
極東4th

まるは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極東4th

【Nコード】

N6296U

【作者名】

まるは

【あらすじ】

地味が取り柄（？）の早紀は、ある日殺される。

死んだ先には——鎧の男がいた。

現実の世界と鎧の世界。

二つの世界に、早紀は縛られた。

【野いちご転載】

物語の始まり

>i29941—3849<

(Illustration by ROM)

むかしむかし、あるところに。

おとぎ話の、ありきたりな始まりの言葉で、十分だった。

ひとりぼっちの小さな早紀を、大きくて立派な車がお迎えにきてくれた。

『これから、一緒に暮らしましょう』

かろうじて、血がながっている程度の、遠い遠い親戚のおじさまとおばさまは、そう優しく微笑んだ。

早紀は驚いた。

こんな立派な車も、こんなお城のようなお屋敷も、自分には無縁のものだと思っていたのだから。

夢を見ているんじゃないかと思った。

だが、夢ではなかった。

屋敷に連れてこられた早紀は、自分と同じくらいの男の子に出会ったのだ。

仏頂面のその子は、出会うなり早紀を、誰もいない廊下まで引っ張っていった。

そして。

そして——こう言った。

『いますぐ、ここをでていけ』

そう、夢ではなかった。

掴まれている腕が、とてもとても痛かったから。

地味な娘

「おはよう、お母さん」

ベッドから這い出した早紀が、一番最初に挨拶する相手が、母親だった。

枕元で、にんまり微笑む若い笑顔の写真。

そのにんまり顔を見ると、早紀もねぐせだらけの頭のまま、同じようににまっとしてしまう。

母親譲りの黒々とした髪。

そんな髪をボブにしているものだから、今風で言うところの少し重たいイメージだろう。

しかし、早紀の記憶の中の母親は、いつもそういう髪型で。

心のどこかで、ずっと母の存在を引きずっている早紀には、他の髪型にしようという気持ちにはなれなかった。

えへへへ。

写真に向かって、もう一回しまりのない笑顔を浮かべると、早紀は身支度を始める。

高校の制服は、真っ黒で出来ている。

まるで喪服だ。

エスカレーター式の私立高で。

小学校の頃から、ひたすら制服は真っ黒。

公立高校でもよかったのだが、この家のしきたりと言われたら、居候の早紀は従わないわけにはいかなかった。

生徒も、独特の雰囲気のある人たちばかりだ。

お金持ちに生まれ育つと、そんな風になるのだろう。

そんな真っ黒制服に、真っ黒髪 of 早紀が部屋を出ると、ちょうど奥の部屋のドアが開くところだった。

「おはようございます、修平さん」

ぺこりと頭を下げる。

「やあ、おはよう。今日も時間通りだね」

優しい、お兄さんのような存在の——鹿島修平。

とても背が高く手足が長く感じるので、早紀は物語の『あしながおじさん』のようだ、こっそり思っている。

正確な立場を言うと、この家の「主人」の従兄に当たり、後見人でもある。

そう、主人の従兄。

この家の当主より、年上ということだ。

不幸はどこにでも現れるもので。

早紀を引き取ってくれた、優しいおじさまとおばさまは、一昨年不慮の事故で亡くなってしまった。

その二人は、真理の本当の両親ではなく後見人らしいのだが、詳しいことは知らない。

ともかく、屋敷に残されたのは、居候の早紀とこの家の若き当主となった少年。

それが。

すうつと。

空気の動く音がした。

何故だろう。

早紀には、その音もなく扉の開く気配が分かるのだ。

引っ張られるように、気配の方を向いてしまう。

真っ黒な。

早紀と同じように真っ黒な制服を着た、真っ黒な髪の少年が現れ

た。

鹿島真理。
シンリ

それが——この屋敷の当主の名前。

※

初対面で、早紀に出ていけと言いつ放った相手が、この真理だ。

子供心に、自分が歓迎されていないことを、その瞬間に理解した。

だが、その当時の早紀は、本当に小さくて。

そして、唯一の肉親であった母を失って、行くあてなどありはしなかった。

だから小さい間は、出来る限り真理を避け続けた。

また、あの強い力で引つ張られ、ぶたれたり放り出されたりするんじゃないかと、怖かったのだ。

だが、成長していくにつれ、恐怖は憧憬へと変わってゆく。

真理は、とても綺麗な子だった。

冷たい顔立ちは、年を重ねることになお冴え渡り、氷の世界の王子様がいたら、きっとこんな顔よねと、早紀の目を奪ったのだ。

しかし、十年以上同じ屋敷で暮らしてきたが、真理と親しくなるきっかけなど見つからずじまいだった。

それどころか、一昨年からこの屋敷に住まうようになった修平の方が、よほど話をしている。

「おはよう、真理」

従兄の修平は、真理には怯まない。

にこやかに、朝の挨拶を投げ掛ける。

真理は、それを微かに目で確認しただけだ。

相変わらずの氷の王子っぷりである。

「そう言えば、真理は明日誕生日だろう？」

視線だけの応対に怯むことなく、修平は話を続ける。

ああ、そうか。

同居していながらも遠い存在の真理の誕生日は、やはり遠い存在だ。

覚えているのに、意識していない。

11月13日。

それが、明日。

真理は、17歳になるのだ。

そんな自分の誕生日の話だというのに、真理の冷ややかな視線は、早紀に向くではないか。

なぜ、私を見るのっ!?

思わず、早紀はキョロキョロしてしまった。

自分を見られる理由なんて、ないと思っていたのだ。

そして、そんな無駄なことを、真理はしない。

「お前…」

しかも。

よりにもよって、今日はお言葉つきだ。

尚更、早紀はどきまぎする。

乙女ちっくな、どきまぎではない。

学校で、先生にいきなり指名された時の感覚。

しかし。

やはり、相手は真理だった。

「お前、まだここにいるのか」

早紀の心を凍土に叩きつける、彼らしい言葉。

十年以上の月日で、早紀が獲得したもの。

それは。

「はあ…まあ」

図太さだった。

帰宅禁止令

さすがに、高校卒業したら、出ていかなくちやなあ。

シーンと静まり返る車内は、いつものこと。

登下校の、送迎の間の風物詩だ。

図太さを身につけた早紀は、隣の氷の王子がしゃべらない限り、ぼんやりと考え事が出来る。

そして、しゃべることなど、めったになかった。

今朝きた、あの一撃も久しぶりのことで。

彼も、長い間早紀を目障りに思い続けているようだ。

この屋敷での生活と、風変わりな学校で、随分早紀も世間知らずになっているだろう。

とは言え、ねっこは庶民なはずなので、仕事さえ見つければ、暮らしていけるんじゃないかと考えていた。

あと一年ちよいかあ。

意外と残り時間が短い事実、早紀は驚いた。

たったそれだけの期間で、就職を探し、学校を卒業して、あの屋敷を出るのだ。

結構、忙しそう。

ちよっとビビって、早紀はへらっと笑ってしまった。

それを自覚して、はっと顔を引き締める。

真理に、見られたかと思ったのだ。

幸い、隣の彼は窓の外を見ていた。

セーフ。

自分の頬に手をあてて、早紀は顔を引き締める。

あと一年ちよっと。

真理に、実力で叩き出されないようにしないといけないのだ。

「おい…」

なのに。

そんな、早紀の考えを吹っ飛ばすような、本日二回目の王子の言葉。

ひっ。

なまじ、車内は近いせいもあって、声にこもった低い響きが、ダイレクトに伝わってくる。

こんな距離で、はつきりと出ていけと言われたら、断りづらいではないか。

完全にビビりまくりながら、早紀はそれでも王子の次の言葉を待たなければならなかった。

逃げ場は、ない。

「おまえ、今夜はうちに帰ってくるな」

突き付けられたのは—— 一方的で強引な一言だった。

※

ちよっ。

女子高生に、外泊しろとお達しなのだ。

しかも、いきなり今夜。

い、行くところが、ありませんが。

やや青くなりながら、情けないことを、早紀は思った。

残念ながら、友達と呼べる人間は、一人もいなかったのだ。

独特のクセのある生徒ばかりの中で、早紀は何というか——空気

のような存在だった。

小さいうちから、真理を相手にしてきたため、とにかく彼女は反射的に自己防衛に特化してしまったのだ。

余計なこととは言わない、でしゃばらない、声をかけられないように存在を薄くする。

そんなことばかりが身についたせいで、おそらくいまだ早紀の名前さえ知らない生徒もいるだろう。

小学校から、ほとんど生徒に変化はないというのに、だ。

それで、早紀もよかった。

いいこともないが、悪いこともない穏やかな生活があれば、それで満足だったのだ。

そんな空気女子高生は、今夜屋敷に帰ってはいけないと言われてしまった。

どう、しよう。

反論したり、拒否したりという考えは、早紀にはない。

それも、空気になるべく努力した結果だ。

知り合いの家がないなら、ホテルとかになるのだろう。

しかし、高校生が平日の夜に、制服でホテルに泊まって不審がら

れないだろうか。

受験シーズンでもないというのに。

うーん、うーん。

悩んでいた早紀に、ふと光が差した。

そうだ、と。

浮かんだのは、修平の顔。

彼に相談すれば、どこか宿泊先を紹介してくれるかもしれない。

幸い、携帯電話がある。

昼休みにでも、電話で相談してみよう、うん。

なんとかかなりそうな事実には、早紀はにこつとした。

瞬間、はっと顔を引き締める。

さすがに、いまの表情は真理に見られただろう。

幸い。

彼は、その後何も言わなかった。

何故帰ってきてはいけないのか——理由を聞かないことさえデフォルトだった自分を、早紀は後で悔やむこととなる。

なぜこんな有様

よかったよかった。

放課後の早紀は、安堵の塊だった。

昼休み、修平に電話をしたところ、彼の実家に泊めてもらえる手はずを整えてもらえたのだ。

これで、真理の機嫌を今以上に損ねずに、なおかつ早紀も安心して眠れる。

学校まで、修平が車で迎えにきてくれる手はずになっていた。

裏門での待ち合わせなのは、表門だと真理の迎えの車と鉢合わせる可能性があるからだ。

修平を巻き込んだ事実を知って、不機嫌の材料にされると困るので、裏門の提案は願ったり叶ったりだった。

そんな夕方の裏門に。

車が横付けされる。

見覚えのある、修平の車だ。

「すみません、修平さん」

窓を開けて顔を見せてくれる彼に、ぺこりと一礼。

後見人ということで、とりあえず付き合いはあるし、軽い話をするものの、仲がいいというのはちょっと違う相手。

ただ、早紀よりもずっと大人なので、困った時には頼りになる。

「かまわないよ。やれやれ、真理にも困ったものだね」

修平の苦笑を聞きながら、後部ドアを開け早紀は乗り込んだ。

ただ。

気になるところはある。

いままで、真理に早く出て行け的なことは、何度も言われていたが、今日のような特殊な話は初めてだったのだ。

「今夜、何かあるんですか？」

空気女の早紀が、ぼそっとそれを聞いてしまった。

相手が、修平という気楽さもあつたのだろう。

彼なら不快なく答えてくれるのではないか、という。

ふっと。

運転席の気配が途切れた——気がした。

はっと前を見ると、修平の後姿は変わらずそこにある。

運転しながら、いきなり人が消えるはずなどないのに。

しかし。

その姿が見えているにも関わらず、気配を感じない気がした。

「そうだね…」

あつ。

静かな静かな修平の声に、早紀の首筋がぞくつとした。

ぞわつと、の方が近いか。

とにかく、悪い感覚がいっぱい早紀の首筋にまとわりついたのだ。

簡潔に言おう。

修平が——いきなり、知らない人間になった気がした。

※

それから。

それから、どうなったかなんて、早紀は覚えていなかった。

突然、目の前が暗くなって、考える力なんかこれっぽっちも残ら

なくて。

そして、とにかく暗い暗い闇の中を泳いでいたのだ。

そんな闇の中から、彼女の意識が引つ張りあげられたのは、硬い床を歩く足音が、鼓膜に響いたから。

しかし、目を開けてもそこは闇だった。

かび臭さと冷たさでいっぱい空間。

早紀は、自分が冷たく固い床に、片方の耳を押し付けるように倒れていたことを知った。

なん、で？

慌てて起き上がろうとするが、身体に力が入らない。

というより、腕が妙に痛いし、自由に動かせない。

どうやら、縛られているようだ。

なんで、私…。

イモムシのようなだらしない状態で、早紀は近づいてくる足音へ、顎を動かすので精一杯だった。

覚醒そのものも、完全ではないせいで、頭もぼんやりする。

「さあ……約束だ。見せておくれ」

かすかな明かりが見えた。

そこに扉があるらしく、下の少しの隙間から、明かりが入ってきたのだ。

声を出して呼びかけたかったはずなのに、逆に早紀は息を飲んでこらえた。

聞こえてきた声が――修平のものだったのだ。

ぼんやりする頭でも分かった。

彼に助けを求めてはいけない、と。

何故か。

それは、いま自分がこんなところに転がっている「何故」と、つながっているからだ。

混乱する記憶の中で、最後に感じたあの違和感。

いままで優しいお兄さんみたいな存在だと思っていたのが、ああもあっけなく簡単に違う生き物になるなんて。

きい。

ドアの開く音。

どきっとしたが、開いたのは早紀のいるドアではなかった。

おそらく、向かいのドア。

下から差し込んでいた明かりが、遠ざかってゆくから。

何をしてるんだろう。

そして。

自分は、なぜこんな有様なだろう。

ほんの微かな明かりの尻尾を眺めながら、早紀は不安と疑問と一緒に縛り付けられているのだった。

「だから…出て行けと行っただ」

「私が見たいのは、これではない！」

ドアの向こうで、修平が声を荒げた。

本当に彼の声かと、一瞬耳を疑うような感情的な声。

「違うだろう？ 分かっているだろう？ 本物はこうじゃない」

高揚していく、狂氣的とも思える修平の声が続けられる。

「本物は、吸い込まれるほど沈んだ闇の色をしているはずだ！」

強く、強く、誰かに言葉をぶつけていく。

その声が、いきなり途切れた。

何の話をしているのか。

修平は、何を考えているのか。

早紀は、声をかけられないまま、じっと外の声を拾い続ける。

「ああ、大丈夫だ…心配はいらない」

沈黙の後。

突然、修平の声が猫なで声に変わる。

「いま、私に見せてくれたものは本物だ…ちゃんと、私も分かっている」

言い聞かせるような、ねっとりした声。

早紀は、怖くなった。

聞けば聞くほど、修平は修平でなくなってゆく。

では、あれは誰なのだ。

後見人ではないのか。

一体、何を見ようとしているのか。

「分かっているとも…足りないものも、ちゃんとかかっている」

ざわざわと、早紀の背中を冷気が這い上がってゆく。

言いようのない恐怖が、物理的なロープ以上に早紀を縛り上げる。

「だから…」

ゆっくり、ゆっくりとした修平のその言葉。

ドアという壁があるにもかかわらず、その壁を貫通して、いま一瞬、早紀に視線が突き刺さった気がした。

「だから…用意したよ、真理…君のために」

きい。

足元だけだった小さな光が。

みるみる大きくなって、早紀の部屋の中に差し込んでくる。

ああ…ああ…。

大きくなった光に、彼女はさらされた。

そして、四つの瞳が早紀に向けられる。

修平と——真理と呼ばれた少年の目だった。

※

あの真理が——驚いていた。

床に転がる早紀を見て。

初めて見るその顔に、早紀の方が驚いてしまいそうだ。

しかし、そんな場合ではない。

彼女は、不自由な姿のままで、二人を見上げた。

驚いている真理の横で、修平は薄ら笑いを浮かべている。

「ほら…真理…これが必要なものだろう」

何を。

修平は、何を言っているのか。

彼の指す手は、早紀の方を向いている。

笑顔をたたえ、瞳は恍惚と輝きながら真理を見ていた。

「この大事な日に、この子を家に置いておかないなんて…駄目じゃないか」

修平の瞳が、ふっと自身の手へと落とされる。

左の手首。

時計の位置。

修平の唇の端が、ゆっくりと上がる。

「ハッピーバースデー、真理」

瞬間。

ゴトリ、と重い音がした。

二人の男の、もっと後ろ。

ミシミシと、床がきしむ。

一筋の、冷たい空気が早紀の鼻先を撫でた。

何。

四本の足の向こうは、暗い空間。

そこで何の音がしているのか、早紀は目をこらして見ようとした。

「さあ、お目覚めだ」

修平が、音の方を——ではなく、早紀の方へと歩みを進めてくる。

「長い眠りだったんだ…おなかをすかせているんだ…かわいそうに」

「あっ！」

早紀は、縄を切られた事実を認識する暇もなく、右腕を掴まれ引き上げられた。

自分の足で立っている、ということではない。

修平の片手に釣り上げられるようにして、ぶらさがったのだ。

不安定に、足がゆらゆらと揺れる。

痛い、という事実より先に、全身を襲う恐怖。

掴まれた手の冷たさが、つま先まで凍らせるようだ。

「だから…」

そんな恐怖の彫刻と化した早紀に。

真理が、小さくため息をついた。

「だから…出て行けと行ったんだ」

そして早紀は死んだ

「さあ、役に立つんだ」

早紀をぶら下げたまま、修平は笑った。

「そのために…引き取られたんだから」

人間とは思えないほどの狂気の瞳と力が、早紀を廊下へと釣り出す。

いま、何と。

修平は、いま何と言ったのか。

遠い遠い親戚の早紀を、何故か引き取ってくれた優しい人たち。

何故か、引き取ってくれた。

呆然として、うまく考えられない。

抵抗も出来なかった。

一瞬すれ違った真理が——自分を見ている。

いつも通りの、目で。

すぐに、再び暗い部屋に連れ込まれた。

「美しき物よ：お前を甦らせる女を連れてきたぞ」

劇の様に大げさに、修平は引き上げている早紀を床に放り出した。

「ああっ！」

床に身体を打ちつけながらも、早紀はその先にあるものを見てしまった。

ほの白く、闇に浮かび上がる大きな物。

人のような姿のそれが、自分を見下ろしている。

それが、少し身じろいだかと思うと床が震えた。

とてもとても——重いもの。

「私がやろうか？」

修平の声が、廊下を向いていた。

「…俺がやろう」

声は。

真理のものだった。

ゆっくりと、背後から足音が近づいてくる。

早紀の、ほんのすぐ後ろに。

すうっと、その存在が身を屈めた気配。

修平のもの以上に冷たい指先が、床の早紀の喉元にかかった。

何を…。

「言うことを聞かなかったんだ…あきらめろ」

真理の指が——喉を鋭く撫でる。

カッと。

焼けるような痛みが走った。

※

目の前に、黒いしぶきが飛ぶ。

それが何なのか、早紀は分からないまま見つめていた。

しぶきは、噴水のように前方に飛び散り、大きな何かの足元を濡らす。

なまあたたかい滝のような液体が、自分の喉を、制服を伝う。

声を出したかった。

なのに、声の出し方を忘れてしまった。

嗚咽ひとつ出せない。

それどころか。

息さえできていない気がした。

ひゅーと、変な空気の漏れる音。

「素晴らしい！　素晴らしい！」

修平の声が、遠くに聞こえる。

ほの白かった存在の足元から、塗り替えられるように黒さが這い上がっていく。

それを呆然と聞くしか出来なかった早紀の頭の後ろに、冷たい吐息がかかった。

そう。

いま、彼女の真後ろにいるのは——真理。

「いいか…抵抗するな…愛されろ」

変な。

変な言葉。

ましてや、真理の唇から『愛』というものが聞けるなんて。

何に。

誰に。

視界が、次第に暗くなっていく。

全身の力が、何かに吸い取られていく気分だ。

心地いいではない。

深く辛い闇に、足を掴まれて引きずり込まれるカンジ。

それが。

『死』と言う言葉に、限りなく近いのだと、沈む意識の中で、早紀は気づいた。

そして。

早紀は。

死んだ。

死×死

「よお、魔女」

その声に、きよろきよろとする。

なんだか暗いところ。

魔女？

放たれた言葉が、宙を飛んできたので、捕まえてみる。

捕まえた時、自分に手があることに気づいた。

その手につながる腕があり、自分に身体があることに気づいた。

足もついている。

真っ黒な服を着ていた。

「お前を呼んでんだ、魔女」

自分の状態を確認していたことを邪魔するように、目の前に大きな影が飛んでくる。

はっと顔を上げると。

黒い男がいた。

黒い鎧の男。

たくさん鋭い棘をもつ鎧。

金属の黒というより、まったく光を反射しない重い黒。

「魔女…私？」

声が、出た。

無意識に喉に触ったが、異変はなかった。

何故、異変があると思ったのだろう。

「ここに来た、ということは魔女に決まってるだろ…変な女だな」

そのとげとげしい鎧の腕が、伸ばされる。

怖いと思いかけたが、動けなかった。

動くと、自分からその棘に刺さりそうな気がしたのだ。

「小娘か…どうりで青臭い味だったわけだ」

伸ばされた腕は、どこも傷つけることなく、早紀の顎を捕らえる。

見つめられているのは分かるが、こっちは相手がよく分からない。

黒い兜が、全てを覆い隠しているから。

そんな鎧兜の存在は。

「まあいい…おかげで俺は甦ったからな…さあ、もう一度死のうじやないか、魔女」

笑ったような声で。

さらりと。

物凄いことを言った。

もう一度？

死のう？

※

ああ、そうか。

分かってきた。

『早紀』は、分かってきた。

自分は、死んだのだ。

真理に喉をかききられて。

「ここは、死後の世界だろうか。」

この鎧の存在は、死神だろうか。

何故、自分は魔女と呼ばれるのか。

そんなたくさんの疑問よりも。

そうか。

死んじゃったのか。

早紀は、小さなため息を落としていた。

図太く静かに、空気のように生きてきたが、それでも早紀は生き延びることは出来なかった。

記憶が、少しずつつながっていく。

自分が、真理のいる屋敷に引き取られたのも、何だか分からないこの死のためだと修平は言っていた。

むかしむかし、あるところに。

そんな都合のいいおとぎ話など、やっぱりなかったのだ。

そして、真理が自分を殺した。

何だろう。

その事実が、無性に悲しかった。

「そうね」

早紀は、棘だらけの鎧を抱きしめようと手を伸ばした。

「そうね…また、死んじゃおうか」

むかしむかし。

そんなおとき話さえ、思い出さないくらいの虚ろな存在になってしまいたかった。

躊躇なく。

早紀は、鎧を抱きしめた。

強く、強く。

いくつもの棘が、自分の身体を貫いたのを感じながら。

「何だ…泣いてやがるのか？」

馬鹿な奴だ。

鎧の男が——微かに笑った。

瞬間。

黒い炎が、鎧の男と自分を囲むように燃え上がった。

「合格だ、魔女：お前とひとつになってやろう」

早紀を刺し貫いた棘が、自分を絡め取るように伸び、鎧の中に取
り込もうとする。

黒く冷たい金属の中に、彼女の身体は沈んでいく。

中は——からっぽだった。

空洞というより、空虚。

その隙間を埋めるように、早紀は取り込まれた。

「死×死が、何か知ってるか、魔女？」

鎧の内側を伝って、声が鼓動のように早紀に押し寄せる。

笑う、鼓動。

その鼓動に、自分が溶けていくのを感じながら——早紀は思考力
を失って、意識を閉じたのだった。

知らなかったこと

はっと。

我に返った時——早紀は、立ち尽くして前を見ていた。

暗いはずなのに、世界ははっきりと見えている。

たくさんの、骨董品が置かれている部屋の中。

真理が立っていた。

そして、早紀を見ていた。

真理の後ろには、修平もいる。

あ、れ？

見覚えのある構図に、早紀は混乱していた。

そして。

何より彼女を混乱させたのは。

真理の足元には。

少女が倒れていた。

真っ黒な髪と、真っ赤な血の海。

その血が、まるで生きているかのように、いま立っている早紀の方へと吸い上げられていく。

干からびていく少女。

それが、一体誰なのか——早紀は知っていた。

「……！」

何か言おうとして、口がきけないことに気づく。

動こうとして、自分の身体がまるで金属のようにこわばっていることにも気づく。

しかし、動くことは出来た。

ズシン。

一歩踏み出すと、足元の床が沈んだ。

その言い知れない感覚におののいて、早紀は次の足を踏み出せなかった。

代わりに。

真理が、歩み寄ってきた。

気づいたら、早紀は彼を少し見下ろすような形だった。

ありえない角度。

早紀を見上げる真理の目は、冷たくも深く差し込むような色をしている。

いままで、早紀の見たことのない瞳。

そんな彼が、ふっと視線を落とし、自分の右手の人差し指を噛む仕草を見せた。

鮮やかな、赤い血がぷくりと浮き上がる。

その指を、真理は早紀に向かって伸ばした。

彼女の目と目の間——眉間か額の辺りに、生ぬるい感触が触れる。しゅるんと。

指先が、そのまま弧を描く。

ガシャンッ。

全身の関節が。

金属的な音を立てて外れた気がした。

※

冷たい外気が――肌を撫でた。

早紀は、自分の素足が床を踏みしめているのに気づく。

目の前には、真理。

しかし、いまはもう見下ろす角度ではなく、早紀が見上げる角度だった。

「あ……」

声が、出た。

腕も動く。

自分の顔に、触れる。

金属の気配も何もない、普通の柔らかさだ。

「なんだった?」

修平が、驚きながら足元の干からびた少女と、立っている早紀を見比べる動きをした。

早紀もつい。

足元を見てしまった。

制服姿の少女のミイラ。

しかしもう、血は一滴も残っていないようだ。

床さえ汚れていない。

「私…」

自分の声が、少し違うように感じながらも、早紀は言葉を探した。

真理に問うべきことがあったのだ。

最重要の疑問がひとつ。

「私…魔女なの？」

瞬間。

真理は、眉間を押さえた。

その様子は、何と言ったらいいのだろうか。

失望というか、落胆というか、呆れというか。

「お前は、いままで自分が何の学校に通っていたのか知らなかったのか」

頭が痛そうに顔を顰めながら、真理は上着を脱ぎ始めた。

脱いだそれを、早紀に放り投げる。

学校？

反射的に服を受け取りながら、真理の言葉を組み立てようとした時。

それよりも重要な事実に気づいた。

何故、彼が上着を投げたのか。

そう。

「……！」

早紀は——まっばだかだったのだ。

バカで出来損ないの魔女

――

十数年。

十数年、魔族の家に住み、魔族専門の学校に通い続けておきながら。

この女は、自分や周囲が何者か知らなかったというのだ。

真理は、その事実強い頭痛を覚えた。

常識として親から聞いているだろうか、成長の過程で気づいているだろうか。

自分に見れば、あまりに常識的なことのため、いちいち確認を取ることも考え付きもしなかった。

大体。

早紀という女は、とにかく影が薄い。

いるのかいないのか、すぐに分からなくなる。

何度、真理はその存在を忘れ続けたことか。

同じ車で、毎朝同じ学校に行っているにも関わらず、三ヶ月以上存在認識しなかったことさえある。

その、とんでもなく影の薄い女は、イケニエとしてこの家に連れてこられた。

将来、真理が受け継ぐ物のために、必要なイケニエだったのだ。

そのイケニエの条件は。

魔女、であること。

魔族の女を、総称してそう呼ぶ。

遠い遠い親戚の子——だが、真理とわずかでも血がつながっているのなら、早紀は間違いなく魔女だ。

なまじ、傍系の傍系な上、親もいないという事実は、誰も早紀の命には頓着しない、ということである。

こんな、うってつけの存在はなかった。

だが。

魔女の能力は、その「物」に影響を与える。

初めて、真理が早紀を見た時。

ぽかーんと口を開けながら、屋敷を見上げているバカっぽい顔を見た時。

真理は、このイケニエを全身で拒否したのだ。

幼少の頃から、自分が何者で、何をすべきかを知っていたからこそ、真理には誰よりも高いプライドがあった。

こんな、駄目魔女の力を借りなければならぬくらいなら。

だから。

だから、真理は小さな早紀を追い出そうとしたのだ。

だが。

魔女とは名ばかりの小娘は、気づくと屋敷にいた続けたのだ。

図太さと、影の薄さを併せ持ったまま。

そして、ついに——真理の17歳の誕生日が来てしまった。

※

誕生日の前日。

朝。

修平に廊下で声をかけられた時、本当に偶然に早紀を目にした。

珍しく、その存在が目に残ったのだ。

そして。

賭けに出た。

この女を、イケニエにしない最後の手段、だった。

正確に言うと、魔女なしで「あれ」を手に入れる方法も、真理は知っていたのだ。

ただし。

その場合、魔女の能力は付加されず、能力そのものが低下する可能性があった。

しかし、真理には自分の存在についてのプライドがある。

自分の血と能力で、それを制御できると思っていたのだ。

なのに。

バカで出来損ないの魔女は、屋敷にいた。

よりにもよって、修平に助けを求めているのだ。

彼は、早紀の味方でもなんでもないというのに。

結局。

真理は、それを運命だと理解した。

この出来損ないの命を救うべく、彼にしては手を尽くした。

それを、無駄にしたのもまた、この出来損ないだったのだ。

せめて。

最後の情報として、生まれ変わる可能性だけを教えてやった。

彼の助言に従い、早紀が微かな望みをつなげることが出来れば――それもまた運命だと思ったのだ。

出来損ないだと思った女は、その微かな望みをつないで、生まれ変わった。

二度、死んだのだ。

肉体を真理に殺され、魂を「あれ」に殺された。

殺す側の二人に、早紀を受け入れる意思があつた時だけに成立する契約。

それが。

いまの、早紀だ。

彼女は、魔族と「あれ」のハーフになった。

制御するのは、真理。

その証を、早紀の額に記した。

起きている間は真理の、寝ている間は「あれ」の——下僕になる
という証。

○

—
—
—

夢に、歩いて入ったのは初めてだ。

眠りに落ちていく感覚が、ひたひたと早紀の身体に染みゆく。

染みゆくごとに、彼女はよりリアルに自分の歩みを自覚するのだ。

「早かったな…」

その足の向こうに——彼はいた。

黒い黒い鎧の男。

つい少し前に会った時は、鎧からは刺がたくさん突き出ていたが、いまそれは見えない。

「また、私は死んだの？」

早紀は、歩いてきた方向を振り返りながら、微妙な気分で聞いてみた。

「オレと契約したせいだ。だから、自分で歩いてきたろ？」

解説を受けても、早紀にはピンとこなかった。

ただ、もう死ななくてもよいようだ。

自分が何になったのか、早紀はまだ分かっていなかった。

真理から詳しく聞く前に、意識が遠くなってしまったのだ。

そりゃ、一日に二回も死ねば疲れて当然だ。

笑い話にもならない、そんな奇妙な表現が、頭を掠める。

気がかりなのは、自分がほぼ全裸のまま昏倒しているだろう事実。

「なんだ、浮かない顔だな」

鎧の男は、ニヤついた声を出した。

この黒い存在と、早紀は何か契約したらしい。

「私…どうなったの？」

早紀の知識はまだ、自分が魔女だった、という一点のみだったのだ。

はっ、と。

兜の内側が、笑いに震えた。

「面白い、面白い…知らないまま二度も死んだのか…これは傑作だ」
笑っても笑っても、その兜は光を反射しない。

暗く暗く沈むだけ。

「いいぜ、魔女…教えてやろう」

この世界に、本当は光がないのか。

はたまた、光を吸い込み続けているのか。

鎧は、右腕を上げた。

指の先まで分厚い黒が覆っている。

「お前は…」

彼は、その親指で。

自分自身の胸を差した。

「お前は…この鎧になったんだ」

早紀は——しばらくの間、考え込んだ。

そして。

やはり、理解できなかった。

※

目が覚めたら、自分のベッドの上だった。

パジャマを着ているのは、きっと真理が使用人の誰かに命じたにちがいない。

彼自身が、そんな甲斐甲斐しい真似は、絶対にしないだろうから。

乙女らしい、自分の裸の行方よりも。

鎧ねえ。

さっき帰ってきた世界のことを、早紀は噛み締めてみた。

まだ、よく分かっていない。

ベッドの上に座ったまま、早紀は両手を広げてみたが、生身となら変わりが無い。

「おはよう、お母さん…私、鎧になったんだって」

枕元の、母の写真に語り掛けてみる。

早紀が魔女だというのなら、母だって多分そうだったのだろう。

しかし、とても魔女には見えない笑顔に、肩をすくめながらベッドを降りる。

事件は。

洗面所で起きた。

早紀は、いつものように顔を洗おうと思っていたのだ。

こんがらがったままの頭で考え事をしながら、半ば意識せずにつもの作業を行った。

タオルで顔を拭き、洗面所から立ち去りかけた時。

「ん？」

早紀は、違和感に足を止めた。

何か。

何か、今、見えたのだ。

おそろおそろ、早紀は洗面所を振り返った。

正確に言うと、鏡を見たのだ。

見間違い、ではなかった。

前髪を、がばっと持ち上げてみる。

鏡の中の早紀の――額。

そこには。

赤紫の、丸に似た記号が描かれていたのだ。

「ええーっ!？」

何回洗っても、取れなかった。

真理の悩み

一一一

真理は、隣の座席を見た。

そこに、早紀がいる。

毎朝、同じように続く登校風景なのだが、いつもと違うことを真理は感じていた。

契約をしたせいだろうか。

早紀が、どんなにちいさくちいさくなって気配を消してしまおうとしても、すぐそこに彼女が存在していることが伝わってくるのだ。

いつもなら、2秒とかからずに忘れてしまえるというのに。

今日の早紀は、更に小さくならうとしているようだった。

額の契約印のせいだろう。

朝から、大きな絆創膏を探して走り回っていたと、使用人が言っていた。

まあ、契約印については、真理も気になるところがある。

学校での、周囲の反応だ。

魔族の学校である。

だが、同級とは言え、真理と早紀は幼少から、ずっとクラスは違った。

真理はハイクラスで、家柄的にも同等以上がそろい踏みだ。

早紀は、ロークラス。

それが、今回は幸いするかもしれない。

家柄に無縁な魔族も多いためだ。

正直。

一部、ソリの合わないハイクラスの連中に、早紀の契約印を見られたくないというのが、真理の気持ちだった。

他の種族には、契約印は見えないというが、あいにくと同種族にそれを隠す方法がないのだ。

絶対に、真理か早紀につつかかってくるに違いない。

真理はいい。

あしらいもできるし、黙らせ方も分かっている。

問題は。

この、影の薄い女。

ハイクラスの連中にとっては、これほどのカモはいないだろう。

特化した血も能力もない、ただ魔女というだけの存在。

面倒なことにならないといいが。

真理は、空気を動かさないほど静かに息を吐いた。

ちらりと、こちらを見る早紀。

学校もそうだが。

真理には、他にもこの契約者についての悩ましい点があった。

だから、魔女を使いたくなかったんだが。

後悔の言葉など、どこにも届くはずがなかった。

※

ハイクラスの真理は、一日を嫌な気分で過ごした。

嫌な気分。

いや、違う。

朝は嫌だった。

昼に、それは怪訝に変わり。

学校が終わる時間には、無然に変わっていたのだ。

耳の早い生徒たちが、契約印のことを触れ回るかと思っていたのだ。

しかし。

下校の時間まで、それらは噂すら真理の耳に入ってはこなかった。

まあ、わざわざロークラスを見に行く生徒もいないだろうから、今はこんなものなのかもしれない。

無然としたまま校門に向かうと、車が待っていた。

中には、既に早紀が乗っているようだ。

初日の学校は、やりすごした。

しかし、真実の本番はここからだ。

後部座席に乗り込むと、真理から逃げるように早紀は少し奥へと動く。

そんな、往生際の悪い女に。

「今夜、出かける」

一言、伝えておく。

きょんとした目が、こっちに向けられた。

不思議そうな顔。

「は、はあ：いってらっしゃい」

そして。

あさっての、とぼけた言葉。

「お前も、だ」

真理は、目に冷気をこめてしまった。

びくうっと、早紀が跳ねる。

「わ、私？ ど、どこに？」

きょろきょろと、落ち着かなく周りを見回す。

どんなに彼女が挙動不審になろうが、出かける先では何ら問題にはならない。

それだけは、真理の救いか。

出かけるだけなら、な。

さて。

「あっち」を、どう自分だけで乗り切る、か。

真理の悩みは、尽きなかった。

真理の部屋

――

「やあ…」

びくつきながら屋敷に帰った早紀と、前を歩く真理を待っていたのは――修平だった。

また、なんというか、目が激しく輝いている。

昨夜のことを思い出して、早紀はいやーな気分になった。

また何か、あるのだろう。

あの真理が、自分と一緒にどこかに出かけるなんて話が出るくらいだ。

「今日は…いくんだよね？ 準備、見てもいいかな？」

らんらんとした瞳で、修平は詰め寄ってくる。

「どうぞ」

真理は、即答だった。

何の話か分からない早紀は、二人を押しつけて屋敷に入ることも出来ず、後ろで立ち止まったまま。

昨夜のせいで、すっかり修平恐怖症まで構築されたおかげで、早

紀の心休まる場所など、自分の部屋だけとなってしまった。

早く部屋に戻りたいなあ、と考えていると——真理が、振り返った。

!!!!

何と言う衝撃。

振り返ったのだ。

あの真理が、わざわざ彼女を認識するために！

ありえない行動だ。

「8時に、俺の部屋に来い」

衝撃で動けないでいる早紀に、用件だけ言い置くと、真理はさつさと屋敷の中に入ってしまった。

言われた言葉が、更に衝撃を上乗せする。

部屋に来い？

アリエナイ。

これまで、一度たりと開けたこともない真理の部屋。

ノックさえ、したことがないのだ。

そこに、自分が招かれた。

真理にとって必要なことなのだろうが、早紀のこれまでの人生では考えられないこと。

出かけるって言ってたよね。

玄関の前に立ち尽くしたまま、数々の衝撃を乗り越えながら、早紀はそれを噛み締めてみた。

制服で、いいのかな。

数歩踏み出せば、屋敷の中だというのに。

早紀は、なかなか一步を踏み出せないままだった。

※

7時58分。

早紀は、真理の部屋の前にいた。

制服のまま、ノックをためらっているのだ。

正直に言うまでもなく、入りたくない。

一緒におでかけなど、ありえない。

勿論、真理のことは嫌いではないし、あこがれさえあった。

しかし、自分と一緒に行動できる人とは、とても思えない。

なのに、そんな相手と異常な契約を、してしまったらしいのだ。

今日の早紀は、学校で生きた心地がなかった。

地味に地味に生きてきたことが、無駄になるとしか思えない、額の落書きのせいだ。

だが。

不思議なことに、早紀をじろじろ見たり、指をさしたりする人などいなかった。

もしかしたら、彼らには見えないのか、あるいは、珍しいものではないのか。

とにかく、その点だけは、早紀は助かっていたのだ。

しかし。

だからといって、真理から逃げることは出来ない。

あーうー。

早紀が、ノックの手を上げては下ろしていると。

「……」

ドアが――勝手に開いた。

冷やかな目が、自分を見ている。

真理だ。

「い、いま、ノックをしようと！」

心臓が飛び出しそうになりながら、苦しげに誤魔化す早紀の手を、彼は掴むなり部屋に引っ張りこんだ。

うええ？

真理に触られるのは、まったく慣れていないので、分かりやすく早紀は慌てた。

「待ちくたびれたよ」

だが、二人きりではなくて。

うっ。

早紀が、つい身構えてしまう相手の、修平がいるではないか。

「いよいよだね」

早紀の様子などお構い無しに、修平は浮かれた声を上げる。

くるり。

真理は、彼には反応せず、早紀の方を向き直る。

えと、なにが。

早紀が質問する暇も、まるでなかった。

離された真理の手が、そのまま彼女の目の前まで上がってきたからだ。

白く細い長い指先が。

早紀の額を――丸く撫でた。

ガシャン！

それは、自分の身体から聞こえた音だった。

鎧

――

真理は――己の下僕を見つめていた。

彼が指でなぞった契約印から、黒く重い煙が、意思を持って吹き出す。

それが、早紀の身体を全て包み込むのだ。

ガシャン！

煙を払うように、硬い腕が現れた。

右腕から左腕、そして両の足。

黒い煙が消えてゆき。

そして、黒い鎧が現れた。

胸と兜は、一番最後。

これで。

真理の鎧は完成だ。

あの、出来損ないの魔女の、影も形もない。

「おおっ！」

修平が、駆け寄ってくる。

鎧を、より近くで見ようとするように。

だが、真理はサービスをしてやる気はなかった。

いやなことは、さっさと済ませたかったのだ。

「窓を開けてもらえますか？」

修平は、彼より年上で後見人ではあるが、それはあくまで表面上だけ。

だから、普通に彼をも使う。

「あ、ああ」

名残惜しそうに、修平が鎧から離れていく中。

真理は、目の前でつつ立つ鎧に向かって、足を踏み出した。

初めての。

鎧にぶつかることも気にせず、歩を進める。

いや、ぶつかることなどありえない。

これは、俺の鎧だ。

触れた部分から。

真理は、黒い金属に飲み込まれていった。

二人羽織

—
—
—

その感覚を、早紀はどう表現すればよかったのだろう。

またも、彼女は真理より背の高くなった視点で、彼を見ていた。

自分に向かって歩き出すその身体が。

自分に触れたかと思うと。

自分の中の数多くの襞を、かきわけるとような感覚。

ぬるりとした、生々しい触感。

脳に直接手を突っ込まれたら、こんな感覚なのだろうか。

その、言葉に出来ない違和感に、早紀が固まっていると。

『静かだな…』

襞を、直接振動させるような響き。

しかし、声というには少し違う。

『何だ…気持ち悪いのか？』

笑わない音の響きが、真理のものだと分かった。

早紀が考えていることが、どうやら伝わってしまったようだ。

変な気分、どころの話ではなかった。

自分の身体の中に、真理がいる、ようなのだ。

鎧になるとは聞いた。

しかし、それが本当に自分の内側に彼を内包する、という意味とまでは理解していなかったのである。

いま。

いま、早紀はどういう姿をしているのか。

『いくぞ』

身体が。

自分が命令を出していないはずの身体が、勝手に動き出した。

夜の窓に向かって。

え？ え？

『抵抗するな』

何かを振り払うように、真理の言葉とともに自分の右腕が大きく振られる。

ぶわっと。

窓際のカーテンが、強い風に煽られる。

「うわっ」

窓際にいた修平が、カーテンにまきつかれて驚きの声を上げた。

そんな音も気にせず。

早紀の身体は—— 部屋の窓から飛び出したのだ。

ここは、二階。

えっと。

早紀は、一瞬固まった。

おーちーるー！！！！！！

※

そして—— 本当に落ちた。

ズウシィン！

自分の両足が、強く強く地面を踏みしめたのを感じる。

痛みなどは、なかったが。

びびびび、びっくりした。

早紀は、驚きに包まれていた。

そんな彼女に。

『うるさい…』

真理のため息が、聞こえた気がした。

『それに…抵抗するなど言っているだろう』

足が、動いた。

自分の足なのに、自分の足ではない。

二歩ほど歩いた後。

深く曲げられた膝から、力が溢れる。

あ？

思った時には、上空高く飛び上がっていた。

一瞬にして、地上の世界が遠くなる。

屋敷どころか、町レベルで。

ごおっと。

自分の身体が風を斬る。

とん、で、る？

その事実を、認識するより先に。

『飛んでいる…だから、暴れるな』

さも、当たり前のように、真理が先手を打つ。

ううむ。

早紀は、その当たり前のような言葉の先手で、逆にパニックれなくなっていた。

そっか。

本当に、人間じゃないんだ。

しみじみと、それを自覚する。

真理と融合（？）しているような状態だし、2階から飛び降りても無傷な上に、空まで飛んでしまうし。

変な話だなあ。

早紀は、本当に、本当に素直にそう思ったのだ。

『…どれだけ呑気な生き物なんだ、お前は』

真理に冷ややかに突っ込まれたことで、早紀は重大な事実に気づいた。

考えていることが——全部真理に筒抜けだ、ということに、だ。

極東4th

—
—
—

真理は、夜空に黒い星を見つけていた。

暗い空に黒いもの。

魔族ならば、それが見える。

正確にいうと、星ではない。

真理が星に向かって飛び続けると、次第にそれは大きくなっていった。

丸く大きな球体が、目の前まで迫った時。

『何だろう、これ』

鎧の独り言が聞こえる。

契約者としてつながる、というのは、厄介なものだ。

真理は表層意識ではなく、もっともつと深いところでちらりとだけ考えた。

それだと、鎧には伝わらないようだ。

ここまで、早紀の素の感情が、流れ込んでくるとは思わなかったのだ。

真理はその球体に、あっさりと滑り込んだ。

瞬間。

早紀が、緊張したのが伝わった。

鎧の表面を震わせるほどの威圧感が、襲ってきたからだ。

鎧ごしに、真理にもそれは伝わる。

すると。

面白いことが起きた。

鎧の内部が、真理を守るようにもっと内に、彼を引き込むような動きを見せたのだ。

不思議な感触だった。

冷たくも熱くもなく、重くも軽くもなく。

その上。

一切の雑音が消え、視界がさらに明瞭になった気がしたのだ。

なん、だ？

防衛本能のように、真理の鎧は静まり返った。

まあいい。

静かにしてくれるのは、この上ないことだ。

真理でさえ緊張すべきところへ、これから彼は踏み出さなければならぬのだから。

鎧は、完全に彼の制御下にあり、音も立てずに一歩踏み出すことが出来た。

一分の隙もなく、自分の身体にフィットした衣服のようにさえ感じる。

歩き出しても、彼の鎧はまるで周囲の気体さえ、動かさないようにするのだ。

極上の——着心地だった。

※

黒い球体の中の、黒い世界を歩く。

中は、外よりももっともっと広がった。

実際に入ったのは初めてであったため、真理もどこへ向かえばよいのかは分からない。

しかし、彼はそのまま歩き続けた。

極上の着心地となった鎧に、わずかな満足を深層で浮かべながら。

それは――唐突に起きた。

視界が、いきなり開けたのだ。

三人の鎧の存在が見え、真理は反射的に足を止めた。

ここがどうやら、目的の場所のようだ。

自分と同じような、黒い鎧の存在。

デザインこそ違い、いずれも名のある、そして力のある魔族なのが、はっきりと伝わってくる。

しかし、彼らは真理の方を見てはいなかった。

全員、前方の闇を見つめているのだ。

真理が、その闇を見やると。

「なるほど、面白い」

闇が、震えるようにしゃべった。

強い魔気が、熱風のように真理に向かって押し寄せる。

ただしゃべるだけでも、それがあふれ出すことを止められないかのように。

入った瞬間の威圧感は、これだったのだ。

そして。

理解した。

これが、自分が——膝を折るべき主だ、と。

「面白い、とおっしゃいますと？」

と、鎧の男が主の方へと語りかける。

新人は、完全なる無視、か。

真理は、多少は覚悟していた。

自分を含めて4つの鎧が、この極東にはある。

誕生日がきて、鎧を受け継いだばかりの新参者。

それに対する扱いとしては、無視もありえるのだろう。

そう、真理が結論づけかけた時。

主が——笑った。

「面白いではないか：おぬしら、見えておらぬのか？」

なに、を。

何を言おうとしているのか。

瞬間。

はっと、三つの鎧は弾かれるように、真理の方を見たのだ。

「新しいカシメルは、面白い鎧を持っているではないか」

闇の中の主は、魔気を激しく震わせながら、悦楽の笑い声を上げたのだ。

※

「闇でありながら、なんと影の薄い鎧よ」

感嘆というより、それは嫌悪の声に聞こえた。

鎧の一人が、言った言葉だ。

その時——分かった。

真理にとって、とても理解しやすい言葉だったからだ。

早紀の存在だ。

もっと、彼は疑問に思ふべきだったのだ。

これまでの人生の中で。

どうして、何度も何度も早紀の存在を忘れてきたのか。

自分にとっては、鎧のイケニエになるべき存在だ。

キー的存在といっている。

真理は、それに同意したわけではなかったから、もっと熱心に彼女を追い出すべきだったのだ。

なのに、何度も何度も存在を忘れ、思い出し、そしてまた忘れていた。

同じ車で、毎日登校していながら。

学校で、早紀の額の印について、誰も騒ぎ立てなかったこともおかしかったではないか。

そう、か。

真理は、主の前だと言うのに、自分の滑稽さに笑いさえ浮かべかけていたのだ。

そうか、そうだったのか。

早紀は、ただ影が薄かったわけではない。

影を薄くしようと、自らしていたのだ。

努力ではなく——魔力で。

自分が魔女だと知らない女だったので、無意識に使っていたのだろう。

そして。

その力は。

予想外に大きかった、というわけだ。

この三人が、指摘されるまで気づかないくらいに。

出会いがしらに、先輩方に一撃を食らわせたようなものだ。

相手にとって面白いはずがない。

歴戦の勇者さえ、その中にはいるというのに。

一方、真理にとっては思わぬ拾いものだった。

早紀の能力など、これっぽっちも期待していなかったのだから。

「どうぞ、お見知りおきを…」

跪いたまま、真理の心は昏い喜びで満たされていたのだった。

偵察

――

「よお」

呼びかけられて、早紀ははっとした。

気づいたら、また彼女は歩いていたのだ。

そして、夢の中に入っていた。

向こうにいるのは、あの鎧。

そっか。

早紀は、思い出した。

真理に連れて行かれた怖いところから帰ってくるなり、彼女はバタンと意識を失ってしまったのだ。

疲労、緊張、恐怖。

いろいろ積み重なったのだろう。

早紀の人生の中で、あんなに怖い思いをしたのは初めてだったのだから。

おまけに。

おまけに、真理が笑うのを初めて感じた。

昏い笑み。

早紀は、ようやくほっと出来て、その場にへたりこんだ。

「お疲れのようだな」

鎧の男は、楽しそうだ。

「うん：疲れた。怖いね、みんな」

この鎧の男は、話しやすい気がする。

他の鎧よりも、怖い感じがしないのは、契約をした関係だからだろうか。

「あっはっは、あいつらのマヌケ面を見たか？ オレを『4th』と見下しながらも、警戒しまくりだったな」

早紀の恐怖など、どうでもいいことのように、鎧は思い出し笑いを始める。

4th？

そういえば、あの場でも聞いた言葉だった。

一番怖い闇が、真理に向かってそう言ったのだ。

『極東エリアの4th』、とかなんとか。

「他に三匹いただろ？ クサレ鎧どもが。4体の鎧の中で、新参者は一番びりつけつ。だから…4thだ」

口にしなかった早紀の疑問を、彼は笑みと共に語る。

しかし、どう聞いても他の鎧と仲良しとは思えない。

ライバル、なんだ。

だから。

だから、真理も笑みを浮かべたのか。

他の三体に、存在を気づかれないまま近づいた事実が、どうも彼を喜ばせたようだから。

「この鎧って、あんなこともできるのね」

早紀は、うまくつながらない記憶を混ぜ合わせながら、ぽろっと口にした。

刹那。

「ぶはっ…おまえ…おまえ…誰があんな技を繰り出したか分かってないのか!？」

息も絶え絶えに笑う鎧なんて——そうは見られるものではなかった。

※

うーん。

早紀は、授業も上の空でいろいろ考え込んでいた。

鎧の男が教えてくれる情報は、1つずつであっても、十分彼女の思考のキャパを超えるものばかりだ。

自分は魔女で、二度死んで、鎧になって、真理と同化して、空を飛んで、怖い人たちと対面して。

それでもってそれでもって。

あの能力とやらを出したのが、早紀だというのだ。

そんなすごい能力なんて、本当に持つてるのかなあ。

考え込んでいるだけで、あっという間に授業が終わり放課後で。

とりあえず、言われたとおりのことを、ごくんと飲み込むしか、早紀には出来なかった。

真理は、懇切丁寧に早紀に教えてはくれないし、鎧の人といわれる時間は、意外と短かった。

夢の世界では、時間の流れが随分違うように感じるのだ。

うーん。

伸びをしたい気持ちをぐっところえて、早紀は身体を縮こまらせたまま、教室から出ていこうとした。

その時。

「…捕捉しました」

目の前に——誰かが立った。

下を向いていた早紀に見えたのは、真っ黒いスカート。

声も服も、間違いなく女生徒のものだ。

ゆっくり。

いやな予感がしながら、ゆっくりゆっくり、早紀は顔を上げていった。

黒いガラス玉のような眼。

青いほど白い肌に際立つ赤い唇。

ウェーブを帯びた長い黒髪。

綺麗な女性だが、知らない人だった。

同じ学年でもない。

だが。

だが、ただひとつだけ、早紀には理解できた。

彼女の額のまんなか。

自分と同じ、しるしがあったのだ。

この人！

「ようやく捕まったか」

その彼女の後ろから現れたのは———までも、知らない男だった。

※

「君の能力は、厄介だな」

まだ、生徒の帰りきっていない、ざわつく教室。

そこで、早紀は見知らぬ男と女に、行く手をふさがれていた。

ど、ど、どうしよう。

うろたえるしか出来ない。

何となく、いま、自分がピンチな気がしたのだ。

早紀は、知らない学校の人間から、声をかけられるような有名人ではない。

ましてや、相手が自分と同じデコのマークを持っているとなると、いやな予感がプンプンするのだ。

「朝から探索させたが、見つけ出すのに今までかかった」

男は、左目を紫を帯びた黒髪で遮っている。

残った右目は、何というか――輝いているように思えた。

この人。

この人、この人、この人、まさか。

勝手に語り始める男を、早紀は警戒しまくった。

彼女の想像が、間違いでなければ。

この男は昨夜、あの三人の中の一人として、いたのではないか。

「ああ、名乗ってなかったな…僕は、東夷淳」

こっちは、零子。

ガラス玉のような目をした綺麗な子を、軽く顎で指す。

「は…はあ」

あの中の一人だというのなら、一体何の用なのだろう。

無意識に小さくならうとした早紀は——しかし、次の瞬間びくつとした。

二の腕を、淳という男につかまれたからだ。

「目の前で挨拶してる相手に、その技は駄目だろう…」

掴んでれば、消えられないかな。

淳は、ひとつの目でニツと笑う。

「あっ…あのっ…」

意味も分からずに、更に腕をとっ掴まれた状態で、早紀は更にしどろもどろになった。

一体、私に何の御用ですか。

そう聞いてしまえば、簡単だったというのに。

知らない人とのコミュニケーションに慣れていない自分を、ここですらしてしまうだけだった。

「不思議だね…魔族の力は、魔族には効きが悪いはずなのに」

ひとつの目が。

ゆっくりゆっくり——早紀に迫ってきた。

※

「トウーイ卿：その辺にしていただけですか？」

ひやつ。

声には、冷気が感じられた。

反射的に、早紀は自分が叱られている気がして、身を竦める。

真理の声に対する、条件反射だ。

ん？ 真理？

しかし、早紀はすぐに感情を驚きに変えた。

なぜ、ここで真理の声が聞こえるのか。

はっと視線を投げると、ドアの向こうに彼が立っているではないか。

あ、あの真理が、ロークラスに！？

信じられない事態に、早紀の口はあんぐりと開いたまま。

もはや、淳に捕まれている腕など、どうでもいいほどの衝撃だった。

「おや、カシユメル卿：昨日ぶりだね」

ぱっと、彼は早紀から手を放す。

何にも悪いことはしてませんと言うように、その手を軽く上げてみせる。

「さっそく偵察ですか？　まあ、3rdのトゥーイ卿としては、気になりますよね？」

ぴっきぴき。

早紀の周囲に、氷が張っていく音を感じる。

それほど、真理の声には冷たさが溢れていた。

その冷気が、自分に向けられるなら、まつ毛さえ凍りついて目が開かなくなるのではないかと思うほど。

「珍しい能力だと、興味がわくものでね…ご挨拶だよ」

その冷気を受け流すように、風が卷いた気がした。

ふわり、と。

一瞬だけ、左目を覆う髪が浮いたが、その中はよく見えなかった。

「そう心配されなくても、初陣でゆっくりご覧になれますよ」

冷気を溢れさせながら、真理はちらと零子を見た。

早紀と同じしるしを持つ女性。

「つれないねえ、極東の中では二人だけじゃないか、憑き魔女は」

自分以外の憑き魔女を見るのは、これが初めてでね。

淳は、早紀と零子を見比べるような動きをした。

「しかも、たった一つしか年が違わない。仲良くなれるかもしれないじゃないか」

淳の言葉とは裏腹に、二人の男の間には火花が散っているようにさえ感じる。

こ、こわい。

早紀は、この場に立っていないかならないだけで、拷問のようなものだった。

「ご冗談を…」

真理が——笑った。

「3rdを狙わないほど、お人よしじゃありませんよ…俺は」

怖い寒い怖い寒い。

早紀は、その真理の笑みを、見ないように目をそらしたのだった。

つながり

—
—
「……」

その感覚を、真理はどう表現すればよかったか。

授業が全て終了し、彼は帰ろうとしたのだ。

廊下に出て、三步進んだところで、足を止めさせられた。

その、得体の知れない感覚に、だ。

痺れる針が、一瞬、肉に突き立ったような、痛み。

初めてのそれに、しかし、真理は迷わずにロークラスに足を向けていた。

そんな気がした、としか言いようがない。

そして——見たのだ。

トゥーイ家の当主が、早紀の腕を掴んでいるのを。

去年、鎧を纏う権利を得た男だ。

たった一年、先にそれを手に入れただけで、彼には大した戦果はない。

だが、トゥーイは3rdだった。

何故か。

それは、極東エリアの4つの椅子のうち、2つまでしか埋まっていなかったからだ。

先代のトゥーイ家当主と、真理の父親が早く命を落としたせいである。

前回の、大空蝕の時だと聞いていた。

そして。

魔族側は、その戦いで負けたのだ。

四人の内、二人を失って。

今年、ようやく真理が鎧を受け継ぎ、久しぶりに4つの席が埋まったことになるわけだ。

トゥーイは、同族ではあるが、3rdでもある。

真理が、最初に踏み越えるべき相手だった。

早紀にちょっかいをかけてきた、ということは、余程昨日出し抜かれたことが悔しかったのか。

早紀の持つ能力を、調べにきたのだろう。

いまだ、クラスメイトにすら、額のしるしで騒がれていないだろう、あの女を捜し出せたことは、大したものだったが。

さて。

牽制しておくか。

真理は――割って入ることにしたのだった。

空蝕

――

「くーしょく？」

聞いたことのない言葉を、早紀は唇で繰り返してみた。

さすがに慣れてきた、夢の中での出来事だ。

「そう、空蝕。空が欠ける夜のことだ」

鎧の男は、そこに空があるかのように、上を指差した。

すると、本当に闇夜が広がり始めるではないか。

月や星のある、夜の空が。

さすが夢。

便利だなあ。

早紀は、あんぐりと空を見上げた。

「蝕が起きると、空に更に暗い影が出来る…似たようなのを、お前も見たら？」

言われて、早紀はすぐに思い当たった。

真理と空を飛んで、黒い球体に入ったことを、だ。

「あれは疑似蝕で、本物じゃないがな。ああいうのが、不定期に発生するわけだ」

いま、頭の上にある空の一部が、闇に欠けてゆくのが分かる。

「その空蝕の、『涙』を奪い合うんだ」

空で——火花が散った。

遠いカメラの映像のように、何かが激しくぶつかり合う。

「あの中に、オレたちも行くんだ」

見上げたままの早紀の耳に、楽しげな声が届く。

血の奥が沸き立つような、熱狂さえ含まれているような声。

早紀は、空から視線を降ろしながら、彼を見た。

そうだ。

早紀は鎧なのだ。

真理も、初陣という単語を使ったではないか。

だから、早紀も戦わなければならないということになる。

ひええ。

理解したら、腰が引けた。

争いなんか、好きはずがない。

「む、む、無理…死んじゃうよ」

魔族の戦いなんて、想像もつかないようなものを、早紀が出来るはずがない。

そんな彼女に、鎧の男は楽しさを消したりしない。

「ばーか、お前にはもう選択肢はないんだよ」

それどころか——とどめを刺してくれたのだった。

※

そのまま。

目がさめると、思っていた。

鎧の男に笑われて、あれ、と夢から放り出されると。

なのに、今日の夢は終わらなかった。

あれ？

早紀は、その違和感に引っ張られるように、辺りを見回した。

頭上の映像は消え、再び静かな状態に戻っている。

いま、自分に生まれた違和感を、早紀が消化出来ないでいると。

ガチャ。

金属が、鳴った。

ガチャガチャガチャガチャ！

地震でも起きたかのように、小刻みに鎧が震えだしている。

「きた…来た来た来た…」

声が。

彼の声が、ひどくなる鎧に共鳴するかのように、喜びに打ち震えた。

「戻れ！　そして新当主を叩き起こせ！」

継ぎ目という継ぎ目が、大きな音を立て続ける中。

制御しきれないほどの、その小手の先の指が、早紀に向けられる。

な、に？

ぶれる黒い指先は、彼女の額に向かっていた。

「来た…蝕だ!! 待ち焦がれたぞ!!」

震えながらも、それでも指は早紀の額で円を描いた。

「あっ!!」

その悲鳴は、既に現実の音を伴っていた。

更に。

彼女は既に、真理の部屋の前に立っていたのだ。

しょ、く。

一瞬前の鎧の言葉が、頭をよぎる。

同時に、身体の奥底から、熱い何かがせり上がってきていた。

彼女の中で、あの鎧が猛っているような。

あらがい難い、そして、生まれて初めて持つ衝動。

手が。

自分の手が。

自分のものではないように、ドアノブを掴んでいた。

あの真理の部屋を――ノックなしで開けるなんて。

初陣

――

ドアが、勢い良く開かれた瞬間。

真理は、飛び起きていた。

明かりは消えたままだが――分かる。

早紀、だ。

予感はなかった。

本当に、何も感じないのだな、とその事実を噛み締める瞬間でもある。

「空蝕だな？」

駆け込んでくる早紀の言葉より早く、真理は問うた。

闇の中で、もつれるような動きの彼女は、首がもげんばかりに頷く。

蝕に気付けるのは――鎧だけ。

いや、そうではない。

逆に、鎧は蝕を知るために、特別に作られたものだ。

ああ。

真理は、あの早紀にさえ飛び込んでこさせる空蝕というものに、武者震いした。

震えながら、早紀の額に指を伸ばしていた。

「いくぞ…」

ガシャンっ！

早紀の身体が、人型という枠を超える。

その変貌すら、いまの真理には長く感じた。

早く、と。

早く、俺を飲み込め。

そして、一秒でも速く、蝕にたどり着かせろ。

一瞬よぎった、トゥーイの姿。

あの3rdより、真理は優秀でなければならない。

でなければ、カシユメル家は4thのままだ。

父親が早く死んで、極東エリアに空席が出来ている間、彼は沢山の恥辱を受けた。

彼だけでなく、極東エリアの全席が、それに耐えなければならなかったのだ。

大敗、そして長い空席。

その汚名をすすぐ機会が、ようやくにしてやってきたのである。

真理は待ちきれずに、鎧が出来上がろうとする、闇の煙に手を伸ばす。

鎧は、そんな真理を――受け入れた。

※

窓から、飛び出す。

派手にガラスの碎け散った音も無視して、真理はすっ飛んでいた。鎧を纏ったら、いきなり視界が開けたように、蝕を感じたのだ。

高い、高い空へと一直線で向かう。

鎧の高揚も、真理にダイレクトで伝わってきた。

早紀の生来のものとも思いがたい、野生的な衝動。

それに突き動かされているのか、いつもの馬鹿セリフが聞こえてこない。

これは、早紀が例のステルスモードに入ったということだろうか。
ステルスが発動した早紀からは、感情のリンクさえも外されているように思えるのだ。

始まったばかりの蝕が目に入った時。

同時に、火花が見えた。

彼らより、速い連中がいたのだ。

しかも。

味方と——敵の両方。

まだ、一対一のようなのだ。

味方は。

1st!!

鎧から、それを判断する。

さすが、速い。

そう理解している間にも、二人の戦いは続く。

真理は飛びながら、右手を自分の鎧の胸にあてた。

そこに――武器があるはずだった。

が。

鎧が、反応しない。

武器を出そうとしないのだ。

鎧である早紀に、武器の場所を問いただそうとした時。

自分の首が、勝手に後ろを向く仕草を見せる。

……。

それに気付いて、真理は眉をひそめた。

右腕を、首の後ろに回すと。

それは――あった。

背中から、それを引き抜く。

長く、長く。

そして、反りかえった刀。

野蛮な刀か。

多少の失望は、あった。

水馬刀と呼ばれるものに近いそれは、魔族にとっては低級な扱いだったからだ。

しかし、既に戦いは始まっている。

真理は、武器の優劣にケチをつけている暇はないのだ。

まずは、一太刀。

いまいる敵に、挨拶をするのが先だった。

ふじい

――

真理が、戦いたがっている。

鎧となって彼を包みながら、早紀はそれを内部から強く感じていた。

自分の内部、というものは二つある。

真理のいる部分と――おそらく、あの鎧の男がいる部分、だ。

その両方が、この初陣を心待ちにしていたことが伝わってくる。

一瞬、それらが自分のものであるかと、錯覚するほど近く。

事実。

その感覚に、強く捕らわれていたせいか、引け腰になったり、怯えたりする余裕はなかった。

自分の元の性格を考えると、かなりの部分で彼らとシンクロしていなければ、ありえない状態だ。

そのシンクロの高さのせいか、空蝕に向かって飛ぶ時の自分の身体は、とても軽く感じる。

そして、そして、蝕が一体なんなのか――半本能的に感じる事が出来たのだ。

鎧の知識だったのか、真理の知識だったのか。

どちらかは、分からないのだが。

空蝕。

エネルギーの塊。

蝕の終わりに落ちる、ひとひらの『涙』の奪い合い。

敵。

金の者。

青の者。

意識の中には、金色がたくさんたくさん流れ込んでくる。

時折、青が掠める程度。

早紀の視界には、夜空で打ち合う黒い鎧と、もう一人が見えた。

金！

ぶつかり合った火花が、鮮やかにそれを見せる。

迷わないのは、真理。

その二つの鏑迫り合いに、割って入る気だ。

首筋が、ぞくつとした。

固いはずの鎧の首が、一瞬、冷たいゼリーにでもなった気がしたのだ。

真理は、そのゼリーから、もっと冷たいものを引き抜いた。

自分の身体から奪われる、長く、曲がったもの。

トプンッ。

首筋は、そんな水音をたてた。

真理から、失望のような感覚が届いたのと——ほぼ同時のことだった。

※

振り上げられる、刃の残像。

金の鎧の背を、真理が斬り付ける。

早紀は、それを見ていた。

突然の一撃に、敵は墜落してゆく。

金の鎧もやはり、この鎧の存在に気付けなかったのか。

でなければ、こうも簡単に斬り付けられるはずがない。

「ああ、やっぱりカシユメル卿か…」

先に戦っていた魔族が、真理の横についた。

1st——イデルグ卿。

真理から伝わる、表層の情報。

がっしりとした、重戦車のような鎧だ。

しかし、鈍重な動きでなかった。

「横槍、失礼しました」

真理が、控えめな一言を口にする。

昼間のトゥーイという男との態度が違うのは、やはり相手が1stだからなのか。

「気にするな…落としたらそれでいい。ベルガー卿なら、イヤミのひとつも言うだろうがな…おっと、噂をすれば、その2nd様だ」

下方から飛んでくる鎧を、1stが見下ろした。

しかし、そこでもすぐに火花が上がる。

同じように遅れてきた、金色の方と接触したのだ。

しかし、金の方が2体見える。

「カシユメル卿…イヤミを言われに、行ってくれるか？」

イデルグは、下の戦いを指した。

「お前さんの鎧は、すぐ存在を消してしまうから…蝕の番人には向かない」

そして、顎を上に向ける。

黒い夜空を、少しずつ闇が侵食している。

まだ、いまは三日月のような形だ。

これが球体になり、そしてまた小さくなっていくのだろう。

「分かりました」

真理は。

答えるや、急降下した。

突然の垂直落下だったが、早紀は絶叫したりしない。

それどころか。

真理と鎧の二人がかりで戦意を煽られていて——すっかり、頭に血が昇ったままだった。

※

2nd——ベルガーの鎧は、なんというか豪華だった。

金属の鎧だというのに、黒い羽の飾りがたくさんついているのだ。

その羽を散らしながら、金の鎧と打ち合う。

しかも、2体相手に、だ。

細い細い、まるで針のような剣が閃いた。

『……切れ』

その戦いに、真理がさっきのようにすぐに飛び込むかと思ったら。

一度動きを止め、彼はそう言うのだ。

言葉ではなく、早紀に直接伝える感覚で。

え？

切れて…何を？

自分に言われているのは分かるが、すぐに反応できない。

二人の感覚のせいで、冷静な判断力などいまの彼女にはないのだ。

『ステルスを…切れ』

もう一度。

今度は、省略なしで言われた。

ステルス——この、存在を感じさせなくなる能力のことだろうか。鎧の存在を、周囲に分かるようにしろ、ということのようだ。

ベルガーへの気遣いなのか、はたまた正々堂々と勝負をしたいのか。

どんな考えからの言葉かは分からないが、いまの真理にはいらないようだ。

だが、更に分らないことがあった。

どうやればこの能力を外せるのか——

いつも、無意識でばかりやっているのだから。

『叫べ…』

真理が、ぼそりと呟いた。

『怒鳴れ…』

少し、音量が上がった。

一瞬の間。

『わめきちらせ!』

早紀の全身に反響するような、大きな音になる。

興奮状態だった彼女は、それに飛び跳ねるほどびっくりした。

反射的に。

『あsdrふじこ!!!』

意味不明の、大声を上げてしまう。

あわっ、なんか、へんな、声、出た。

早紀は、口を押さえようとしたが、鎧の右手をわずかに動かした
だけでとどめられる。

『ああ…つながったか』

少しうるさそうに、しかし、納得したように——真理は呟いたの
だった。

オフモード

――

少し――分かった。

早紀という鎧の扱いを、だ。

精神のリンクが切れている時の彼女は、ステルスモード。

自分の心さえも、真理から隠すのだ。

低次元な雑多な感覚が、流れ込んでこないのはありがたいが、ずっとステルスモードなのは困ることもある。

それを、さっきイデルグに言われたのだ。

ステルスが故に、蝕の番が出来ない、と。

自由にオン、オフが出来なければ、不便なのだ。

それに。

ステルスは、早紀の能力で。

これのみに頼って勝ったところで、真理には勝利への充実感を感じられなかったのだ。

さっきの一撃で、それに気付いた。

勿論、必要なところでは使う。

だが。

取り敢えず次は、真理の力で敵を落とす。

『あわわ…切れた？ 切れたの？』

早紀の、慌てた声を聞きながら、真理はベルガーの脇を擦り抜けた。

向こうから、突っ込んでくる、一体の金の鎧。

天族だ。

だが、この名前は遠からず忘れることになる。

自分たちが滅ぼすからだ。

真理は、そういう魔族至上主義の教育を受けてきた。

だからこそ。

前回の、大空蝕の敗北は、限りない汚点なのだ。

真理は、気に入らない形の刀を振り上げた。

打ち合う。

鎧の全身に、その振動が伝わった。

一瞬、ぐわんつと鐘が鳴ったような共鳴を引き起こす。

打ち負けはしなかったが、腕がきしんだ。

みしっ。

真理は、その腕をなおきませる。

跳ね、返した。

一秒にも、満たない間の――攻防だった。

激痛

—
—
—

早紀の身体でもあるはずなのに、信じられない速さと力で、真理が自分を操る。

早送りの、アクション映画を見ているような光景だ。

だが、これは映画ではなかった。

早紀は、それを身を持って思い知ることとなる。

敵の刃の切っ先を、皮一枚よけきれなかった瞬間。

……!!

声にもならない悲鳴を、あげさせられたのだ。

い、痛い——なんてものじゃなかった。

掠めた胸の辺りに、引き裂かれたような熱と激痛が走ったのだ。

こらえきれずのけぞった動きは、鎧全体を連動させた。

『うご…くなっ!』

その身体の主導権を、即座に真理に奪い返される。

『痛い! 痛い!!』

小さなケガ以外、経験のない早紀には、こらえがたい痛みだった。

『うご…!』

再度。

真理は、彼女を制そうとしたのだろう。

だが、それより速いものがあつた。

自分に振り下ろされる――刃。

痛い！

それは、予測される激痛への予告的反射。

現実の痛みを知ってしまった早紀に、その恐怖は我慢できなかった。

が。

「助太刀にきたのかね…それとも、足を引っ張りにきたのかね」

目の前に散ったのは――黒い羽。

敵の一撃は、ベルガーの細い剣がいなしていたのだ。

その瞬間。

恥と怒りが、早紀を覆った。

自分の中に、あったものではない。

真理から、放出されたものだ。

「大体…」

ベルガーは打ち合いながらも静かな声で続ける。

「有用な力を持っているというのに、それを使役しないのは…戦いを愚弄しているのか？」

真理の心を、なお乱れさせる——とどめの一言だった。

空の涙

――

真理の、プライドはずたずただった。

対等に戦えていたはずの戦況は、早紀に邪魔され、ベルガーの助けを借りた上に、決るような嫌味で畳み掛けられたのだ。

これは、父親経由で受けた屈辱ではなく、真理自身が受けたものだった。

『痛い、痛い』

そんな彼の頭の中には、ひよわな早紀の声が響き渡る。

真理は、まったく痛くないため、その言葉に同調できるはずもなかった。

鎧と魔女の同化についての基礎知識はあるが、全てを知り尽くしているわけではない。

鎧が傷ついて、痛がるなんて想像だにしていなかったのだ。

そして、真理は短い時間で選択を強いられる。

このまま、痛がる早紀を引きずって実力で戦うか。

再びステルスモードで、不意打ちで戦うか。

この一瞬の迷いでさえ、二体の敵の片割れが、こっちに向かってくるには、十分な時間なのだ。

そして。

真理は、答えを出す必要がなかった。

近づく敵を認識するや。

ひよわな早紀の声が。

聞こえなくなった。

真理の指示も待たず——彼女は保身に走ってしまったのだ。

おかげで。

いきなり、真理を見失ったらしい敵の戸惑いを、目の当たりにさせられたのだ。

これでは……ただの作業ではないか。

忌々しく——真理は、刀を振り下ろしたのだった。

※

トゥーイは、来ていないと思っていたら。

「奴なら、ずっと上空だ」

三体を落として、蝕に戻ってきた真理に、イデルグは天空を指す。
ちようど、降下してくるところだった。

「トゥーイ卿は、目が効くからな…戦力が足りている内は、厄介な奴がこないか見張ってもらっていた」

「きませんね、向こうのトップも…青も」

黒耀石の目を持つ鎧が、真横に立つ。

その石が、まるで生きているかのように、兜の上を這いずった。

本来、あるべき位置ではないところまで、自由に動いている。

「ついに、くたばってくれているなら万々歳だがな…まあ、青が来るには距離があるから、そっちはいいだろう」

イデルグが、魔気を吐き出しながら、蝕を見つめる。

ピークはとつくに過ぎており、もう少して蝕は閉じるだろう。

青か。

静かすぎる鎧の中で、真理は屈辱にまみれたまま呟いた。

もうひとつの種族——海族だ。

奴らは、名前の通り海上が縄張りで。

今回のように、蝕が陸地の上であれば、現れない。

しかし、世界中の海の広さを考えると、侮れない勢力だ。

今の真理は、自分の失態から逃避しようとしていたのかもしれない。

新しい情報で、頭をいっぱいになっているフリを。

しかし——黒耀石が、彼を見るように動いた。

まるで、さっきの戦いぶりを、見ていたと言わんばかりに。

カシユメルの名に、泥を塗られた気分、彼は耐えなければならなかった。

これが…4thの立場か。

だが。

「こうして、目の前にいるのに…霞んで感じるよ。僕のこの目ですえ…悔しいけどね」

真理の、被害妄想とは裏腹に。

トゥーイは、称賛を口にした。

それは、真理自身ではなく——鎧を誉めたに過ぎなかったが。

※

「蝕が：終わるぞ、卿ら」

トゥーイと真理の間の空気を、ベルガーが一言で断つ。

非常によろしくない気分のまま、しかし真理は、空蝕の閉じゆく様へと視線を馳せた。

初めての蝕と、その蝕の終わりなのだ。

横向きにある瞼が、ゆっくりと閉じていくような様を、じっと見つめた。

その瞼が、もとの空に触れようとした時。

微かなきらめきを見せる。

ああ。

これが――涙か。

「染めるぞ」

イデルグが、下から何かを捧げ持つかのように、両手を差し出す。鎧から溢れる魔気とはまた違う、明らかに故意に作り出す魔気を、

その両手に乗せるのだ。

ベルガーは、恭しく宙で片膝をつくようにして、手から魔気を生み出す。

トゥーイも、両手に気を溢れさせ始めた。

初めての戦い。

初めての勝利。

そして、初めての——儀式。

両手を、ゆっくりと前に出す。

全身を血液のように流れる魔力を、両手に集めるのだ。

魔力を皮膚のすぐ内側に集めると、立ちのぼるように魔気が溢れてくる。

こうして、涙を魔族の色に染めるのだ。

黒く、より黒く。

そうすることで、この蝕の持つエネルギーは、魔族のものとして極東エリアに降り注ぐ。

『地』を支配するに相応しい種族を決めるための、エゴイスティツクなマーケティングだ。

魔のエネルギーを帯びた涙を浴びると、無傷では済まない他の種族は、その間、隠遁を余儀なくされる。

魔族たちの学校や屋敷などは、敵の涙の影響を受けないよう『傘』をかけてある。

その『傘』の範囲以外、自由に動き回れないのだ。

出られるのは、鎧持ちくらいか。

「どうした、ベルガー卿…」

完全に黒に染まった涙が、蝕の終わりからこぼれ落ちる瞬間。

イデルグが、隣の男を気にした。

羽の鎧を持つ男が、一瞬辺りを気にする動きをしたからだ。

「潮の…否…気のせいであろう」

ベルガーは、すくっと立ち上がるや兜を左右に振って見せた。

こうして。

真理の初陣は——終わった。

傷の代償

――

ガシャンッ。

鎧から解放された早紀は、前に倒れるように膝をついた。

痛い――！！！！

胸が、焼けるように熱く痛いままだったのだ。

窓が割れ、風通しのよくなった真理の部屋で、彼女は初陣の代償と戦わなければならなかった。

「今夜は…」

頭の上の方で、真理が不機嫌な声で、何かを言おうとしている。

しかし、いまの早紀には聞き取れない。

パジャマの胸が、血で濡れていないのが不思議なほどだ。

「…見せてみろ」

言いかけた言葉をやめ、真理の声が近づいてくる。

無造作に伸ばされた両手が、彼女のパジャマの前を、ぐいと開いたのだ。

夜中に、男の部屋で、あられもなく——なんてことを考える余裕など、早紀にはない。

だが、自分の傷口を反射的に見てしまった。

金色のアザが、胸の上を左右に走っている。

真理も、傷に驚いたようだ。

彼は、その傷口に手を伸ばしかける。

傷に触られるなんて、痛いに決まっている。

早紀は。びくつと身構えたが。

真理も同じように、びくつと手を引っ込めた。

熱いものに手を近づけた時の、反射行動に見えた。

ああ、そうか。

分かった。

真理も、この傷には触れないのだろう。

金色の敵につけられた傷だから、きっと魔族にはとても悪いものに違いない。

ということは、痛い上に——誰も早紀を助けてはくれないのだ。

涙が出そうだった。

「調べておく…部屋に戻れるか？」

真理の声は、彼女を更に孤独な気分叩き落した。

焼ける胸を、パジャマで隠すようにして、ふらふらと立ち上がる。

いまでも、誰か頼れる人がいたならば、彼女はきっとへたりこんだままだったろう。

だが、そんな人などどこにもいやしない。

いないから、立たなければならない。

おかあさん、おかあさん。

生きている真理より、死んだ母の写真の前で――泣きたかった。

※

「ああ…ここにいたか」

夢路の途中で、早紀はへたりこんでいたらしい。

あんなに痛くても、寝つけるものなのかと、その事実も不思議だった。

その夢路の途中へ、迎えにきたのは——早紀と同化したという鎧の男だ。

夢の中でさえ、傷口が痛いというのはどういう了見なのか。

夢ならば、痛いという感覚などないはずなのに。

「それはな…お前の魂に傷をつけられたからだ」

言葉にしていけないものも、男は勝手に汲み上げて語り出す。

「魔族と天族なんて、真反対だからな…お互いの攻撃の効きだけは…ガチだぜ」

よっと。

ガチャツと鎧を鳴らして、男は早紀の前に片膝をついた。

顔も上げられない早紀に、近づくための行動だろうか。

そして、彼女の頭の側でこう言った。

「オレなら…治せるぜ？」

なんと——甘美な言葉だったか。

この悶える痛みから早紀を救えると、男は言うのだ。

こんな状態の彼女さえ、はっと顔を上げてしまうほどの威力があった。

「おっと…ただし、それにはお前さんの魔力がある…治すのに必要な量だ」

それを、抜いていいのか？

何故、そんなことを聞くのか。

早紀が魔女で、魔力を持っているというのなら、好きなだけ使えばいいのだ。

それでこの痛みがなくなるのなら、安いものではないか。

早紀は、こくこくと強くうなずいた。

「オーケイ…すぐ治してやるぜ」

甘い、甘い言葉。

心と魂の弱った早紀にとっては、彼しかする人がいないという気分させられる。

差し出される金属の指先が、彼女の肩に触れたかと思うと。

ズシンッ。

身体が、鉛のように重くなった。

金属の手だから重くなったんだ、と言えば納得もするが、肩が――ではなく、全身が、なのだ。

「あ、あれ…」

早紀は、変な声を出した。

夢なのに。

目が。

回る。

から

――

夜のうちに、真理は何箇所かに連絡をした。

だが、必要な答えは返ってこなかった。

早紀の傷について、だ。

鎧を持つ者たちは、みな特権階級の選ばれし者たちで。

真理のカシメル家も含め、彼らは血族主義であるために、外部と鎧の情報を共有しようという気など、さらさらない。

だから。

その中でも、更に少ない憑き魔女の情報など、手に入れようものなかつた。

一瞬。

頭に、トゥーイの顔がよぎる。

彼なら身近で、同じ憑き魔女を抱えている。

しかし。

真理が、彼に教えを請うなど――ありえなかった。

意外と、夜が明ければ、あっさり治っているようなものなのかもしれない。

トウーイの憑き魔女も、一年鎧の役を引き受けているが、未だに登校しているではないか。

様子だけは、見てくるか。

朝、真理は早紀の部屋に向かうことにしたのだ。

彼女の部屋の前に立ち、澱むことなくノックをした。

返事はない。

まだ、寝ているのだろうか。

あるいは、やはり怪我が治っていないのか。

普段の生活ならば、起きていてもおかしくない時間なのだが。

真理は、鎧の主として当然のごとく扉を開けた。

そして見たのだ。

早紀は——ベッドの上に座っているのを。

起き上がれるのか。

その事実にも、まずひとつ安堵する。

痛がっているような様子はない。

しかし、同時に違和感にも気づく。

ならばなぜ、ノックに返事をしない。

そして、何故。

こっちを見ない。

真理は、ツカツカとベッドへと近づいた。

「おい…」

その肩に手をかけると。

まるで、紙のように早紀はベッドへと仰向けに倒れたのだ。

瞳は、ちゃんと開いている。

しかし——ガラス玉のように、何も映してはいなかった。

※

いつもの存在感の薄さとは、まったく違う。

生気そのものが、希薄になってしまっている。

まるで。

大量の、魔力を抜かれたかのように。

まさか。

真理は、抜け殻になった早紀の胸元を開いた。

傷は——ほぼ、なかった。

金の糸ほどの、痕跡が残っているだけ。

この傷が、早紀の魔力を吸い取ったのかどうかは分からない。

しかし、いまの彼女は、「一応」生きているとしか言えないほど、魔力が枯渇しかけていた。

「……っ」

真理は、頭を抱えた。

大きな、葛藤があるのだ。

彼は、鎧の主で。

この早紀の主で。

そして、偉大なるカシユメル家直系の主でもある。

その真理が、どうして下僕のために、力を尽くす必要があるのか、

と。

しかし、もしこの状態で、彼女が鎧になれなかったなら、真理は戦いに出られなくなる。

ならば、他の誰かの魔力を。

だが、自分より下に見ている相手に、魔力を分けてやるようなお人よしなど、カシユメル家の一族にはいない。

勿論、主である真理が命令すれば従いはするが、自尊心を深く傷つけられるだろう。

使用人たちは、かろうじて魔族と言える程度の低階級のものばかりで、早紀に分けるほどの魔力があるかも怪しいものだ。

深い眉間の皺の間で、葛藤と戦っていた彼は。

ついに、ベッドから離れた。

扉に向かって足を踏み出す。

開いたままの扉に手をかけ。

真理はそれを――部屋の内側から閉ざした。

ご丁寧に、魔力でカギをかける。

そして再び、早紀の元へと戻ったのだ。

これから。

これから真理がすることは、誰にも知られてはならなかった。

カシユメルの名において。

主が下僕に——魔力を分けてやるなど！

もどりみち

――

朝。

早紀は、目を覚ました。

いつものように起き上がり、ベッドの上に座って母親の写真を見る。

「おかあさん…おは…」

そこで――彼女のネジが切れた。

眠りの世界を黒とたとえるなら、いまの早紀は白い世界にいて。

何かを考えたいとか、動きたいとか。

「したい」という欲求が、まったく失われてしまっていた。

ただ、自分の肉体が存在するだけで、それ以外は全て白で塗りつぶされていたのだ。

そんな中であって。

早紀は、足だけがほのかに温かいような冷たいような、そんな感触を味わっていた。

不定期に触れる、まとわりつくような風ではない何か。

ちやぷん。

一度だけ——音がした。

それが何なのか、考えることは出来ない。

早紀は、そのぬるい何かに足を浸したまま、白い世界で立ち尽くすだけなのだ。

ふと。

自分の、右手が見えた。

だらりと下ろしたままの右手が見えた、ということは。

早紀は、首を動かしていたのだ。

右手が。

とても。

あたたかい。

足のぬるさなど忘れてしまうほど、自分の右手が熱を持っている。

その熱が、右手から少しずつ腕へ肩へと上がってくるのだ。

とてもとても、冷えていたのが分かる。

この温度を、ずっと自分が心待ちにしていたことも。

白い世界をも、右手の熱は溶かし始める。

自分を。

助け出してくれる温度。

早紀は、温かい右手を動かしてみた。

「おかあ…さん…」

何かを——握り返していた。

面倒な魔女

――

「おかあ…さん…」

きゅうつと。

赤ん坊のような力が、真理の手を握り返してきた。

お母さん？

不本意な呼ばれ方だ。

まだ、完全に帰っていない意識から漏れた、うわごとレベルの言葉。

真理は、ガラス玉のような、開いたままの目を見た後。

枕もとの写真を見た。

早紀によく似た女性が、笑っている。

早紀の母親が、カシユメルを引く魔女のはず。

親子二代で、魔女らしくない魔女だったようだ。

握られた手は、乳を吸う赤子のように、真理から魔力を吸い上げていく。

ふう。

魔力を失う倦怠感を覚えながら、真理は小さく息を吐いた。

鎧を得てからというものの、早紀には本当に振り回される。

予想もしていなかった力を持っているかと思えば、たったひとつの傷で魔力を枯渇させる。

鎧としてリンクしていればうるさいし、痛みを怖がって、彼の許可なくステルスに逃げる。

おかげで、真理個人としては、まったくの戦果を上げられていなかった。

ただ——数だけならば。

昨日、彼が墜とした数は2。

向こうのトップが、どうやら出撃してなかったので、2／3という立派な数字になる。

この数字は、おそらくイデルグによって報告されているだろう。

カシユメル家の初陣にしては、十分すぎる数字ではあった。

本当に、不本意だが。

多くの鎧を受け継ぐ魔族が、憑き魔女を持たない理由も、早紀を見ているとよく分かる。

非常に——面倒だ。

思えば。

トゥーイの連れていた、零子と呼ばれる憑き魔女も、ガラス玉の
ような目をしていた。

いまの早紀よりは、マシな目だが。

彼女もまた、傷により魔力を失いかけているのだろうか。

不本意なまま、真理が思考を巡らせていると。

「あ…」

小さな、女の声。

早紀のガラス玉に——光が入っていた。

知らぬが仏

――

早紀は――ベッドの上に転がって、天井を見ていた。

「あ…れ…?」

うまく記憶がつかならず、早紀は変な声を出す。

だるい身体をむくりと起こし、きろきろと周囲を見た。

誰もいない。

何故、誰かいると思ったのだろう。

自分でも、よく分からない。

時計を見ると、昼過ぎというありえない時間だった。

学校をさぼったことになる。

朝、起きて。

起きて――それから。

思い出そうとしたが、記憶はつながらなかった。

「おかあさん…おは…こんにちは?」

眉間をぐりぐりにしたまま、早紀はそれでも、母親の写真に挨拶をする。

今日はまだ、した気がしないのだ。

疲れてたのかなあ。

思い当たる節は、それしかない。

昨夜は、初めての戦いだったし、物凄く痛い思いもしたし。

そう言えば、痛みはすっかり消えていた。

夢の中で、鎧の男が治してくれると言ったが、本当だったようだ。

結構、優しい人カモ。

早紀は、そう思いながら、こそつと胸元を確認してみる。

傷は、きらっと光る一筋が、残っているだけだ。

けだるいのは、魔力を抜かれたせいだろうか。

治療に必要と言われたから。

だが、魔力さえあれば治せるという事実は、少しだけ早紀の心を軽くした。

今後、鎧になりたくないと言っても、あの真理が納得するはずがないからだ。

痛いのは嫌だが、いまの彼女の立場では、断ることは到底無理である。

どんなに逃げても、鎧の男は夢に出るだろうし、鎧が必要な真理に連れ戻されるだろう。

その真理は。

きっと、早紀が怪我で起き上がれないと思って、学校へ行ってしまったに違いない。

治りましたって：言った方が、いいよ、ね、やっぱり。

余り気は進まないが、黙っておくのも変な話だ。

夕方、帰ってきた頃に伝えるかなあ。

だるい身体に任せて、早紀はぱたりと布団に倒れ込んだのだった。

※

夕方、着替えて廊下に出る。

いつもなら、そろそろ学校帰りの車が着く頃だ。

廊下に出るや、修平に会った。

会った、というのは何か変だ。

廊下の壁に、寄りかかるようにして立っている彼を、見たという方が正しい。

いつもの、修平の様子ではなかった。

自分が死んだ事件以来、彼とは疎遠にしている。

早紀の思っていたような、人ではなかったせいだ。

いい人だと思っていたのが真逆だと、そのギャップの大きさとショックが比例する。

元々冷たい真理の方が、よほど平気だった。

だが、あまりにおかしい。

「あの…大丈夫ですか？」

遠巻きに、早紀は声をかけてみた。

非常に重そうな動きで、顔が上がる。

「あ…ああ、気にしないでくれ」

下がる眼鏡を戻しながら、彼は手で軽く早紀を払う仕草をした。

「でも…誰か呼びましょうか？ 具合、悪そうですよ」

修平の部屋は、そう遠くはない。

そこまで帰れないほど、彼の具合は悪いのではないだろうか。

「ちょっと真理に、魔力を吸われたただけだ：傍系のつらさだよ」

よっと。

修平は、何とか身体をまっすぐに戻し、しかし、よろけながら自室へ向かおうと歩き出した。

真理に？

立場的に言えば、修平よりも真理の方が上だ。

その上の人間に、魔力をよこせと言われたら、拒めないのだろう。

真理もまた、昨日の戦いで魔力を消耗したに違いない。

ふうん。

人間で言うところの、献血したようなものなのだろう。

修平の様子からすると、その内治るようだ。

他の人から、魔力ってもらえるんだ。

真理は、上の人間だから命令すれば、魔力はもらい放題というところか。

早紀のような、このだるさは感じていないに違いない。

いいなあ。

素直に、ちょっと真理が羨ましかった。

詐欺師

――

「あ…」

真理の魔力を吸って、一時的に意識を回復した早紀だったが、長い覚醒ではなかった。

一瞬だけ目が合ったが、その目はすうつと閉じられたのだ。

ようやく彼女の身体が、「休みたい」という欲求を表した証拠だった。

ふう。

とりあえずは、最低限の魔力には達したようだ。

真理は、引き上げようと思った。

が。

握られた手は、離れなかったのだ。

おい。

冷ややかに、その手を見ると。

これまた図々しいことに、引き続き真理の手を通じて、魔力を吸い続けている。

まだ、全然足りていないと言わんばかりに。

何という、食欲。

呆れながら、その安らかな寝顔を見る。

こんな静かな寝顔で、物凄い食欲だった。

本当に。

真理は、思った。

本当に、厄介な憑き魔女だ。

早紀が鎧である以上、真理が死ぬまで付き合う羽目になるだろう。

主から、遠慮なく魔力を吸うような魔女と。

まあ、本人は覚えてないのだろうが。

いや。

覚えていられては、困る。

いつも魔力を分けてやると思われるのは、非常に問題があった。

魔力対策も、必要なようだ。

それからしばらくして。

ようやく満足してきたのか、早紀の手が緩む。

振り払うことは出来ただろうが、無理にそうすると今度こそ、彼女が完全に覚醒して、真理が何をしていたか気づきそうだったのだ。

緩んだ手をほどき、真理はベッドから立ち上がり——かけて、よろけた。

思いのほか、早紀に持っていかれたようだ。

これでは、真理の方に問題が出る。

どこかで、魔力を補給しなければ。

ああ。

残酷にも、彼はすぐに心当たりを思いついた。

修平がいた、と。

※

修平を、自室へ呼んだ。

彼は、真理に魔力を与えるのを拒めない。

分かっていたからこそ、遠慮なく魔力を吸い上げた。

男の手を握って、ゆっくり吸い上げる酔狂はなかったので、負担がかかるのは分かっていたが、一気に奪わせてもらう。

今度よろけるのは、修平の方だった。

そんな彼に。

『魔力供給者』も、手配させることにする。

出撃の度に、こんなに持って行かれては困ると、修平も思ったのだろう。

すぐに手配すると言って、ふらふらと真理の部屋から出て行った。

世の中には、いろんな魔族がいる。

その中に、階級と能力は低くても、無駄に魔力が余っている存在もいるだろう。

そういう人間を、一人置いておけば便利だと、よくよく分かったのだ。

真理の父親は、憑き魔女は持たなかった。

遠い遠い記憶の話なので、確実ではないが。

もし、父親が生きていたならば、魔女を生かすことに反対しただろうか。

「……」

ふと。

真理は、顔を扉へ向けた。

早紀の気配がしたのだ。

リンクしてしまったせいで、早紀のあの能力は、真理には通用しない。

近くになれば、はっきりと気配が分かるのだ。

どうやら、真理の部屋に入りたいようだ。

ここからが、早紀は長い。

昨日の蝕の時には、飛び込んできたが、あれは非常時だ。

通常の彼女は、真理を怖がっているのです、部屋に入るのに長い時間戸惑う。

「……入れ」

気配が、ざわざわとうるさいので、真理はさっさと先手を打った。

扉まで迎えに行つてやる気力は、まだ彼にはない。

気配が、びくうっと飛び跳ねる。

「し、失礼します」

言葉と同時にノックという、奇妙な組み合わせの後——扉が開いた。

※

早紀の顔色は、かなりよくなっている。

まだ完全ではないのは、当たり前だ。

あれ以上、真理の魔力を分けてやっていたら、彼の方が動けなくなっただろう。

「あ、あの…怪我…治りました」

やはり、真理のことは覚えていないような話が、ちんたらと始まった。

そうだ、傷だ。

その点については、彼も気になるところがある。

「自然に治癒したのか？」

問いかけると、問われること自体に、早紀が驚いた顔をした。

「分かった」とだけ真理が答えて、そのまま出て行けると思っている

たのだろうか。

しかし、これから傷を負わないということは、考えられない。

少なくとも真理はまだ、真っ向勝負について、あきらめる気はなかったのだ。

だから、必要な情報は早紀から引き出しておく必要があった。

「あ、いえ…鎧が、治してくれると言って…」

早紀は——思いがけない言葉を吐く。

「鎧が？」

早紀は、真理と鎧と、半分ずつの契約をしたのだ。

その鎧が、彼女を生かそうと助けることがあっても、確かにおかしくはない。

真理が、魔力を分け与えたように。

だが。

「はい、鎧が魔力をくれたら治してやるって…」

その補足で、真理は目を細めなければならなかった。

魔力を、くれたら？

いやな、キーワードだったのだ。

「正確に、何と言われたか覚えているか？」

はしよられ過ぎた言葉では、理解しづらかった。

「ええと…傷を治す量の魔力をくれるなら、治してやれるが、それでいいか？　とか、そんなカンジで…」

とつとつ、と。

思い出し思い出しながら、早紀は鎧の言葉を伝える。

真理は、眉間を押さえていた。

この女は、バカだとはっきりと分かったのだ。

魔族が人間をたぶらかす時の、常套句のような詐欺口上だったのだ。

魔力をどのくらい必要なのか、とか確認もせずに、早く痛みから解放されようと飛びついたに違いない。

おかげで、死ぬ寸前まで魔力を引っこ抜かれている。

しかし。

呆れながらも、真理は引かなかった。

しかし——早紀が、あんな抜け殻になっても、鎧は困らないとい

うの
だろ
うか、
と。

狼に礼を言う羊

――

夢の中。

今日は、早紀はちゃんと歩いて入れた。

相変わらず、真っ黒な鎧が待っていてくれる。

「昨日は、どうもありがとう」

自分を助けてくれた男に、早紀はお礼を言った。

おかげで、すっかり痛みもなくなり、動けるようになったのだ。

すると。

「ぶっ…ぶふっ…お、お前、バカだろ？」

突然、鎧をガチャガチャ鳴らしながら、男は爆笑するではないか。

こんな滑稽なことはない、と言わんばかりだ。

え？ あれ？

お礼に爆笑が返ってくるとは、思わなかった。

確かに、この鎧も魔族側のものなのだから、お礼なんてものを素直に受け取ることはないのかもしれないが。

「大体：よくお前、今日歩いてこれたな」

オレの見立てじゃ、全治一週間だと思ったがな。

まだ、笑いの波動を含む言葉で、しかし、不思議そうに早紀を見る。

それほど、あの傷はひどかったということだろうか。

「おかげさまで…」

早紀の言葉は、また鎧を笑わずだけとなった。

あ、そういえば。

笑う彼を前に、早紀は何かを思い出そうと意識を巡らせる。

夢の中のことを現実を持ち出したり、逆をするのは意外に難しい。

今日、真理に鎧の言葉を説明する時も、そうだった。

その真理が、彼女にこう言ったのだ。

「鎧と話が出来るのなら：『抜け殻でもいいのか』、と聞いておけ」

そう聞けば分かると。

それ以上の説明は、真理はしなかった。

ようやく言葉を捕まえられたので、早紀は鎧の前で復唱した。

「新当主からのご質問か…へえ、なるほど…なんとなくお前が元氣な理由がわかった」

興味深そうな、しかし、少し意地の悪い声の音。

「じゃあ、こう伝えておけ」

兜が、早紀に向かってずいっと近づいてくる。

よく見ると、顔の造型が結構怖い気がする。

「『抜け殻上等』…ってね。」

すっごい——悪そうな声だった。

その後で、ぼそりと。

「お前の魔力は、かなり少ないな…不便だぞ」

とぼっちりで早紀は、文句を言われるハメになった。

同じ立場

真理と一緒に、登校する。

車から、彼らが降りた瞬間。

「鹿島さまあゝ」

突然、女生徒たちが、真理に向かって襲い掛かってくるのではないか。

その勢いに、早紀はぼいっちよと、群れから放り出された。

いたた。

何事かと、少し離れてその喧騒を見る。

真理は、確かに綺麗ではあるが、学校でこんな歓迎を受けたのは初めてだ。

毎日一緒に通っているのだから、確かだった。

「……おはようございます」

異様な事態を見ていた早紀は、その声が自分に向けられたものだと、すぐには分からなかった。

何しろ、学校で彼女に声をかける人間など、皆無だからだ。

「え？ あ？ おはようございますっ」

はっと気づいて、声の方を振り返る。

ガラス玉のような目——零子、と呼ばれる女性だった。

あ、トゥーイさんちの。

階級など、よくわかっていないので、頭の中でそんな言葉を並べる。

きよろきよろと周囲を見るのは、あの独特の目の男が、一緒にいるのではないかと思ったから。

「ご主人様なら…あちらに」

手を捧げるように指す先には、やはり女生徒に囲まれるトゥーイの姿が。

えーと。

「黒い涙が降りましたから…みな、喜んでいるのでしょーう」

他人事のように、零子はぼんやりと言葉にする。

はあ、なるほど。

痛みで余り覚えてはいないが、先日の初陣は、確か魔族側の勝利だったはず。

確かに、涙が黒く染まっていた気がする。

「でも、女ばかりですね」

早紀は、苦笑した。

そんなに嬉しいのなら、男も来てよさそうなものだが。

これではまるで、あの真理がアイドルのようだ。

本人は、さぞや閉口していることだろう。

そんな早紀の、何気ない言葉に。

「男は…子供を産めませんから」

さらりと——零子は、恐ろしいことを口にしたのだった。

※

「こ…子供？」

現実味のない単語を、早紀は繰り返していた。

「ええ…次の鎧を、継ぐ者が必要ですから」

しかし、零子は当たり前のように言葉を続ける。

んーと。

早紀は、出来るだけ彼女の言葉を、オブライトにくるんで考えることにした。

要するに。

真理を囲んでいる女性たちは――彼のお嫁さん候補、ということか。

なるほど。

だが、納得はするものの、ひっかかるところもある。

「でも、何で前から騒がなかったのかなあ」

真理が、鎧の継承者であることが、隠されてでもいたのだろうか。

「先日の戦いで、これからしばらく魔族の勝利を確信したからでしょう：魔女は強い者が好きですから」

さりげなく、零子は容赦なかった。

ぷっ。

意味を理解した早紀は、軽く吹き出してしまう。

階級が高いだけでは、魔女は群がらない、と。

あの真理が、いままで彼女らに品定めされていたと言うのだ。

ようやく、お眼鏡にかなったというところか。

その栄誉の歓迎を、真理は押し退けるように校舎へと向かってしまった。

トゥーイは、まだ囲まれたまま。

だからだろうか。

零子は、ここを離れる様子はない。

ガラス玉のような瞳で、魔女たちを見ている。

「お嫁さん候補に：興味あります？」

早紀は、ちょっとだけ気になった。

彼女の瞳は、トゥーイというより、そっち中心に向いている気がしたからだ。

「そうですね：死ぬまで一緒に暮らす人になりますから」

淡々と、零子は答える。

そっかあ、奥さんになる人とこの人は、一緒に暮らさなきゃいけな……あれ

え？

いま考えていたことは、零子だけの問題ではなかったのだ。

間違いなく——早紀も同じ立場だった。

※

何と言う、小姑プレイ。

早紀は、どんよりしながら授業を受けていた。

朝の零子との会話が、頭にこびりついて離れないのだ。

キツそうな人、多いんだよなあ。

穏やかとか優しそうなとか、そういう肩書きを持っている女性とは、なかなか出会えない。

何しろ、この学校の女性は、みな魔女だというのだから。

零子も、ぼんやりとしてはいるが、ボケというわけではない。

戦いの関係で、魔力を消耗していることで、あの気だるさが出ている可能性もあった。

その証拠に、今朝の状況判断は的確だ。

魔女たちの考えも分かっているし、鎧の持ち主が、早く子孫を残さなければいけないことも——妻になる人間と、自分が暮らす必要

があることも、きちんと把握していたのだから。

絶対、いじめられる。

真理に鎧としてコキ使われ、その妻にいじめられる図は、容易に想像が出来た。

強制的に鎧にさせられた早紀は、自分の今後一生全部を、真理に捧げなければならぬことまで、深く考えてはいなかったのだ。

屋敷を出て、一人で暮らす。

そんな、ささやかな考えも、簡単に吹き飛んでしまった。

どこかに、優しくて階級の高そうな魔女っていないかなあ。

早紀は、ロークラスしか知らない。

いわゆる、庶民の魔族のクラスだ。

そのせいもあって、本当にみな風変わりで怖い。

一方、ハイクラスの生徒たちとは、口をきくのも考えられなかった。

もし真理が親戚ではなく、一緒に暮らしていなかったら、やはり口はきけなかっただろう。

真理のことだから、きっと家柄は重視するだろうなあ。

となると、ハイクラスの相手に間違いない。

せめて。

せめて、私を無視してくれる人ならマシ。

そこまで考えて。

早紀は、はたと思い当たることがあった。

あれ、そう言えば私、人に無視される能力があったような。

結構——それは、便利かもしれない。

当主のつとめ

――

そうか。

ようやく静かになった環境で授業を受けながら、真理はさっきまでの喧騒について考えていた。

そうか、子孫を残す相手を、探さなければならぬか、と。

とにかく、鎧を受け継ぐことしか考えていなかったため、これからずっと長い未来のことまでは、意識が向いていなかったのだ。

真理の父親は、彼が小さい時に戦いで死んだ。

もしいま自分が死ねば、鎧は傍系の誰かが、養子に入るという形で受け継ぐことになるだろう。

そんなに簡単に死ぬ気はなかったが、子孫を残すのが義務であることも理解していた。

本来こういうことは、家柄を考えて、父なり母なりが手配するのだろうが、真理に親はいないし、血の近い叔父叔母も死んだ。

既に、真理は鎧を相続してしまい、一族の主となっているため、どんな内容であっても、親戚が彼に強く出ることはない。

となると。

気の利く親戚が、よい魔女を勧めに来るのを待つか、自分で探す
かしかない、というワケだ。

それは——とても、面倒くさそうだった。

早紀のような魔女が特別珍しいだけで、普通の魔女と言えば、
気が強くプライドが高い。

ハイクラスの魔女となれば、尚更だ。

美、企み、背徳、嘘。

どれも大好物だ。

そんな彼女らの志向のひとつが、強い魔族の子を産む、
というもので。

階級が上の、ではないところが、恐ろしいところではあるが。

そう考えると、真理の希望もおのずと決まってくる。

力の強い魔女、だ。

結婚なのだから、愛だの恋だのふざけた言葉は必要がない。

お互い、それを合意していれば、いいだけのことだ。

優秀な魔女か。

だがそれは、探すハードルを上げることでもあった。

魔女が特別な階級について、力を振るう姿を公に見せることは余りない。

勝手気ままに生き、好きな時に自分のために魔力を使う。

だから、魔女の能力を知るのは、彼女自身と近しいものくらいなのだ。

学校では特に、女同士の駆け引きなどもあるようで、あからさまに見せ合う真似もしない。

結局——よい案など、何も浮かばなかった。

零子の目

一一一

零子は——早紀を見つけられるようになったのか。

学校で、気づけば彼女が、自分を見ている気がするのだ。

他の人にも気づかれているのかと思ったが、彼女以外は相変わらずで。

クラスでは、いつも通りの空気女だった。

登校中や、廊下、昼休み、帰宅中。

ほんのわずかな隙間隙間で、確実に早紀は見られていたのだ。

「私に：何かご用ですか？」

ある昼休みに、思い切って彼女に聞いてみた。

「いいえ」

すると、零子は首を横に振るではないか。

な、ないんだ。

即答加減に、早紀は困ってしまった。

それなら見るな、とは言えない性格なのだ。

うーん、それじゃ。

「私のこと…いつもちゃんと見えてます？」

質問を変えてみた。

早紀は、あまり上手に能力を使いこなせている気はしない。

しかし、零子以外の様子を見る限りは、普段から挨拶のように発動しているらしい。

その事実を、周囲の人間の目で確認してみようとしたのだが。

瞬間的に、零子の表情が険しくなった気がした。

返答はない。

長い、沈黙。

え、えっと。

いけないことを聞いてしまったのかと、早紀が居心地悪く、しかし立ち去るきっかけを掴めないでいると。

零子は——ゆっくりゆっくりと、息を吐いた。

「あなたは…」

何かを言いかける、赤い唇。

予鈴が鳴り始める。

午後の授業まで、もうすぐだ。

その音の中。

零子は、長いまつ毛を伏せた。

「あなたは…変です」

その美しい顔とは裏腹に。

言葉は、静かに早紀に突き刺さったのだった。

トゥーイさんち

――

真理は、嫁探しを放置したまま、自分以外の三席のことについて調べていた。

これから、彼が踏みつけていく相手たちだ。

家柄などの基礎情報は、元々持つてはいるが、それぞれの能力の情報となると、手に入れるまで多少時間がかかる。

味方とは言え、自分の能力をべらべらしゃべる馬鹿はいないのだから。

3rdのトゥーイは、特筆すべき目を持っている。

あの零子と呼ばれる魔女も、その視る能力によってトゥーイ家に連れてこられたのだ。

トゥーイ自身、二つの目を一つに重ねて使っているという噂がある。

ああ。

それについては、真理は納得だった。

わざと隠した片方の目。

露出された方の目の力を引き上げ、それに更に零子の能力を加え

たというワケか。

徹底的に、特化したタイプだった。

だからか。

真理は、その情報にうつすらと唇の端を持ち上げた。

だから、真理や早紀に絡むのだ。

特化した目でさえも、早紀の持つ能力に翻弄されているのだから。

さぞや、悔しい思いをしていることだろう。

どうにかして、この事態を克服しようとしているに違いない。

「最近…トウーイ卿と会ってないか？」

登校中、車内で早紀に聞いてみた。

彼女は、ぶんぶんと首を横に振った後——しかし、こう言ったのだ。

「零子さんなら…たまに」

たまに、の言い方が奇妙だった。

ああ、そっちを使ったか。

さすがに、トウーイ様じきじきに早紀に何度も絡むのは、プライ

ドに関わるのだろう。

憑き魔女を使って、対早紀克服計画を発動したわけか。

「余計なことは言うな」

真理は、一本の釘を刺した。

この女が、零子と『友達』などというものになったら、カシユメル家の内部のことを、べらべらしゃべるんじゃないかと思ったのだ。

すると早紀は、とてもとても複雑な顔をした。

何か言い返すかと思ったが。

従順とは違う方向で、いつも通りに彼女は黙り込んだのだった。

二人のサディスティックな主

一一一

「余計なことは言うな」

真理のこの言葉こそ、余計だった。

早紀が、魔族の縄張り争いや、戦いだの家柄なのに、余計な知識など持っているはずもないし、口を挟めるはずなどないのだから。

こういう言葉を面と向かって言われると、自分はまったく真理に信用されていないのだと分かる。

信用、などという関係が、今後構築できるとも思いつらい。

その事実、早紀を憂鬱にするのだ。

空蝕が来る度に、こんな関係のまま戦いに出なければならぬのだから。

せめて鎧さんくらい、話の出来る相手ならなあ。

早紀は、いつそ夢の中の男が恋しくなった。

もし彼とならば、きつともっと軽く話をしながら、一緒にいられるんじゃないかと思ったからだ。

しかし、彼と同じものになっていながら、会えるのは夢の中だけ。

痛みから助けてもらった恩以来、早紀はすっかり彼の存在を頼りにしていた。

結局、真理は苦しむ早紀を放っておいただけ。

その差は、彼女の中では大きかったのだ。

これから。

真理と出撃する度に、この不信心は膨れあがっていくのだろうか。

少なくとも、早紀は自分のステルスを切れない気がした。

あの能力こそが、自分を守るものなのだ。

な、の、に。

な、の、に、だ。

黙り込んだ早紀に、彼はこんなことを言ったのだ。

「ステルスの、オンオフを自由に切り替えられるようにしておけ」

時が、一瞬止まった。

それは、また彼にオフを命じられるという意味で。

ピシッと言う音を、早紀は聞いた。

自分と真理の間の何かが、そんな音を立てたのだ。

はいも、いいえも——答えられなかった。

※

「何だ？」

夢の中。

早紀が、じーっと鎧の男を見ていたので、怪訝な声を返されてしまった。

「ううん…鎧さんの方が、よっぽどいい男に見えてきた」

はぁーっとため息をつきながら、彼女は本音を漏らす。

毎晩、こうして会っているが、鎧の男は決して早紀を疎んじない。

「そりゃ、光栄だ」

ニヤつく声も、慣れればなんてことない。

氷柱みたいな真理の声に比べたら、いっそ温かく感じるほど。

「なんかもう…ずっと、こっちにいらればいいのに」

起きて、真理に会うのが憂鬱だ。

平日は学校へ行くために、必ず同じ車なのだから。

「……………」

早紀の言葉に、鎧は少し黙り込む。

何のコメントもないことが意外で、彼を見やると。

「先代の、魔女の話をしてやろうか？」

出てきた言葉は、少し噛みあわないもの。

これまでの話の流れで、先代が出てくるのは奇妙だった。

しかし、興味はある。

こくこくと頷くと、鎧はその兜を反射させた。

「いい…女だったぜ。極上のたっぷりの魔力、極上の能力」

ゆっくり、ゆっくりとした言葉。

思い出している声だが——それは、何だか奇妙な思い出し方に感じた。

「先代の魔女は、オレと契約を失敗した…意味が分かるか？」

『いやよ！ 死にたくないわ！』

夢の中に反響する、絶叫。

それに、早紀はびくつと身を固くしてしまった。

すぐそこに、先代の魔女とやらが、いるように錯覚してしまったのだ。

「かくして魔女は、この世界に閉じ込められ：死ぬまでオレと暮らしましたとさ」

『出して！ 私をここから出して！！ 痛いっ！ 痛いわ！！』

苦痛による叫び。

その苦痛は、早紀の知っているものだった。

つい先日、同じような悲鳴をあげさせられたのだから。

「昔話は、こんなところか：で、何の話をしていたっけな？」

ニヤつく声で、早紀に向き直る鎧は——とても意地の悪そうな声を出したのだった。

伊瀬

目がさめた早紀は、ベッドの上で少しぼんやりした。

不信感の募る真理から、鎧の男へと伸ばしかけた頼ろうとする手を、彼は意地悪に笑いながら拒んだのだ。

「おかあさん…おはよう」

声が沈む。

起きて、自分が独りであるという現実を噛み締めると、こんなうだつの上がらない声になるのか。

ずっと、この家に住みながらも、早紀は独りだった。

だから、その事には慣れていたし、普通だったはずなのに。

多分。

こうしている今も、早紀が真理や鎧の男と、つながってしまったせいだ。

彼女は、独りではなくなったのだ。

なのに、その二人のどちらとも、早紀の心は本当につながらないままで。

その事実が、余計に「独り」を際立たせてしまうのだろう。

起きて。

ああ。

今日が、土曜日だと気づく。

学校はお休みで、どこにも行かなくてもいい。

逆に言えば、どこに行ってもいい。

早紀はこれまでの人生の多くを、この屋敷に引きこもってきた。

一人で外に行きたいと思えなかったし、出てはいけないう雰囲気があったのだ。

いまにして思えば、魔族だとか、鎧のイケニエだとか、空から降る涙の色だとか、そういう事情があったのだろうが。

でかけ、よっかな。

母親の写真の前で、ふと、魔がさした。

こんな気分のまま、この屋敷に引きこもっていたくなかったのだ。

よし。

出よう。

憑き魔女は——自分の衝動に、身を任せることにした。

そして、クローゼットを開ける。

自分で服を買い揃えない早紀は、そこが多くの黒で占められていることを知るのだ。

そうだ。

服を買いに行ってみよう。

早紀は、おでこに絆創膏を貼った。

ぺたり。

※

屋敷を出て歩くと。

早紀は、目が覚めるような強い気を感じた。

脳に風が入り、深く息が吸える。

開放感だろうかと思いかけたが——違うと、気づいた。

空気を取りまく粒のひとつひとつに、『魔』を感じたからだ。

これが、あの涙の効果なのか。

少し嫌な幸福感。

無理やり、幸せにさせられる感覚だ。

学校で、真理を取り囲んでいた魔女たちは、これをありありと感じたのだろう。

早紀の心の奥の一箇所だけが、微かな苦さを感じていた。

それでも。

幸福感を消すことは、出来ない。

屋敷にいた時の重さが消えてゆき、早紀は自然に足取りを軽くしていた。

黒っぽい服に黒い髪という、重たい身なりだというのに。

駅前は、人で溢れていた。

その多くの人を見た時、早紀は背筋がひやっとするのを覚える。

もう、自分があの集団の中にいるべき人間ではないと、知ってしまったからだ。

考えないようにしながら、それでも直視できずに、彼女は斜め下を見るようにして歩く。

そんな、下の方を這う彼女の視線に。

靴が。

真新しい、真っ白いスニーカーが。

ん？

ビルとビルの隙間。

小さな小さな路地の入り口に、片方だけスニーカーが落ちていたのだ。

んん？

好奇心でつい。

早紀は、靴から路地の奥へと視線をのぼす。

足があった。

地面に横たわる足。

足だけじゃなくて、上にはちゃんと身体もついていた。

要するに——人が、倒れていたのだ。

「……！」

見つけてはいけないものを、見つけてしまった。

※

早紀は——見なかったことに、しようかと思った。

何とヒドイ、と思うかもしれないが、関わってはいけない気がしたのだ。

相手のために、だ。

早紀が、もし自分を人間だと思っていたならば、そんなことは考えなかっただろう。

魔族と関わると、普通の人の方に害がありそうな気がしたのだ。

しかし。

道ゆく人たちは、綺麗な片方のスニーカーなど、誰も気づかないように歩いてゆく。

立ち尽くす早紀の存在も、自分の能力のせいかな、同じように空気を扱いだ。

早紀は、靴を拾っていた。

せめて様子を見て、この靴を渡してくるくらい、魔族でも許されるんじゃないかと、そう思ったのである。

日の入らない、路地に入る。

「あの…」

意識はあるのだろうか。

声を、かけてみる。

「う…」

微かに、横たわる身体が動いた。

長い髪。

女の人かと一瞬思ったが、拾った靴も大きいし、うめく声もとて
も低い。

肩幅も骨格も身長も、やはりどう見ても男だ。

「大丈夫ですか？」

靴を側に置きながら、早紀はそおっとジーンズの足に触れた。

瞬間。

じゅつと。

触れた部分から、水分が蒸発するような湯気が上がる。

びっくりして、手を離してしまった。

熱かったわけじゃない。

痛かったわけじゃない。

自分の指を見るが、何の異変もなかった。

何？ いまの？

「う…あ…君は？」

男は、やっと意識がはっきりしたのか、肘に力を入れる。

それで、少しだけ上半身が浮き上がる。

長い髪が、まるで川のように、彼の顔に幾筋もかかった。

赤茶けた、濁流のような色の髪。

一瞬、目を奪われたのは——何でだったのか。

※

「みっともないところを…」

何とか立ち上がった男は、建物の壁を支えにするように手をつく。

大きい。

早紀は、見上げる目をまばたかせた。

2メートル近く、あるのではないだろうか。

それに、倒れたのが不思議なくらい、しっかりした身体だった。

健康そうな、陽に焼けた肌。

髪が長いのが、少し違和感があるか。

「あ、いえ…」

魔族の中で暮らしてきた早紀には、まぶしいほどの人だった。

「あ…靴…」

はっと、我に返って、早紀は足元を指差した。

拾ってきたそれは、まだ地面に置いてあるまま。

「あ、ああ…」

男も、それに気付いたようで、無防備な片足を伸ばそうとした。

が。

まだ、身体がつらいのだろう。

その大きな上半身が、ぐらりと傾ぐ。

あっと。

反射的に、早紀は支えようと手を伸ばした。

あつ、あつ！

彼の身体に、触れた手が。

吸盤でもついているかのように、服ごしに吸い付いたのだ。

あーっ。

身体の奥底を、一瞬でかきまわされるような錯覚。

何かが、触れた手から彼に向かって引き上げられる。

な、なに？

手が。

さっきまでの、吸盤ぶりが嘘のように離れる頃。

逆に、早紀は彼に身体を支えられていた。

「おどろいたな…」

頭の上で、感嘆の声が上がる。

「君は、先祖がえりかい？　こんな子に、こっちで会えるなんて」

早紀の目の前に、赤茶色の髪が流れる。

言われている言葉の意味なんかは、分からない。

ただ——早紀は、慌てて彼から逃れていた。

片方の靴のまま、しかし、彼はまっすぐ立っている。

「よかったら、名前を…」

投げられかけた言葉から、早紀は逃げ出したのだった。

※

足が——もつれる。

絶対！

早紀は、転びそうな前のめりの身体をそのままに、なんとか走った。

恐怖というより、異物感。

絶対……普通の人じゃない！

それだけは、早紀には確信があった。

この世界に、人間以外のものがあるのは、よくわかっていた。

多分、そっち属性の何かなのだろう。

そうと分かれば、関わってはいけない。

「待って！」

なのに。

なのに彼は——早紀を、見失わなかった。

振り返ったら。

片方の靴のまま、彼は追い掛けてきている。

大きい人だ。

そして、人間ではない。

そんな相手に追いかけられるのだから、早紀は恐怖で竦み上がるべきだった。

だが、彼の瞳には、毒をまったく感じない。

人混みの中。

早紀は、走る足を緩めていた。

追い付いて、しかし、少しの距離を残して止まった男。

気付けば、周囲の誰もが、自分と彼を振り返ってもいる。

慌てすぎたせいなのか。

早紀のステルスは、切れているようだ。

この人は、なんなのだろう。

早紀は、いまもなお彼に、何か吸い上げられている気がしながら、その大きい身体を見上げる。

「こわがらないで…」

自分からは触れないことを見せるように、彼は更に一步下がった。

見ると、さっきまで苦しんでいたのが嘘みたいに、息ひとつ乱していない。

「君は命の恩人だ…そんな人を、ただで帰しては、私は叱られてしまう」

その、整った息から吐き出された言葉は——遠い遠い昔に読んだ、絵本の文とよく似ていた。

※

彼は、伊瀬と名乗った。

置き去りにした、靴を拾いに戻る道すがら、の話だ。

ひよこひよこと、大きな身体が横を歩く。

警戒を解いた訳ではないのだが、早紀の目には、とても悪い人には見えなくて。

それに、変な現象は起きはしたが、害はなかった。

ということは、真反対といわれる天族ではないはずだ。

「あの：恩人って」

早紀は、彼を助けたつもりはなかった。

確かに、様子を見ようとは思ったが、彼女は医者でもなんでもないのだ。

治してやることなど、出来るはずがない。

しかし、いま彼はさっき倒れていたのが嘘のように、生气に溢れている。

「ああ：そうか、自分では分からないのか」

伊瀬は、困った笑みを浮かべた。

説明しづらいようだ。

「君の力をね：少し分けてもらったんだよ：すまない、非常事態だったから」

ひよこ、ひよこ。

片方の靴のせいで、足をつく高さが微妙に違うため、ぎこちない歩き方。

ん？ ん？

その縦に揺れる影を見ながら、早紀は眉間を寄せていた。

早紀の力といえば、魔力だ。

その魔力を受けても、平気ということは。

「もしかして：同族の方ですか？」

おそろおそろ、彼女はそれを口にしてみた。

魔族にしては、まったく毒がないと思ったが、早紀だって魔族である。

そう考えると、異端児が他にいてもおかしくないではないか。

「え？ 君、お仲間かい？」

驚きながらも、何かを嗅ぎ取るように、伊瀬はすうっと息を吸った。

魔族の匂いとか、するものだろうか。

「そういえば：ほんの少し？　そうか、お仲間だったのか」

明るく、崩れる表情。

本当に嬉しそうだ。

早紀も、嬉しくなってきた。

冷たいばかりの魔族の中にも、こんな太陽みたいな人がいるのだ
と思うと、心が軽くなるのだ。

だが。

「でも、君はよく平気だね：海から、こんなに遠く離れているのに」
がりっ。

レタスに混じった小石のように、続けられた言葉は、早紀の奥歯
の間で、嫌な音を立てたのだった。

タミ

――

「真理：いいかな？」

ノックと声は、修平のもの。

部屋で調べものをしていた真理は、「ああ」と促しながら椅子を立ち上がった。

扉が開くと。

修平が、一人ではないのが分かる。

「前に頼まれていた人を、見つけてきたんだけど」

彼の斜め後ろ。

針金のように、まっすぐな長い黒髪の女。

黒いレースに覆われた服。

真っ黒な手袋と長いブーツという重装備で、肌の露出を顔だけにとどめている。

石膏像のように整いすぎた顔に、燃えるような強い瞳。

よくよく見ると、少し幼い感じが残っている。

まだ、学生ではないのか。

先日、確かに真理は、修平にこう頼んだ。

『魔力を補充できる魔族を』

真理は、まっすぐに彼女を見た。

大きな瞳が、同じようにまっすぐ見返す。

魔女らしい魔女の目だ。

「魔力は、通常の魔族のおよそ2倍…十分じゃないか？」

修平は、これぞ目玉商品とばかりに、彼にアピールする。

しかし、その声音には多少のひっかかりを覚えた。

無理やりアピールしているかのように、聞こえたのだ。

何か、隠しているな。

それを、真理は感じ取ったのだ。

「名前と年齢」

真理は、修平を通り越し、彼女に直接言葉を投げた。

「タミ、16歳」

つっけんどんな、とんがった返事。

年齢の印象は、どうやら間違っていなかったようだ。

ということは。

「1年：ハイカローか？」

続けた質問に、一瞬修平の指先が反応した。

タミは、その大きな目で、わずかの間天井を見た。

小さな吐息。

「ハイクラスよ」

なるほど。

真理は、納得した。

これに修平は、触れて欲しくなかったのだと、分かったのだ。

※

「ハイクラスの魔女では、駄目だ」

タミを部屋から追い出した後、真理は修平にそう突きつけた。

ハイクラスⅡ名のある一族。

その魔女では、プライドが高すぎて、早紀に魔力を分けることを拒むのだ。

詳細を知らない修平は、単にタミ↓真理の、魔力移動のみを考えただろう。

だが、本当にそれが必要なのは、早紀だった。

だから、ハイクラスでは駄目なのだ。

大体。

ハイクラスの魔女が、何を好き好んで、他の魔族に仕えるような仕事を選ぶのか。

「いや…あの…まあ、それが…本人の希望なんだよ」

口の中を、沼化させたように、どろどろと練り混ぜた声が出てくる。

本人の？

よほど、風変わりなのか。

真理が、そう思いかけた時。

「分かるだろう？ 真理だって子供じゃないんだし」

察しろよ、と言わんばかりに、修平が両手を開いてみせる。

ハイクラスの魔女が、真理に仕えたいと思うことに、何を察しろと言うのか。

チカッ。

彼の脳裏に、何かがまたたく。

ああ、そういえば。

つながりそうでつながらない回線が、それでも真理を納得させようとする。

なるほど、そうか。

接触の悪い回線の向こう側に、ちらちらと答えが見えた気がしたのだ。

「つまり…」

真理は、回線をつなぐために、一度眉間を指先で押さえた。

「つまり…彼女が」

しっかりと、つながった。

「彼女が…俺の妻候補、というわけか」

お節介な親戚が、必要だと思っていたら。

意外と身近にいたようだ。

※

さて、そうなると話が変わってくる。

真理は、修平を追い出し、代わりにタミをもう一度呼んだ。

家名は聞いた。

エンドリン。

極東エリアの、鎧鍛冶の一族だ。

真理の持つあの鎧も、長い長い歴史を遡れば、タミの先祖が作ったことになる。

鎧鍛冶は、その仕事の特殊性から、地位を認められている——代々、血筋が高潔な真理とは、意味合いが違った。

しかし、真理が選択する相手としては、問題があるわけではない。

魔力を、常人の倍持っているという点も、申し分もない。

後は。

「君は…自分より身分の低いものに、魔力を分けられるか？」

この問題点を、どうするか。

ただの妻候補として来たのならば、こんなことを聞く必要はない。

しかし、おそらく向こうも、まだ正式にそうなる気はないのだ。

仕えながら、真理を値踏みする気だろう。

それならば、問題点をクリアできるかどうか、だ。

「私が魔力を分けるのは…貴方だと聞きましたが」

石膏の頬が、ぴくりと動いた。

「正確には…俺の鎧だ」

真理の言葉に、もう一度頬が反応する。

「もっと正確に言ってください…鎧の『どっち』ですか？」

タミの言葉は、鋭かった。

さすがは、鎧鍛冶の一族。

鎧の事は、よく理解しているようだ。

こればかりは、隠してもしようがない。

妻になるにせよ、ただの魔力タンクにせよ、隠しておくことは出

来ないのだ。

「憑き魔女だ」

真理の答えに——タミは、目を伏せた。

そのまま、時間が止まったように動かない。

おそらく、静かに静かに考えを巡らせているのだろう。

目が。

開いた。

「：分かりました」

タミは——値踏みする時間を、選んだようだった。

※

早紀は——部屋にいなかった。

ノックをして、返事がなかったため真理は、結局その扉を開けたのだ。

また魔力を抜かれて、抜け殻のようになっていたかと思ったのである。

しかし、部屋は空っぽで。

使用人が、「お出かけになったようです」と、一言。

珍しいこともあるものだ。

早紀が、自分から——自分ひとりで、出かけるとは。

いまは魔の涙なので、傘の外にいても問題はない。

ただ。

その行動そのものが、彼女の反逆の証のようにも感じた。

真理に、面と向かって反論できない早紀の、ささやかな抵抗。

これから一緒に暮らし、そして、一緒に登校することになるだろうタミを、紹介しておこうと思ったが。

明日も休みではあるので、急ぐことではない。

だが、気分的には、面白くはなかった。

反逆の意思を示したこともそうだが、妙に胸騒ぎがしてきたのだ。

遠く離れていても、確かに真理は早紀と根底でつながっていて。

その気配だけは、分かる。

距離は関係ないのか、早紀が出かけたことは分からなかった。

ただよく意識をこらすと、気配にかすかな雑音が混じっている気がするのだ。

それに、早紀は鎧だった。

蝕は、夜にしか起きないとは言え、いまでも彼女に何かあって、帰れない状況が出来た場合、真理に支障が出る。

鎧が行方不明で、出撃できませんでした——などという失態は、あってはならないのだ。

雑音の正体が、何なのか分からない事もまた、真理の意識を割こうとする。

誰かと……一緒か？

以前、トゥーイにちよっかいをかけられた時には、雑音はなかった。

人間たちの中に、いるせいかもしれない。

それらの出す気は、魔族とは違うからだ。

他の種族か、と一瞬頭をよぎりかけたが、真理はすぐにそれを払った。

天族が、魔の涙の間に出歩くはずがない。

海族は、それをものとしなが——長時間、海から離れては生

きられないのだ。

人間の中にいるだけなら、心配しなくていいだろう。

不快は隠せないが、真理はそう結論づけたのだった。

優しい人は遠い人

—
—
—

『海』

聞こえたのは、その単語。

早紀は、無意識に歩みが遅くなってしまった。

胸が、ドキドキしてきたのだ。

逆に、顔からは血が引いていく。

もしや、と。

もしや、伊瀬と呼ばれた男は。

「同族とは言え、お礼をしなければね…」

早紀の状態には気づかずに、彼は考えるように空を見上げた。

青い青い、早紀の心にはそぐわない、美しい空を、だ。

「お、お礼なんて…いい、いらないですから」

お礼が欲しくて、足を止めたわけではない。

今にして思えば、足を止めた事そのものが、呪わしくなってきた
ほどである。

毒のない瞳が、いけなかったのだ。

すぎるもののない早紀が、惹かれずにはいられなかった、あの瞳が。

しかし、掴んだ綱は——海につながっていた。

海というキーワードから連想する種族など、貧相な知識の早紀は、ひとつしか持っていなかったのだ。

何故、種族の違う彼が、魔力を吸えたのか、理由はよく分からないが。

魔族だって。

バレたら、どうなるんだろう。

心の中で、早紀は小動物のように、小刻みに震え始めた。

ステルスも起動出来ない状態で、それに気づかれたら——敵対関係なのだから、生きて戻れないのではないか。

となると。

気づかれないまま、うまくやり過ごして離れるしかない。

「そういえば…名前を聞いてなかったね…ん？」

青空から視線を落とした伊瀬が、言葉の最後を疑問に変えた。

早紀が、びくっと飛びのいてしまったせいだ。

あわわわわ、私の馬鹿。

心の中の小動物が、表に出てしまっている。

「あ…いえ…あの」

唇が、ぷるぷる。

そんな、恐れおののく早紀に——伊瀬は、やわらかく微笑んだ。

「気づいたんだね、私が誰か…でも、そんなに怖いものじゃないから、心配しなくていいよ」

だが。

何と勘違いしたのか。

彼の言葉は、早紀の知らない方向へ、ねじ曲がったのだった。

※

「そうだ」

伊瀬は、早紀をじーっと見つめた後、にこりと微笑んだ。

こわがらせまいと、声も微笑みもとりわけ柔らかくしている気がする。

心の奥の優しさが、透けて見えるようだ。

さっきの彼の言葉から推測するに、怖い立場(?)のようだが、それが信じられないくらいに温かく感じる。

伊瀬が、そうすればそうするほど、早紀は消えてしまいたい気分になるというのに。

彼は、早紀の前で、両方の人差し指を立てて見せた。

その指の腹同士を、ぴたりと合わせる。

「君に：似合う色を」

二つの人差し指が、すうっと離れた。

指の間から、濃紺の糸が。

いや。

布が。

細く、長く。

しゅるりと、たわむように、ひねるように。

一瞬、早紀の目はそれに奪われた。

現れたのは——濃紺のリボン。

深い海の中と、同じ色。

「そうか…これが君の色か」

大きな両の手の上で、渦を巻くそれを、伊瀬は満足げに見つめた。

早紀も、その濃紺のリボンから、目を離せなかった。

差し出されるリボンを、だが、ふるふると首を横に振って拒む。

同族では、ないんです。

本当は、本当は私。

頭の中に、真理の冷たい目が閃く。

どうして、私は魔族だったのだろう。

海族だったなら、きつといまの一瞬を、喜んだに違いないというのに。

「大丈夫、よく似合うよ」

リボンは、しゅるんと自分から動き出した。

魔法——ならぬ、海法とでもいうのだろうか。

生き物のようにそれは、早紀の黒髪を絡め取る。

おかっぱの、横の髪を一房。

リボンごと、髪を編みこんで。

伊瀬は、微笑んだ。

早紀は——泣いた。

※

気づいたら、屋敷の前だった。

早紀は、逃げ帰ってきてしまったらしい。

屋敷の金属の門扉を握りしめ、長い長いため息をつく。

泣いたせいか、頭は痛いし、鼻はつまるし。

だが。

伊瀬の存在は、彼女の心に鮮烈な印象を残してしまった。

優しい、海の人。

すっかり心を弱くした早紀にとっては、誰よりも頼りたい相手に
見えて。

だが。

早紀は、この門扉の向こう側の人間だった。

その事実を、彼に告白さえ出来ないのだ。

正門を開けることは出来ないので、のろのろと脇の小さな通用口に向かう。

いまの自分の背中には、たくさんの失望が積み込まれているだろう。

そんなズタボロの彼女を。

玄関で、出迎えた男がいた。

「……」

無言の——真理だ。

びくうっと、飛びのきそうになる。

あの真理が、玄関にいるはずがない。

ましてや、自分を出迎えるはずがない。

しかし、彼はそこに立っていた。

他に誰か来るのではないかと、早紀が後方を振り返ってしまった

ほどだ。

そんな彼女の、後頭部に。

「……部屋に來い」

微かな冷氣。

不機嫌なのか怒っているのか、はたまた普通の声なのか。

まったく判断のつかない声音と温度に、早紀があわてて彼を見直そうとすると。

既に、真理は背中を向けて、階段を登り始めていた。

いまは、彼の一方的な話を、聞かされる気分ではない。

だが。

従わないわけには、いかない。

しゅうんと。

早紀は、重い足を踏み出さねばならなかった。

小さな反抗

—
—
—

いつもの早紀と——何か違う。

真理は、一瞬それが何なのか、すぐには分からなかった。

泣いた目だろうか。

街に行って、何故泣くのかは、想像も出来ない。

それとは、また別に。

何度もためらった末のノックの後、早紀が入ってきた姿を、真理はじっと見た。

よく見れば、おかつぱが少し違う。

左の髪に、濃紺のリボンが絡み付いているのだ。

それが。

何故か、早紀らしくないと思った。

彼女のことを、よく知っているわけではない。

だが、臆病で自分を消すことにかけては天下一品の、影の薄い女は、人と違うことをして、自分を主張しようとはしなかった。

そのリボンは、真理には『違うこと』に見えたのだ。

「あの…なんでしょう」

真理は、自分でも気づかないほど長く黙り込み、彼女を見ていたようだ。

あの早紀が、しびれを切らして、言いにくそうに話を切り出すのだから。

ああ、と。

真理は、気を取り直した。

「誰と…一緒だった？」

リボンを巻き、そして泣いた顔で帰ってきた。

それは、早紀が誰かと一緒だったという証拠なのだろう。

本来の話は別にあったが、まずは気になるところから聞く。

その誰とやらが、あの雑音の元だったのかもしれないのだ。

瞬間。

真理は、心の中で驚いていた。

早紀の表情が、この世の終わりのように強張ったからだ。

唇が。

わなわなと、震えだす。

「誰とも…」

その震える唇が、嘘を——あの早紀に、嘘を言わせようとしているのに気づいた。

だが。

「……いえ…言いたくない…です」

唇は、嘘は言わなかった。

代わりに。

初めて、目の前で真理に逆らった。

リボンの色

――

「へえ……」

夢の中。

鎧の男は、面白そうに早紀を見る。

そんなに彼女が、へこんでいるのが楽しいのだろうか。

しゃべる気も起きずに、早紀はそこらに座り込んだ。

「面白いもの……持ち込んだじゃないか」

伸びる、黒い金属の指。

それが――早紀の髪に伸びる。

はっと、彼女は身を引いた。

そして。

気づいた。

夢の中だというのに、自分の髪に絡んだままの、あのリボンを。

どうして、夢の中にこれが一緒に来てしまったのか。

「そうビクつくなくて…鎧ってのは、結構いい加減でな。力なら…
実は、何だって受け入れるんだよ」

彼の言葉は、まるでこのリボンが何で出来ているか、知っている
かのようにだった。

ここは、鎧自身の世界。

そこに持ち込んだものなのだから、正体を知っていてもおかしく
はない。

だが、彼はそれを責めたりはしなかった。

「面白いもんに…会って来たんだろ？ そいつをくれた奴、さ」

逆に。

鎧は、楽しくてしょうがない声をあげる。

どうして、他の種族に会ったことを喜べるのか。

敵なのに。

だから——真理には、隠した。

嘘をつこうとしたのだが、それで彼をかわせるとは、思わなかつ
たのだ。

嘘をついてしまえば、きっと暴かれる。

あの真理なら、そうする。

早紀は、言わないという道を選んだ。

その決意を、唇に乗せて守ろうとしたのである。

「似合ってるぜ…そいつ…お前さんには、一番似合う色だ」

真理と向かい合った時を思い出して、早紀は震えそうになっていた。

それを、鎧は軽い声で破る。

見上げる早紀を尻目に、彼は今度こそ鎧の指でリボンに触れる。

「お前の中にも…同じ色があるだろう？」

ちやぷんっ。

※

早紀の足元に、水が漂っていた。

それが、ちやぷんと音を立てたのだ。

何でもあるの夢の中。

驚いて、彼女は鎧を見上げる。

なんで？

早紀は、疑問を思い浮かべながらも、水に出会ったのは今回が初めてではないことにも気づいていた。

何も考えられなくなった時。

彼女の足元で揺れていたのは、何だったのか。

もっと遡ると。

鎧であった彼女の首筋から、武器が抜き取られる時、自分は水音を聞かなかったか？

それは、早紀の中にずっと潜んでいたのだ。

自分自身にさえ、隠れるようにひっそりと。

「だ、だって、私…魔族…」

足首まで水に浸したまま、彼女は混乱していた。

昼間。

伊瀬は、この匂いを嗅ぎ取ったのだろうか。

水は、リボンと同じ色をしていた。

浅いはずの水なのに、光をほとんど与えられなかった色だ。

「オレも、契約の時にちらっと見ただけだ…」

鎧の足が、水を蹴飛ばす。

「まあ、何だっていいさ…お前さんが、魔族じゃなくて、実は海族だったとしても構わないしな」

早紀が、考えまいとしていたことさえ、平気でこの男は口にするのだ。

「私が海族ってこと…ありえるのかな…」

頭をよぎるのは、伊瀬の顔。

自分が魔族なんて、やっぱり未だにおかしい気がする。

実は、何かの間違いで海族だったなら——早紀は、その希望をじっと見つめた。

「さあな…俗世のことは、オレにはよく分からん」

鎧は、そこで話を切り上げるのかと思った。

早紀の足元の水を、消してしまったから。

だが。

「お前さんが、もし海族というのなら…お前さんを作ったのは、海族ってことじゃないのか？」

作る。

そんな変な単語が混じっていたので、早紀はすぐにピンとこなかつた。

あつ。

早紀は、水の失われた足元を見る。

お父さん!?

私のお父さん——誰?

いあいさつ

「おかあさん、おはよう…」

ちょっと複雑な気分で、母親に挨拶は済ませた。

夢の中から持ち帰った、記憶のせいだ。

早紀の、父親に関すること。

確かに、住んでいたところの近くに、海はあった。

母親と出かける時に通る道は、いつもどこか魚の匂いがしていて。

だが、それ以外の父親の記憶や、海との関連を探そうとしたが、有力な手がかりはなかった。

そんな、早紀の記憶の糸は、途中で切れてしまう。

好きで切れさせたわけではない。

ノックのせいだ。

「は、はい…」

ベッドの上に座ったまま、母の写真と向かい合って、結構考え込んでいたようだ。

反射的に答えはしたものの、早紀はまだパジャマのままだった。

慌ててドアの向こうに、ちょっと待ってと言おうとした彼女だったが。

遅かった。

ドアが、開いてしまったのだ。

あわわわ。

早紀は、ベッドの上に座ったまま、お客を迎えるハメになってしまったのだ。

そして。

最悪なことに、来訪者は——真理だった。

あ。

昨日の件もある上に、パジャマのままとは、気まずいにもほどがある。

最悪な状況に、早紀が小さくなっていると。

真理が、一人ではないのに気づいた。

彼の後ろに、誰がいる。

修平かと思ったが、もっと小さい。

立っていたのは、真っ黒い女性。

早紀の第一印象は——それ。

真理は、ベッドの上の情けない彼女を見るや、ため息をつく。

「お前は…」

彼の呟いた一言で、十分だった。

痛いほど、早紀もそれに打ちのめされている。

初対面の相手に、いきなりパジャマで会うなんて、と。

だが、その女性は、大きな瞳で部屋の中を見回す動きをした。

「ところで…『その方』は、何処に？」

幸か不幸か。

早紀は、彼女に認識さえしてもらえなかったのだった。

※

「す、すみません…ここです」

そのまま消えてしまいたかった早紀だが、小さい声で自己を主張する。

すると、大きな目が更に大きく見開かれた。

間違いなく、早紀を見つけた目だ。

その強いまなざしに、彼女は焼き殺されそうだった。

一体、どちら様かは知らないが、こんな家にやってくる女性だ――
――魔女に決まっている。

「タミ、です…今後ともよろしく」

パジャマ姿で、情けない姿の早紀に対し、それでも彼女は挨拶を
投げる。

ただ。

言葉は控えめだったが、態度はやや上からだった。

その様子に、早紀はビビりながらも、しかし、気になることがあ
った。

今後とも？

タミと名乗った女性は、そう言ったのだ。

まるで、これから自分と付き合いが出来るかのように。

「ええと…」

どう挨拶をしていいか分からずに、早紀は真理を見た。

まだ、いっぱいわだかまりのある相手ではあるが、説明してくれ
そうなのは、この男しかいなかったのだ。

「これから、一緒に暮らす相手だ」

その男とやらは、こともなげにそう言い放つのだ。

一緒に…暮らす？

ま。

まさか。

冷や汗をかきながら、おそろおそろタミを見た。

手袋に、ブーツ。

上から下まで全部真っ黒の彼女は、早紀を値踏みするように、じ
っと見ている。

まさか、この女性が。

頭の中に、零子との会話がよぎる。

『男は…子供を産めませんから』

この女性が——真理の相手！？

あいたあ。

早紀は、ベッドの上で半泣きになりそうだった。

彼女の想像していた通り、キツそうな魔女と、最悪とも言える初めての対面をしてしまったのだから。

「早紀です…ヨ、ヨロシクお願いします」

しゅうんしゅうん。

小さくなりすぎた早紀を———
「またも、タミは見失ってしまったようだった。」

二歩

――

「変な魔女ですね」

早紀の部屋から、真理の部屋に戻りながら、タミは静かに呟いた。言わずには、いられなかったような一言。

何度か、早紀を見失ったせいだろう。

目の前にいると、分かっているのに見えなくなるのは、やはり驚くべきことなのだ。

「鎧になっても、あの力は…健在ですか？」

タミの目的には、どうも鎧そのものも含まれている気がする。

真理は、斜め後ろのタミを、わずかに振り返る。

肯定のつもりだった。

「対魔族に、あれほど効く魔力があるなんて」

言葉には、口惜しさにも似た響き。

早紀の能力を意識した魔族は、最初はみなそうなってしまうのか。自分の中の微かな優越感に真理は気付き、しかし、戸惑いもした。

あれは、真理自身の力ではない。

真理の意味で、オンオフできないところも不便だった。

早紀の性格にも、魔女としては難がある。

だから。

出て行けばよかったのだ。

昨日の早紀を、思い出してしまった。

初めて、真理に逆らった彼女を。

衝撃はあった。

すぐには、自分で気づけないほど、長く長く、それは真理の中で尾を引く。

戦闘中、反射的に自分を守ろうと、真理に逆らってステルスモードに入ったことと、ワケが違ったのだ。

早紀は自分の意思で、はっきりと彼の言葉を拒否したのだ。

ふらふらと。

生きるためだけに、ただ、流される女だと思っていた。

鎧になる前も、鎧になった後も。

とにかく、いつも環境に適応しようとしていたのだ。

しかし、昨日の早紀は違った。

リボンを巻き、泣いた目で——そして、拒否した。

あの早紀が、反抗してまで隠したがる言葉が、気にならないと言えば嘘になる。

誰と。

「……部屋は、こちらでは？」

足を止めたタミに声をかけられた時。

真理は、自室の扉の前を、二歩ほど通り過ぎていたのだった。

授業

一一一

情けないパジャマ姿から、着替えを終えた早紀は、枕元をじっとみた。

母の写真から少し離れたところに、リボンを置いていたのだ。

夢の中に持ち込んだとは言え、実際にリボンを巻いたまま寝ていたわけではない。

どうしよう。

と、思いながらも、早紀はリボンに手を伸ばしていた。

ただの細長い布に感じるが、それを自分の左の髪に近づけると。

しゅるり。

生き物のように動き始め、リボンは早紀の髪を編み始めるのだ。

伊瀬のくれた、海のリボン。

そして。

もしかしたら、自分の中の『水』と、何か関係があるのかもしれない。

けれど、父親の記憶なんかない。

聞いた記憶もない。

問題は。

この事を、鎧以外に話せないことだ。

あの鎧の男は、早紀が何の種族であれ、興味もないし頓着もしない。

だが、魔族にとって、他の種族は敵なのだ。

そして、更に早紀の味方にならないものが増えた。

タミと呼ばれる魔女だ。

あの黒々しい彼女なら、ホウキに乗って空を飛んでいても、とても似合うだろう。

いまどき、ホウキに乗る魔女がいるのかどうか、早紀は知らないのだが。

真理のお相手になるということは、家柄もしっかりしているのだろう。

幸い。

彼女も、上手に早紀を見失ってくれる人のようにだ。

それを生かしながら、逃げるしかない。

早紀が、そんな消極的理論に走っていた時。

またも、部屋がノックされた。

うう。

もう、真理とタミでおなかいっぱいな上に、彼女には考えなければならぬこともあるというのに。

「は…い」

歯切れの悪い声で、返事をする。

「タミです…入ってもいいかしら？」

あう。

訪問者は——おなかいっぱいの片割れだった。

※

何の用だろう。

何故か早紀の部屋で、お茶の準備が始まった。

来たばかりの彼女は、それが自分の権利であるかのように、使用人を使っている。

さすがは、良い家柄だ。

未だ早紀は、彼らに何かを頼むことさえ、ほとんど出来ないでいるというのに。

まあ。

早紀の能力上、使用人たちも彼女の存在を、うすらぼんやりとしか認識していないのかもしれないが。

お茶の準備が終わるまで、何の話も始まらない。

ソファに、向かいあって座っているながら、早紀はいたたまれない時間を過ごさなければならないのだ。

しかし、タミは大きな目で、まばたきもほとんどしないまま、彼女をじっと見つめ続けている。

睨まれている気がして、しょうがない。

だが、その凝視っぷりは、どこかで覚えがあるものだった。

あ。

零子だ。

学校で、彼女が自分を見る時も、そんな目だったのだ。

まばたきの隙に、早紀が消えてしまうとも思っ——ああ、な

るほど。

納得した。

タミも、彼女を見失うまいとしているのだ。

「しゃべってくれないかしら」

使用人たちが下がった後、最初にタミが言ったのは、そんな言葉だった。

な、何を？

早紀は、たじろいだ。

ちょっとだけ、ギクリとしていた。

自分の中にある、何かを白状しろと言われた気がしたのだ。

しかし、その秘密を共有しているのは、早紀と鎧の男だけ。

彼女が、知っているはずがない。

「何でもいいから、声を出して：もう、ぼんやりとしか見えてないの」

その声には、悔しさが混じっている気がした。

早紀を見失うのは、屈辱なのだろうか。

「は、はい」

何でもいいと言われたので、とりあえず返事を返す。

すると、黒く大きな目が、はっきりと早紀を真ん中に映した。

ほおっと、タミは安堵の吐息をつく。

「まるで…海族という気分だわ」

その、吐息の影から呟かれた言葉は——早紀の鼓動を止めるかと思っ

※

「海族を…知ってるんですか？」

反射的に、早紀は食いついてしまった。

いま、彼女の中で一番大きくなった、その種族の話だ。

まさか、タミの口から出てくるとは、思ってもみなかった。

「私は、鎧鍛冶の一族よ…天族も海族も敵ですもの…敵を知らなければ、鎧は作れないわ」

真理は、名前しか紹介しなかったため、彼女の口から語られることは、とてつもない驚きだった。

もっと、貴族っぽいお嬢様かと思っていたのだ。

鎧鍛冶、ってことは。

早紀の頭に、鎧の男がよぎった。

金属の防具のはずなのに、意思らしきものを持っている。

彼を作った一族だろうか。

「海族って…どんな相手です？ ま、まだ、戦ったこと、なくて」

早紀にしては、随分慎重に言葉を選んだ。

戦い以外で、海族に興味を示していると思われる、不都合だったのだ。

これなら、自然な質問ではないか——多分。

「……………」

大きな瞳が、じっと早紀を見る。

真意を見抜かれる気がして、つい目をそらしてしまった。

「そうね…彼らは、水の中では自由に姿を隠せるから…誘い込まれない方がいいわ」

だが、少しだけタミの雰囲気が変わった気がした。

言葉が、するすると出てくる、というか。

さっきまでは、どこか早紀を警戒している様子も感じられたが、それが少しだけやわらかくなったような。

「雨の日は、更に危険よ：雨の日に海上で蝕が起きたなら、その蝕は諦めるべきだわ」

それから――

早紀は、あっけにとられていた。

タミの唇は、どんどん知識を溢れさせていくのだ。

蛇口をひねったかのように。

もしかして、この人って。

早紀は、ありがたい情報を流し込まれながら、タミを盗み見た。

この人って――戦闘ヲタク？

※

レコーダーが欲しい。

早紀は、講義を受ける生徒となりながら、切実にそんなことを思

っていた。

タミの語る言葉は、理解できないものが8割だったのだ。

冷静な口調ではあるが、彼女の戦闘に対する蛇口は、締められることなくダダ漏れになっている。

しかも、難しい専門用語がバンバン飛び出すからたまらない。

それは何？　どういう意味？

質問を挟む隙間さえ、見つけられないのだ。

しょうがなく、分かる部分だけを、早紀は拾い集めた。

力のベクトルは、 x 軸と y 軸共に魔族と天族は真反対。

海族は、 x 軸は魔に近く、 y 軸が天に近い。

x と y の値が、真逆の海族もいる。

説明の仕方はもっと違ったが、早紀は語られる言葉を、何とか頭の中でグラフに直すことが出来たのだ。

海族の、特殊なベクトルのゆえに。

「海族は生まれつき、天族にしか効かない力を持つものと、魔族にしか効かない力を持つものに別れてしまったの」

言葉の糸が、早紀のグラフの上をすべり落ちていく。

ということは、海族とは言っても、実質的な力は魔寄りか天寄りということだ。

伊瀬は、どっちだったのだろう。

早紀を傷つかなかったということは、魔寄りだったのだろうか。

「勿論：物理的な力技は、別ね」

伊瀬のことを考えていた、彼女の頭の上を言葉が流れる。

その言葉には、若干の軽蔑がこもっていた。

野蛮な、とでも言いたげなのか。

「だから海族の戦士は、みな物理能力を鍛えるの：魔にも天にも対抗できるように」

ああ。

納得してしまう。

彼の、素晴らしい身体を思い出してしまったのだ。

極東魔族の四席の中で、あの身体に対抗できるのは、おそらく1人だけだろう。

「だからこそ：不思議なの」

何か、鋭いものが、刺さったかと、思った。

それが、タミの視線だと分かり、びくびくと彼女を見返した。

「天にも魔にも効く…能力があるなんて」

鋭い目の中を、 x と y の軸がうねる。

早紀の力のベクトルに——その黒い手袋を伸ばそうというのか。

嘘

一一一

真理にとって、早紀は鎧と同じ意味を持つものだから、その能力には確かに興味があった。

しかし、理論上の話ならば分かるが、それから外れたものについてはお手上げだ。

その点、タミは非常に熱心で。

そして——零子も。

早紀は、屋敷ではタミに。

学校では、零子に付きまとわれているようだった。

「何か、成果はあったのか？」

真理は、自室に来たタミに問いかけてみた。

早紀と違って、ごく自然に彼の部屋を訪れ、少しの会話を交わして去っていく。

だが、それはどこが義務的だった。

最低限の付き合いをしているだけ、というような。

「少しだけ…」

タミは、何故か自分の手袋の手を見た。

制服を着ても、その手袋は外さない。

「彼女の魔力を、サンプルにもらいました…」

じっと、手を見続ける。

その手袋に、早紀の魔力が乗っているかのように。

「何かが混ざってます…1つのような…2つのような」

混じる？

その表現に、真理はひっかかった。

早紀が、純粹な魔族ではないという意味だろうか。

彼女の母親の写真が、一瞬だけ頭をよぎった。

別の種族と、交わったということか？

しかし、それはとても難しいことのように思える。

人間の男では、魔女の卵までたどり着くことは出来ないだろう。

天族など、触れ合うことも出来まい。

海族なら。

魔寄りの能力を持つ海族なら、可能性がないこともないのだろうが——敵対関係の相手と、子を成せるものなのか。

「もし、よろしければ…彼女の親の世代の血を知りたいのですが」

真理と同じ思考に行き着いたタミが、頼みごとをしてくる。

真理は、一瞬沈黙した。

違う種族の血が入っていると、重大なことだ。

他の魔族に知られたら、悪し様に言われかねない。

「いや…両親ともに魔族だ」

真理は、涼しい顔で嘘をついた。

タミもまた——他の魔族なのだ。

途切れた過去

――

初めて、タミが右の手袋を外すのを見た時、早紀は言葉を失った。

青く青く、変色した手が現れたからだ。

そして、動けなかった。

ここで動揺したり逃げたりすれば、彼女が不快に思うのではないかと、反射的に考えてしまったせいだ。

早紀の部屋。

この屋敷に来て以来、タミは頻繁に彼女の部屋に来るようになった。

友好的ではないが、力というもののへの興味は、純粹なものに感じる。

あくまでも、魔族的な純粹、なのだが。

そんな彼女に。

「少しだけ、魔力をもらえるかしら？」

聞かれた時、早紀はととても複雑だった。

飛びつきたい気持ちと、危険信号の両方が、頭の中でせめぎあっ

たからだ。

自分が何なのか知りたい。

その気持ちは、毎日毎日大きくなっていく。

だが、本当に知ってしまった時——純粹な魔族でなかった場合、早紀はどうすればいいのか。

しかも。

それを、タミに知られることになるのだ。

結局、はいもいいえも答えられなかった。

いつもどおりの早紀が、炸裂してしまったのだ。

その沈黙を、どう取ったのか。

タミは、彼女の目の前で手袋を取ったのである。

青い、手。

正常な色、というよりは、変色してしまったような濁った青。

「気にしないで……いろんな力に触れていたら、こうなっただけ」

早紀より、ひとつ年下なのを知って。

鎧鍛冶の血筋であることを知って。

そして、ハイクラスなのも知った。

でも——深窓の令嬢ではなかった。

その手を見れば分かる。

「気持ち悪い？」

早紀に近づきながら、大きな目が見据えてくる。

慌てて、首を横に振っていたら。

「そう……」

青い手は、あっさりと早紀の腕に触れていたのだった。

あ。

理解した時にはもう遅く。

どうやら、魔力を持っていかれたようだ。

※

ノックの音。

早紀は、またタミだろうかと思った。

まだ、彼女が持っていた魔力の結果を、彼女は聞いていないのだ。

「はい」

そう答えると。

ドアを開けたのは——真理だった。

あー。

瞬間的に、テンションが三段階ほど下がる。

何というかもう、顔を見るのさえ憂鬱なのだ。

今度は、どんな一方的なお話なのだろうか。

愛想も無愛想も浮かべないまま、早紀は彼を見ていた。

まっすぐに、真理は彼女の方へと歩いてくる。

いつも通りの氷の表情だったが、用件も言わずに一直線だ。

ひいっ。

どこで止まるのかと思っていたら、目の前まで来られる。

その上に、顔まで近づけてくるではないか。

な、何事!?

背中に嫌な汗をかきながら、早紀はそれでも心理から目を離せなかった。

感情の読み難い黒く冷たい目が、彼女をいつになく強く捕らえている気がしたのだ。

間近の、唇が開く。

「お前の…父親は、誰だ？」

ひそめられた声。

早紀以外の、誰にも誰にも聞こえないようにと、空気をかすめるほどの低い声だった。

「え？ あ？」

ギクリとした。

真理に気づかれる要素は、なかったはずだ。

きっかけは、海族の伊瀬との出会いだっただし、鎧の男はあの調子だし。

他は。

あ。

早紀は、天を仰ぎたかった。

いたではないか。

そう。

タミが。

彼女は、早紀の味方でもなんでもない。

真理に報告したって、何ひとつおかしくなかった。

※

「しっ、知らない！」

早紀は、即座に否定していた。

ギリギリとした気持ちを隠したいのもあったし、第一、本当に知らないのだ。

この答えに關してだけは、嘘ではない。

真理が、タミから何と聞いたのかは分からないが、この件については、深く突っ込まれたくなかった。

否定に、間近で真理の表情が曇る。

「本当に…本当に、知らないの…見たこともないし、聞いたことも

ないし：」

嘘じゃない、嘘じゃない。

早紀は、必死に心の中で言い訳をした。

だから早く、興味を失って。

そして：早く離れて。

ドアップで見るには、真理の顔は余りに心臓に悪い。

綺麗だからこそ、たてようもない迫力があるのだ。

しかし、瞳は逃げたがる早紀を強く捕まえる。

「何故？」

その声は、さっきまでとどこか違った。

早紀を追い詰める音というよりも、純粹な疑問に近いものに感じたのだ。

問いかけに引っ張られるように、彼女は真理の目を見てしまった。

「何故：父親のことを聞かなかった？」

あれ？

目を奪われたまま、早紀は質問に答えられなかった。

あれ、どうしてだろう。

確かに、早紀は小さかった。

しかし、父親と母親がいて子供がいるという図式は、何となく頭にはあったような気がする。

だから、一度くらい聞いていてもおかしくはなかった。

もしかしたら、聞いたのに覚えてないのだろうか。

頭の中をひっくり返してみるが、真理どころか自分自身さえ納得させる言葉は、見つかりそうにない。

反射的に、彼女は真理の身体の影から、枕元を見ようとした。

そこには、母親——の写真。

自分によく似た、魔女らしくない女性が笑っている。

見れば見るほど、記憶が曖昧になっていく。

おかあさんと、どんな話をしたっけ。

何て言ってたっけ。

記憶の中の笑っている彼女との記憶が、どんどん白く霞んでいく気がした。

二戦目

「うーん」

早紀は、夢の中でも首をひねっていた。

自分が、健忘症にでもかかったんじゃないかと思えるほど、記憶が不鮮明になっていく気がしたのだ。

父親どころか、母親さえちゃんと思いつけなくなってきたなんて。

「うるさいぞ」

あっちを向いたり、こっちを向いたり。

早紀の落ち着かない態度とうなり声に、嫌気がさしたのだろう。

鎧の男が、その固いつま先で、早紀の尻をつつく。

「うひゃっ」

変な声をあげて、早紀は飛びのいた。

「勝手にくつろぐな。ここは、お前の部屋じゃないんだぜ」

鎧にしてみれば、彼女がとても呑気な姿に見えたのだろう。

これでも、とてもとてもシリアスに、考え込んでいたというのに。

そういえば。

この鎧の男は、早紀の中から水を引っ張り出した。

もしかしたら、他のものも引っ張り出せるんじゃないだろうか。

彼女の、魂の契約者なのだから。

「あの…私の中に、魔力と水以外に…他に、何か、ない？」

おそろおそろ、彼に聞いてみる。

「力以外は、興味がない」

しかし、即答で真っ二つにされるだけだった。

あきらめざるを得ない現状に、早紀が遠い目をしかけた時。

「ああ…力か…そうか…そういう意味なら」

ふと。

男は、兜の中で何かを呟いた。

「水は、お前の力の折れ曲がってるところから出ているな」

言葉がまとまったのか、男はさらりと意味不明なことを言っている。

早紀は、自分の眉間がつながるほど、引き寄せなければならなか

った。

タミではないのだから、力の形だの水の出所だの言われても、さっぱり分かるはずなどないのだから。

だが、せっかく教えてくれたのだから、せめてもう少し詳しく聞きたそうと、眉間のシワを伸ばして気を取り直した。

「それって…」

男を見上げると。

彼は、引っ張られるように、更に上を見上げていた。

カタッ。

鎧が震える。

カタカタカタカタッ。

「おいでなすったぜ…」

声は——歓喜に満ち溢れていた。

※

一度、蝕が始まると。

早紀の魂は、鎧に乗っ取られたようになってしまった。

前の戦いを思い出して、行きたくないと思っただ。

強制的に目覚めさせられた時、目の前の真理の部屋のドアを開けるのを、ためらうことさえできないのだ。

ノックもなしに開けられるのは、この瞬間だけ。

高揚する意識に、乗っ取られまいとしながらも、早紀は飛び起きた真理と向かいあうのだ。

すぐに。

彼も、蝕に向かいたくてしょうがないのだから、すぐに早紀の額を指でなぞるだろう。

そう思っていた。

しかし、あの真理が一瞬動きを止めたのだ。

「…もし怪我を負ったら、すぐに鎧に治してもらえ。その後の医者
は雇ってある」

頭に血が昇った状態の早紀は、彼の言う言葉の意味を、瞬間的に理解することは出来なかった。

真理もまた、それだけ言いおくと、予備動作もなく早紀の契約印をなぞるのだ。

あっと思った時には。

自分を、真っ黒い霧が覆っていて。

身体中が、自由のきかない金属に変化していくのだ。

さっきの。

ぽっかりと、身体を中心に穴が開いている気分だ。

隙間風が、そこを吹き抜けていく気がするほど。

さっきの言葉は。

上手に、考えられるはずがない。

真理が——入ってきた。

がらんどうの自分の内側を、生々しく埋めていく。

その瞬間の気色の悪さと、隙間がなくなる充足感。

相反する二つの感覚を、早紀は同時に味わわされるのだ。

そうすると、前の倍はさらに頭に血が昇る気がした。

鎧の感情と、真理の感情の両方が絡むせいだろう。

二人とも、戦いたくて戦いたくてしょうがないのだ。

さつき。

だが、やはり考えられるはずなどなかった。

身体の支配権を奪った真理が——空に向かって飛び出してしまったのだから。

早紀＋真理

――

静かで、身体に吸い付くような心地よい鎧。

早紀が、最初からステルスをオンにしているのが、そこから伝わってくる。

契約でつながっているながらも、本能的に何もかもを隠すことの出来る女。

蝕へ飛びながら、真理は鎧の鼓動を探ろうとした。

タミの言う、他の力の混じりを何か感じるかと思ったのだ。

しかし、不快感も違和感も、そこには見つけることが出来なかった。

ただ。

首筋から、武器を引き抜こうとした時。

その感触と、形の意味を理解した。

ああ。

そうか。

これか。

水馬刀に似ていると、最初にそう思った。

下賤な形の武器。

それは、強くないという意味ではない。

海族が、好んで使う形だからだ。

鎧の能力や武器は、イケニエにした魔女によって変わる。

この武器は、まさに早紀から生まれた刀だった。

おそらく、早紀には海族が混じっている。

それを知らずに、真理は自分の鎧に使ってしまったワケだ。

考えたことは、いくつか。

一番は、勿論家名や体裁のこと。

自分の代が終わるまで——いわゆる、真理が死ぬまで抱えておくべき重要事項だ。

同じ運命を、早紀にも共にしてもらわねばならない。

疑問を打ち捨て、ただ自分は純粋な魔族であると刷り込むのだ。

簡単だ。

早紀の、父親の情報を与えればいい。

それは、本当のことだけでなくとも構わないのだから。

その情報で、早紀ともどもタミも黙らせる。

彼女の混じったような能力は、ただの突然変異なのだと。

そう、信じさせるのだ。

一瞬にして、深層意識で計算を済ませる。

意識を引き上げるように、真理は空を見た。

蝕が——見えた。

※

今日、真理は自分の能力を乗せるつもりだった。

初陣の時は、早紀を制御しつつ、戦いに慣れなければならなかったのだ。

剣技そのものは、幼少から当然のごとく学んではいるが、魔族の戦いとしてはそれだけでは無意味だ。

蝕の前には、金の鎧が一人。

あれが、一番速く来た敵さんのようだ。

魔族側では、真理が一番ということか。

真理は、刀を握る手に魔力を集めた。

早紀のステルスは全開のようで、警戒はしているが、彼の接近はまったく気づいていない。

「来い…」

鎧の指が、がちっと音を立てた。

そのまま、刀と一体化する。

指に集めた冷気が、真っ白い結晶となってつないだのだ。

そのまま。

刃の切っ先まで、白く彩られる。

予想以上だった。

早紀が海族と関わりがあるのを証明するかのように、水にまつわる刀は予想以上に彼の冷気を受け入れた。

飽和する水分までも凍らせたのか、無数の氷の棘が刀から張り出す。

元の水馬刀の形とは、似ても似つかぬ針の刀。

悪くない。

前の形は、とても好きにはなれなかったが、これはまさに真理の能力を体現している気がしたのだ。

その刀を。

たとえ前回、早紀のステルスを体験していたとしても、対処出来るはずもない哀れな天族に振り下ろす。

気づいたら、斬りつけられている。

そんな、屈辱的な一瞬。

だが。

天族は、前回のように墜落はしなかった。

「くっ！」

深々と、鎧に大傷を負いながらも踏みとどまり——斬り返してきたのだ。

きちんと、認識した反撃ではなかった。

ハハハッ。

真理は、笑いながらその一撃を刀で受けた。

無数の棘を壊しながらも、相手の剣や腕に真理の氷が飛ぶ。

魔力による冷氣。

天族にとって、それを浴びるのは――火を浴びるようなものに違
いなかった。

讓歩

一一一

真理は——医者を用意していると言った。

出撃間際の、一瞬のやりとり。

前回、早紀が傷ついた時、確かに彼は調べておくようなことは言っていた。

しかし。

正直、その言葉など、まったく信用していなかったのだ。

真理ではなく、鎧が彼女を治療してくれたのだから。

医者など、それでもう必要はないはず。

だが、真理は不思議なことを言った。

『鎧に治してもらえ』と。

『その後の医者は雇ってある』と。

その後の医者？

鎧に治してもらった後に、どんな医者が必要だというのか。

早紀が考え込んでいる間にも、真理は躊躇なく金の鎧を斬りつけ

ている。

右手の感触が、奇妙だった。

彼の冷たい気が、右腕の全てにまとわりついている。

けれども、それが心地よいとさえ思えるのは、気の持ち主の真理と、同化しているせいだろうか。

真っ暗な夜空に、氷がキラキラと跳ねる。

砕けても砕けても、刀はすぐに新たな棘を生み、金の鎧に降り注ぐ。

綺麗な、力だなあ。

相手にとっては、とんでもない威力なのだろうが、魔族側にいる早紀にとっては、美しささえ感じるのだ。

真理のことは、いまでも怖い。

痛いのも怖い。

でも、あの真理が早紀に医者を雇ったと。

それがどんな役割なのかは、きちんと理解は出来ていなかったが、とてつもないことだと、少しずつ感じていた。

勿論、それは彼が早紀を鎧として、メンテナンスしているにすぎないことは分かっている。

物としてだとしても、あの真理の手をわずらわせているという事実は、すごいものに思えたのだ。

そして、今。

真理の冷気を、共有している。

別人として向かい合っている時には、早紀を怯えさせることしかしなかった冷たい気配。

こんなに馴染む冷たさを感じたのは、産まれて初めてだった。

『ステルスを：はずせ。危ないと思ったら：勝手に戻せ』

真理の、声がした。

ほんの一步。

譲歩が混じっていた。

わずかな歩み寄り

――

『あわわわわ…』

早紀の、奇声が聞こえた。

鎧の内部から反響するように、真理に伝わってくる。

相変わらずの、緊張感の足りなさだ。

しかし、それは彼女がステルスを解いたということだ。

用意した医者と、自分の判断で戻していいという二つの条件を、早紀が飲んだのだろう。

うるさい。

ステルスを解けとは言ったのは確かだが、やはりつながるとそう思わずには言われない。

本人が、いろいろ混乱しているせいか、伝わってくる音もこんがらがっていたのだ。

意味不明の、しかし現状に関する単語だけが、鎧の中を飛び交う。

おっと。

早紀がうるさいということは、敵さんには自分が見えているとい

うことだ。

突然現れた真理に、一瞬驚いて止まっていた重症の天族が、はっきりと目的を持って剣を掲げて突進してきている。

斜め下方では、別の火花が散り始めていた。

「なんだ…その力はっ！」

動くのもやっとなのはずの真理の敵は、しかし、剣と共に問いを発する。

見えない彼の能力に、問わずにいられなかったのか。

フツ。

敵の質問に、答えるわけがない。

敵に贈るものは、答えなどではなく、苦痛だと決まっているのだから。

剣を受け流し、真理は左手の指で自分の刀の表面を、強くなぞった。

鋭い指の動きに、多くの氷の棘が刀からへし折られ宙を舞う。

真理は——冷気を呼んだ。

「貫け…」

冷氣に乗った氷の棘が。

金の鎧に突き刺さってゆく。

「我が名はカシユメル：貴様は、先の大空蝕には参戦したのか？」

宙で崩れ行く敵に、真理は名乗り、そして問いかけた。

ああ。

そして、気づいた。

敵に問いかけなどしても無駄だ、と。

さっき、自分がそう思ったではないか。

敵に与えるものは——苦痛のみ。

真理は。

最後の一撃を、振り下ろした。

※

「能力を、解いているのか」

1stの登場に、真理は微かな笑みを浮かべていた。

兜のせいで、それは相手には伝わっていないだろうが。

「蝕の番が必要でしょうから」

今日は、真理が一番速く到着したのだ。

そして、ステルスを解かなければ、番が出来ないのは前回で学習していた。

戦闘行動がなければ、早紀もおとなしい。

「そうか…下はもう終わるだろう。2対1だからな」

1stと4thが、ここにいるのだから、彼のいう2とは、2ndと3rdのこととなる。

1stが1体、真理が1体、そして二人が1体。

敵の合計は、3ということか。

「敵は、おそらく一人代替わり待ちだろう…いつ参戦するかは知らんが、な」

前回、敵の1stが不在だった。

今回もとなると、蝕を巡る戦いとは別の理由で、死んだ可能性がある。

逆に魔族は、去年のトゥーイ、今年の真理と一気に四席が埋まった。

そして、天族は真理を攻略できていない。

極東の蝕を、しばらくは天族が取れるとは思えなかった。

「しかし、ここまで順調に蝕が取れると…要求が増えてくるな」

下方の火花を見ながら、1st——イデルグは、苦笑にも似た音を漏らした。

「これは…『青』ともやる羽目になりそうだ」

面倒なんだがな、あいつらは。

『……っ！』

イデルグの言葉に、真理はああと納得した。

要求というのは、彼らの更に上からだろう。

極東エリアの上に、亜細亜エリアがある。

勿論その上も。

海に面したエリアでは、「青」と蔑称される厄介な海族がいるのだ。

「……………」

真理は、ふと思考を止めた。

何か、不自然な事象が起きた気がしたのである。

ほんの少し前。

彼が、海族について納得する直前。

『……っ！』↑驚きにも似た、息を吞む一瞬のこの音は、何だったのか。

真理ではない。

ということは、早紀か？

しかし。

当の早紀は——既に、ステルスの殻の中に閉じこもっているようだった。

面会者

――

ガシヤンツ。

そうして早紀は、鎧から解放される。

真理の指先によって。

その後、何とも言えない時間を味わうのだ。

今日の魔族の勝利を喜び合うでもなく、傷つかなかったことに安堵するでもなく。

ただ早紀は、1stの男の言った言葉を、頭の中に反芻してしま
うのである。

青と、戦うことに。

それを聞いた瞬間、早紀は反射的にステルスを起動させていたよ
うだった。

自分の思考が、真理にダダ漏れになるのを防ぎたかったのだ。

だから、多分。

彼に、早紀の考えたことは、バレて、いな――

「お前の父親は……」

思考にかぶるように、真理の言葉が乗せられる。

考えていたことと、あながち遠くはない内容に、早紀は胸を冷たくさせた。

ステルスは、間に合わなかったのだろうか、と。

「お前の父親は……魔族だ」

だが、想像よりも結論は、はるかにシンプルだった。

え？

「お前の両親は……どちらも魔族だ、と言っている」

いつも通りの冷えた目が、早紀の目に飛び込んでくる。

いや。

自分が、はっと顔を上げて、彼の目を見てしまったのだ。

う、うそ。

そう、真理の目の中に嘘を探そうとした。

彼の目を真正面から見上げるなんて、普通の自分ならありえないのだから。

だが。

真理の瞳は、まったく揺れない。

いつも通りの色のまま、早紀を映している。

「お前の能力が、魔族に効くのは…」

さっき、冷気を共有している時には、あんなに心地よかったというのに。

いまはもう、彼女の心を冷やすだけで。

「それは…単なる突然変異だ」

身体の内側にいる時の彼は、早紀の隙間を埋めてくれたというのに。

いまはもう——遠い真理に戻っていた。

※

朝、鎧の男と別れて、目を覚ましたら。

タミがいた。

ええー？

早紀が驚いて飛び起きようとする、彼女は手を離してくれた—

―握られていたのだ。

手袋のない左手は、青くはなかった。

その手を、再び手袋の中にしまいこみ始める。

「え、ええと…」

朝から、一体ここで彼女は何をしていたのか。

早紀が把握できずにいると、ちらとタミが彼女を見た。

「ほとんど、魔力の消耗はありません…」

そう言われて。

はたと、昨日の記憶がよみがえる。

真理の言った言葉を、だ。

「もしかして…あなたがお医者さん？」

その問いは、とてもマヌケなものに感じた。

タミが、無反応のまま早紀を見ているのだ。

言葉もない。

「え…あ…その…あなた…この家に…雇われてるの？」

これまでずっと、真理のお嫁さん候補とばかり思っていた。

だから、タミⅡ医者 of 計算式が成り立たなかったのだ。

「その質問なら…『はい』です」

澱みない返事に、早紀は混乱した。

医者という言葉には、語弊があるようだが、タミがこれから早紀の怪我の後処理(?)をするというのだ。

「ええと…どんな仕事か…聞いていい？」

具体的に、タミが何をするために雇われているのかは、知らないのである。

怪我を負えば、鎧が治してくれるはず。

治った後に、何があるというのか。

「怪我を、鎧があなたの魔力を使って治すと…あなたは魔力欠乏症に陥るということです。その補充を…私がします」

ああ、そう。

そう、魔力欠乏症ね。

そういえば、記憶が途切れていた時間があったような。

魔力がなくなったら、困る状態になるんだ。

って…あれ？

早紀は、ふと思考の矛盾に気づいた。

前の時は、彼女はいなかったのに——どうやって治ったんだろう。

※

いろいろなモヤモヤを抱えたまま、早紀は登校した。

自分の父親は、魔族だと言われるし、タミが雇われた医者だし、
前回の回復には疑念が残るし。

モヤモヤしない方が、おかしいだろう。

しかし。

休み時間に、それらを吹っ飛ばすような、とんでもない事件が起きた。

学校の職員が、早紀を呼びに来たのだ。

「は、はい!？」

ステルスには自覚があったので、呼びかけに慌てて答えて席から立ち上がる。

呼び出しなんて、生まれて初めてだった。

何事かと、職員に駆け寄ると。

「ご親戚が、面会にお見えです」

し・ん・せ・き？

口をぽかんとして、その言葉を復唱してしまった。

早紀の親戚といえば、カシユメル系列しか考えられない。

しかし、わざわざ彼女を呼び出す人など、誰も思い浮かなかった。

思いつくほど知らない、と言った方が正しいか。

修平さん、かな。

真理とは遠縁なのだから、修平とも一応そうなるのだろうし。

早紀は、首を斜めにひねったまま、応接室へと案内された。

そこには。

真っ黒い、フードつきのマントに身を包んだ男がいた。

男、と言っても顔が見えたわけではない。

ひどく大きくて、がっしりしていたので、女とは思えなかったのだ。

「少し…二人にさせてもらえますか？」

低く低く、押し殺したような声。

早紀は、ぽかんと男を見ているしかない。

ドアが閉ざされ、二人きりになった後。

マントから腕が出て、節のしっかりした人差し指が一本立った。

その指が、ゆっくりと男の唇の前に立つ。

指をそのままに。

もう片方の手が、少しだけフードをずらした。

こぼれおちる、赤茶けた髪の一房。

よく焼けた肌。

「……………！！！！」

早紀は、声にならない絶叫をあげていた。

誰か、分かったのだ。

伊瀬。

街で出会った、海族の男ではないか！

利害

こ、こ、ここは魔族の学校デスヨー！！

早紀は、目を白黒させたまま、錯乱状態に陥っていた。

慌てて周囲を見回してしまうのは、誰かが見ているのではないかという恐怖感のせい。

だが、彼がここに早紀を訪ねてきたということは、彼女のことを魔族だと知った、ということでもある。

魔族だと知って遠ざかるならまだしも、一体何の用があるというのか。

伊瀬は、人差し指を下ろして、微かに口元を微笑ませる。

早紀が、騒ぎ立てないことが分かったからだろう。

「やっぱり…思った通りの子だ」

優しい、声。

早紀が魔族と知る前に、彼の出した声と同じ音。

いまなお、伊瀬はそんな声で語りかけてくれるというのか。

「君にお礼がしたくてね…最初は。だから…君のことを調べてしまった」

優しい声が、経緯を語り始める。

お礼ごときのために、魔族の学校に侵入したなんて、おめでたすぎる。

大体、早紀は彼にとってお礼の対象では――

「そしたら…君が魔族だと分かった…カシユメルの家にいることも
しかし。」

伊瀬は、全てを知っていた。

その上、どういう意味かは分からないが、カシユメルの名前も。

カシユメルの当主が鎧を身につけ、戦いに出ているということを知っているということなのか。

反射的に、早紀が一步下がりがけた時。

「ああ…いや、怖がらないで欲しい…私は君の…魔族である君の助けが必要なんだ」

伊瀬の方が、先に一步下がる。

初めて出会った時も、早紀を怖がらせないようにしてくれた人。

「もし、話を聞いてくれる気があるなら…すまない…手に触れさせてくれないか？」

複雑な戸惑いに振り回されている彼女に、伊瀬は不思議な言葉を並べた。

手？

つい、自分の手を見つめてしまう。

「正直…そろそろ限界でね…海から離れすぎると…こうなる」

大きな身体が、微かに傾ぐ。

「……！」

敵地に。

話を聞く、確証もないというのに。

海族の身体で乗り込むなんて。

早紀は、慌てて手を伸ばしていた。

確かに彼女の身体の中にある——海の力が、伊瀬に流れてゆく。

※

「魔女を探している…血筋で言えば、カシユメルの…」

早紀の手に渡される、一枚の写真。

艶やかで、見ているものの視線を惹きつけてやまない、強い強い瞳。

長い黒髪は、くるんくるんと好きな方に浮き、跳ね回っている。

どう見ても魔女。

タミや零子と反対の、騒々しい方の魔女だ。

「この人を…何故？」

魔女と、関わりのある人間には見えなかった。

授業の始まる鐘が鳴る。

「昔…我らの宝が盗まれた。その犯人を…私はずっと探している」

その鐘の音の中、伊瀬は語り始めた。

写真の魔女は、一人で海族の中に飛び込み、宝物庫からそれを奪っていったと。

その方法は、決してスマートではなかった。

多くの海族に姿をさらしながら、宝を奪い、そして逃げていったというのだ。

俊敏で、そして『アバキ』と、彼らが名づけた能力を持っていた。

天族寄りの能力を持つ眷族が、全てそのアバキでしてやられたのだと。

記憶や知識、秘密——それらを彼女はことごとく、天族寄りから吐き出させたのだ。

そのおかげで、海族でも一部しか知らない抜け道から、逃げおおせた。

「私は…宝を取り返したい」

この魔女を、探しす手伝いをしてほしい。

そう、伊瀬は言うのだ。

突然そんなことを言われても。

困ってしまうのが、早紀だ。

カシユメルの血筋と言われても、早紀はあの屋敷以外のことはまったく知らないのだ。

それに。

伊瀬を手伝うということは、海族を手伝うということだ。

そんな事実がバレたら、早紀は身の破滅ではないのか。

しかし。

何度も確認するが、相手は海族。

彼女の中にある、海の力の秘密が分かるかもしれない人でもあった。

あらがいがたい、誘惑の瞬間。

ごくり。

早紀は、生唾を飲み込んでいた。

「私のお父さん…あなたたちの眷属かもしれないんです」

しらべて、くれますか？

真理の言葉を——鵜呑みになんて出来なかった。

壁に耳あり障子に零子

ほけー。

早紀は、授業中ずっと、力尽きてぼんやりしていた。

校内での、ありえない来客とその内容で、すっかり疲れてしまったのだ。

やっと授業が終わって、これで帰れると思っていたら。

席の前に――零子が来ていた。

新たな来訪者に、早紀は飛びのきそうになった。

一体、何の用なのか。

零子は、じっと目をこらして、彼女の存在を確認しているようだった。

「今日、あなたがとてもよく見える時間帯がありました。だから、確認しにきたのですが…あの時だけだったようです」

零子の言葉に、ぎくりとした。

同じようなことが、前にもあった気がするからだ。

そう。

街で。

伊瀬という時に。

「そ、それって…もしかして…応接室？」

おそろおそろ、聞いてみる。

今日、伊瀬と会った場所だ。

あの部屋は、完全にドアは閉ざされていた。

「ええ…私その時、外にいたんです」

しかし、窓というものがあつたのだ。

応接室は——一階なのだ。

だ、大丈夫のはず。

早紀は、記憶を探った。

伊瀬はずっと窓に背を向けて、早紀の方を向いていたから、彼が何者かは見られてはいないはずだ。

「随分、親しそうでしたね」

冷や汗をダラダラかいている早紀は、その言葉に更に追い詰められる。

駆け寄って手を取ったところは、間違いなく見られたのだろう。

「あ、その、親戚…だから」

だらだらだらだら。

「そうですか…」

零子は、早紀のステルスにしか興味がないうで、そのまま背を向けて去っていこうとした。

ほっとしかけた早紀だったが。

「『あなたたちの眷属』…不思議な表現ですね」

零子の捨てゼリフに、冷水をぶっかけられる思いを味わわれる。

声ではない。

きっと、目のいい彼女のことだ——早紀の唇を読んだに違いなかった。

※

言っていない。

早紀は、自分の口から海族なんて、一度も言っていない。

だから、零子は奇妙な表現にひっかかっているだけで、何の確証もないのだ。

何度も記憶をたどって、早紀はやっとその結論を導きだした。

いくら零子だって、魔族の学校に敵が入り込んでるなんて、想像もできないだろう。

そう、だから大丈夫。

「……」

しかし。

早紀は、別の意味でぎくりとさせられていた。

真理が、彼女を見ていたからだ。

そしてここは、帰宅中の車内だった。

一人で百面相しているのを、見られたに違いない。

無言なのが、余計に早紀の心に重圧を与える。

そんな真理が——いまのカシユメル家の当主。

早紀や、写真の魔女の、血筋の頂点に君臨しているわけだ。

彼に聞けば、分かるだろうか。

謎の魔女のことを。

しかし、何故かと聞かれたら答えられない。

写真の出どころも。

真理に問うにしても、もっと外堀を埋めなければ。

それより。

まだ、修平の方が聞きやすそうだった。

好きになれないタイプではあるが、真理ほど追い詰めてこないのではないかと思ったのだ。

「修平さん…」

屋敷に帰り、当主が自室に入ったのを確認した後、早紀は廊下を歩いていた修平を呼び止めた。

「この人…カシユメルの血筋らしいんですが、ご存知ですか？」

イキの良さそうな、魔女の写真を取り出す。

どきどき。

自分の、喉のあたりに心臓がある気がした。

「ん？ ああ…どこかで見たような」

写真を覗き込みながら、修平は眉間に指を当てる。

「ああ…ああ？」

納得したような声が、中途から不審な疑問に変わる。

ギリ。

嫌な予感が、電流のように首筋を走った。

「…馬鹿にしてる…わけじゃないよね？」

奇妙な言葉と、あからさまな怪訝が——早紀に向けられたのだっ
た。

矛盾

――

「そんなのウソです！」

不覚にも、真理は驚かされた。

早紀の大声を、現実的に聞く日が来るなんて、思ってもみなかったからだ。

声は、廊下から。

距離があつて、ドアという遮蔽物があつてなお、彼の耳まで大きく届いていた。

何事かと視線を向けるが、ドアや壁が邪魔をして様子を伺うことは出来ない。

その後、大きな声は打ち止めになったらしく、それ以上の声は真理の位置まで届かなかった。

一体、誰相手に何の騒ぎなのか。

珍しすぎる出来事だから、なのだ。

真理は、ドアを開けたくなっていた。

しかし、理性がそれを押しとどめてもいた。

たかが早紀の大声で、自分が出て行くまでもない、と。

どうせ、くだらないことに違いない、と。

廊下は静まり返り、真理は興味を失うために視線を部屋の中に戻そうとした。

コンコン。

ノックが――それを許さなかった。

ぴりっと。

自分の指先に、電気が走る。

彼が持っている力は冷氣であって、電気ではないというのに。

「僕だよ」

ドアの向こうにいたのは、従兄だった。

早紀ではない。

ふっと息をつき、中に招き入れる。

「一応、耳に入れておこうと思ってね」

斜め後ろを、一瞬見る動作。

さっき、早紀に大声を出されていたのは、この男なのか。

「彼女…変じゃないか？」

彼女、とは早紀のことだろう。

しかし、その彼女が変なのは、今に限ったことではないだろうに。

「魔女の写真を出して、この人を知らないかと言っただ」

不可解な視線の動き。

「…誰の写真だったと思う？」

そんな修平の視線が、真理の眉間で止まった。

分かるはずのない真理は、瞼の動きだけで先を促す。

「彼女の…母親の写真さ」

一瞬——早紀の部屋で見た、魔女らしくない女の笑顔が、真理の頭をよぎった。

※

修平が真理に差し出したのは、あの母親の写真——ではなかった。

彼の言葉にショックを受けた早紀が、写真を置き去りにして部屋に駆け込んでしまったらしい。

写真の中にいるのは、騒々しそうな魔女。

早紀とは、似ても似つかない。

「これが…母親か？」

真理は、眉間をせばめながら従兄に聞いた。

「そうだよ…あの子連れてきたのは、うちの両親だからね。母親の魔女のことは、ちゃんと調べてあるさ」

名前は——貴沙^{タカラ}。

カシユメルの、遠い血筋。

そう説明する修平の言葉が本当ならば、早紀の部屋の写真は誰なのか。

あの、魔女らしくない女。

「別の女を、母親だと思っていたのか」

それ以外、真理には考えつかなかった。

この写真を、どうひっくり返しても、早紀の部屋の女にはならないのだから。

「さあ…よく分からないね。うちの親の遺品を整理すれば、何か資料があるかもだけど」

何しろ、大事な鎧のイケニエだろう？

ちゃんとして調べてあるはずさ——そう、修平は言うのだ。

早紀の両親は、どちらも魔族だ。

そう真理は、彼女に告げた。

それは、彼が両親のことを調べた、という言葉でもある。

その嘘を保守するためには、真実の母親のことくらい知る必要があるかもしれない。

あの早紀が、大声を出すほど衝撃を受けたのである。

真理に、聞きにくる可能性があった。

最近の早紀は、彼を驚かすことをするからだ。

「遺品を…見せてもらおう」

真理は、写真を机に置いた。

「今からかい？」

意外そうな修平の言葉には答えず、黙ったまま意思を伝える。

「…分かったよ、当主殿」

苦笑しつつ部屋を出る、修平について歩き出した。

「憑き魔女ってのは面倒だね…鎧に押し込んだまま、出さなきゃよかったと思わないかい？」

前をゆく修平は、振り返らないまま真理に軽口を叩く。

余計なお世話だな。

真理は——答えなかった。

おかあさん？

――

「おかあさん！」

早紀は、枕もとの写真にとびついた。

ベッドのスプリングで、身体が変な方向に跳ねて、腕をぶつけながらも写真立てを抱き上げる。

「お母さん！ お母さん！」

ついさっき。

信じられない話を聞いた。

廊下で。

見知らぬ魔女の写真を見て、修平が言ったのだ。

『これ、君のお母さんじゃないか』、と。

違う！

早紀の母は、この写真の女性だ。

あの写真の魔女など、会ったことも見たこともない。

何故、そんなデタラメを言うのか。

早紀は、叫んだ。

自分でも、あんな大声が出せるとは思わなかったくらい。

にこにこ笑う、写真の中のおかっぱの女性。

子供の頃の、記憶を早紀は引っ張り出そうとした。

ぼやけすぎて、はっきりしなくなっていく思い出。

母親はこの人だと、疑うことさえ出来ないのに、鮮烈な記憶が何も甦ってはこない。

きっと、修平の勘違いだ。

そうに違いない。

自分のぼんやりした記憶に耐え切れず、早紀はそう思い込もうとした。

そうだ。

真理なら、彼女の母親のことを知っているのではないか。

修平の勘違いを、彼ならひっくり返せるに違いない。

もしも。

修平の言うことが正しいのなら——おそろしいことだが、もしも

そうなら、その理由だって彼は知っているのではないか。

早紀の記憶は曖昧だ。

しかし、この写真の女性に、自分が強い愛情を覚えているのだけは間違いない。

その愛という感情に奮い立ち、早紀は写真立てを持ったまま、真理の部屋に直行した。

強い決意でノックをする。

返事は——なかった。

不在だったのだ。

※

夜になっても、真理は部屋に戻らなかった。

早紀は、何度も勇気を奮い起こし直して、部屋に向かったのだ。

ついには、彼の部屋のドアを開ける暴挙までおかしたのだから、不在は間違いなかった。

泥水を掻き混ぜるような濁った思考になりながら、彼女は母の写真を抱えていた。

そんな早紀の気持ちを追うように、雷鳴が轟き、強い雨が降り始める。

お母さん。

何回、そう呼び掛けただろう。

胸に抱えている、写真の女性に向ける言葉だ。

決してあんな派手で、魔女魔女しい女に向けるものではない。

だが、そんな早紀の心を、修平の言葉が踏みにじる。

必死に否定しながら、早紀は十数回目の、真理の部屋詣でに向かうのだ。

既に早紀の心には、海族のことなど消え去っていた。

本当に自分という存在を守ることだけしか、考えられなかったのだ。

ドアをノックする。

沈黙。

その後。

「…入れ」

真理は――戻っていた。

あ。

心臓が、握りつぶされるような痛みを、早紀は覚えた。

いきなり、答えがそこにあるのだと感じたせいだ。

真理は、誰かも問わずに入れと言った。

早紀が、来たとわかっていて、入れ、と。

震えの走った手で、ドアを開ける。

室内は、真っ暗だった。

闇の中に、真理が立っている。

瞬間。

雷鳴が一瞬、部屋を照らす。

白い真理の肌が――ひどく蒼く見えた。

※

「私のっ……」

早紀が、勇気を持って出そうとした声は――裏返った。

痙攣するように、喉がひくつと鳴る。

言わなきゃ。

気負いすぎた彼女の唇が、もう一度空を切った時。

真理は。

目の前に立っていた。

あっと、思う間もない。

冷たいその指先が、早紀の額を滑ったのだ。

ガシャン。

な、んで。

全身が金属になる感覚に襲われながら、早紀は真理を見ていた。

今日は蝕ではない。

そうならば、早紀が最初に気付くはずだ。

鎧になる必要などないのに。

しかし、逆らえるはずなどない。

早紀は、真っ黒い塊になるしかなかった。

その塊に。

真理が、入ってくる。

生々しく、早紀の隙間を埋めてゆく、違う生き物。

なんで、なんで。

早紀は、聞きたいことがあるのだ。

答えが欲しいのだ。

悠長に、鎧になっている暇などない。

だが。

混乱しながらも、早紀はステルスをかけなければならなかった。

止められないこの気持ちを、真理に知られるわけにはいかないのだ。

海族のこともあったが――この気持ちそのものを、真理が理解できるとは思わなかったから。

殻に閉じこもる。

その中で、早紀は殻を叩き続けるしか出来ないのだ。

おかあさん、おかあさん、と。

身体は勝手に動き、テラスにつながる窓を開ける。

雷鳴と、叩きつける雨。

飛び立った鎧を、雨が容赦なく打ち据えた。

おかあさん

雷と雨を引き裂いて飛んでいた鎧は、ゆっくりと減速していく。

はつきり、目的を持った動きだった。

鎧の中で、寒くもないのに震えを止められずにいた早紀は、ある方向を見た。

正確には、いまの鎧の主導者である真理が向いた方を、自動的に見ただけだ。

雨にけぶる四角い建物の、ひとつの四角い窓。

その窓辺には——ベッドがあった。

そして。

人が、横たわっていた。

病院？

早紀が、ぼんやりとその認識をした直後。

あ。

決壊する一瞬前の、ひとつの言葉。

ああああああ！！！！！

ステルスなど、一瞬で崩壊するほどの大声を、早紀は鎧の全身で放っていた。

勿論、それは物理的に外に漏れることはない。

真理の、意識的聴覚をつんざくだけだろう。

しかし、早紀は叫ばずにはいられなかった。

そこには、おかっぱの女性がいたのだ。

記憶より年を重ねてはいるものの、早紀の記憶を鮮明に塗りつぶすほどの威力があった。

お母さん！

猛獣が吠えるように、早紀はそれを叫んだ。

驚きよりも早く、野生そのもので出来た愛しさが駆け抜ける。

そして、本能のまま彼女はその部屋へ向かおうとした。

のに。

ガチャン。

身体は、不恰好な金属の音を立てるだけで、真理に制されてしまっていた。

すぐそこに、会いたくてしょうがなかった母がいるのだ。

一秒でも早くその側に駆けつけ、自分が早紀だと名乗りたかった。

そして、優しく抱きしめて欲しかった。

制御される鎧ものともせず、早紀はガシャガシャと関節部を鳴らして動こうとしたのだ。

『あれは…人間だ。お前の本当の母ではない』

あ、れ？

鎧の動こうとする雑音のせいで——何を言われたか、よく聞こえなかった。

※

雨の中で。

伝聞ばかりで作られた、昔話を聞いた。

昔々、ではなく——ちよつとだけ、昔の話。

魔女と人間の娘が出会い、親交を持ったこと。

魔女が、自分の赤ん坊を、人間に預けて死んだこと。

人間は、その子を育てていた。

しかし。

人間と魔族が長く一緒にいたために、魔気のせいで人間はどんどん身体を壊して弱っていった。

このままでは、魔族の子供を残して死んでしまう。

そう悟った人間は、生前の魔女が言っていた言葉を頼りに、彼女の血族に子供が存在を伝える。

そこへ、ちょうど生け贄の魔女を欲しがっていた本家に、その情報が届いた。

生け贄にされるとも知らず、育てられなくなった人間は、子供を手放した。

それが、早紀の幼少時代の真実。

産みの母は死んだ。

しかし、育ての母は生きていた。

だから、早紀の知る真実と、事実は食い違っていたのである。

淡々と事実のみを語られる言葉を聞きながら、早紀の目は病室のベッドを見ていた。

彼女は、入院生活を余儀なくされているようだ。

自分の発していた魔気が、どれほど育ての母を苦しめたのだろう。

死を感じるほどに、彼女を追い詰めていたのだ。

早紀は、動けないまま窓を見ていた。

どうして、近づけようか。

魔気でボロボロにされた女性に、更に魔気を浴びせることなど、出来るはずがなかった。

愛の記憶が。

早紀の中に、確かにあった愛の記憶が、雨に打たれていく。

狂おしいほど、この愛を伝えたい相手がそこにいるというのに、雨はその火が燃え上がるのを邪魔するのだ。

後はただ、くすぶるばかり。

何も考えられなくなった早紀の身体は、ゆっくりと病院に背中を向けた。

自分の意思ではない。

真理が、そうしたのだ。

鎧でよかった。

初めて——そう思った。

でなければ、早紀はきっと一人では帰れなかっただろうから。

※

ずぶ濡れの鎧が、真理の部屋を濡らす。

構うこともなく、彼は早紀の中から抜け出た。

ああ。

いまほど、彼女はその喪失感を、痛く感じたことはなかった。

ほんのわずかの温度も失って、自分がただの抜け殻になってしま
う気がしたのだ。

せめていっそ。

肉を持たない、この無機質な鎧のままでもいいなら。

しかし、真理の指が額をなぞる。

ガシャン。

金属が崩れ落ちるように、早紀を肉の塊に戻してしまう。

水で湿った床に、彼女は膝をついた。

そんな早紀を、真理は見下ろしているようだ。

「何故、そんなに過去にこだわる…」

降り注ぐ視線に乗って、彼はそう聞いた。

さっきの母の姿が、早紀の脳裏を矢のように貫く。

だ。

だって。

彼女は、自分のおかつぱの頭を、強く両手で掴んだ。

だって、私には。

「私には……過去しかないもの」

楽しい記憶も、嬉しい記憶も、あの過去の中にしかない。

小さな小さな絵本におさまる程度の、短い幸せな思い出。

その後は。

ただ生かされ、ただ生き延びていただけ。

ああ。

疲れた。

強い倦怠感と、虚無感に包まれる。

早紀は、のろのろと立ち上がった。

のろのろしたまま、真理の部屋を出る。

そして。

自分の部屋を、素通りしたのだ。

そのまま——屋敷を出てしまった。

あーあ

「あーあ」

鎧の男が、苦笑気味に早紀を見た。

あれ。

いつの間に、彼女は眠ってしまったのだろう。

夢路を歩いていた自分に、早紀は疑問を感じた。

眠れるような状況では、なかったというのに。

「まったく、オレの想像の及ばんことをするなあ、お前は」

さてさて、どうしたもんか。

一人で話を進める鎧に、早紀は考えをまとめられずにいた。

この夢路に来る前、彼女はあの屋敷を出たはずだ。

疲れ果てていた。

とにかく心がもう、この上なく疲れ果てて、いますぐ消えてしまいたいと思ったのだ。

豪雨の中、早紀は生きるため以外の目的で歩いたのだ。

そして。

ふっと、残像のようによみがえる、雨のカーテン。

そのカーテンの向こうに、早紀は踏み込んだ。

わかっていたのだ。

頭の隅で、そのカーテンの向こうに何があるのか。

なのに、踏み出していた。

刹那。

ぬかるんだ泥の地面が、早紀の足を捕らえた。

斜めの地面。

存在を隠すことしかできない魔女は、人間と同じように簡単に、その斜面を転がり落ちた。

バシヤンツ！

泥をたっぷりと含んだ、ひどい流れが彼女を受けとめる。

嗚呼。

最後に、早紀は思った。

魔女は――溺死できるかな。

遠い死神

「おはよう…大丈夫か？」

自分が、のんきに夢路に入れた理由は——目覚めてから理解した。
生きているのだ。

いや。

「伊瀬さん…」

助けられたのだ。

この海の種族に。

「水は君を殺せない…そして、水は私たちにつながっている」

死ななかった理由と、助けられた理由が、2つまとめて差し出される。

早紀の中の海族の力が、溺死を許してくれなかったのだ、と。

そっか。

早紀は、深いため息をついた。

また、ふてぶてしく生き延びてしまった、と。

見知らぬ、青い空間。

海の中の、そのまた大きな泡の中にいるような気がする。

ここが、本当はどこなのかは彼女には分からない。

別に、どこだってよかった。

生き延びても、現実は何も解決していないのだ。

「ただ：何があったのかまでは、私には分からない」

どんよりと沈んだ彼女に、伊瀬は理由を聞きたいように話を切り出した。

「もしや：私の頼んだことで、君に不利になるようなことが起きたのか？」

彼の続ける言葉は、イエスでありノーであり。

おそらく伊瀬が、一番心配しているであろう――要するに、早紀と伊瀬が密約を交わしていたことを、他の魔族に知られた、という最悪の事態はない。

しかし、預かった写真が、早紀の惰性で生きる日々に、大きな傷を作ったのは間違いない事実だった。

はあ、と。

もう一度、ため息をつく。

自分を守る気力がないということは、どんなことも隠す必要がないということだ。

早紀は、「その事実」を海族に伝えることのリスクを、まったく考えなかった。

本当にもう、どうでもよかったのだ。

「あの魔女……」

だるい唇をそのままに。

「あの魔女……私の……母だそうです」

あっさり、暴露してしまった。

喪失

一一一

距離は、あまり関係ない。

真理は、その事実を悪い意味で理解しなければならなかった。

早紀との――現実的な距離の話だ。

昨夜。

彼女は、屋敷を出たようだ。

朝、誰も早紀を見つけられなかった。

正確には、真理が問わなければ、使用人の誰一人と彼女の不在に気付かなかったのだ。

彼みずから早紀の部屋に赴いたが、そこには誰の気配も残されてはいなかった。

昨夜のあの出来事が引き金で、彼女は屋敷を出ていったのだろうか。

理不尽な事象に、真理は学校にも向かわず、自室で立ち尽くしていた。

知りたいと望んでいたから、彼はわざわざ労力を使い、それを調べたのだ。

そして、証拠の人間の近くまで案内してやった。

真理が、このカシユメルの当主が、そこまでしてやったのである。感謝されることこそあれ、逃亡されるいわれなどない。

真実を投げ与え、早紀がいままでうだうだどこだわってきた過去と、決別させるつもりだった。

そう。

真実を。

ああ言えば、早紀のあきらめがつくと思っていたのだ。

しかし、結論は真逆だった。

早紀は消え、どこに行ったかさえ分からない。

かすかな雑音を感じるのは、いま彼女のいる場所に、何か関わりがあるのか。

これまでに数回感じた雑音。

いまだその原因は分からない。

ただ。

彼女がその原因に包まれた時のことを、真理には決して教えない

ということだ。

あのちっぽけな魔女の——数少ない抵抗。

そして、真理は知るので。

いますぐ、彼女を連れ戻せない現実を。

いつ、戻ってくるかも分からない。

簡単に言えば。

真理は魔女と共に。

大事な鎧を失った、ということだった。

死者

――

「母……」

茫然と、伊瀬はその言葉を繰り返した。

少しの時間の後、彼の瞳に強い意思が戻る。

その瞳が、じいっと早紀を見つめた。

今までも、彼女は見られていた。

しかし、それとはもっと違う意味の視線だ。

何もかもを検分するような、強い視線。

「で…君の母は？」

視線をはずさないまま、ゆっくりと彼は問う。

答えいかによっては、早紀は尋問でも受けるのだろうか。

しかし、そんなことは無意味だ。

「母は死んだそうです…私は会った覚えもありません」

一体、どれくらいの間、自分が母に育てられたかさえ、早紀には覚えがない。

自分の記憶が、何の役にも立たないことを伝える。

写真をもらった時、早紀はそれが自分の母であることさえ、分らなかったのだから。

「そう…か」

伊瀬は、明らかに落胆したようだった。

声は、深いため息と共にこぼれ落ちたのだ。

彼にとっては、手掛かりがぶつとりと切れてしまったに違いない。

母とは、何という罪作りな魔女だったのか。

彼女は、二人の人間を不幸にした。

育ての母である人間は、いまは病で苦しんでいる。

伊瀬は、盗まれた宝に困っている。

早紀の中に、その母への愛はない。

それどころか——いまは、憎しみさえ感じていると言っているらしいだろう。

自分の不幸の元凶である魔女。

早紀には、そう思えて仕方がなかった。

彼女が、どん底で母を憎んでいる間。

落胆していた伊瀬の視線が、ゆっくりゆっくりと早紀の顔に焦点を合わせていった。

気づいた時。

早紀は、自分の瞳の奥深くまで、彼に貫かれている錯覚を覚えたのだ。

「もしかして…」

だが、伊瀬の声にあったのは、信じられない驚きを含んだ響きだった。

「もしかして…あれを…使ったのか？」

視線は早紀に。

しかし、言葉は——死者に向けられているものようだった。

濃紺の糸

――

「お困りのようですね」

真理の部屋にやってきたのは、タミだった。

早紀の探索については、修平に秘密裏に指示している。

失踪そのものさえ、箱口令かんこうれいをしいているのだ。

鎧の憑き魔女に逃げられ、まだ見つけられずにいるなど、カシユメルにとって悪い評判以外の何者でもない。

しかし、間の悪い時に、他の一族の居候がいるもので。

「問題ない」

真理は、彼女をカヤの外に追いやろうとした。

タミは、白すぎるほど白い顔を、ほんの少しだけ緩めてみせる。

彼女なりの、微笑みなのだろうか。

「私…彼女を探す方法、知ってますよ」

その、少しだけやわらかくなった唇が、意外な一言を吐いた。

一瞬だけ。

真理は、動きを止める。

しかし、すぐに時を戻した。

そんなことは、ありえないと思ったからだ。

早紀の存在を、完全に感知できる魔族は、おそらく契約している真理だけ。

事実、タミは早紀をうまく認識できていたなかった。

「出来るのです」

真理の沈黙を、信用されていないと理解したのか。

タミは、ずるりと手袋を外す。

初めて見る、彼女の手は——青かった。

真理には、はっきりとは認識できなかったが、その青の中にはたくさんの魔力が渦を巻いているように感じる。

「彼女から：前に魔力をもらいました」

上に向けた手のひら。

その青い手のひらから、糸が紡ぎ出されていく。

しゅるん。

細い細い蛇のように、糸は床まで落ちると、鎌首をもたげた。

「これは…彼女の魔力です」

早紀のつけている、濃紺のリボンと同じ色の糸だ。

まだ、タミの手のひらと糸はつながっている。

「この糸を切れば…魔力は持ち主の元へ戻ろうとします」

それを追えば——その先に、あの女がいるのだと。

そう、タミは言うのだ。

三度目？

一一一

伊瀬が、その青い空間から消えてしまったために、早紀は一人で取り残されることとなった。

人間のような様式で、暮らす魔族とは違う。

毎夜入る夢の世界にも似た、シンプルで何もない世界。

早紀は、壁にあたる部分に触れる。

微かな弾力と共に、彼女の指は押し戻された。

伊瀬は、自然にすり抜けて行ったが、普通に触れただけでは出られないのだろう。

ふう。

早紀は、床に座り込んだ。

これから、どうしたらいいのだろう。

次の蝕が来た時、自分の中の鎧は、間違いなく戦いたがる。

しかし、鎧の主とは遠く離れてしまっているのだ。

それで、鎧が許してくれるとは思いがたい。

更に。

早紀は、自分が鎧の憑き魔女である事を、伊瀬に伝えていなかった。

ついさっきまで、その事実を忘れていたのだ。

額の印の意味を知っているなら、既に気づかれていることだろうが。

とぷんっ。

壁がたわんだ。

反射的に振り返ると――伊瀬が、戻ってきたところで。

青ざめた、顔。

彼の肌は、しっかりと日にやけていて、普通ならば顔色は分からないはずだ。

しかし、青銅になってしまったかのような肌が、早紀の足を縫い止めた。

「すまない…」

一歩。

この空間の外は、真水か海水か。

しかし、雫ひとつしたたらせることなく、乾いたままの伊瀬は、
一步を踏み出した。

早紀の方へ。

ずしんと、床が揺れた気がする。

あ。

さあっと、血の気が引いていく。

「すまない…おそらく、『きみ』には罪はないのだ」

言っている意味は、分からない。

しかし、彼が何をしようとしているのかは、感じていた。

また、殺されるんだろうな。

早紀は、ため息をついた。

二度死んだ経験は——伊達ではなかった。

※

大きな手。

片手でも、楽に掴めそうなのに、伊瀬は両手を早紀の首に回した。

今度こそ…本当に死ぬんだろうなあ。

理由も分からず、既に二度殺されたのだ。

今度の死は、まだ分かりにくいながらに理由がある。

実の母親の、ツケを支払うということだ。

払ってやる義理などはない。

しかし、早紀が生きている意味を見いだせない以上、抵抗してまで生に執着する気になれなかったのだ。

「何故だ…」

首にかけられた手に、まだ力はこめられない。

代わりに、伊瀬の苦しげな声が漏れ落ちる。

「何故、君はそんなにも魔女らしくないのだ…海が…我らの力が、そうさせるのか」

魔女らしくないなんてもう、聞き飽きてしまった。

第一、少し前まで自分は人間だと信じて疑っていなかったのだから。

「魔族なんて……」

早紀は、首にかけられた手を温かくさえ感じた。

真理の手は――冷たかった。

彼は、早紀を一番最初に殺した。

脳裏に、真理の冷たさがよぎる。

「魔族なんて……クソ食らえよ」

言った直後。

胸がしめつけられた。

ああ。

思い出したくない記憶が、掠めてしまう。

初対面で、早紀を追い出そうとした男の子がいた。

それからずっと、追い出そうとしていた少年がいた。

今夜、家に帰ってくるなと言った男がいた。

「愛されろ」、と言った魔族が――いた。

あれは、なんだったのか。

彼は――何をしたかったのか。

今更。

今更考えても、何もかも遅く詮ないことだ。

早紀は、死ぬ。

今度こそ、本当に。

苦しげに、伊瀬は指に力を込めた。

その力に押されるように、早紀は天を仰ぐ。

青い天井。

その天井から――一滴、青い水がしたたった。

隙間

首をへし折られるほどの強さではなく、伊瀬はただ静かに早紀を殺そうとしてくれた。

その、残酷なあたたかさの向こうで――一滴。

確かに一滴、水がしたたったのだ。

それは、青く細い流れを生み出した。

雫を追うように細長い青が、滑り込んできたのである。

あ。

苦しい喉元が、ドクンッと反応した。

あの、青は。

あの――濃紺は。

刹那。

青い空間自体が、大きくたわんだ。

ぐわんと、気が唸った。

伊瀬が、はっと顔を天に向けた時。

泡のように。

部屋は。

弾けた。

水は、即座にうねりを持って早紀を包みこむ。

首から引き離される、あたたかな残酷。

しかし、その大きな手は、即座に早紀を捕まえようと伸ばされた。

ここは、水の中。

伊瀬のテリトリ。

この中なら彼は、地上よりも速く、そして強い。

早紀の目前に、大きな手が広がる。

再び、彼女が伊瀬に捕らわれようとした――その時。

いきなり降りた白いカーテンが、その手を消してしまう。

冷たい、とても冷たい、氷のカーテン。

あ。

ああ！

急激な温度の変化に、早紀を取り巻く水は蜃気楼のように揺らめいた。

早紀の真上。

いびつな光の屈折率の物陰から。

白い白い指先が――伸ばされていた。

※

水中で。

天を仰いだ早紀の、額に押しあてられる指先。

ごぼっ。

彼女の吐き出した空気が、蜃気楼の向こう側の景色を、粉々にしてしまう。

だが。

だが、早紀の額に触れる者など――ただ一人。

何故？

明確な疑問さえ間に合わないほど速く、指先は円を描いた。

黒い泡が、早紀の全身を包んだ。

水の中で鎧になるのは、これが初めて。

全身から吹き出す黒い魔気の代わりに、水が押し寄せてくる圧迫感。

そして。

水よりも大きな質量が、早紀の中に滑り込んだのだ。

忘れもしない、独特の生々しさ。

あ。

何故、泣きそうになったのだろう。

もう何もかもどうでもよくなって——それこそ自分の命にだって、興味を失っていたというのに。

自分の隙間を埋められると、満たされた幸せのような錯覚を覚えるのか。

早紀の戸惑いが落ち着くのを——待ってこない者がいた。

白いカーテンが、眼前で碎け散ったのだ。

美しいほどの、氷の破片の乱舞。

その舞と共に、赤茶けた濁流が踊る。

伊瀬の長い髪が、生きもののようにな水中でうねっていた。

早紀は、身構えた。

いや。

身構えたのは、早紀の中の男。

魔族の、男。

あつ。

早紀は、慌てた。

確かにここは、伊瀬のテリトリーだ。

しかし、彼は生身なのだ。

そんな姿で、この身に挑んでは危険ではないのか。

この鎧の持ち主が、海族に対して加減するはずがない。

さっき。

さっき、確かに彼は早紀を殺そうとした。

だが彼は、最後まで優しくあろうとしたのだ。

その伊瀬が。

顎を上へと上げた。

遠くの水面を指すように。

帰れ、と。

そう言っているのだろうか。

次の瞬間。

伊瀬は、水に溶けて——消えてしまった。

かけるべき言葉

――

「ただし：あなたが追わなければなりません」

早紀の魔力の糸を、自分から切り離す前――タミは言った。

この糸の戻る場所を、真理自らが追え、と言うのだ。

ただでさえ理不尽に出て行った者を、カシユメルの当主である彼が。

タミは、自分の青い手のひらから伸びる糸を、不服げに見下ろした。

「この糸は、純粋な彼女の魔力で出来ています…ということは、切り離れた途端：私は見失ってしまうでしょう」

不服なのは、早紀の存在を見失ってしまう自分について、か。

タミの言葉は、彼女の持つ正しい知識で出来ている。

カシユメルが――いや、早紀と契約している真理でなければ、糸を追えないと言うのだ。

手のかかる。

ため息の後。

「糸を切れ」

そう、指示を出した。

しゅるんっ。

戒めから逃れた早紀の糸は、風などない室内で、一度うねるように舞い上がった。

タミは、宙に視線をさまよわせている。

もうおぼつかなくなったのか。

次の瞬間。

糸は、最短距離をゆくべく、窓のわずかな隙間をすり抜けた。

あの通りに、追え、と。

ふう。

真理は、窓辺に近づくと、そのガラスを開ける。

まだ、明るい外。

生身で飛ぶのは…久しぶりだな。

人間に見られず飛ぶくらいは、まったく問題はない。

問題は。

他の魔族。

カシユメルの当主が、真昼間から生身で空を飛ぶ。

どんな、あらぬ噂を立てられるものか。

しかし。

真理には、選択肢はなかった。

こうしている間にも、糸は遠くへと向かう。

ああ。

理不尽だ。

真理は、窓から飛び立った。

※

そして真理は、理不尽な女の前に立つ。

二人——ずぶ濡れのまま。

しかも、その水は塩水というおまけ付きだった。

早紀が囚われていたのは、海中だったのである。

自室の床を海水で汚しながら、真理は魔女を見下ろしていた。

彼女はうなだれていて、死刑判決を待っているようにも見える。

ふらふらと家を出て、海族に捕まって殺されかけました、など失態と呼べるレベルではない。

青い被膜の向こう。

真理は、海中で見たのだ。

彼女の首にかかる、男の手を。

正確には、早紀の魔力の糸が、穴を穿った瞬間に見えたのだ。

何を、素直に殺されかけている。

真理は、目を見開いていた。

そして——糸の穿った穴を引き裂いたのだ。

海族の男を、見た。

生まれて初めて見る、青の一族。

氷の壁を突き破り、彼は水の主の顔をして、闇の鎧を見据えたのである。

自分が生身であり、相手が鎧持ちの魔族であったとしても、一切

の脅えも怯みもなかった。

あの目は。

戦う者の目だった。

上に立ち、殺せる者の目だった。

本能的に真理は気づいたのだ。

海族と蝕を争うことになったならば、この男と相對することになるう、と。

確かに、男は早紀を殺そうとしていた。

だが。

殺し方の、手ぬるさが気になってもいたのだ。

その気になれば、早紀は一瞬で絶命させられただろう。

憎い魔族の女を殺す方法とは、とても思えなかった。

そして。

男は、早紀を帰した。

真理が奪い返したのは間違いないが、最終的にそれに男は同意したのだ。

でなければ、海中であっさり見逃すはずがない。

援軍を呼ぶことも出来たはずだ。

なのに、見逃した。

まるで。

まるで、そう——早紀に、好意にも似た感情を抱いているかのよう
うに。

※

好意？

自分の思考に、嘲笑が浮かんだ。

どこの世界に、魔女に好意を持つ海族がいるのか。

そう思って、早紀の本当の母親の存在が頭を掠める。

海族と、何らかの関わりのある魔女。

死んでなお、娘を振り回し続ける。

確かに、その女の血を、早紀はきっちり引いている気がした。

でなければ、これほどまでに真理が振り回されることなどないの

だろうから。

人畜無害のようにうなだれる魔女から、海水がしたたり落ちる。

彼がこのまましゃべらなければ、あと数十時間でもそのまま時を止め続けそうな気配だ。

理不尽だな。

その言葉は、山ほど彼の中で渦を巻き続ける。

だが。

早紀を打ちのめすほどの、強い怒りがわきあがらない。

それが、真理にも不思議だった。

いくら鎧の憑き魔女とは言え、死なない程度に怒りをぶつけることは出来るのだ。

それほどの屈辱を、この女は真理に与えたはずである。

逃亡し、海族の手に落ち、殺されかけ、それを当主自らに助けに行かせた。

憑き魔女でなければ、間違いなく万死に値する。

なのに、深く呼吸を繰り返しながら、早紀の前に立っているのだ。

おそらく、あきれかえっているのだ、自分は。

真理は、そう分析した。

あきれすぎて、怒りを乗り越してしまったのだ、と。

だから、物も言えないでいる。

「……………」

物も言えない自分にしびれをきらし、彼は唇を開きかけた。

しかし、声は出ない。

何を言えいいのか——さっぱり分からなくなってしまった。

いつものように冷たく突き放し、部屋に戻せばいい。

二度と部屋から勝手に出ないよう、出入り口に魔錠でもかければいい。

なのに、真理は言葉を探せなかった。

そう。

彼は、早紀にかけるべき言葉を、無意識に探していたのだった。

※

かけるべき言葉。

そんなことに、何故自分は尽力しているのか。

その事実には、真理は眉を寄せた。

気をつかうべき相手では、決してない。

下僕相手に、探してまでかける言葉などありはしないのだ。

だが、真理は打ちすえる力も、罵る怒りも発揮できないままだった。

いつそのまま。

早紀を置き去りに、部屋を出て行ってしまいたかった。

この場にいたくないとさえ、思い始めていたのだ。

しかし、ここは自室で。

早紀を追い出すべきだった。

『部屋に戻れ』

それだけ言えば、事は足りる。

足りるのだ。

それなのに——唇は動かない。

足も動かない。

俺は…どうしたいのだ。

真理の矛盾する心を、砕くものがあつた。

ノックだ。

この、海水まみれの二人に、割って入ろうとするものがある。

「タミです」

その声に、どこか安堵する自分がいた。

「入れ」

声が、出た。

さっきまでが嘘のようにあっさりと、当たり前のように言葉を発していた。

ドアを開けた彼女は、すぐに部屋の中に視線を走らせる。

早紀を探しているのだろう。

その視線が、水に濡れた床に注がれ——そして、ようやく見つけたようだった。

微かに、表情を緩める。

早紀が見つかったことを、喜んでいるのだろうか。

彼女は、真理へと視線を動かす。

そして。

「折檻されますか？」

涼しい声で、上に立つ魔族らしいことを言い放ったのだった。

手のかかる魔女

――

「折檻されますか？」

タミの言葉に、早紀はうなだれながら笑っていた。

これから自分は、「生きている」という事実を、後悔するほどの責め苦を味わえるのだろうか、と。

それだけのことをしたのだ。

ただ、真理は早紀を殺すことは出来ない。

鎧の憑き魔女だからだ。

真理という宿主からひきはがされ、再び一人の魔女にもどった早紀は、その虚しさを拭えないでいた。

彼と一つになっている時の、たとえようなない充実感を忘れられない自分がある。

自分は、一人ではなく。

真理から必要とされていて。

その役割を、他の誰とも代われるものではないのだと。

それが一番実感できる瞬間が、鎧の自分だったのだ。

あの感覚は——あの感情には、何と名前をつければいいのか。

「されるのなら…私にお任せなさいませんか？」

タミは、手袋の右手を軽く上げてみせた。

魔力に関する、何らかの能力のある青い手。

その手で、早紀を痛めつけてくれるのか。

他人事のように、彼女は言葉を聞いていた。

しかし。

「俺が決めることだ」

冷ややかな一言が、タミの右手を下げさせる。

「話がそれだけなら…出て行くがいい」

したたり落ちるしずくをそのままに、真理が冷気の息を吐く。

この二人のやりとりを、見たことはほとんどなかった。

しかし、真理の声の響きにこめられているものは、ひややかさと疎外する音。

いまの彼の、機嫌の悪さを表しているのかもしれない。

そして、タミは——カシユメルではない。

自分の血族以外の者に、恥を見られたくないのだろうか。

早紀という名の恥を。

「失礼しました」

タミは、するりと部屋から消えた。

逃げることの出来ない早紀は、ただ立ち尽くす。

真理が、現状に何らかの終止符を打つまで、こうしているしかない。

ふう。

息を吐く音。

真理は言った。

「手のかかる女だ」

冷気は——感じなかった。

「打ちのめすと…いいのに」

早紀がゆっくり顔を上げるのを、真理は見ていた。

彼の吐いた、「手のかかる女だ」という言葉から、数分。

真理が、続きの言葉を紡げずにいる時に、ついに早紀がその唇を開いたのだ。

瞬間。

イラッとする熱い感情が、真理の脳裏を掠める。

そんなことを、手をかけさせた側に言われたことが、腹立たしかった。

言わせた自分にも、苛立ちがあった。

その勢いに任せて、ツカツカと彼女に近づいた。

濡れた黒髪を強く掴み、強引に上を向かせる。

突然の暴挙に、早紀は驚いたように目を見開いていた。

瞳の中に、自分の目が映っていた。

あらわになっている、額。

憑き魔女の、証。

こんなものがあるから、真理は振り回されるのだ。

鎧を失えない。

だから、早紀も失えないのだと。

その丸い額に。

「……っ！」

早紀が、痛みに身を竦めた。

そうだろう。

真理はまるで林檎をかじるように、早紀の額に歯を立てていたのだから。

にじみ出る血と、赤黒く内出血する皮膚。

それでも、歪みなくありつつける印。

歯を離し、真理はそれを見た。

命ある限りちぎれない、自分とつながった証。

「忘れるな」

真理は、早紀の髪から手を離す。

よろめく身体。

「お前に選択肢はない：勝手に死ぬ権利もない」

その腕を強引に掴んで、彼はその力ない身体を扉の外へと引きずり出した。

覚えたことのない意識の熱さが、真理を駆り立てていた。

「生きているのがそんなにいやなら」

手を離す。

「夢の中でも、引きこもっている」

扉を、強く閉める。

それでも。

自分の右手と、契約の糸は——早紀の気配を消しさることはなかった。

ゆめとうつつのリンゴ

――

額が、ズキズキと痛んだ。

早紀は、放り出された廊下で、しばし呆然と扉を眺めた。

真理の部屋の扉だ。

思いもよらない出来事が起きたのだ。

罰せられると思っていた。

もっと、冷酷に。

それこそ、タミに嬲らせるくらいことは、するかもしれないと
考えたのだ。

しかし。

真理は、タミを追い出したのである。

早紀は戸惑った。

目の前の男が、いま何を考えているのか分からなかった。

だから、言ってやったのだ。

『打ちのめすと……いいのに』、と。

瞬間。

真理に火が見えた。

あの、不機嫌になればなるほど冷たくなる男の瞳に、早紀は炎を見たのだ。

気づいたら、髪を掴まれて上を向かされていた。

信じられない。

あの真理が。

早紀の、しけた挑発に乗ったのである。

そして——噛まれた。

額の印を。

その熱い衝動が、額から消えないうちに、早紀は部屋から放り出されたのだ。

額に心臓があるかのように、激しい鼓動を感じた。

一瞬。

あの一瞬。

真理の、むきだしの感情が見えた気がして。

その熱さに、早紀は炙られた。

よろり。

足に力が入らなくなつて。

気づいたら――へたりこんでいた。

※

「はっはっは…傑作だ」

夢の中。

早紀を見るなり、鎧の男は笑い出した。

「噛まれたか…しかも、当主に」

彼が言うのは、額の印のことだ。

それは、すぐに分かった。

夢の中だというのに、そこでもなお額は、
ずきずきと痛みを残していたのだ。

印についた傷だからだろうか。

それとも——その痛みからは、たとえ夢の中でさえ逃げられないと、自分は思い込んでいたのか。

「逃亡の折檻にしちゃあ、可愛いもんだぜ」

ニヤニヤとした気配で、男は言い放つ。

まったくその通りだ。

だからこそ、彼の行動が鮮やかに記憶に焼きついていた。

「しかし…」

微かに、鎧の男は考えるような仕草をする。

「半分の権利を持つ当主が、そこに傷を与えたのなら」

あつと。

早紀の、背中に冷たいものが走った。

鎧が、目の前に立ったのだ。

壁のように立ちふさがった、と言った方が正しいか。

この感触は、知っていると言うべきか。

初めて、この男と会った時のことを思い出した。

害意など、感じない。

しかし、違うものはある。

「当然、オレにも半分の権利があるわけだ」

兜が、ずいっと近づいてきた。

吸い込まれるような、闇の色の兜。

彼もまた、早紀を噛もうというのか。

だが、中に肉の存在があるようには思えない。

噛むには——歯がいるというのに。

早紀の心配をよそに。

ガリッ。

歯ではない黒い何かが。

早紀の額をリングにってしまった。

※

「なんだ…起きるのか？」

やや不服そうに、鎧の男は早紀に言った。

身体が、目覚めに向かおうとしているのを、彼女も自覚しかけていて。

不意に夢からはがされることが多いが、今日は珍しく目覚める直前を感じたのだ。

額が、痛い。

二人に、夢とうつつの両方で噛まれたのだ。

どこにいても、痛いに決まっている。

その額を抱えたまま。

そっか。

無理に、起きなくてもいいのか。

そんなことを考えていた。

真理の言葉が、よみがえったのだ。

『生きるのが嫌なら、夢にでもひきこもっていろ』、と。

少し。

戸惑った。

夢とうつつの狭間で。

生きる目的も必要も、早紀には見つけられなかった。

隙間が——そう、身体中隙間だらけなのだ。

その隙間を、時々埋める酷い存在が、うつつにはいた。

「しばらく、こっちにいたらどうだ」

鎧の男が、珍しく引き止める。

いつも、簡単に早紀を目覚めさせていたというのに。

「どうして？」

不思議だった。

早紀がここに残りたいとグズった時には、ひどい記憶を見せて追いたてた。

その男が、引き止めるなんて。

「どうして？　そうだな：嫌な予感がするから：か？」

自嘲ぎみな笑い方だった。

いつもの笑い方と違う気がして、早紀は足を止めた。

「いや：いい：さっさと目覚めろ」

その笑いを払うように、男は早紀の背を押し出す。

あつ。

夢から――転がり落ちていた。

黒黒黒

朝。

早紀は、夢から転がり落ちたまま、ベッドでぼんやりしていた。

今日は平日だ。

いつも通りなら、きちんと着替えて準備をして、学校へ向かわなければならぬ。

真理と一緒に。

そこだ。

その部分が、早紀をベッドでぐずらせるのだ。

ずきずきと鈍く痛む額が、否応なしに彼の存在を思い出させる。

逃げた自分と、連れ戻した男。

噛んだ男と、放り出された自分。

そんな男に合わせる顔など、早紀が持ち合わせてはいなかった。

本当に。

夢の中にとどまっていられただけなら、どんなに楽だったか。

だが。

早紀をただぐずらせてくれるほど、世界は彼女に優しくなかった。

突然のノック。

早紀は、毛を逆立てた。

慌てて時計を見る。

しかし、まだ登校の時間ではなかった。

「タミです」

「ひゃあい」

名乗られた瞬間、ビビった勢いで反射的に変な声を出していた。

真理でなかったことにほっとすると同時に、何故彼女が自分の部屋に朝っぱらからきたのか、という疑問がわきあがる。

だが、その思考は自分が思ったより、ゆっくりだったようだ。

その間に、ドアを開けたタミが、すっと部屋の中に入る。

ちらと室内を見ただけで、彼女は早紀の存在をきちんと認識しようとはせずに、クローゼットに向かったのだ。

開けた瞬間。

一瞬、タミが固まった。

ハンガーに並んでいるのは、買い与えられている黒い黒い黒い服。

「はあ…」

彼女は、深いため息を漏らす。

「???」

ベッドの上の早紀は、その落胆めいた背中を眺めているしかできなかった。

※

「あ、あの…?」

タミの背中に、ついに早紀は声をかけた。

早朝からの訪問の意図を知ろうとしたのだが、彼女の言葉は、タミに自分の位置を認識させたようだ。

振り返った視線が、すんなりと早紀を捕まえる。

確認するように一度まばたきする、整えられた目元。

そして。

表情を、微かに曇らせる。

タミの視線は——早紀の額に注がれていた。

あつ。

慌てて傷を隠そうとしたが、時すでに遅し。

みつともないものを、見られてしまった。

疑問よりもバツの悪さが勝って、早紀は小さくなりかける。

「部屋へ」

彼女の存在を、見失わないようにか、タミが声をあげた。

はっと顔を向けると。

「私の…部屋へ」

そう言うなり、出口の扉へと向かおうとするのだ。

え？

全ては語られなかったが、タミの部屋に来いと言ったのだろうか。

一体、どうして？

心当たりがあるとしたら、昨日だ。

真理とのトラブル。

それを、ほんの少し垣間見たタミ。

だが、その事件とクローゼットの、因果関係は分からない。

タミの部屋へ行く因果関係は、もっと分からない。

朝から部屋を襲撃されて、落胆されたり、傷を見られたり。

一体、彼女は何を。

「声……」

出口の扉で一言だけ。

「は、はい」

反射的に、答えてしまう自分は、一体何の病気なのか。

ついていなくてもいいという選択肢は、早紀にはないようだ。

疑問という以前の思考の中、彼女はのそのそとベッドから足を下ろす。

とりあえずいまは。

真理に合わなくていい口実だと思えば、理不尽な誘いでも、ついていけそうな気がした。

※

タミの部屋は――黒かった。

いつの間に、調度品を運び込んでいたのだろう。

元々、どんな部屋かは知らないが、カシメル家のものとは違う黒が、部屋を覆いつくしていたのだ。

光沢のある、金属のような黒が多い。

おずおずと、慣れない部屋に足を踏み入れた早紀は、前をゆくタミが、やはりまごうことなくクローゼットに向かうのを見た。

そして。

開け放たれる。

黒、黒、黒。

しかし、早紀の部屋の黒とは違う。

光沢も、黒具合も、ラインも。

一目見ただけで、早紀のただの黒い服の海とは違うと分かった。

「脱いで」

その服を、手袋の手で器用により分けながら、タミは言う。

ぬ、ぐ？

早紀は、思わずきよろきよろした。

脱ぐって。

自分を見ると、しょぼいパジャマ姿。

脱ぐものなんて、これくらいしかない。

しかし、脱いでどうするというのか。

雰囲気的に、タミの出す服と着替えるということなのか。

早紀の部屋の服では落第で、自分の服を出そうとしているように見える。

何故か、という理由は分からないままだが。

「えっと」

まごついている早紀を尻目に、タミは黒いレースで作られたドレスを引き出す。

それを、じいつと見ている。

たらっと。

早紀は、いやな汗をかいた。

まさか、それを自分に着せようということじゃないよね、と。

「脱いだ？」

振り返ったタミの一言に、早紀は別の意味で逃げておけばよかったと後悔したのだ。

「まだ…です」

困った眉間を作った瞬間、額がズキッとひどく痛む。

真理に、「逃げるな」と言われた気分だった。

招待

――

先触れが来たのは、朝だった。

大して寝る必要はないのだが、それでも真理はけだるさを払えずにいる。

ほぼ、起きたままだったのだ。

「と…いうわけだけど…どうする？」

入り口にいるのは、修平。

先触れとやらを、読み上げたばかりだった。

「相手が相手だから、受けるのがいいと思うけどね」

つい昨日、真理は当主にあるまじき失態の数々を、さらけだしたばかりだ。

その時の気持ちの整理など、まったくついていないというのに、また次がくるというのか。

「最後の追記は…なんだ」

眉間に指先をあてながら、真理は不機嫌を冷やかさで吐き出す。

読み上げられた言葉に、とりわけ気に入らない部分があったのだ。

「ああ：憑き魔女も、連れてこられたし、ってところかい？」

修平は、すんなりとそらんじる。

彼にとっては、さして気にならないところなのか。

「珍しい能力って、噂が広まり始めてるからね。物珍しさからだろう？」

言われたら、納得出来ないわけでない。

しかし。

最近、早紀が絡むと本当に、ろくなことが起きないのだ。

海族とのつながりの可能性も、真理のアキレス腱になるだろう。

そんな問題児の早紀を連れて来い、というのだ。

来い、と。

そう真理に言えるのは、彼よりも上の地位の魔族のみ。

上の地位。

それには——極東での力の順位も含まれていて。

先触れを出したのは、イデルグだった。

そう。

我らが極東4thの筆頭。

一番の剛の者からの、夕食への招待状だった。

※

「だが、彼女は正装なんて持っていたかな」

修平が、考え込む仕草をする。

今夜の招待とやらへの、服装のことを言っているのだろう。

前に、真理の当主襲名の挨拶の時、早紀は鎧姿だった。

だから、どんな姿をしていようが、相手には見えなかったのだ。

だが、今夜は違う。

極東1stからの、内々ではあるが招待なのだ。

制服や、普段着で行くわけにはいかない。

真理は、全て用意してある。

父から受け継いだものもあるが、ほとんどが自分用にあつらえたものだった。

だが。

早紀は、人前に出ることを想定していなかった。

元々は、鎧として飲み込まれ、外には出てくるはずのなかった魔女である。

「僕が確認して、準備させようか？」

カシユメル家の後見をやっていたせいか、修平は屋敷内や一族の、こまごましたところまで目を行き届かせている。

任せておけば、無難にこなすだろう。

しかし、問題もあった。

修平に任せれば、早紀の額の傷を見る可能性があったのだ。

普段ならば、早紀はほぼステルスモードなので、気づかれないうま過ぎたかもしれない。

そして、修平が気づいたならば、真理に問うことも考えられた。

印につけられた噛み傷。

「タミに…やらせよう」

真理は、指名相手を変更していた。

まだ、タミの方が御しやすいと思ったのだ。

少なくとも彼女であれば、答えたくないことを答える必要はないし、変な勘繰りをあからさまに見せることもないだろう。

せいぜい、あれを『折檻』のひとつと思うくらいか。

「そうかい？ まあでも…カシユメルじゃない者を、余り深入りさせないようにね」

修平の目にも、タミは純粹な妻候補には映っていないのだろう。

連れてきたのは、この男だというのに。

「まめに、実家とやり取りをしてるみたいだよ…普通と言ってしまえば、普通のことだけどね」

一応用心しろ、と。

そう言いたいのだ。

「やり取りを…監視しておけ」

これ以上、面倒を増やすな。

既に、修平が手配しているだろうことは分かっていたが、本音の一部が唇から零れ落ちてしまった。

完璧主義者

一一一

相手が女とはいえ。

身体を見られるのは、決して平気なわけではない。

しかも、相手はきちんとした姿をしているにも関わらず、自分はパンツ一枚の情けない姿だ。

さっきから、早紀の身体を眺めては、クローゼットからドレスを引っ張り出し、投げ捨て、また引っ張り出しを繰り返す。

「あの：一体何が：」

次の服を掴んで振り返ったタミは、それを彼女に押しつけるように突き出す。

「着て」

有無も言わさぬ迫力に気圧されながら、早紀はそれを握らされていた。

「今夜：イデルグ家に招待されているの」

服をいじっている彼女に、タミは続ける。

はっと顔を上げたが、向こうは早紀の反応よりも、服を着る作業に視線を向けたまま。

慌てて、早紀は服に頭と袖を通した。

イデルグ——1stの鎧の人だ。

真理の思考を通して、早紀にもわずかながらに他の鎧の主の知識がある。

鎧を持っているのだから、カシユメル家と負けず劣らずの家系なのだろう。

そこに。

誰が、招待されたというのか。

背中を長く走るフアスナーに苦戦しながら、疑問を組み立てようとしていたが。

「あなたの主と…あなたがよ」

背中に回ったタミが、ジャツと一気にフアスナーを引き上げる。

『主』

その表現に、どきっとした。

この心にある、どうしても断ち切れない何かを、言葉にするとそういうものになるのだろうか。

絶望し、死にかけたのはつい昨日のこと。

しかし、その死の崖っぷちで、断ち切れないそれを見てしまった。
そして。

その『主』なるものと重なる瞬間を、渴望してしまったのだ。

この感情は、鎧と一体化しているせいなのか。

鎧の男の感情が、早紀の中に流れ出しているのだろうか。

自分の感情に戸惑っている彼女を、タミがじっと見ている。

視線に気づいて、引け腰になっていると。

手袋の手が、伸ばされた。

「リボン…も、黒がいいわ」

言われて、はっとしていた。

いつも自然と髪に絡みついている、深い青のリボン。

一瞬だけ、伊瀬が脳裏をかすめる。

早紀は。

青のリボンを――外していた。

※

タミのこだわりは、半端ではなかった。

出かけるのは、夜からだと言ったのに。

普段から、自分のスタイルにはポリシーがあるのだろうとは分かっていたが、早紀に服を貸すだけでは終わらなかったのだ。

一度着せた服を、ひんむかれた後——髪を、切られた。

ハサミを出された瞬間、喉にせり上がった感情を、早紀は言葉に出来なくて。

母を、忘れないための髪だった。

だが。

もはや、誰にも義理立てをする必要などないのだと。

そう思うと、ひどい葛藤が喉の中で渦巻いたのだ。

しかし。

髪を切るのもいいかもしれない——そう、観念してもいた。

母への愛の感情は、決して消えてはいない。

ただ、会うことはもう出来ないのだ。

生きている事実だけを喜び、それをただ、愛に変えて行こうと思った。

その踏ん切りとして、髪を切るといふのはいいことに感じたのである。

シャリッ。

重苦しいおかつぱを、タミが削ぎ落としていく。

頬から顎のフェイスラインに沿うように、髪が流される。

前髪も。

トップも。

随分重かったのだと、足もとに散り落ちる髪でよく分かった。

髪を切り終えるや、今度はバスルームに連れ込まれる。

奇妙な形の薬の瓶が、山ほど並べられていて。

バスタブに落とすもの、磨き上げるためのもの。

むせかえる不思議な香りに包まれながら、早紀はタミに磨き上げられた。

完璧主義者。

まさに、その言葉がぴったりだ。

魔力オタクだとは思っていたが、完璧主義者という素地がオタクを後押ししたのだろう。

身分は、はるかに早紀よりいいはず。

それでも、タミが自分に構うのは、早紀の持つ特殊な能力について知りたいからだろう。

魔力オタクとして、完璧主義者として、プライドを犠牲にしても手に入れないに違いない。

プライドを犠牲にしても——その点が、タミのすごいところだと思った。

目的のためなら、曲げられないものでも曲げてくる。

少しだけ。

好きだな、と思った。

魔女

一一一

夕刻。

まだ出かける時間には少し早いが、真理は支度を終えていた。

黒いシャープなスーツに、リボンタイ。

代々受け継がれる、古代の覇者から下賜された、闇と同じ素材で出来たマント。

髪もなでつけるように仕上げ、手袋の準備も出来ている。

扉を見る。

そろそろノックがあっても、しかるべきだと思っていたのだ。

朝、タミに任せてからずっと、早紀の姿は見えていない。

女の支度に興味などなかったし、タミならば立場的に、正装の意味をはき違えることはないだろうと思っていたのだ。

扉を見る。

自分の準備を終えてしまうと、何もすることなどない。

扉を見――

刹那。

真理は、吸いかけた息を止めていた。

整然としたノックが、来訪を伝えたからである。

「タミです」

憑き魔女を連れてきた、という言葉と同意の呼びかけだった。

ふう、と安堵する。

魔女が、きちんと時間を守ることは少ない。

そういう気がかりがあったための、安堵だろう。

「入れ…」

自分の心を分析しつつ、真理は入室を促した。

澱みない、いつものままのタミが入ってくる。

その後ろから。

「……………」

真理は、ほんの2度——首を傾けていた。

そして。

3秒止まった。

誰か、分からなかったのだ。

頬を覆うように流れる短い黒髪が、輪郭を錯覚させる。

しっかりと描かれた目元のメイクが、瞳をいつもより大きく感じさせる。

ハイネックの黒いレースが、そのまま膝下まで流れ、やはり黒いレースの靴下で足元まで黒く染め上げていた。

引き結ばれた赤い唇は、気軽に声を発しそうにない。

そこにいたのは。

いつもの早紀ではなく——魔女だった。

魔女講座

一一一

支度が終わった後、タミは魔女らしく振る舞う方法を、早紀に教え始めた。

相手は、上位の魔族。

そこで早紀が恥をかけば、その主である真理が恥をかくのだと。

「口は、意識をして閉じておく」

無駄なことはしゃべるな。

しゃべらない時は、唇をわずかも開けるな、と。

「何か話しかけられたら、勝手に答えずに主を見ること」

答えていいことであれば、主は頷く。

答えさせたくない場合は、主が自ら話を引き継ぐ。

教える内容に、まったく澁みはなかった。

タミもまた、そのように教えられたのだろうか。

彼女にとっての主とは、自分の親に当たる人物になるかもだが。

ただ。

自分にしゃべりを任されるより、遥かにマシだった。

魔族の上流階級での礼儀など、早紀が知るはずなどなかったのだから。

「もし、どうしても困ったことがあったら…」

タミは、一瞬だけちらと視線を自分の右手に落とす。

「遠慮なく、消えてしまいなさい」

失敗をするくらいなら、存在を消せと。

そう言うのだ。

確かに。

存在を消してしまえば、相手は早紀に声をかけようとも思わないだろう。

いっそ、最初から消えていたいほどだった。

しかし、自分も一緒に招待されたということは、少なからず早紀に興味があるということだ。

非常に迷惑な興味である。

早紀は、行きたいわけではないのだから。

「唇を：閉じて」

最後にもう一度そう言うと、ついにタミは真理の元へと彼女を連れて行こうとする。

それには、イデルグ家に行くのとは比べ物にならない、勇気が必要だった。

昨日の噛み傷は、タミがおそろしいほど綺麗にメイクで隠した。

しかし、痛みはある。

まだ確かに、昨日の事件を引きずっている。

タミは、澱みなかった。

真理の部屋に立ち、さっさとノックをする。

「タミです」

「入れ：」

簡単なやり取りで、すぐにドアが――開いてしまった。

答えはない

――

魔女だ。

いま、真理の目の前に立っている女は、間違いなく魔女だ。

普段着ない服と、薄くすかれた髪と、表情まで塗りこめてしまったかのような化粧。

額の傷も、うまく隠されて分からない。

しかし、目の中だけが、まだ早紀の面影を残している。

人間に育てられた、黒になりきれない色。

だが、そのたった一つの不完全さが、それ以外の黒を、よりくつきりと浮かび上がらせていた。

本当に、昨日まで一緒に住んでいた、あの早紀なのか。

分かっているながらも、真理は目の前の女を確認してしまう。

変貌しすぎた理由のひとつは、髪だったのかもしれない。

育ての母親の写真を見て、何故彼女が髪型にこだわっていたのかは理解できた。

だが、その髪を彼女は落とした。

ついに、というべきか。

ついに、早紀はあの母親にこだわるのをやめた、という決意に見えた。

「いかがでしょう」

タミが、まっすぐに問いかけてくる。

彼女の存在を、つかの間ではあるが忘れていた事実には、はっとした。

「さがっていい…」

彼は、質問に直接答えず、タミを下がらせようとした。

不満があるのならば、最初にそう言う。

何も言わないのだから、問題はない——そう悟れど、暗に伝えたのだ。

タミは、一瞬だけ不満そうにそこに佇んだ後、部屋を出て行った。

昨日も、こういうシーンがあった。

残されたのは、二人。

昨日の真理は、彼女の額に歯を立てて。

今日の真理は。

「魔女に…なったか」

一言だけ、語りかけていた。

ゆらぐ、瞳。

しかし、赤く染められた唇は、きゅっと強く引き結ばれた。

そう。

彼女は、魔女にならねばならない。

これまでも、確かに早紀は遺伝的には魔女だった。

そうではなく、本当の意味での魔女になったかと聞いたのだ。

早紀は、何も答えない。

だが。

否定もまた、なかった。

車内

一一一

学校へ行くのと同じ車で、しかし、違う行き先に向かうための車に乗り込む。

早紀はただ、唇を引き結んでいた。

真理は、窓の外を見るでもなしに見ている。

気配から、早紀へのささくれのようなものは感じない。

もう、昨日のことなど、どうでもいいのだろうか。

傷は隠れているが、痛みはまだ、彼女の額に残っているというのに。

元々。

毎日同じ車で登校していたが、一言も会話をかわさないことなど当たり前だった。

話があるとしても、一方的なものだけ。

いつも通りと言えば、おかしいことなどない。

すべての支度が整って、早紀が鏡を見た時。

正直、悲鳴をあげそうだった。

いつもの自分からは想像もできない、正統な魔女が鏡の中にいたからだ。

教えられた通りに、しっかりと唇を閉ざしていると、その唇が開いた瞬間に魔法をかけられそうな錯覚を覚えるほど。

育ての母への思いを、髪と一緒に断ち切ったからだろうか。

『魔女に：なったか』

真理の言葉が、脳裏に甦った。

彼が言葉にするほど、今の自分は魔女になっているのだ。

魔女でありながら、魔女に近づかないようにしていた足かせが、薄れているのが自分でも分かる。

海へ逃げることも出来ず、三度目の死を免れたことも、早紀の選択肢を減らし、魔女の道へと追いやっていった。

そして何より。

あの充足感が、早紀を掴む。

麻薬のように、もう一度あれを望む自分がいるのだ。

ふと。

視線を感じた。

真理の瞳だけが、こちらを見ている。

目を――そむけてしまえばよかったのだ。

なのに、見返してしまった。

真理の瞳の中の自分を、見ようとしたのかもしれない。

でも、それは不可能だった。

彼が先に、目をそらしてしまったのだ。

ダシ

「よく来たな」

イデルグという男が、風変わりであるということに——早紀は、すぐに気がついた。

たとえ招待したとは言え、玄関まで彼らを迎えてくれたのだ。

真理の斜め後ろにいた彼女は、その巨体を驚きとともに見上げた。

正装程度では、決して隠すことの出来ない見事な肉体だ。

海族とも、決してひけを取らない、肉体派の魔族。

尖ったタテガミのような黒髪は、猛獣を想起させる。

その高い位置の視線が。

不自然なほど、一気に下げられる。

真理を見る高さではない。

もっと後ろの空間の、低いものを見ようとするかのようにだ。

「本日はお招きいただき…」

真理の挨拶も聞かない視線は、ついに止まった。

早紀を、捕らえたのだ。

さすがは、1stというべきだろうか。

零子やタミとは違い、少しの間はあったものの、自力で彼女を見つけたのである。

「悪いな、カシユメル卿」

ぽんつと。

大きな手が、軽く真理の肩に置かれた。

そんな挨拶でいいのだろうかと思ったが、自分の考えが根本から間違っていることを、早紀は知るのだ。

「今日の卿はダシだ…キサの娘だってな…この憑き魔女」

イデルグの巨体は、信じられない身軽さで真理をかわすと、早紀の目の前に割り込んでくる。

そして。

キサ、と言った。

貴沙——と、おそらく。

見下ろす目に、害意は感じない。

しかし、反射的に早紀は身構えてしまった。

あの、ロクな遺産を残さなかった、諸悪の根源である実母の名前だったからだ。

イデルグにも、何か恨みを買っているのか、と。

「全然似てないな：残念だ」

まじまじと早紀の顔を覗き込みながら、心底残念そうにイデルグは言った。

その表情を見た刹那。

あつ。

彼が、母に抱いていた感情が何なのか——分かった気がした。

いい女

――

ダシ。

そんな言葉で片付けられて、真理は非常に不快だった。

血統を差し置いて、イデルグが早紀に会いたがっていたのだと分かったからだ。

しかも。

彼女の珍しい能力を知りたくて、などという理由ではなく。

晚餐室の席についた後も、イデルグは早紀を見ていた。

そうしていないと見失う可能性があるのだから、しょうがないのは分かるのだが。

おそらく、特殊な能力のせいで、彼女の出自を調べさせていたのだろう。

父親はともかく、母親まではすぐにたどれるのだから。

そして、母親はイデルグの知り合いだった。

正確には知り合いというより――

「貴沙は、あの当時…魔女の中でも問題児でな」

大きな手でグラスを持ち上げながら、1stは語り始める。

魔女が魔族の中での問題児なら、いつものことだと彼は言った。

わざわざ言葉にまで、されることがはないのだと。

貴沙が、問題児と言われているのは。

「一人で天族にちよっかいをかけたたり、海族を騒がせたり：騒々しい女だった」

イデルグの話に、早紀は唇を引き結んだまま。

ちらりと真理を見るのは、どう反応したらいいのか分からないからなのか。

「当時、オレは3rdでな。1stのカシユメル卿：いわゆる卿の先代に頼まれて、ちよつとばかし灸をすえることになったわけだ」

彼は、グラスを宙に軽く掲げた。

空間がひねられる。

歪んだ空間が戻った時。

その宙空には、魔女が現れた。

クラシカルなのは、マントと帽子だけ。

レザーのミニスカ、深く胸元の開いた服に、あらわなヘソ。

派手な化粧と、帽子から飛び出すように跳ねる髪。

そんな魔女が、こっちをとんがった目で睨んでいた。

イデルグがグラスを揺らすと、映像は波紋を生んだ後に消滅する。

「いい女だろう？」

彼は、早紀を見ながら言った。

「灸をすえるつもりが、こっちが火傷させられるハメになったんだからな」

貴沙の思い出と共に——彼は、グラスを飲みほしたようだった。

血統

—
—
—

早紀の知らない、母親の話だった。

元々、ほとんど知らない実母のことだ。

彼女は、何を聞かれても「知りません」以外の答えを言うことはないと思っていた。

しかし。

宙空に現れた、自分の母親の若い姿に、正直驚いたのだ。

今にも動き出しそうなほど生き生きと、貴沙という女性は自分を睨んでいたのだから。

ほけーっと口が開きそうになって、慌てて引き結ぶ。

零子のように、タミのように。

静かな顔でおとなしくしていよう——そう思った。

どうせ、早紀は全然似ていないのだ。

すぐに、イデルグは彼女に興味を失うだろう。

「オレの子供を、産ませたかったんだがな」

なのに。

爆弾発言が投下され、早紀は目を見開いてしまった。

産ませたかったという希望の言葉なので、彼は自分の父親ではない。

すぐにそう理解したが、彼女の中ではいまだ謎なその部分に触れられたせいで、ひどい驚きになってしまった。

「ほう：なかなか、個性的な顔にもなるな」

イデルグのコメントに、慌てて早紀は人形の顔に戻る。

「貴沙に子供を産ませた男は、一体誰だ？ オレを袖にしたんだ：生半可な相手じゃあるまい」

だが、おとなしく人形に戻してくれるはずがない。

やはり、話がそっちへと運ばれていく。

早紀は。

真理を見た。

答えていいかという問題以前に、答えようがなかったのだ。

「……言えない相手ですよ」

真理の言葉には、あらゆる含みが込められている気がした。

お話する理由はありません、という拒絶。

それと——言うには、はばかりれる相手です、という揶揄。

はばかりれる。

それほどすごい相手という意味にも取れるし、それほどひどい相手とも取れる。

「なるほど…まさか、あのお方じゃないだろうな…はははははっ」

自分の言葉に、傑作だとイデルグは大きく笑った。

すごい方で解釈してしまったようだ。

※

早紀が、複雑な気持ちのまま、晚餐の席に座っていると。

「…お子さんは？」

ずっと黙っていた真理が、するりと声を吐き出す。

冷気もないが、興味もない口ぶりだった。

興味もないのに聞くということは、話を別方向へそらそうという
思惑があるのだろう。

早紀の母親や、出生の話をあまり蒸し返されたくないのだ。

それは彼女も同じだったので、話の行方が気になり、真理の声を追うように、イデルグの方を見た。

「ああ、三人いる。男は二人：双子だ」

ニヤリと、1stは笑う。

さすがは魔族である。

好きだった魔女に袖にされても、そのまま諦めきれずに操立てなど、するはずがなかった。

そのニヤリは、どこか本気で面白がっている顔である。

「∴それは、お気の毒に」

真理は、やはり興味のない口調で、社交辞令的に返す。

お気の毒？

早紀は、意味が分からなかった。

双子。

「男が二人いるだけでも厄介なのに、双子だぞ∴まあ、せいぜい殺しあってくれ、ってところだ」

イデルグの笑いに、早紀は動きを一瞬止める。

何か、物凄い発言を聞いた気がしたのだ。

いやな理解が、彼女の頭に浸透していく。

そうか、と。

イデルグの息子ということは、彼が引退した後、鎧を引き継ぐということだ。

しかし、鎧は一つ。

受け継げるのは、たった一人だ。

普通ならば、一番上の男が継ぐ気がするが、双子ではどちらも納得しかねるだろう。

しかも、魔族なのだ。

おとなしく、相手に鎧を譲るはずがない。

「ついでに、ご自身が殺されないようご注意を」

しれっと真理も、怖い言葉を上乘せする。

「ははは、オレを殺せるならいつそ上出来だ」

極東のトップは、身体だけではなくツラの皮もしっかり鍛えているようだった。

※

晩餐後、すぐに帰る、という方向にはなかった。

イデルグは真理を連れ立って、話をするために別室へと向かってしまったのだ。

ぽっん。

残されたのは、早紀だ。

勿論。

イデルグは、使用人に彼女を他の部屋に案内するよう命じたのである。

そして、二人は先に行ってしまった。

ぽっん。

使用人は、主の命令を遂行しなかった。

いや、出来なかったのだ。

何故なら、早紀の存在を一瞬で見失ってしまったからである。

おかげで。

彼女はまるで空気のような存在感で、手持ち無沙汰になってしまったのだ。

まあ。

ある意味、気楽だった。

どこにいたとしても、どんな変な行動をしたとしても、誰もそれを認識できないということである。

よその魔族の屋敷など、入ったことのない早紀は、ゆっくりと歩き出した。

大きなホールを覗くと、黒い甲冑が飾ってあるのが見える。

イデルグが身につけている本物かと、近づいて見てみたが、造型は全然違った。

ただの飾りなのだろう。

貴重な本物を、こんなところに置きっぱなしにしているはずがない。

息子が二人、鎧の後継を狙っているのだから、なおさらだ。

ふと。

背後に気配を感じて、早紀はどきっとしながら振り返った。

誰かが入ってきたのだ。

「ふう…」

ため息混じりに、その人物は早紀の方へと近づいてくる。

少年——というには、既に身体がきっちりと出来上がっている気がした。

しかし、一目で分かった。

イデルグの息子だと。

彼の血を色濃く受け継いでいる、力強い肉体派だったのだ。

双子の片割れだろう。

目は、何も見てはいない。

早紀の存在に、気づいていないのだ。

「見えない魔女って…ホントかよ」

難しい顔をしながら、ぼそっと呟かれた言葉は——早紀の心臓を、強く跳ねさせたのだった。

ベルガー

――

「近々：ベルガー卿にも、呼ばれるかもしれんぞ」

ソファに、深々と埋もれながら、イデルグは使用人に酒の手配をさせた。

真理はその向かいに腰を下ろしながら、彼の話を聞く。

ベルガー卿。

極東の2ndだ。

「ベルガー卿まで、貴沙という魔女に求婚でもしていたのですか？」

ため息をつきながら、真理は返す。

早紀の周囲が、とてつもなく騒々しくなってくる。

それは、非常に面白くないことだった。

「いや、違うな。ベルガー卿は、純粹にあの娘の能力に興味があるようだ」

ただし、悪い意味で、だ。

付け足された言葉に、真理は目を細めた。

悪い意味。

理解は出来た。

要するに、真理の鎧の能力を——邪魔だ、と思っているのだろう。

魔族の力は、物理能力以外は、魔族には効きづらい。

そこへ、イレギュラーの早紀が現れたのだ。

「あの娘の弱みを探って、お前さんを失脚させるかもしれんぞ」

同じ極東のメンバーとはいえ、結局は魔族同士。

2ndの地位を脅かす可能性の高い真理の芽を、早いうちに摘んでおきたいのだろう。

事実、早紀には父親という弱味がある。

誰もまだ、その真実にたどり着いていないからこそその弱味だ。

「そこで、だ…」

運ばれてきた酒を、イデルグは手に取った。

真理の前にも出されたが、手は伸ばさない。

「オレも、貴沙の娘がベルガー卿に食いものにされるのは、寝覚めが悪いからな…ひとつ提案がある」

ごくり、と酒を飲み干す太い喉。

「オレの息子のどっちなに、あの娘をくれてやる気はないか？ オレの身内が絡めば、さすがのベルガー卿も手出しはしないだろう」

予想外すぎる提案だった。

イデルグは、本気そのものの顔で。

真理は、凍りついたままの顔で——しばし、見詰め合ってしまった。

子

—
—
—

ど、どうしよう。

早紀は、鎧の側で固まったまま動けずにいた。

イデルグの息子と思われる男は、すぐ近くに迫っている。

彼女の存在に、気づかないままだ。

自分の能力を、疑っているわけではない。

子供の頃から、無意識に使ってきた能力だったし、蝕の戦場でもその力はいかんなく発揮されているようだ。

しかし、さすがに目の前に来れば、分かるのではないだろうか。

ましてや、彼は早紀の能力を知っているようだ。

知っているからこそ、強く意識をこらせば気づかれると思った。

零子も、タミも——イデルグも、「いる」と分かっているのならば、速さの差こそあれ、早紀を見つけたではないか。

は、離れよう。

ゆっくりそつと、ホールから出て行こう。

早紀が、そーっと動こうとした瞬間。

男は、ぴたっと動きを止めた。

まるで。

耳を澄ますみたいに。

早紀も、足をぴたっと止めた。

視線が。

イデルグの息子の視線が、軽く周囲に巡らされる。

気配はなくとも、空気が動くのは止められない。

足音だって、ほんのわずくらい、生まれているのかもしれない。

あの父の血を、受け継いでいるのだ。

鋭くても、おかしくなかった。

動きを止めたおかげか、幸い見つけれなかったようだ。

しかし。

「いるのか？ カシユメル卿の魔女」

堂々と呼びかけられて、更にどきっとする。

大胆で、効果的な方法だった。

早紀は、客人で。

もしこの呼びかけに応じず、自力で彼に見つけられてしまったら、スパイ容疑くらいかけられそうだ。

やましいことが、ないのならば。

「います…」

カシユメル卿とやらのために——答えておくべきだった。

※

「マジか…」

早紀の存在を、声から認識するやいなや、イデルグの息子は目を見開いた。

ようやく、焦点の合った瞳。

そして。

「マジだ…こりゃ…すげえな」

笑い出す、大きな口。

おかしくてたまらないように、彼は身体をのけぞらせて笑う。

「なるほど…確かに、一筋縄じゃないかないぜ」

早紀に近づきながらも、彼の笑いは止まらない。

対する彼女は、どう反応したらいいのか分からなかった。

一体、どんな風にイデルグは、彼女のことを言ったのか。

「だが…面白い…面白いぞ、お前」

大きな手が。

がしっと、早紀の手首を掴んだ。

反射的に身を引こうとするが、掴まれた手はビクともしない。

「オレは、甲斐…お前は？」

魔族にしては、好奇心に満ち溢れた強いまなざし。

早紀が逃げたがっていることさえ、自分の欲望に正直過ぎて、気づいていないようだ。

「あ…」

引き結んだ唇を、動揺したせいで開いてしまった。

魔女ではなく、過去の早紀に戻ってしまう。

「あの…手…」

離して。

何とか、そこまで声に出来た。

「ん？ ああ…いや、駄目だ。手を離したら、お前消えるだろう？
早く、名前を言え」

だが、向こうはさっぱり譲歩しなかった。

早紀の能力に対する衝撃が、彼に手を離させないのか。

こうなったら、とにかく早く名前を名乗って、解放してもらえないか。

「さ…早紀」

空を切りそうになる唇で、ようやく名前を声にした。

「早紀か、了解…それじゃあ早紀…」

名前を、視線に乗せる、というのだろうか。

甲斐という男は、前よりも強いまなざしで彼女を見た。

そして——こう言った。

「早紀…オレの子を産まないか？」

血

――

「あれは、憑き魔女ですよ」

真理は、非難めいた冷気を隠せなかった。

憑き魔女を奪うという意味を、イデルグに分からないはずはない。

「知ってるとも…勿論、仕事の妨げにはせんさ。正妻に出来ないのは、百も承知だからな」

問題になる点を、彼は軽くかわした。

正妻に出来ない。

その意味は、真理にも分かっている。

憑き魔女である上に、早紀の身分は低いのだ。

「だがな…よく考えてみろ」

イデルグは、アルコールの混じった魔気を吐く。

真理の作る低い室温を、上げるかのように。

「あの特異な能力の娘が、誰の子も産まずに朽ち果てるのは…余りに惜しいだろう？」

その温度を。

再び真理は、確実に二度下げた。

イデルグの言わんとしている意味を理解し、そして、それを言われるまで理解していなかった自分に対して、だ。

特異な能力。

その能力を、煙たがる者がいるのならば、欲しがる者もまた、いてもおかしくない。

「お前さんも気づいているだろう？ あ的能力で、お前さんは遠くらず3rdに上がる。2ndも遠くない」

1stまで上がると言わないのは、イデルグが簡単には譲らないという意味だろう。

「だがな…本当に、あの娘の能力を使いこなせば…極東エリアの蝕の話だけでは済まんぞ」

言いたいことは、よく分かった。

気に入らない魔族を、簡単に葬り去ることだって出来る。

その力だけで、他の魔族を屈服させる脅しにもなるだろう。

早紀の能力が、遺伝すれば——これからの魔族の中心になることも可能なのだ。

地位の高い者との子であれば、尚更、その道は楽になる。

貴沙の娘だから、つぶされたくないというのも、確かにイデルグにはあるだろう。

しかし、早紀の能力を血筋として欲しいと言っているのもまた、事実なのだ。

それを、あけっぴろげに真理に言ってしまうところが、またイデルグなのだろうが。

どこから、何を考えるべきか。

真理は、珍しく混乱していた。

しかし、混乱は長くは続かない。

ざわりと、嫌な気配が首筋を走ったのだ。

兄弟

――

「早紀：オレの子を産まないか？」

時間が――止まった。

止まって当然だ。

いきなり初対面の相手から、ありえない言葉が出たのだから。

早紀は、ただ呆然と相手を見ていた。

「ああ、お前が憑き魔女ってことは知ってる：だから、オレの子だけ産まないか？」

彼女の呆然を、どう解釈したのか。

甲斐は、更に畳みかけてくる。

要するに、プロポーズではないという意味だ。

そんな意味が分かったところで、何の助けにもならないのだが。

この人、頭おかしい。

早紀が、ようやく掴んだ言葉は、それだった。

軽い目まいさえ覚える。

微かに暗くなる視界の中、あけっぱなしになっていた自分の口を、何とかきゅっと引き結んだ。

「悪い風にはしない：子が男なら、イデルグ家の跡取りにさえ、なれるかもしれないぞ」

自信に満ち満ちた目が、早紀の目を覗き込もうとする。

その中を、自分でいっぱいにして、心をむしりとりとうとするのだ。

だが、早紀の脳裏は、甲斐でいっぱいにはならなかった。

真理の目の方が、百倍怖い気がしたのだ。

ごくり、と早紀は生唾を飲む。

自分が、言葉に足首を掴まれていないのを、ゆっくりと確認する。

思ったより落ち着いていた。

だから、こう言えたのだ。

「だって…あなた：双子でしょう？」

刹那。

甲斐の目が変わった。

黒い瞳が、猫のように縦長になったのだ。

開いた唇から、牙が見えた。

「勝つのはオレだ…オレにつけ」

手首が、碎かれるかと思うほど強く握られる。

変貌と痛みで、早紀が石像のように硬直した直後。

「うちの憑き魔女に…何か用か？」

声とともに——冷気が足もとを流れた。

※

「ああ、これはカシユメル卿…ご機嫌うるわしゅう」

猫の目を戻しながら、甲斐は声を振り返った。

棒読みに聞こえるのは、この男が真理を敬ってはいないせいかな。

しかし、まだ早紀の手は離さない。

後ろ手に、確保したままだ。

「うちの憑き魔女に、何か用か、と聞いている」

真理が、怒っているのはよく分かった。

あー。

早紀は、どよんとした気分を、胃の奥に味わわされる。

昨日の今日だ。

また余計なトラブルを、引き連れてきたと思われるに違いない。

今日のこれは違うと言っても、通じるとは思えなかった。

「ただの男女の話ですよ…父から聞いたでしょう？」

太くしっかりした声で、甲斐は真理を押し返そうとする。

父親——1stの存在を盾に。

一体、真理はイデルグと何の話をしていたのか。

奇妙な話の流れに、早紀は目の前の大きな身体ごしに、真理を見ようとした。

よく見えないが、足元の冷気が脛の辺りまで上がってきたのは分かる。

「その件は、丁重に断った…その上で、何か用かと聞いている」

声が、甲斐の盾を貫いたかに思えた。

早紀の手を握る指が、大きく動いたのだ。

「イデルグ家を、味方につけておいたほうが得策ですよ…」

咀嚼するように、ゆっくりと紡がれる言葉は、彼の手と連動していた。

おそらく、相当機嫌を損ねたのだろう。

早紀が顔を歪めなければならぬほど、時折強い握力が押し寄せるのだ。

「鎧も持たぬ子供が…家語るか」

真理の言葉は——とてつもなく辛辣だった。

瞬間。

早紀の手は離された。

その手が、大きな拳になる。

「やめとけ…馬鹿」

拳は。

振り出されなかった。

ホールの入り口に、甲斐によく似た男が立っていた。

※

「初めまして、カシユメル卿」

手をひらりと振って、男が入ってくる。

甲斐によく似た男——おそらく、間違いなく双子の片割れだろう。

ただ、甲斐ほど肉体を鍛えることには、執着していないようだ。

髪も綺麗に撫でつけているため、やや落ち着きを感じる。

ただし。

真理に対する態度は、兄弟そろって大差ない。

鎧持ちの男に、ずさんな挨拶なのだから。

そして、真理をかわすと、自分の兄弟の方へと歩みを進める。

兄弟ゲンカでも起きるのかと、早紀がやや身を引いて身構えると。

男は。

甲斐さえも、スルーしたのだ。

そんな彼が、下がった早紀の前で足を止める。

「私は美濃…お前の名前は？」

今日——二度目の出来事だった。

名前を聞かれるという。

この兄弟は、どうして早紀の名前を聞こうとするのか。

甲斐に至っては、更にひどい言葉が続けたのだが。

「おい…どういうつもりだ」

彼女が答える前に、美濃の身体は兄弟に遮られた。

甲斐のたくましい腕が、彼女の前に突き出されたのだ。

「どういうつもり…？ それは私の言葉だ…順序も考えられぬサルが」

上背は同じくらい。

早紀より遥かに高い二人が、今にも胸をぶつけあわんばかりに睨みあっている。

え、えーっと。

やはり、兄弟ゲンカに発展しそうな雰囲気、早紀は周囲を見回した。

真理は、無然とした表情のまま、イデルグの双子を見ている。

その目が。

早紀の視線に、気づいた。

軽く。

ほんの少しだけ。

顎が動いた。

くいっと、微かに早紀につながる糸を引くように。

あつ。

どきっとした。

いま、真理に——来い、と呼ばれた気がしたのだ。

最初から

――

馬鹿馬鹿しい。

イデルグ家の招待は、くだらないことだけだった。

ダシにされ、イデルグの当主からは、ありえない提案をされ、挙句、双子の片割れはフライングをかましていたのだ。

早紀に、不穏な魔力が近づいたことを、真理は感じていた。

イデルグと、話をしている時のことだ。

この屋敷は、極東1stのものである。

そんなところに、外部から不審者が入り込むとは考えづらかった。

その上、あの早紀を見つけた、ということだ。

かなり力のある魔族——イデルグの身内と考えるのが、妥当だった。

「その件は…お断りします」

当主の申し出を、真理は一言で切って捨てた。

一考にも値しなかったのだ。

答えながらも、軽く宙を探していた。

不穏な魔力の、出所を追うために。

「断るか…って、どこに行く気だ？」

彼の行動に、イデルグは不審な声をあげた。

真理が、ソファから立ち上がったのだ。

「あなたの息子のどちらかが、うちの憑き魔女に絡んでいるようです」

今日の彼の話を、息子たちに既に行っているというのなら、早紀を探そうと思っても不思議ではない。

家督を争っている最中ならば、なおのこと、競争相手を出し抜きたいだろう。

「ああ、なるほど…それはアリだな」

面白そうに、イデルグが笑う。

少しの食い違いを感じた。

真理の言葉に反応したというよりは、自分の中の言葉に納得した、という風なのだ。

「たとえお前さんが断っても…魔女が断らない、という可能性もある、というわけだ」

ニヤニヤと、イデルグは笑う。

魔女という存在の不確定さを、誰よりも知っているといわんばかりのしたり顔で。

ああ。

真理は、忌々しくその言葉を理解した。

ああ、そうか、と。

最初から、イデルグはそのつもりだったのだ。

真理に話を通したのは、単なる形式。

最初から、双子を早紀にけしかけるつもりだったわけだ——彼女
の心を、奪わせるために。

どうぞゆっくり

双子が言い争いを始めたのを、真理は不機嫌に眺めていた。

罵り合う前に、この二人にはすべきことがあるはずだ。

明らかな大差をつけて相手をねじ伏せるか、継承権を剥奪すべく陥れるか、能力が拮抗しているならば、命がけで相手の息の根を止めるか、である。

まだ心の中に、ほぼ同時に生まれた兄弟という、しがらみが残っているのか。

しかし、そんなことは結局真理にとって、どうでもいいことだ。

他人のお家騒動に、首を突っ込む気も興味もないのだから。

真理が、ホールを出ようと思った時。

視線を感じた。

早紀だ。

大きな二人の男の物陰から、真理の方を見ている。

厄介な、彼の鎧。

極東の1stから3rdまでが、早紀の能力に違う意味で興味を

抱いている。

イデルグは取り込みたがり、ベルガーは煙たがり、トゥーイは――
彼も煙たがっている方だ。

だが。

今日のイデルグとその息子二人は、おそらく大きな勘違いをしていた。

彼女を、標準的な魔女だと思っているだろう、という点だ。

父方の血筋はいまだ不明だが、精神的には純粋な魔女ではない。

今日、ようやくソレに足を踏み込んだばかりの、人もどきだったのである。

だから。

魔女として扱ったところで、早紀が揺らぐとは思えなかった。

そんな彼女に。

真理は軽く顎を動かし、早紀に帰る意図を告げた。

一瞬。

彼女の目が、しっかりと真理を捉える。

その視線が、次第にうつむき気味に下に落とされたかと思うと。

一步目を、踏み出した。

「あ…おい」

双子の頭の悪そうな方が、彼女を呼び止めようとする。

早紀は視線を落としたまま、しかし、足は止めなかった。

真理の側まできて、ようやく動きを止めたのだ。

「どうぞ…ごゆっくり」

戻ってきた彼女の行動に、知らず深い満足を覚えながら——真理は、冷たい皮肉だけを残して立ち去ったのだった。

会話

— — — — —

これまで、外部と接触する機会は、本当に少なかった。

早紀は、それを身にしみて感じたのだ。

子供の頃の、母とのぼやけた記憶、空気のような学校、そして縁の切れてしまった伊瀬。

彼女の知る外部の世界など、そんなものだった。

真理の鎧となることで、他の鎧の者たちと接触することも起きたが、それはあくまでも鎧の立場として、の話だ。

彼女が、メインになることはない。

なのに。

イデルグ家で、いきなり早紀はメインディッシュに据えられてしまった。

イデルグの当主に、そして双子の息子に。

甲斐の言葉から推測するならば、彼は早紀との間に子供を望んでいる。

彼女が魅力的だから、という意味ではない。

それくらい、分かっている。

相手は、彼女の名前さえ知らなかったのだから。

おそらく。

早紀の能力を持つ子が、欲しいのだ。

そんなに、魔族に効く力が欲しいのだろうか。

「…双子とは、関わるな」

真理の声に、早紀はびくつとした。

イデルグ家からの帰り道——車の中であることを、すっかり忘れていたのだ。

関わりたいわけではない。

子供のことも、余りに飛躍しすぎていて、冗談としか思えないほどである。

「それと…」

答えない早紀など気にせず、真理は言葉を続けた。

一瞬止まった言葉に、ふっと彼女の意識が引つ張られる。

「それと…ベルガー卿には…注意しておけ」

珍しく、歯切れの悪い言葉。

言うべきか言わないべきか、そんな葛藤でもあったのだろうか。

1stの次は、2ndの話ときた。

それもまた、彼女の能力のせいなのか。

「面倒くさいなあ…」

ぼつりと、早紀は呟いていた。

はっと口を押さえる。

いま、本当に無意識に、本音が口をついていたのだ。

真理に、冷たい息を吐かれるんじゃないかと、びくびくしながら彼を見ると。

「ああ、まったくだ…」

ため息をつきながら、彼はやはり本音を口にするではないか。

普通の会話が——成立してしまった。

変な興味

「面倒くさいな…」

そう言ったのは——鎧の男だった。

夢の中。

リボンもない軽くなった髪を見て、彼はそう言ったのだ。

「うん…面倒くさいみたい」

自分の髪ではなく、イデルグ事件のことだと思い、早紀はあっさりと同意する。

「先代が、憑き魔女を持ってたせいだろう」

妙な知恵がありやがる。

男は、ため息のように言葉を吐き出した。

イラついて見える。

珍しい姿だ。

「先代って？」

「イデルグ家の先代だ」

早紀の質問は、間髪入れず返答が投げられた。

そうか、と早紀は理解したのだ。

鎧は、代々受け継がれているもの。

ということは、このカシュメルの鎧は、他の3人の家系や歴史もある程度知っているということである。

「だから、奴は憑き魔女が子を成せると知ってるんだ…何しろ、自分が父親と憑き魔女の子だからな」

当たり前のように口に出された言葉は――衝撃的だった。

あの、イデルグのトップの母親が、憑き魔女だというのだ。

「二人の兄を押しつけて、一番下賤な血筋の男が家督を奪った話は…このオレにさえ聞こえるほどだったぜ」

本来、戦いでしか使われない鎧にさえ届く噂。

相当な、スキャンダルだったのだろう。

「そのせいだろうな…お前の血をイデルグに入りたいなんて、酔狂なことを考えるのは」

要するに。

イデルグは、家系の血の濃さとか高級感とか、まったく気にしない男なのだ。

それでも、1stを取った。

彼の強さの証。

「まあ、イデルグの子を孕んだ状態で、カシユメルの鎧になった時
…一体どうなるか…興味が無いわけじゃないがな」

ぼそつと。

鎧の男が、とんでもない事を言い出す。

モラルのない戦いのみへの欲望が、そんなことを語らせるのか。

変な興味、持たないで。

早紀は、遠い目をしてしまった。

美濃

同じ学校…だったんだ。

早紀は、半分唾然としながら、その事実を噛み砕いていた。

イデルグの、息子のことである。

昼休み。

教室で、何もすることがない早紀の元に、訪問者がきたのだ。

美濃だった。

横に、何故かトゥーイがいる。

その後方には、零子が控えていた。

ある意味、学内で早紀を探すための、最高の人間たちを引き連れてきたわけだ。

「トゥーイ卿…これで貸しは無しです…助かりました」

「そうしてほしいものだな。僕はどっちが跡目を継ごうが、問題ないんだから」

美濃の言葉に、彼よりも高い位置にいるトゥーイは、面白くなさげに肩をそびやかす。

早紀は困惑しながら、二人の男を見比べる。

この二人が一緒にいる理由が、分からなかったからだ。

共通点があるとすれば、鎧を受け継ぐ血筋というくらいか。

しかし、トゥーイはちらりと早紀を睨むように見ると、さっさと零子を引き連れて帰ってしまった。

「少し話がしたくてな…それくらいは許されるだろう？」

彼は、空いている早紀の前の席に座り、半身を乗り出すように振り返る。

身体が大きいせいで、座ってなお威圧感がある。

昼休みに来たのは、考えた上か。

放課後なら、早紀は真理に合わせて帰らなければならない。

昼休みとは、半端な長さの、しかし逃げられない時間帯だ。

そして、断りにくい話の仕方だ。

甲斐のように、いきなり腕をひつつかで結論を強要したりはしない。

早紀が、目で軽くトゥーイの消えた方を見ると、美濃も同じように一度視線を動かした。

「ああ…トウイ卿は、俺の従兄弟だ。違う血筋の従兄弟はいいな…殺す優先順位が低いから頼みごとが出来る」

さらりと、隠されてもいないだろう真実を述べながら——しかし、そら恐ろしい言葉も付随している。

「父はな…」

現状に、早紀が追い付けないでいるのをよそに、美濃はさつさと話を始めて。

この辺りの強引さは、父親や甲斐と変わらない。

「父はな…憑き魔女を作れなかったことを、一番後悔していた」

そして——イデルグの話を、した。

※

憑き魔女という言葉に、早紀が惹かれないはずがない。

二回死ぬという、よく分からない確率の元に生み出される、鎧の化身のような生き物。

それが、自分であり、零子でもある。

イデルグは、父とその憑き魔女の子だ、という話までは聞いた。

そんな男だからこそ、自分が鎧を受け継ぐ時に、憑き魔女を作ったのか。

「魔女というのは、不安定すぎて、思い通りに契約が運ばなかった……」

美濃の目が、早紀を映す。

「トゥーイ卿が、憑き魔女を作ったのは、うちの父に影響を受けていたせいで、意図的なものだ……成功したのは幸運だったがな」

早紀を見ながらも、零子の話題が出る。

声には、微かながら羨望を感じた。

はっと。

早紀は、零子のことを認識した。

同じ憑き魔女、という意識はちゃんとあったのだ。

「……零子さんも憑き魔女なら……彼女を口説けばいいんじゃないですか？」

イデルグが、憑き魔女という肩書の上にこだわっているなら、早紀じゃなくてもいいはずだ。

「それが、トゥーイ卿の憑き魔女は……彼の実験材料でな」

美濃は、やはりさらりと——奇妙な言葉を吐いた。

「うちの父親の能力が、たった一回のまぐれなのか、それとも憑き魔女特有の遺伝もあるのか……そのために、憑き魔女を自力で用意したわけだ」

後継ぎにするかは、分からんがな。

美濃は、あっさりと言葉を続けた。

詳しく考えたくない。

早紀は、耳を覆いたくなった。

零子を思い出す。

ハイクラスの魔女たちを見ながら、あの中の誰かがトゥーイの正妻になるのだと、悟った目と言葉をしていた。

きっと自分の運命を、彼女は知っているのだ。

何故そんなひどい運命と、折り合いをつけているのか。

大体。

実験というのならば、イデルグ家だってさして変わらない。

相手が、零子か早紀かの違いだけだ。

警戒のまなざしで、美濃を見る。

しかし。

「お前も…トウーイ卿には突っかかれただろう？ 血筋から、遺伝能力から、丸裸にされないよう気をつけるんだな」

話の流れは——実験材料という要点は、軽く流してしまったのだった。

魂と心と身体

――

またか。

『その感覚』に、真理は眉を寄せた。

またしても、早紀につっかかる魔族の感触を、味わわされたのだ。

昨日の今日を考えると、イデルグの息子だろうと予想出来た。

招待から帰りついた昨晚。

真理は、修平を通じてイデルグの息子二人の情報を、軽く仕入れていた。

美濃と甲斐。

同じ学校の、一年であることが分かった。

ナリはでかいが、真理よりも年下だったのだ。

あの育ちすぎの身体は、遺伝と父親の影響だろう。

しかし、昼休みというイヤな時間に、ちょっかいをかけられた。

放課後と違い、どこもかしこも生徒で溢れている。

そんな時間に、ロークラスに足を運ぶのは、非常に不本意だった

のだ。

しょうがなく、真理は立ち上がった。

放っておける魔女なら、どれだけ面倒は減るだろう。

トゥーイの憑き魔女ならば、おそらくここまで手間をかけることもないと思われる。

あの憑き魔女も、所詮は魔女なのだから、何らかの思惑を身の内で育てているに違いないが。

しかし、それが内側でとどまっているだけなら、主としては問題ないのだ。

だが、早紀はそういうワケにはいかない。

いまようやく彼女は、魔女としての自覚に踏み込んだばかりで。

そんな不安定な状態を、イデルグの息子たちにかき回されたくないかったのだ。

もしも、早紀が——どちらかの誘惑に負けたらどうなるのか。

そう考えると、真理は非常に不快だったのだ。

ロークラスに足を運ぶ事実よりなお、不快だったのである。

真理の鎧でありながら、心をイデルグ家に持っていられる。

その身体の一部を、イデルグ家に持っていかれるのだ。

それらの想像は、多大なる不愉快を、真理の中で生んでいた。

理由など分かっている。

早紀は、この『カシユメルの鎧』なのだから。

その魂も心も身体も全て、カシユメルのもでなければならない。

そう。

全て、カシユメルのもでなければならないのだ。

ありえない出来事

――

「ああ……」

非常に不愉快な声を、美濃が吐いた。

話の途中、いきなりの出来事だったため、早紀は身を硬くしたのだ。

何か、自分に対してひどいことを言われそうな気がしたのである。
しかし。

美濃の視線が、目の前の早紀から教室の入り口に向けられた時、その理由がはつきりした。

真理が――こっちを見ていたのだ。

どこに目がついているのか。

以前の、トゥーイ訪問の時も、同じようなことがあった。

いつの間にか、彼がそれを見ているのだ。

こ、これは。

早紀は、うつすらと汗をかきながら、言い訳したい気分かられる。

確かに、彼女は美濃がいることを許容した。

相手が下手に出ていたから、断りにくかったということもあるのだが。

それでも、イデルグの息子と話をしていた事実は、真理には面白くないのだろう。

彼が、戦いで順位を争う家系なのだから。

「大したつながりだな…よく気づくものだ」

ふうと、大きく息を吐いて、美濃は席を立ち上がる。

真理の視線が、彼を追い出そうとしているのだ。

「もし、俺を頼ることがあれば、一年のハイクラスに來い…いつでも話を聞こう」

最後に一言。

早紀には、やわらかい言葉を残して、美濃は真理のいる出口の方へと向かった。

え？

自分が美濃に頼るケースは想像できなかったが、もう一つ引かかる言葉があったのだ。

え？ え？

つい、その大きな背中を見送る。

真理の近くに立つと、体格差がなおさら明らかだ。

い…一年って。

なのに、彼はああ見えて年下だったのである。

「話をしていただけですよ…勿論、彼女の同意の上でね」

そして。

美濃は、真理にも一言を残した。

その内容は、真理の視線を彼女に向けさせるには、十分すぎるもので。

まさに——余計なひと言だった。

※

あの真理が。

あの真理が——早紀と話でもするか、と言ったのだ。

呆然としながら、彼女はさっき起きた出来事を、頭の中で反芻し

ていた。

しかも、今も真理は目の前にいるのだ。

椅子に腰掛けて。

だが、やっぱり真理だ。

この状況を、ヨシとはしていない顔だった。

おそらく、さっきの美濃のせいに違いない。

「あの…」

こんな不自然な会話は、正しく成立するはずがないのだ。

早紀は、そう悟った。

「あの…さっきのは、本当に別に大した話は…」

とんでもない話は聞きはしたが、彼女はそれにとりあえずフタをかぶせる。

いまはとにかく、真理を立ち上がらせ、この教室から出て行かせようと思ったのだ。

目が。

真理の目が、こちらをじっと見る。

いつもと違うように感じるのは、目の高さの違いか。

お互い、椅子に座っているせいで、いつもより近い高さに感じる。

まるで。

そう、まるで。

真理が一段降りて、早紀の高さに近づいてくれたような。

あ、ありえないから！

早紀は、大慌てでいま考えた自分の思考を否定した。

あの真理が、憑き魔女ごときと同じ高さに降りるはずがない。

あの真理なのだ。

あの――

「お前は…俺が嫌いか？」

…。

……。

…………。

い、いま。

いま、何か、すごいセリフを聞いた気がする。

怖いより

――

「お前は…俺が嫌いかな？」

いたって、真面目な質問だった。

真理は、自分に対するいい感情を、早紀から引き出さなければならぬと悟ったからだ。

嫌いの反対は、好意的な感情だ。

その中には、単純な好きから、憧れや尊敬というものも含まれる。

もし、早紀がそのような感情を自分に持っているとは自覚すれば、おのずと行動も変わってくる。

その感情が、他より強ければ、真理を裏切ることなくなる。

母とやらも、海族とやらも、ほかの魔族の邪魔者も、入ることが出来なくなるのだ。

これまで、早紀が自分に対してどう思っているかが、どうでもよかった。

憑き魔女としての仕事さえきっちり果たせば、あとは本当に何でもよかったのだ。

だから。

そのように扱ってきた。

しかし、彼女はただの『物』ではなかった。

まったく思い通りにはならない。

そして、このまま思い通りにならなければ、真理にとって残念な事態になる可能性があるのだ。

それを阻むためには。

真理を好きにさせるのが、一番早いことに思えたのだ。

早紀は。

長いこと硬直していた。

真理の質問は、思いのほか彼女に衝撃を与えたようだ。

「え…っと…あ…」

その顔のまま、意味不明な声をこぼす。

「あっと…えと…」

驚きの目は、真理を見たまま。

「好きとか…嫌いか…とかじゃなくて…」

ようやくその唇が、意味のある言葉を紡ぎ始める。

「ええと……怖い」

そして——魔族としては、喜ばしいホメ言葉をもらう羽目となったのだ。

いま、真理が望む言葉の中では、真反対に近いものだったが。

※

畏怖があるのは、想定していなかったわけではない。

真理は、無然としつつもその事実を受け入れた。

しかし、当主としてカシュメル血族の者に、尊敬されて然るべきだと、心のどこかで思っていたのだ。

だが。

相手は、あの早紀だったのだ。

憑き魔女になるまで、彼女は自分が魔女である事実を知らなかった。

だから、カシュメル家のことなど、これっぽっちも理解していなかったのだろう。

畏敬にせよ尊敬にせよ、生まれるはずがないのである。

そんな、鈍い娘に。

当主自ら魔力を分け、タミの手配をし、育ての母の人間のことを調べ、近くまで連れて行き、海族に拉致されているところを助けに行ったのだ。

しかし、そのいずれも（魔力を分けたことはともかく）、早紀をありがたがらせることなどなかった。

この女は。

真理は、彼を『怖い』と一言で片づけた女を見た。

重苦しい髪をタミに切られたらしく、昨日のような化粧がなくとも、随分様変わりした気がする。

目もとは、まだおぼつかないが、それでも真理の反応を伺っていた。

怖い、ということに対して、彼がどう出るのか。

「怖いより…」

釈然としない結果を、真理は塗り替える必要を感じた。

感情は、変わる。

人によっては、それこそめまぐるしく。

「怖いより…好きになれ」

早紀が、魔女である自分を受け入れ始めたように、いま彼女の持つ『怖い』を変えることは出来るのだ。

それが、彼女を取り巻く不穏な環境から、彼女自身を守る力になる。

そんな真理の言葉に。

早紀は、一瞬固まって。

しかし。

直後。

深く沈んだ表情になった。

理解できない、感情の動きだ。

何故、そこで沈むのか。

唇が。

早紀の唇が、小さく動く。

「私のこと…好きじゃないくせに」

ぼそり。

昼休みの終わり

――

「怖いより…好きになれ」

真理にそう言われた時、本当に驚いたのだ。

あの彼が、早紀の気持ちを引きたがっていることに。

しかし。

その言葉に、喜ぶことなんか出来なかった。

なぜ、このタイミングで彼がそんなことを言い出したのか、分か
ってしまったのである。

イデルグの双子だ。

彼らが、早紀を取り込みたがったから。

それを防ぐために、あるいはそれに張り合ってたか、早紀の心を自
分にとどめようとしたのだろう。

もし彼らが現れなければ、真理は今まで通り、彼女に上から言い
放つだけの言葉を投げていたのだ。

だが、これも結局、上から言い放っている。

「好きになれ」と。

その方が、真理にとって都合がいい、という言葉が、姿を隠さないまま含まれているのだ。

好き、という意味を——はきちがえている。

彼が望むのは、一方的な好意。

鎧という関係でつながっても、心は一方的にしかつながない気だ。

真理がそうあればあるほど、早紀は自分が『独り』であることを思い知らされるというのに。

「私のこと…好きじゃないくせに」

それが、悲しかった。

真理が、自分のことなど好きじゃないのは、子供の頃から知っている。

憑き魔女になっても、その感情が続行しているのくらい分かっている。

イデルグに、自分の『物』を取られるのがいやなだけで、『早紀』を取られるのがいやなわけではないのだ。

それなのに、一方的な好意を求められる。

真理自身のために。

そんな簡単に、心なんて差し出せるはずがなかった。

包む気も、温める気も——愛する気もないくせに。

真理は。

早紀の一言に、動きを止めていた。

目は、彼女を見ているが、いまの言葉を理解したのか、どう思ったのかは表には出ていない。

その唇が。

微かに、動く素振りを見せた時。

昼休みの終わるベルが——鳴った。

差

一一一

「私のこと：好きじゃないくせに」

意味が、分からなかった。

さっき真理が言ったのは、早紀に自分を好きになれという話であつて、それ以外の何物でもない。

なのに、彼女の返答は、真理から早紀に向けての好意の話だったのだ。

何故、そうなる。

昼休み終了のベルで、ロークラスを出て行きながらも、真理は考え込んでいた。

いつの間にか、自分のクラスに戻り、そして席に着きながら、早紀の意図を読み解こうとした。

そして。

もしや、と。

真理は、ある答えに至る。

もしや早紀は、自分との間に『対等』な好意の関係を、結びたいと思っているのか、と。

「……………」

どう。

どう言えればいいのか。

正直に言えば——考えたことがなかった。

簡単に言えば、考えるに値しなかったことだ。

当主と憑き魔女が、『対等』な感情の糸で結ばれるなど。

主従に過ぎない。

その従属側が、主人を尊敬したり好意を抱いたりは容易に想像がつくのだが、逆を想定したことがなかったのだ。

早紀のことは。

昔は、役立たずだと思った。

憑き魔女にも値しなかった。

だが。

結果から言えば、彼女は想像以上に有益な力を持っていた。

持ちすぎていたと言っている。

しかし、それを自由に使いこなせてはいないし、その背景にはトラブルの匂いを抱えている。

力そのものが、新たなトラブルの元凶になっているのもまた、間違いない。

だが、彼女はカシユメルの鎧だ。

真理が当主である間は、ずっとカシユメルのものであり続ける。

だから？

彼は、自問した。

これまでに考えたことのないことに、結論を出そうとしたのだ。

だから、自分は今、早紀のことをどう思っているのか、と。

「……………」

結論が——出るはずがなかった。

脳筋

――

早紀は、帰りの車中、非常に気まずい気分を味わわれた。

昼休みに、あんなやりとりを真理としてしまったのだ。

噛み合うはずのない、『好意』という感情。

要求され、つっぱねた。

真理は黙ったままだが、早紀を無視したいいつものだんまりとはワケが違う。

そして、この空間には。

「……」

タミもいた。

同居がはじまってから、彼女も一緒に通学するようになっていたのだ。

彼女は、ちょうど中央の席。

両側の微妙な異変に、無言で視線だけを投げてよこすのである。

制服姿だが、手袋はいつも通りだ。

その手袋の手が、軽く早紀の腕に触れている。

彼女の存在を、忘れないようにするための、タミなりの方法らしい。

特に拒む理由もないので、戸惑いながらもそれを受け入れていた。

「そういえば…」

その彼女が、微妙な空気を軽くつつくように声を発する。

どちらに向けて言おうとしているのか、分からないが、早紀は自分にはないだろうと思っていた。

「イデルグ卿の子息に、いろいろ聞かれましたわ…」

瞬間。

車内の空気が、冷凍された。

真理の、視線によって。

なんで、タミがイデルグの話を。

そう思いかけて、すぐに分かった。

タミは、1年なのだ。

そして——ハイクラス。

あの双子と、クラスメートなのである。

彼女が、カシユメル家にいるという情報を、どこからか仕入れたに違いない。

タミの視線が、早紀の方に向く。

真理ではなく。

「あなたの好きなものを、調べて欲しいと頼まれたのだけど…」

冷えゆく空気の中、彼女は淡々と早紀に向けて言葉を続ける。

いや、あの。

タミの向こう側のブリザードに気圧されて、早紀の唇は、あわあわと空回る。

「そんな義理はないから、『脳筋に付き合う暇はなくてよ』、と答えておいたわ」

よかったかしら？

早紀は、斜め上方を見ながら、タミの言葉に軽く汗をかいた。

ああ——どっちか分かった。

※

帰りついたら。

「ああ…」

タミが、軽く理解した声を出した。

真理は、一瞬だけ足を止めた後、全てを無視してさっさと屋敷に入ってしまった。

早紀は。

あ、あは、あは。

途方に暮れる笑いを心の中で浮かべながら、『それ』を見ていた。

屋敷の入り口にあったのは——大量の花、花、花。

むせかえるほどの香りが、たちのぼっている。

よほど、香りの強い花のようだ。

赤と黒が混じった薔薇のような花を、タミが一本抜き取る。

「あなたを、匂いで見つけるつもりかしら、あの脳筋は…」

タミは、この犯人を甲斐と睨んだようだ。

抜き取られた花が差し出され、早紀は反射的に受け取ってしまった。

うーん。

居心地が悪い。

真理は、全力で無視したようだが、これまでの様子からすると、非常に不機嫌になっているのは分かる。

更に、早紀としては非常に虚しい。

突然、周囲に好意を要求する男が増えてきたが、皆、別に彼女を好きなわけではないのだ。

それを勘違いして、舞いあがれるほど、お気楽な性格はしていなかった。

この花は、とても暗い華やかさがある。

彼女に似合うと思って送られたとは、到底思えなかった。

自分を産んだ母親ならば、間違いなく似合うのだろうが。

ため息をひとつついて、早紀は花をよけて屋敷へと入る。

二階へと上がり、自室に戻ろうとした時。

真理がまだ制服のまま、奥の部屋から出てきた。

つい、そっちを見てしまう。

真理も、遠いながらに早紀を見た。

随分、距離があるのに。

自分の手が――ひやりとした。

その手に握っているのは、タミにもらった1本の花。

あっと、慌てて花を身体の陰に隠す。

真理は、黙ったままこっちを見ている。

いたたまれなくなった早紀は。

逃げるように、自室に飛びこんだのだった。

魔族らしい感情

――

鬱陶しい。

真理の中の不快と不機嫌は、その言葉へと名前を変貌させた。

早紀にまわりつく、イデルグの双子だ。

簡単に振り払えない位置にいる二人だけに、苛立ちに似た感情が、彼の中に生れていた。

それは、自宅の前に積まれた花を見た時、最高潮に達する。

誰もいなければ、真理はこの花を一瞬にして冷凍し、粉々に砕いただろう。

しかし。

この花は、早紀に宛てられたもので、彼の一存でどうこうできるものではなかった。

いや。

出来ないわけではない。

だが、それをやることで、更に早紀との間に溝を穿ち、イデルグが入りやすくなると思うと、尚更苛立ちを覚えるのだ。

それもこれも、彼女が自分に対し、従順ではないからである。

真理は、早紀に対し従属を求めているのに、彼女は自分に対し対等を求めている。

最初から、噛みあうはずなどなかった。

花を無視して自室に入った方がいいが、真理のみぞおちにたまった苛立ちは、落ち着く様子はない。

早紀がまだ、あの花の山の前で足を止めているのかと思うと、更にひどくなっていく。

そんな早紀に、何か言う言葉が出来たわけでもないというのに。

みぞおちの苛立ちに憑き動かされ——真理は、部屋を出た。

そうしたら。

早紀が、既に廊下にいた。

一瞬、真理は安堵した自分に気づいた。

彼女は、さっさと花のそばを離れていたのだ。

だが、その直後。

安堵の感覚は、急転直下に突き落とされる。

彼女の手の中に。

あの花が一輪、握られていたのだ。

苛立ちが、大きく膨れ上がる。

真理が、これまで見たこともない生き物に進化していく。

その花を手にしたことによって、早紀がイデルグの好意を受け入れたように感じたのだ。

生き物の名前は、一番近いものに例えるなら——殺意。

イデルグの双子を、存在そのものから消し去りたいと思う感情。

言うなれば。

とても、魔族らしい感情だった。

特別な感情

――

「あー…」

夢の中で、彼が唸っていた。

実に、面白くなさそうに。

「なあ、嫌な予感が当たったろう？」

そして、早紀の顔を見るなり、そう言い放つのだ。

ああ。

心当たりがありすぎて、早紀は笑うことも出来ずに目を遠くへと泳がせた。

きっと彼は、イデルグの双子のことを言いたいのだろう。

鎧という立場から、どこまで現実世界のことを知っているかは分からないが。

だが。

「今日の当主のキレっぷりときたら、とんでもなかったぜ」

最初に彼の口から出たのは、イデルグのことではなく真理のことだった。

そうか。

鎧は早紀とつながっているが、きっと真理とも別の形でつながっているのだ。

だから、真理のことが分かるのだろう。

キレてたんだ。

早紀は、更にいやーな気分になる。

おとといも、昨日も、そして今日もいろいろあった。

真理にとっては、どれもこれも面白くないことの連続だったろう。

「おかげで、妙にお前さんに執着しはじめた」

ふうと、鎧が嫌そうな音で言う。

「うーん、でもそれは…単なる持ち物の所有権とか、そういうレベルだから」

それくらい、早紀だってちゃんと理解している。

なのに。

兜が、早紀の方を向いて微かに傾いだ。

「じゃあなんで…」

声が、不意にひそめられる。

この空間には、二人きりしかないというのに。

「じゃあなんで…お前は、あいつに好かれたがつてるんだ？」

ガツン！

そんな音が聞こえた。

自分の頭の後ろの方。

『私のこと…好きじゃないくせに』

甦る、昼間の言葉。

早紀は真理に、何を求めたのか。

「だから、嫌な予感がしたつつつたんだ…」

本当に不快そうに、もう一度鎧がそう言ったが——早紀は、自分の思考に取りつかれていて、耳には入らなかった。

※

そして翌朝。

またも、登校の後部座席は、不自然な沈黙に包まれることになる。

早紀の沈黙は、昨日のものとは違う。

簡単に言えば――落ち込んでいた。

昨夜、夢の中で鎧に言われたことが、起きてからもずっと彼女を刺し貫いていたのだ。

だから、真理が現在どれだけ不快な状況であるかとか、どれだけキレているかとか、あまり意識を向けていない。

自分のことで、手いっぱいだった。

そして。

出がけに、入り口にあった花が全部水漬けになって粉々に砕けていたことも、確認はしたが衝撃に思うことはなかった。

「……」

中央のタミが、右と左に一度ずつ大きく目を動かしたが、今朝は口は動かさないでいてくれるようだ。

何で。

何で、真理の好意を自分は欲しがったのか。

他の誰よりも、そんなものを望めないはずの相手なのに。

それが、分らないのだ。

タミに、そんなものを求めている。

修平にも、勿論、イデルグの双子にも。

なのに——真理には、求めてしまった。

ちらりと。

真理を見た。

むつつりと、不機嫌を残した——それでも、綺麗すぎる横顔。

子供の頃、早紀が来た時に出ていけと言った時も、こんな顔だったのかもしれない。

ああ、そうか。

少しだけ、心当たりを見つける。

その出会いが、キーワードだ。

真理は、最初から彼女を煙たがっていた。

他の人が、空気レベルには彼女をそこに置いておいてくれたのに、彼だけが早紀を拒絶していた。

そう。

空気ではなく、唯一拒絶してくれた人なのだ。

逆に言えば。

早紀の『存在』を、たった一人強く認識してくれていた相手だった。

『出ていけ』、『まだいたのか』と面と向かって言われる度に、彼女は何とか凶太く切り抜けてきた。

だが、あの瞬間だけ、早紀という魔女は生きていた。

この世にあって、唯一誰かから特別な感情を抱かれていた。

それが——真理だったのだ。

※

学校につき、早紀は自分の席についてなお、心は自分の内側に囚われていた。

そうだ、最初は真理だったのだ。

次が、鎧の男。

早紀は、彼に好意を覚えかけた。

真理よりも、鎧の男のそばにいたいと考えた。

だが、それを彼は、早紀に拒ませた。

ここは、ロクなものじゃないと、居座る場所ではないと突きつけたのだ。

そしてその次が——伊瀬。

彼だけは、何故か早紀を見つけることが出来た。

理由は分からないが、彼女はどうかやら伊瀬（あるいは海族）の近くにいと、能力を発揮できないらしい。

それは、零子が応接室の早紀を、容易に見つけることが出来た事件で証明されている。

そんな環境のせいもあるかもしれないが、伊瀬は彼女を見つけた。

魔女と知ってなお、追ってきた。

そして。

好意に近い感情を覚えた。

好意に近い感情をもらった。

なのに。

その好意の感情は、成立しなかった。

種族の違い、母親のせい、相手の立場のせい。

いろんなものが立ちふさがって、あの部屋が砕けた時のように、
ぱぁんと割れて失われたのだ。

結局。

早紀には、真理だけが残ったのである。

なんだ。

彼女は、自分を好きになってくれる人を、フラフラと探している
自分に気づいた。

なんだ、そうか。

私は。

ただ、誰かに好かれたかったのか。

は、はは…。

唇を軽く開けるだけで、音のない乾いた笑いを浮かべる。

教室の誰も、そんな早紀には気づかない。

自分という生き物を認めた誰かに、好きだという感情を持って欲
しかっただけなのだ。

その相手がいま。

真理しかない、というだけ。

何と高級な――残り物。

1年のハイクラス

――

真理は。

1年のハイクラスに来ていた。

最初に自分を見つけたのは、タミ。

一瞬だけ、怪訝を瞳に覗かせるが、近づいてもこなかった。

ただ。

彼女はその瞳を、室内へと向けるのだ。

窓際付近に立っている、大きな身体。

最初に目に留まったのは、甲斐の方だった。

丁度いい。

ツカツカと、その無駄なサイズの身体に歩み寄る。

甲斐の視線が、すぐに真理を映す。

「返事だ」

真理は――握り締めていた指を、開いた。

指の隙間から、小さな破片がゴミのように床に向けて落ちてゆく。
赤と黒のゴミ。

一度視線を下に向けた甲斐は、そのままゆっくりと彼に向けて上げる。

「これは、卿の返事ですよね」

早紀のではないと、そう言いたいのだろう。

それが。

「それが…どうかしたか？」

顎を軽く上げ、自分の視線が低いのも構わず、真理は見下す目をした。

たといデルグの息子であろうが、甲斐自身は明らかに彼よりも格下の身分だ。

真理には。

憎悪があった。

それを——隠さなかった。

冴え冴えとした憎悪を、隠すことなく甲斐にたたきつけたのだ。

パキッと、音がした。

甲斐の前髪に、氷の粒が絡みつきそこねて落ちた音だった。

瞬間。

目の前の甲斐の身体が、横に吹っ飛んだ。

吹っ飛ばしたのは、美濃の右腕。

その右腕は——見事に凍り付いていた。

「乱暴ですね…」

美濃が、腕を忌々しく見つめる。

すぐには碎けないのだ。

当たり前だ。

「それが…どうかしたか？」

簡単に碎ける氷になど、するはずがなかった。

2年のロークラス

――

タミが、ロークラスに来ていた。

しかも、2年の。

キヨロキヨロもせず、教室の入り口に突っ立っているのだ。

早紀は、慌てて席を立った。

「な、何か？」

とにかく、声を出す。

するとその大きな瞳が、早紀の声を追って彼女を映した。

やはり、自分に用事だったのか。

わざわざ、ロークラスまで何故。

そう、聞こうとするより先に、手を取られた。

「行きましょう」

見失わないため、連れて行くため――両方の意味で、タミは手を取ったのだ。

「え？　行くってどこへ…」

言葉は、『帰る』ではなかった。

なのに、彼女はどんどんと階段を登ってゆく。

どんどん、どんどん。

高い塔を上るように、タミは上を目指すのだ。

上？

先は、階段の先にあるものを見定めようとした。

あったのは。

扉。

その扉を開けるとそこは——雪国だった。

じゃない！

猛烈な吹雪の中だった。

屋上らしいそこが、なぜいきなり吹雪いているのか。

進みかけた足に、何かが当たる。

「……！」

それは、大きな男だった。

その名前を、そして早紀は知っていた。

美濃だ。

身体の半分ほどが、氷付けのような形で倒れている。

目は、ギラギラと怒りに光っているが、要所を凍らされているらしく、もがくので精いっぱいのようなのだ。

早紀は、はっと顔を吹雪の向こうに向けた。

男が、二人立っている。

一人は、とても大きい。

美濃よりも、もっと。

そしてもう一人の身体から——吹雪は生まれていた。

名

一一一

甲斐という男は、自分の力を強化する能力を持っていた。

イデルグの息子に、ある意味とても相応しい力だった。

筋肉の鎧でふくれあがる姿を、真理は顎を上げて見下したまま。

既に、美濃は沈んだ。

右腕に張り付いた氷は、生きた氷だ。

少しずつ、少しずつそれは美濃の身体への侵食を始め、彼は自分の力を発揮するまでもなく、氷に食われるように倒れた。

だが、相手は魔族。

せいぜい、半分ほどで侵食は止まったことだろう。

動きを封じられているだけで、死んではいないはずだ。

勿論、この後物理的にトドメを刺せば、それは叶う。

「感謝したらどうだ？」

目の前の、力の塊に言ってやる。

「いまなら…お前が当主になれるぞ」

嘲笑と共に。

刹那——目の前で怒りが弾けた。

それと共に、真理の上半身ごと砕くべく、巨大な拳が振り出される。

なお、嘲りが浮かぶ。

美濃は、甲斐を助けようとし氷に吞まれた。

その美濃が倒れたことに、甲斐が怒りを発する。

決着がつかないはずだ。

普通の双子ならもう、どちらかの命などとっくになくなっている。

いまだ、二人がのうのと生きながらえているのは、くだらない感情に甘えていたからだ。

そう理解すると、真理はおかしくてたまらなくなる。

吹雪のマフラーを、その太い甲斐の首に巻きつけ、締め上げてやりたくなる。

そして——してやった。

ものともせず、真理に拳が迫る。

猪のごとき突進力だ。

マフラーを、目にもかけてやった。

真理は、雪に音を吸い取らせながら、すいと身をかわす。

恐竜のごとき咆哮があがるのがうるさく、口にも巻いてやる。

両手で自分の顔をかきむしるように、甲斐はマフラーを払おうとした。

だが、その爪は。

自分の顔に、強い傷跡を残すだけ。

払っても払っても、吹雪はすぐそこにいくらでもあるのだ。

もがき暴れる男を沈めようと、真理が瞼を動かしかけた時。

「真理！」

名が。

呼ばれた。

吹雪を。

止めてしまった。

これ以上嫌われたって

――――

何、これ。

吹雪と、倒れている美濃。

そして、対峙していたのは――甲斐と真理だった。

元の大きな身体を、更に大きくした男が、真理に拳を振り上げる。

一瞬。

早紀は、強く目をつぶった。

その拳に、彼が吹き飛ばされるビジョンが浮かんだからだ。

しかし。

再び、目を開けた早紀を待っていたのは、立ったままの真理と、雪に縛りあげられてゆく甲斐の姿。

カシユメルの男は、容赦なくイデルグの息子を打ち倒そうとしている。

いつも、早紀が感じる『冷ややかさ』などというレベルを、超越しているところではない。

これではまるで――殺し合いだ。

なんでとか、どうしてとか。

そういう言葉は、山ほど頭をめぐる。

しかし、原因だけは分かった。

自分、だ。

これは、おそらく所有権の争いなのだ。

戸惑った。

所有権争いの殺し合いを、反射的に早紀は止めようと思ったのである。

だが、戸惑ってしまった。

真理を呼ぶ言葉を、彼女は持っていなかったのだ。

何ひとつ。

本当に、何ひとつ持っていなかった。

ああもう。

自分が、情けなくなる。

認めてくれて好いてくれるなら、相手は真理でなくてもよかった。

ふらふらと、漂っていただけの自分。

早紀は、積もった雪を強く踏みしめる。

ああ、どうせ。

どうせ、最初から嫌われていたんだ。

唇を大きく開ける。

吹雪に負けないほどの。

「真理！」

そして、初めて呼んだ。

呼び捨てだ。

これ以上嫌われたって、何も変わらないではないか。

これ以上嫌われたって——出ていけなんて言われないのだから。

ああ…そうだろうな

一一一

早紀がいた。

更に後方にタミがいたので、誰がこの女を屋上に連れてきたのかは、一目瞭然である。

余計なことを。

その上、早紀は彼を呼び捨てにした。

初めてのことだ。

名前を呼び捨てに、というよりも、彼の名そのものを口にしたのも、おそらくこれが初めて。

ふらふらしていたはずの目が、しっかりと真理を映している。

どうしてこう。

真理は、目を細めた。

どうしてこう、簡単に変わってゆくのか。

また、昨日と違う女になった。

何が彼女に、あんな目で名を呼ばせたのか。

彼の思考は、動いた空気で邪魔される。

甲斐だ。

吹雪を止めたことで、彼は雪のマフラーから逃れていた。

顔が傷だらけで血を流しているのは、自分の爪のせい。

ここまでできたのだ。

邪魔が入ったからといって、この男も戦いをやめるはずなどない。

だが。

「もういいから！ イデルグさんちに、私はいかないから！」

早紀が、大きな声をあげる。

あの、誰よりも空気でありたがった女が。

さすがの甲斐も、その声の方を見る。

イデルグさんち。

早紀らしい表現だ。

その表現で、はっきりと息子たちに拒否の意を伝えようとしているのか。

いや。

早紀の目は、真理の方に向いていた。

甲斐を拒否しているのではなく、真理にその旨を宣言しているようにも聞こえる。

だから、こんなことはやめろと。

さて。

早紀の拒否を背に、真理は甲斐を向き直った。

殺意は、ゆるやかに下降し始めている。

だから、ここでやめてやってもいい。

そんな目で、甲斐を見てやった。

「……………！」

彼の拳は、真理に向かって構わず繰り出されたのだ。

ああ…そうだろうな。

いやなのに

――

「ほらな…」

夢で、彼は両手を広げて見せた。

今日の出来事を、なんと簡潔に態度で現すのか。

真理がキレたという裏づけが、見事に取れましたよ——そう言いたいのだ。

しかし、声音はそれを歓迎していない。

早紀だって、歓迎するはずがなかった。

「馬鹿みたい」

早紀は、信じられなかった。

あの真理が、自分から二人にケンカを売ったというのだ。

タミが、そう教えてくれた。

それくらい、怒り心頭だったということか。

だが、馬鹿げている。

憑き魔女以外の部分の早紀など、どうなろうと知ったことではな

いくせに。

「困るのは、お前に対して馬鹿になることだぜ」

鎧の男は、唸るような声を出す。

最近、彼も機嫌が悪い。

「うん、困る…ほっというて欲しい」

下手に関わられると、早紀の中の弱い女の部分が、抉り出されてしまう。

今日、自分で抉り出したばかりのそれ。

一生懸命、早紀はそれを踏みつけようとしている。

そして、消してしまおうとしているのだ。

「いや…そうじゃない」

鎧が、言葉を濁す。

顎を彼女の方に向ける。

「お前という存在を、奴と俺は共有してるんだ…」

半分ずつの契約の話が、こんなところでちらつく。

それと、馬鹿にどんなつながりが。

「奴がまずい馬鹿になると…俺も馬鹿にならなきゃならなくなる」

腕が。

鎧が、早紀の腕を取る。

自分の方に引き寄せるように、強い力が加えられた。

間近に立つ、硬い身体。

手は離され、その指が早紀の額をこづいた。

いたっ。

まだ残る、噛まれた痛み。

そういえば。

二人に——噛まれた。

※

二人に噛まれた額。

その意味を、早紀が考えようとした時。

カタッ。

小さな音が、生まれた。

あつと。

早紀は、顔を上げる。

まさか、と。

まだ、夢の中。

鎧の男を見たのだ。

「早いな…」

彼の声は——歓喜の響き。

声にかぶってゆくのは、鎧が震える歌。

こんな日に。

自分の弱さを見て、真理の馬鹿な行動を見た日に、蝕が来るなんて。

や、やだ。

早紀は、恐れた。

いま、この気持ちなまま、真理とひとつになりたくなかったのだ。

あの心地よい感覚に、溺れたくなかった。

溺れてしまったら、早紀が真理に依存してしまう。

そうしたら、自分はきっと彼からの好意を願ってしまうのだ。

いま、消し去ろうとしているそれに、みっともなくしがみつく。

それは…いや。

懇願する目で、鎧の男を見てしまった。

だが。

「ダメだ」

喜びに、うち震える声。

この幸せを、彼は絶対に手放さない。

「さあ…いけ」

指が。

彼の指が、早紀の額に伸びる。

二人に傷つけられたそこを、容赦なくなぞった。

目覚めは、痛みの残り香と共に。

目の前には、真理の部屋。

身体の中には、鎧の喜びと興奮が燃え盛る。

ああ。

扉を開ける自分を、止められない。

いやなのに。

鎧になるのは、いやなのに。

バアンッ！

開け放った早紀。

飛び起きる真理。

身体の中の鎧が、こう言う。

彼と——ひとつにならなければならぬ。

唯一

――

女が、扉を開ける。

真理を、呼ばずにはいられないのだ。

普段、決して自分から近づいてこない女が、唯一、彼を必要とする瞬間。

真理は。

飛び起きながら、早紀を見ていた。

自分に、対等の好意を求めた女。

答えは、まだ彼の中にはない。

だが、彼女はカシュメル――真理のものだ。

それを今日、イデルグに叩きつけた。

興奮をおさえきれない早紀が、彼を見上げる。

鎧が、彼女を振り回している、いつもは見られない顔。

蝕が、早紀をこうさせる。

蝕が自分を――

指先で。

額の円をなぞる。

黒い魔気に包まれながら、早紀が一瞬だけ、泣きそうな顔をした。

すぐに、すべては包み隠される。

そして、美しくも硬い鎧となるのだ。

真理は、手を伸ばした。

鎧の胸に、だ。

拒まれるはずなどない。

鎧は、真理の手を飲み込む。

そのまま進むと、彼自身を受け入れのだ。

吸い付くような内側は、とても静かで。

早紀が、自分を隠している証拠だった。

何も、彼とつながたくない、抵抗しているように思える。

『行くぞ』

一言――声をかけた。

たった、一言。

返事は、ない。

彼女の声は、聞こえないまま。

だが。

真理を包む鎧の内側が――微かに収縮した気がした。

訪問者

一一一

蝕の戦いで、魔族が危ないシーンなどなかった。

地上の蝕であったため、相手は天族だけだったし、しかも向こうは今回二人欠けていたのだ。

一人は、もともといなかった。

二人目は、おそらく前回派手に、真理が叩き伏せた相手だろう。

だから、戦闘そのものが威嚇的なもので終わったのだ。

その間中、早紀は満たされる感覚に打ちのめされ続けていた。

幸せな偽物の満足感を味わえば味わうほど、その嘘の虚しさに魂が挟られる思いだったのだ。

鎧から解放された後、逃げるように部屋に戻り、逃げるように夢に飛び込んだ。

鎧の男は、戦闘そのものの密度の薄さに不満げだった。

そんな鎧の男の言葉にさえ、耳をふさぐようにして、早紀はひたすらに夜明けを待ったのだ。

夜が明けたところで、真理も鎧も消えてしまうことなどないというのに。

幸い。

週末に入ったため、学校には行かなくてよかった。

部屋に閉じこもっていれば、真理にも二日会わずに済む。

そう。

思っていた。

なのに。

「……!!」

騒然とした屋敷の気配に、揺り起こされた。

蜂の巣を、つついたような大騒ぎになっている。

何？

パジャマのまま、ドアから首だけ外に出したが、使用人たちが駆け抜けてゆくだけで、事態の把握は出来そうになかった。

慌てて着替えて、廊下へ出る。

真理に会うのは怖かったが、こんな屋敷の状態は、彼女が来てから一度もなかったため、ひどく気になったのだ。

静かな静かな魔族の屋敷を、騒がせる存在。

階下へ降り、騒々しさに導かれるように玄関を出る。

門の内側に、真理が立っているのが見えた。

反射的に身体が逃げかけるが、早紀は別のものも見てしまったのだ。

門の向こう側。

魔族の屋敷のテリトリーのすぐ向こうに、悠然と立つ男の姿を。

伊瀬だった。

何故、彼はこんなところに来たのか。

それ以上に分からないものが、その腕の中にあった。

彼が抱きかかえているのは、青い顔と痩せた身体の——早紀の育ての母だったのだから。

※

「……………」

早紀は、両手で自分の唇を覆っていた。

そうでないと、そこから魂が飛び出してしまいそうだったからだ。

おかあ、さん。

病院の窓ごしに見た彼女は、伊瀬の大きな身体に抱かれていると、なおさら小さく頼りなく見えた。

しかし、門という障害物を越えれば、そこにあの母がいるのである。

ああ！

身体が、引きずられそうになる。

愛という愛が溢れ出し、衝動的に母しか見えなくなる。

この狂気的な感情は、一体なんなのか。

近づいてはいけないと思うブレーキがあるにも関わらず、早紀は駆け出していた。

真理が、そこに立っていることさえ、一瞬忘れた。

「おかあ…」

手を伸ばす。

門にしがみついて、大きな声で呼びかけて、自分を見て欲しかった。

早紀です！

私、早紀です！

伸ばしかけた手は——届かなかった。

おなかに回された真理の腕が、彼女の突進を途中で阻んでしまったからだ。

その上、簡単に反転させられた。

早紀に見えるのは、屋敷と入り口で遠巻きにみている使用人たちだけになる。

あっ、あ！

もがいて門の方を振り返ろうとするのに、真理の腕はがちりと彼女を捕まえていて、びくともしない。

「離し…」

お母さんが、お母さんがそこにいるのに！

「お引き取りいただこう」

自分の身体のすぐ傍から放たれる、冷たい冷たい言葉。

早紀の産毛を逆立てさせるほどの、物凄い冷気。

「悪い話では、ないと思ったのだが」

ため息をつく伊瀬。

その足音が、離れ始める。

待って、待って!!!

強くもがいて、必死に真理の腕から逃れる。

ようやく呪縛から逃れ、門を振り返った時。

もはや——そこには、誰もいなかった。

青風情

――

「なんで!？」

早紀は、強い語気で真理の方を振り返った。

興奮で赤くなった目を、大きく見開き彼を見上げる。

責めている目だった。

「なんで!？ どうして!？ どうしてこんな酷いことをするの！」

その拳が、真理の胸を一度強く打つ。

下僕風情が、主をぶったのだ。

だが、その事実をしっかりと認識するより先に。

「どうしてよお……」

拳は震え、早紀の瞳から涙があふれ出す。

空気さえも震わせるように、悲しみの波を外に向けて放つのだ。

彼女にとって特別な存在を、あの男は連れて来てしまった。

だが、人間を、ましてや海族を自分の屋敷に入れることなど、真理に出来るはずがない。

それ以前に。

何と言ったか。

あの海の男は。

早紀が。

早紀が――

真理は、震える彼女の手首を掴んだ。

引き寄せる。

そして、涙でぐしゃぐしゃに濡れた目を、上から覗き込む。

この早紀が。

真理の思考が固まるより早く、彼女に突き飛ばされる。

不意打ちによろけている間に、早紀は門へと駆け出していた。

後を追おうというのか。

普段はぼーっとしているくせに、取り乱した時の彼女は手に負えない。

「おかあさん…おかあさん！」

獣のように吠える彼女を、門から引き戻す。

ふざけるな。

真理には、考えねばならないことがあった。

そして、早紀は他のどんな存在より、自分の方を向いていなければならなかった。

その二つを、いまの彼女は台無しにするのだ。

せっかく、母親のことをあきらめさせたというのに。

せっかく、早紀は魔族になろうとしていたのに。

青風情が——全て台無しにしてしまった。

タミの口元

――

「海族は、昔から人間と仲が良いの」

気づいたら、早紀は自分のベッドの上だった。

傍の椅子に座っているのは、タミで。

その手が、彼女に延ばされている。

ああ。

そうか。

門で真理ともめている時に、タミがやってきたのだ。

その後、早紀は力が入らなくなった。

おそらく、タミが必要以上の魔力を、彼女から抜いたのだろう。

そして、部屋に連れ戻された、というワケか。

タミという監視人つきで。

「魔と天の能力を融和出来るの…彼らは」

昔、タミが語ったXとYの能力値を思い出す。

海族は、魔と天の要素を持っていた。

だから、人間に近づいても害を与えずに済む、と。

そう彼女は言うのだ。

そういえば。

物語や昔話で、人間と海の中の何かが出会う話はよくある。

乙姫様も、海族だったのだろうか。

そんな海族に抱かれていた、育ての母。

彼女は一体、何故こんなところに来たのか。

伊瀬とどういう関係なのか。

「どこまで…聞いたの？」

早紀は、深く長いため息をついた。

魔力が減らされたせいとか、門の前で起きた衝動は、すっかり鳴りをひそめてしまっている。

「カシユメル家から？ いいえ、何も…私には嘘しか言わないわ、あの人は」

その事実を、別に大したことではないと思っているタミの声。

魔族同士、家同士ということを理解している声だ。

「私の家で、あなたのことをいろいろ調べたの」

そして、タミは自分のしたことも隠さなかった。

「あなたの本当の母親が誰で、育ての親が人間なこと」

そこで一度、彼女は言葉を切る。

「そして今日…」

早紀に触れる指が、何かを探るように動いて。

「そして今日…海族があなたに近づくと、あなたの中の力が変化するのが分かったわ」

わずかに口元が緩んだのは、それが嬉しかったからなのか。

秘密

真理と――遠くなった。

元々あった距離よりも、もっと遠く。

同じ車の中にいてなお、まったく無関係な生きもののよう。

真理は、彼女を遠巻きに見るだけ。

早紀は、できうる限り、彼に接触しないようにした。

昼休み。

遠い真理のことと、育ての母のことを考えないようにしている早紀の元に――タミが来た。

扉のところで、ただつつ立っている彼女に驚く。

また、真理がイデルグの息子相手に、立ち回りでもしているのか
と思いきや。

手を握り、顔を近付けてくる。

「人間に会いに行くわ……」

かすれるほどの、小さな小さな内緒話。

え？

タミを見つめるが、相手はそれ以上補足する気はないようだ。
人間。

早紀を誘ってまで会う相手など、一人しか思いつかない。

タミの視線が、斜め後ろにちらと投げられる。

そこにいたのは――真理、ではない。

濃厚な目元とまつげに、一瞬性別を間違ひそうになるが、男物の制服の見知らぬ魔族がいたのだ。

見知らぬ、だが、同時に雰囲気はタミにそっくりだった。

兄、あるいは近い親族か。

彼が、人間の元へ連れて行ってくれるというのか。

「ただし…」

視線を早紀に戻した彼女が、言葉を付け足した。

空気が、小さくわななく。

タミの唇が、震わせたのだ。

「ただし…カシユメルには…秘密です」

再会

病院。

早紀は、その建物の前であっけにとられていた。

そこは、前に真理に連れてこられた病院だったのだ。

窓ごしに、育ての母を見た場所。

既に、伊瀬にどこかに連れ去られたと思っていた。

しかし、そうではなかったのだ。

「ありがとう…兄様」

車に残る男に、タミは一言投げ掛けると、彼女は建物に入ろうとした。

その手を、反射的に捕まえて止める。

「私たち…ま、魔族だし」

唇に乘せる言葉は、自分自身の根元に突き刺さるものでもあった。

いまや、逃れようのない事実だとわかっていても、口にするのは辛い。

「だから？」

タミは、まったく理解していない。

「人間に近いと害になるんじゃない。」

母親という餌に食いついておきながらも、早紀は自分が母を弱らせた事実を、捨てきれずにいたのだ。

「……すぐに済ませれば、大したことではないわ」

理解できないという響きを、タミの声は含んでいた。

普通の魔族にとっては、そんなものなのかもしれない。

それに。

じゃあ、帰ろうと言われたら、一番躊躇するのは自分なのだ。

本当かどうか分からないタミの言葉を握ったまま、早紀は病院へと足を踏み入れたのである。

ナースセンターに寄ることもなく、タミはまっすぐに階段に向かう。

いくつもの段を上り、いくつもの白い扉の前を通りすぎた。

タミの足が。

止まった。

ひとつの扉の前。

名札は、下がっていない。

下がっていたとしても、早紀の記憶にはないのだ。

照合しようがない。

あ。

タミが、一步脇によける。

彼女に扉を開けさせようというのか。

冷たい冷たい金属の、横開きの取っ手。

ノックをすることさえ——忘れていた。

※

扉を開けると——窓が開いていたのか、思いの外強い風が、早紀をあおった。

一瞬、強く目を閉じた後、ゆっくりと開く。

昼の日差しが、差し込む病室。

しかし、ベッドはでっぱった壁に邪魔されて、見えない配置にな

っている。

どくん。

早紀の中の何かが、ひとつ大きな音を立てた。

どくん、どくん。

それが、ひとつではないことを思い知る。

一步踏み出すことに、それは喉から飛び出すほど、強く大きくな
っていった。

布団のふくらみ。

そこに。

そこに——眠っている母が、いた。

「……………！」

叫びそうになった唇を、早紀はとっさに押さえる。

ああ。

ああ…ああ。

唇を押さえたまま、早紀ははらはらと涙をこぼした。

おかあさんだ。

写真の、いや、記憶の中で薄れかけた、育ての母だ。

スイッチが入るとは、まさにこのこと。

この顔を見た途端、早紀は自分が違う生き物に感じるほどだ。

押さえきれない、愛の衝動。

何かの気配に、気づいたのだろうか。

閉ざされていたまぶたが、微かに揺れた。

薄く、静かに開かれる瞳。

泣きながら、早紀はその遅い時間を味わった。

開ききった瞳が――彼女を映すまで。

余り力の入っていない黒い目の中に、早紀が入った。

驚きは、そこにはない。

代わりに、瞳は閉ざされてしまう。

「……！」

拒否されたと感じ、早紀はショックを覚えかけた。

しかし。

そうではなかった。

閉ざされた瞼の隙間から、涙が溢れだしたからだ。

「おかあ…」

その涙に呼ばれるように、早紀は言葉をかけようとした。
なのに。

「やっぱりまだ…早紀のままなのね」

早紀の声は、奪われてしまった。

手に負えない女

――

学校に、修平が来た。

「動いたよ…行き先は病院」

耳打ちされた言葉に、真理は反射的に早紀の気配を探る。

いやな気配ではなかったので放置していたが、どうやらタミが早紀を連れ出したようだ。

病院。

目的地に、右の瞼がぴくりと揺れた。

ああ、なるほど。

タミなりに、早紀の力の答えにたどり着こうとしたのか。

餌は、早紀自身。

彼女をあの人間の前にぶらさげれば、なんなりとしやべり出すだろう。

「車は…？」

修平に確認したが、そうするまでもなかった。

チャリ、と鍵が掲げられたのだ。

真理は、制服の上着を翻した。

聞くのか？

胸が、ざわざわとざわめく。

先日、あの青が言い残した言葉が、真理の中に甦る。

いや。

あれからずっと、ずっと彼は考え続けていた。

あの言葉の意味を。

あれは。

あれは、早紀が聞くべきものではない。

真理でさえ持て余し、何の対処もできないでいる。

車に乗り込みながら、彼は自分が焦っているのを感じた。

近づいては遠ざかる、手に負えない女。

聞いてしまえば。

また早紀が——変わってしまう気がした。

思い出して

— —

「まだ…?」

震える喉が、それを音にしていた。

涙を流す自分と、涙を流す育ての母。

だが、その涙の意味が、同じものだとは早紀には思えなかった。

まだ、って。

にここに。

記憶の中の、母が笑う。

目の前の、母が泣く。

ひどい悲しみを混ぜた色に見える。

会いたかった。

会えば、自分を早紀だと分かれば、喜んでくれると。

そう、思ったのに。

「さ…早紀です」

涙が、なおさら止まらない。

愛も溢れて止まらない。

「早紀じゃ…駄目ですか？」

何を母が待っていたのか、それは分からない。

いまの自分の頭では、とても答えは探せない。

でも。

拒絶だけは、されなくなかった。

記憶の中の母を――壊してしまいたくなかったのだ。

壊れたら。

壊れてしまったら、これから早紀はどうしたらいいのか。

絶望はした。

死んでもいいと思った。

いろんなことが、これまであった。

けれども、この母への愛だけは、燃え続けていたのだ。

その火が。

揺れる。

消えてしまうかと思うほど大きく。

育ての母は、濡れた瞳をゆっくりと開いた。

もう一度、早紀がその中に映る。

「あなたが大きくなったら…呪いが解けると…思っただのに」

あ。

ヒステリーにも似た気配が、自分のおなかの中で、一回転した。

育ての母の目は。

「呪いが解けたら…会いにきてくれると思ったのに」

彼女の目は——自分を見ていない。

自分の後ろの、誰かを見ている。

「私のことを…思い出してよ」

伸ばされる手に、早紀は一步下がっていた。

「私を思い出して…貴沙」

滑稽

き…さ。

呼ばれた名に、早紀はよろめいた。

それは――母の、産みの母の名前。

あの、イデルグを翻弄し、海族の宝を奪った女。

「どういう…からくりですか？」

動けないでいる早紀の横を、通り過ぎる黒い影。

タミだ。

これまで黙っていた彼女が、二人の間に割って入ったのである。

「貴沙と呼ばれた魔女は死んで…その娘が、この子ではありませんの？」

「違ったんだよ」

質問に答えたのは――育ての母ではなかった。

早紀は、更に割り込んできた者を見なかった。

声で、分かったのだ。

「海族…」

身構えるタミの声。

「いつか、来ると思っていた…」

声が、早紀に向く。

伊瀬だ。

この病院は、海族の監視下の元にあったのだろう。

「あの魔女は、我らの宝を奪った…そして、自分自身に使ったのだ」

足に、力が入らない。

指先が、氷のように冷たくなって震える。

「我らの宝…裏返りの珠を」

意識が、裏返しそうだった。

世界のすべてを道連れに、何もかも消えてしまいそうだった。

「裏返りの珠は、元々、海族の鎧の継承者の能力が、偏らないようにする物」

私は…。

「天と魔に対応するために、偏って生まれた場合、その珠を飲ませ

る」

私は…。

「天は魔になり、魔は天になる…力が裏返る」

私は…さ…。

「赤ん坊の時以外、海族でも使われることはないために、私もすぐには気付かなかった」

私は…さき。

「あれは…裏返って生まれ直す珠なのだ」

パキン。

早紀の中で、プラスチックが割れたような音がした。

裏返ろうとする力に耐え切れず、二つに割れる音。

それが、いまの自分なのだ——音が教えてくれた。

※

「彼女の力は、天の物ではありませんわ」

頭の上で、会話が交わされる。

「そう：あれは海族用だからね。魔族が使うことは想定されていない。彼女の場合は、おそらく変異現象が起きたのだろう」

あは。

早紀は、壁に手をついた。

そうしないと、立っていられなかったのだ。

鎧が、昔こう言った。

魔力が、折れていると。

折れたところから、水は出ていると。

折ったのは、珠。

海族の、宝の珠。

あの水は。

自分のものではなかった。

彼女に、海族の血など流れていない。

謎の父親など、いないのだ。

「あは：ははは」

ずるずると、壁をずり落ちながら、早紀は笑った。

なんという。

なんという滑稽な結末。

私なんて。

私なんて、いなかったんだ。

早紀なんて、この世のどこにもいなかった。

ここにいるのは、ただの貴沙の変異種。

「私は：君の中の珠を、返してもらいたい」

伊瀬が、彼女を見る。

自分を殺そうとしたのは――珠を取り返すため。

これを返したら。

貴沙に戻るのか。

母の言う、『呪いが解ける』のか。

そして。

消えるのか。

早紀という存在は。

刹那。

風が――巻いた。

開いたままの窓に、昼の短い影が入る。

見ていた。

世界中が、早紀を否定しようとしている中。

その、短い影を追い掛けてしまった。

「帰るぞ：早紀」

冷えた風が――彼女の名を呼んだ。

空に浮いたまま。

人間にも、タミにも、海族にも目もくれず。

いまにも床に落ちてしまいそうな、早紀を呼んだのだ。

空気を、かきわけた。

彼女は、無我夢中で両手を動かし、自分の身体を前に進ませる。

空気さえ泳いで、早紀は遠く感じたそこへたどり着く。

「真理！」

窓から飛び降りる勢いで——彼にしがみついていた。

冷たい唇

――

『彼女は、本当は貴沙という魔女だ。我らが宝の珠の力で、今の姿に生まれ変わってしまっただけ』

門の向こうの海族は、そう言った。

早紀は、本当は違う生き物なのだと。

『この人間の女性が、生き証人だ。彼女の目の前で、貴沙という魔女は珠を飲んだ』

腕の中には、早紀の育ての母。

『殺さずに、珠を取り出す方法が分かった…それがお互いのためになると思わないか？』

思わないな。

真理は、自分にしがみついて泣きじやくる早紀を抱いたまま、病室の三人を見下ろした。

弱すぎる人間。

力の謎を追い過ぎた魔女。

目障りな海族。

この三人は、早紀の一番深い秘密を知っている。

片手で早紀の身体を支えながら、もう片方の手で彼女の額をなぞった。

この三人は――殺さなければならない。

真昼の、変化。

腕の中の早紀が、魔気に包まれる。

その腕から飲み込むように、真理は彼女の中に取り込まれた。

瞬間、鎧ごしに彼が見たものは。

ベッドの上の人間を抱えて、走り去る海族と。

駆け込んできた別の魔族。

タミに似た顔の、制服の男。

魔力は、魔族には効かない。

だが。

圧倒的な鎧の力は、別だ。

刀は、特に。

魔力で増幅しているとは言え、物理の力もある。

たとえ二人になろうとも、抗えはしない。

「そこまで…だよ」

抜きかけた刀を、真理は止めさせられた。

後ろ、だ。

空中の真理の、更に後ろ。

聞き覚えのある声に、彼は振り返らざるを得なかった。

「同族殺しは、証拠が残らないようにやらないと…後が面倒だろう？」

ひとつ目の鎧。

トゥーイだった。

※

「零子が、いきなり君の憑き魔女が『分かる』と言い出してね」

遠かったから、やむを得ずこの姿を借りたんだよ。

トゥーイは、せわしくなくひとつ目を鎧の上で動かした。

「まあ、こんな空中で立ち話もなんだし…うちに来ないかい？ お

つと：お願いじゃなくて、強制だよ。こんなところで鎧姿で何をしていたか、告げ口されたくないだろう？」

立て板に水の勢いで、しかし真理の逃げ道をふさぐ言葉を吐く。

面倒な奴が。

真理は、内心で舌打ちした。

まだ、誰も殺してはいない。

だから、いくらでも現状をしらばっくれることは出来る。

しかし、1stの双子の息子に恥をかかせ、2ndには既に不審の眼で見られている今、何を告げ口されても面倒なことになるのは間違いなかった。

「このまま移動しよう：後で何か言われたら、演習中とでも答えておくさ」

そして――行きたくもない、3rdの屋敷に行く羽目となったのだ。

バルコニーに降りるなり、トゥーイは鎧を解いた。

零子も全て理解しているようで、人に戻るなりすぐさまバルコニーの戸を開けに動く。

「君も：解きなよ」

遅れて着地しながらも、真理は鎧を脱げずにいた。

まだ平静に戻れないでいるであろう早紀を、彼らの元にさらすことになる。

ふう。

覚悟を決めて、真理は鎧を脱いだ。

抜け殻となった鎧と向かい合う。

額を、なぞった。

瞬間。

泣き濡れた早紀の顔が現れ、そのまま前のめりに倒れこむ。

その身体を、真理は抱きとめた。

「どうしたんだい？」

彼の胸に顔をうずめたままの早紀に、怪訝な声が飛ぶ。

「…気にするな」

力の入っていない身体を、横抱きにするようにして、真理は室内へと入った。

「そんな…仲だったかな？」

「どうとでも…」

トゥーイの怪訝など、いまの彼には何の意味もない。

ただ。

早紀と、早紀の秘密を知る存在をどうすべきか——それだけが、最重要項目だったのだ。

※

「しかし、いきなりエンドリン家の婚約者を殺そうなんて…穏やかじゃないね」

ソファに対面で座る。

向かいには、トゥーイ一人。

真理は、早紀を膝の上に抱えたまま。

零子は、斜め後方から立ったままこちらを見ていた。

エンドリン家——タミのことだ。

婚約者ではない。

しかし、その否定は無意味だろう。

同じ家に、既に住んでいたのだ。

周囲にはそう思われていても、不思議ではなかった。

ハイクラスの魔女を雇用していたなど、信じる方が少ないだろう。

「痴情のもつれ……というわけではないんだろうし……何事かな？」

トゥーイの視線が、腕の中の早紀に向く。

「痴情のもつれだ」

真理は、淀みなくうそぶいた。

本当のことを、この男に言えるはずなどないのだ。

大体、こんなところに連れてこられたこと自体、本意ではない。

さっさと帰ってしまいたかった。

「はっ……うすら寒い嘘だな」

「嘘？」

トゥーイの言葉を、真理は冷たい疑問形で返した。

そう。

彼は、冷たい嘘をつこうとしたのだ。

「イデルグの双子と、俺がどうなったか…知っているだろう？」

この男が、先日情報を知らないはずがない。

自分の嫌な過去さえも、いまの真理は利用する気だった。

「まさか…」

トゥーイは、微かに鼻白んだ。

「あの女は、早紀を泣かせた」

早紀を、軽く抱きなおす。

何の抵抗もない。

もう、考える気力など、彼女には残っていないのだろう。

「君らしくない…」

疑いが、ほんの少し掠れる。

もう一押しか。

「らしくなくて…結構だ」

真理は、彼女をもう少し引き上げた。

ためらいなく、口づける。

真理の唇より――冷たかった。

あ

—
—
—

「ひでえ顔だな」

とぼとぼ歩いていた早紀に、声がかけられる。

ああ。

いつの間にか眠りの道を、歩いていたようだ。

彼女の前には、鎧の男が立っていた。

早紀の力について、一番詳しいはずの男。

「どこまで…知ってたの？」

ぼんやりと、言葉を発していた。

少しずつ、現実で起きたことが、早紀の頭の中で構築されていく。

「まあ…大体は、な」

悪びれる様子はない。

元々、彼は言ったではないか。

どんな力でも構わないと。

ただ、彼は思うまま戦うことができればいいのだ。

「そう…」

ぺたんと、その場に早紀は座り込んだ。

昼間。

彼女の魂が、引き裂かれるような爆弾が降ってきた。

私は父親は誰なのか——ではなく、私は誰なのか。

私は早紀で、でも本当は貴沙で。

ああ。

そこまで考えたら、目の前が一瞬だけ暗くなった。

ああ、そうだったのかと。

貴沙の子どもだから、早紀とつけられたわけではなかったのだ。

キサが裏返ったから、サキと。

名前を、裏返しただけ。

「本当のことを…知りたいか？」

頭の上で、鎧の男の声がする。

のろのろと、彼を見上げる。

「だって…知らないでしょ？」

知るはずがない。

裏返ったのは、むかしむかしの話。

「…ここは俺の世界だぜ。そんでもって、目の前にお前さんの魂がある」

金属の手が、大きく広げられるように、見上げる早紀の顔に近づいてくる。

あ。

今度こそ、本当に目の前が真っ暗になってしまった。

葵

—
—
—

「こんばんは…あなた魔女ね」

大きな屋敷の窓辺。

おかっぱの女が、嬉しそうに見上げてくる。

レトロなホウキの上に横座りしたまま、貴沙は空中から女を見下ろしていた。

それが——出会い。

葵は、オカルト好きな変な女だった。

毎日、あの手この手で、魔の者を呼びだそうとしていたのだ。

偶然に偶然が重なって、その一つが成功した。

たまたま近くを飛んでいた、貴沙がそれに反応したのである。

無視出来ないことはなかったが、好奇心からふらりと近づいた。

ぷい、と無視して彼女は飛び去った。

面白いと思えなかったのだ。

その後、また近くを飛んでいる時に、稚拙な人間の召喚を感じた。

ちょうど、貴沙はムシヤクシャしていた。

だから、あの人間に悪さでもしてやろうと思ったのだ。

うかつに魔女なんかを呼ぼうとすると、ひどい目にあうと——それを教えてあげるのよ。

そうしたら。

先客がいた。

「あなた、悪魔ね！」

あのオカルト馬鹿女は、下級魔族を部屋に引っ張り込もうとしていた。

運の悪いことに、同じ学校の同じロークラスの魔族で。

だいつ嫌いな奴だった。

むしゃくしゃに、更なるムカっぱらが上乘せされ。

「はあい…そこのハエもどき、アタシの獲物を横取りするのはやめてねー」

ホウキに乗ったまま、奴の後頭部にアタックをかけたのだった。

「ぐえぼっ!!」

こんな一撃を簡単に食らうから、ハエもどきで十分だ。

魔族の中でうだつが上がらないから、人間なんぞをいたぶってウサを晴らそうとしていたに違いない。

貴沙は、自分が何故ここに來たのか、その理由を軽く棚上げしながら、邪魔者を追い払おうとした。

「お前！ 貴沙！」

ハエのくせに、反撃に出ようとする魔族に向かって。

彼女は、ホウキの上から、更に大上段の視線で見下ろした。

「…暴くわよ」

それが貴沙の――殺し文句。

※

なんで好きになったかなんて、貴沙は考えもしなかった。

ただ、この寿命も短く、ひねっただけで軽く死んでしまいそうな人間を、彼女は結局、気に入ってしまったのだ。

気に入ってしまったら、それが全てだ。

毎夜毎夜。

彼女は、葵の元へと飛んできては、くだらない話を話したり聞いたりした。

そんな付き合いをしつつ、一年ほどたった時。

葵は——倒れた。

そこでようやく、貴沙は理解したのだ。

自分が持つ魔気が、人間を弱らせる事実を。

知らなかったわけではない。

ただ、どの程度弱るのかなんて、これまで人間と付き合ったことがなかったから知らなかったのだ。

このまま、葵の元へ通い続ければ、彼女は死んでしまうかもしれない。

そこで、身を引く——あいにく貴沙は、そんなタマではなかった。

「へえ、海族にはそんな面白い珠があるのね」

魔力は弱いが、無駄に知識だけは持っている魔族を軽く『暴き』、貴沙はその情報を手に入れたのだ。

人間と、一番上手に付き合える種族が、そいつらだったのだ。

能力を裏返す珠。

貴沙の魔力は、天力に裏返るのだろうか。

それはそれで、面白そうだった。

もし、彼女が天力を得たなら、魔族の全てを自由に暴けるようになる。

勿論、相手の魔力も自分に強く効くようになるだろうが、それもまた一興。

何より。

天力は、人間にとっては幸福を産む力、と言われていた。

天族は滅多に人間には接触しないようだが、魔力とは逆の意味で作用するのだろう。

だから貴沙は。

海族の世界へと、身ひとつで飛び込んだのだ。

魔と天の力が交錯するそこは、彼女にとって悪い戦場ではなかった。

そして。

「はあい」

ズブ濡れの魔女は、葵の部屋に降り立った。

「どうしたの？」

横になっていた彼女が、驚いて起き上がる。

「ちょっと海まで、ね…それより面白いものを手に入れたわ」

濡れたままベッドの端に腰かけ、手のひらを開いて見せる。

虹色の真珠ほどの——美しい海の宝だった。

呼ぶ人

――

バチンッ。

いきなり無理に電気がつけられたように、早紀は目を開けた。

目の前には、鎧の男。

「夢の中で、長く寝ると帰って来られなくなるからな」

あっさりとした言葉に、彼女の方が戸惑っていた。

さっきのは。

自分が知らないはずの、母たちの世界。

それが、早紀の中にあっただ。

鎧の男は、彼女の中からその記憶を引きずり出したのである。

ああ。

ああ、本当に。

自分は、貴沙だったのか――じわじわと、足元からその現実が這い上がってくる。

どこか、現実的ではない事実だった。

本当は間違いですよ、と言われたら、喜んで納得しただろう。

あの、派手で高慢で美しい魔女。

イデルグに惚れられ、育ての母に愛された女。

それが、それがこの早紀だと。

地味で、姿を隠す能力しかない——早紀は、自分の思考に硬直した。

「なるほど…」

心が通じてしまったらしい鎧が、小さく笑った。

「そうか…『暴き』の反対なら『秘める』、か」

逃げ場が、ない。

どこにも、ない。

夢の中さえも、早紀は現実にぐるぐる巻きだ。

そして、その現実で貴沙を待っている人がいる。

育ての母——いや、葵だ。

愛した友の帰りを、病床で待ち続けている。

早紀を待つてなんかいなかった。

誰も自分を。

待つてなんか。

「ああもう……いいから目を覚ませ」

彼女の渦巻く思考を鬱陶しそうに、鎧の男が言い放つ。

ついでに。

夢から蹴り落とされた。

※

朝。

にしては、少し早いようだ。

部屋の中は、まだ真っ暗で。

そして。

「……！」

違う匂いがした。

早紀が、はっと顔を上げると。

ほんのすぐ側に——シャツがあった。

空っぽのシャツではなく、中身の詰まったシャツ。

それを、早紀は両手で強く握り締めていた。

驚きつつ、顔を上げると。

真理が、いた。

しかも、目は開いている。

何故、彼が。

そこまで考えかけて、早紀はうすらぼんやりと昨日の出来事を思い出すのだ。

とにかく昨日の彼女は、何かにしがみついていなければ、自分という存在を保つことも出来ない有様で。

ただひたすらに、目の前にある誰かに掴まり続けていたのだ。

病院の窓から飛び出した時も。

鎧を解除された時も。

その途中で、本当に何も分からなくなった。

いまもなお、シャツにしがみついているということは。

早紀は眠ってもなお、真理を離さなかったのだ。

彼は自分を見ている。

そんな彼を、自分は見ている。

何を、どう言えはいいのか分からなかった。

私は本当は真理より年上で、早紀という生き物ではなくて、この能力もただ単に母の力がひっくりかえっただけです。

既に、どこまで彼が知っているのかは分からない。

もしかしたら、真実を知らないのかもしれない。

真実を知らないというのならば。

この事実こそ、早紀は秘めたいと願った。

でなければ。

でなければ、自分を『早紀』と呼ぶ人は、誰もいなくなってしまうのだ。

「う…」

こみあげる何かを、彼女は飲み込もうとした。

指も、離せない。

真理は、何も言わなかった。

指も——ひきはがされなかった。

これから

—
—
—

もはや、何の手立ても間に合わない。

その事実を、真理は理解していた。

案の定、タミはこの屋敷には帰ってはこなかった。

既に早紀の情報は、他に漏れたと言っているだろう。

ふう。

小さく小さく吐息をつく。

無意識に、自分が他人を気遣っていることに気づいて自嘲する。

同じベッドの中には早紀がいて、彼のすぐ側に寄り添っているのだ。

シャツも掴まれたままのため、お互い昨日の制服のまま。

本気で真理が引きはがそうとするならば、それは簡単に出来た。

だが。

もしいま彼女を一人にして、そしてフラフラ屋敷を出て行かれましたら——取り返しがつかないことになりかねなかったのだ。

早紀の存在は、明確に爆弾となった。

タミの一族なら、実験台に彼女を使いたいだろう。

あの海族は、宝を取り返したがっている。

情報は、力だ。

タミの一族も、無作為にバラまいたりすることはないはず。

もうしばらくは、その秘密は小さい世界で留まるだろう。

だが、何らかに利用しようと考えているのは間違いなかった。

そこまで考えて、真理はふと思考を止めるのだ。

自分が、早紀を早紀として止めおこうとしている事実には、気づいてしまったのである。

元々、憑き魔女などいなかったのだ。

それならば、憑き魔女が誰であっても構わないではないか。

早紀の中の海の力を取り除き、貴沙に戻したとして何の不都合もない。

腕の中の、早紀を見下ろす。

そう。

誰でも、構わないではないか。

瞼が。

動いた。

湿ったままのまつ毛が、重そうに持ちあがる。

赤く汚れた黒い瞳が、ゆっくりと彼を見上げる。

その目は——早紀でいたがっていた。

※

ようやく早紀の指が離れた真理は、ベッドから起き上がることが出来た。

すぐに、自室に戻り修平を呼ぶ。

昨日の事件の真実を、彼はまだ知らないのだ。

既に他家に知られたことを、身内に隠している必要はなかった。

「……」

黙って真理の説明を聞いていた彼は、ちらりと横を見る。

早紀のいる部屋は、ここよりもっと離れているのだから、そんな

ところから見えるはずなどないのだが。

「なるほど…彼女は実は貴沙だった、と」

「そうだ」

「それを、タミ嬢に知れたと」

「…そうだ」

短い確認の後、修平は考えを巡らせているようだった。

「上の連中に知られたら、普通なら外せと言われるだろうね。青ごときの宝珠など」

そうだろうな。

彼の言葉は、真理の予測の範囲内だった。

理由は二つ。

青の干渉を受けた、魔の鎧などあってはならないという魔族のプライド。

もう一つは——取りだした海族の宝珠を、存分に調べたいという技術畑の存在だ。

その中には、おそらく鎧鍛冶の一族たちも入っているだろう。

だが。

早紀から宝珠を取り除く方法を知っているのは、海族だ。

魔族が、彼らに助力を頼むはずなどなく、ましてや取り出した珠を、海族が渡すはずもなく。

ということは。

「彼女を…取り上げられるだろうね」

ピシッ。

何か、音がした。

氷が割れるような音。

「彼女から珠を取り出すまで、君も出撃できなくなるな」

ピシピシッ。

「…そう怒らないでくれよ」

そう言われるまで、真理は自分が強い冷気を放っている事実に着いていなかった。

どうでもいい

――

学校にも行かず、早紀は自室でぼんやりしていた。

自墮落にベッドで横になったまま。

だが、この部屋には地雷がある。

彼女は、さっきからその地雷を踏んでいた。

そう。

母――葵の写真だ。

いや、もう母親ではない。

貴沙の友達。

そう思うと、見てはしまうのに、まともに顔を見つめられない。

そういえば。

この写真に映っているのは、葵だけだ。

小さな早紀と、一緒に写っている写真ではない。

満面に笑っている顔。

これは、誰に向けられた笑顔だったのか。

そもそも何故、自分はこの写真をずっと持っていたのか。

小さかった早紀が、自分で写真が撮れるはずもない。

自分でアルバムを開けて、母の写真だけくすねてきた記憶もない。

なのに、この写真だけは早紀はずっと大事に持っていた。

ああ。

布団に顔をうずめる。

また、だ。

また、自分が早紀ではなくなっていく。

この写真は、きっと葵が持たせたものだ。

いつか早紀の呪いが解けて貴沙に戻った時、自分を思い出しても
らえるように。

一番、幸せそうに笑った自分を、戻った貴沙に見せたかったのだ。

早紀に、じゃない。

この笑顔は、彼女に向けられたものじゃない。

写真立てごと叩き割りたい気持ちがわきあがるが——出来ない。

出来ない出来ない出来ない。

貴沙の残した呪いがあるとすれば、それはこの衝動的な愛情。
この呪縛がある限り、彼女はこの写真を見続けなければならない
のだ。

そんな、一人苦しむ早紀の部屋が。

ノックもなしに、不躰にドアが開かれる。

驚いて顔を上げると。

そこには——冷気を漂わせた真理がいた。

※

怒っている。

それは、すぐに分かった。

怒って、早紀の部屋にやってきた。

理由は分からない。

いや、ありすぎる、のほうが正しいか。

彼女は、真理にとってあまりに問題を抱えた魔女だ。

だから怒っても当たりま——あつ。

ツカツカ淀みない足取りで近づいてくる姿に、反応できずにいた早紀は。

目の前に立った彼が、手を伸ばすのをどこか遠い意識で見ていた。

気づいたら。

鎧になっていた。

なん、で。

蝕ではない。

しかも、まだ昼間。

なのに彼は、早紀を鎧に変え、なおも手を伸ばすのだ。

彼女を身に纏うために。

満たされる。

これまで、何度も真理はそうして早紀を満たした。

昨日でさえも。

その痛いほど切ない充足感が、自分に広がってゆく。

こんな空々しい幸せなど、いらないうのに。

早紀の部屋のバルコニーから、そして飛び立つのだ。

どこへ。

身を任せたまま、早紀は空を見た。

憂鬱そのものの曇天。

その雲そのものに、彼は向かっているように思える。

まっすぐまっすぐ、真上に。

暗い水蒸気の群れに突っ込み——そして、抜けた。

雲海を足もとに見下ろす、明るい太陽の世界。

魔族には、不似合いな美しさだ。

そんな世界の真ん中で、真理は動きを止めた。

何を言うでもない。

何をするでもない。

おそらく、目的もない雲の上。

そんな無駄な飛翔。

真理にしては、ありえないほどの無駄だ。

ああ。

ぼんやりと、早紀は思った。

真理もまた、彼女の存在を持てあましているのだと。

持てあまして、どうしようもなくなることがあるのだ、と。

そう思ったら。

ちょっとだけ、彼をいとおしく思えた。

※

「私…このままでいたい」

鎧から生身の身体に戻った早紀は、自分に印をつけた男に、そう
言ってみる。

早紀の部屋。

ついさっき、バルコニーに舞い降りたのだ。

長い散歩だった。

雲海に日が沈む様を、生まれて初めて早紀は見たのだ。

その間中。

真理は黙っていたし、早紀もステルスで遮断したままだった。

ただ。

お互い黙ったままだが、ずっと側にいた気がしたのだ。

同じ太陽を見ていた。

なにかが、真理とつながったわけではない。

でも、彼が自分を必要としてくれている気がしたのだ。

早紀である自分を。

本当は、貴沙でもいいのかもしれない。

どっちだって、彼が鎧として使えたら関係ないのかも。

だから。

早紀として生まれて初めて、相手を試そうとした。

その言葉が——「私…このままでいたい」

持てあますほど面倒な彼女に、真理はなんと答えるのか。

彼は、自分を見ている。

怒りの冷気は散歩中に消えたのか、なりをひそめていた。

ただ、静かに早紀を見ている。

その身体が。

すうっと歩き出す。

部屋を出て行くつもりなのだ。

あつと。

早紀は、彼を視線で追いかけていた。

返事もせずに、行ってしまうのか。

彼女にとって、この世で一番大事な言葉だったのに。

崖っぷちに立った状態で、どっちに進むかを決める権利を真理に託したというのに。

待って。

待って、いけないで。

伸ばしかけた手の向こうで、真理は——足を止めた。

「好きにすればいい」

権利が、投げ戻された。

静かな真理の唇から、振り返りもせずにごぼれた音。

瞬間。

早紀の身体に、しびれが走った。

ああ、ああ。

好きにすればいい、と。

早紀でいたければ、早紀でいていいのだと、そう言われたのだ。

どうでもいい、ではなかった。

当然

――

何が起きたか、分からなかった。

真理は、扉を見たまま立ち止まっていただけだ。

その背中に。

何かが触れた。

そつと。

本当に、そつと。

小さい接触。

彼の後ろにいるのは、早紀一人。

彼女が、手で真理の背中に触れているのだ。

「……………」

『その』感覚を、彼は思考にできなかった。

不快ではない。

不快ならば、すぐに振り払っている。

そうではなくて。

触れている手の上の方——肩のあたりに、今度は別の何かが触れる。

微かな息遣いが、近くにある気がした。

早紀が、頭を押しあてたのだろう。

そうか。

不可解な感覚の理由に、真理は思い当たった。

これまで、彼を避け続けた相手が、自分から触れてきた事実に驚いたのだ、と。

あの早紀が。

あの早紀が、自分から真理に触れてきたのだ。

何かが、伝わってくる。

背中と肩から、彼女の何かが。

「真理の…鎧として生きるわ」

その何かが、音になる。

小さな小さな、ため息のような音。

それは、微かに真理の産毛をざわめかせた。

分かった。

早紀が自分に向けているのは、好意だ。

真理がこれまで、彼女からむしりとりとしたその感情が、いますぐ後ろにある。

「当然だ」

彼もまた。

貴沙と早紀という二枚のカードから、早紀をひいたのだ。

「好きにしろ」という言葉の瞬間に。

触れてみた

早紀が、動物のようになついた。

いや。

子どものようになついた。

真理が視界から消えるのを、まるで恐れるようになってくる。

部屋にさえ。

彼女は、自分の部屋にさえ戻るのがいやがり、真理の部屋に居ついたのだ。

夜さえも。

理由など、分かっている。

もはや、彼女が『早紀』であることを認め、守れるのが真理しかないからだ。

つい先日、真実を知るまで母親に精神的に依存していたように、早紀はいま真理に依存しているのである。

スイッチが入ると、とにかく彼女は極端に動き始めるのだ。

望んでいたことだった。

真理は、隣で眠る彼女を見る。

ただ、自分のために尽くす憑き魔女。

それを、彼は手に入れたのだ。

なのに。

満足出来ていない自分もまた、真理の内にある。

自分が欲しかったのは、本当にこれなのかと。

それに、問題もまだ何も解決してはいない。

まだエンドリン家には、動きはない。

真理の方から、取引を持ちかける材料もまた、ない。

向こうが、早紀以外の取引に応じるとは、思えないからだ。

鎧鍛冶の一族。

タミを見れば分かるように、彼らは力を追い求めるのである。

真理の誇りが戦いにあるように、彼らの誇りは鎧にあるのだ。

早紀は、格好の獲物だろう。

そう考えると、いまの早紀の状態は好都合だった。

授業時以外、彼女が視界から離れることはない。

さらわれる可能性は、限りなく低いということだ。

夜が更ける。

早紀は、死んだように眠ったまま。

おそらく、鎧の世界にいつているのだろう。

ふと。

額の印に——ただ、触れてみた。

逃げ込め

――

「まさか、当主になつくとはな」

鎧の出迎えの言葉は、面白くなさそうなもの。

不快というよりは、つまらないという響きだ。

「別に…いいでしょ」

早紀は警戒して、鎧と距離を取る。

最近の眠りの中では、ずっとこんな感じだ。

彼が自分を害すると、考えているわけではない。

彼がまた、貴沙の記憶を見せるのではないか――それを恐れているのだ。

もう、あんなものはいらなかった。

自分はただ、早紀でありたい。

早紀であることを脅かすものに、近づきたくないのだ。

「馬鹿な奴だ…」

その警戒を、鎧は低い笑いで蹴り飛ばす。

「せっかく、オレがきっかけを作ってやってんのに…見たくない、
考えない、知ろうとしない」

やれやれ。

うんざりした声を、わざと作っている気がする。

早紀を、挑発しようとしているような。

しかし、言っている意味なんか、分かるはずもない。

「死×死の意味は…分かっただろう？」

なにを。

鎧は、何を言おうとしているのか。

近づきながら、上から見下ろしながら、彼女に何かを考えさせようとしている。

「わ…私が何かを知ったところで…どうなるの。あなたは、力さえあればそれでいいんでしょ」

憑き魔女が、貴沙でも早紀でもいいというのならば。

それでよいのならば、わざわざ彼女をかき回すようなことをしないでいいのだ。

何故、こんな禅問答のようなことを言うのか。

鎧は——足を止めた。

早紀を見下ろす。

漏らされたのは、吐息。

「じゃあ…お前さんに得になることを、ひとつ教えてやるよ」

そして、言葉。

「どうしようもなく追い詰められたら…鎧に逃げ込め」

意味なんか理解できないうちに——目が覚めた。

呪文のように

「随分：雰囲気が変わったね」

早紀は、見つかった。

彼女のステルスを持っても「いる」と理解されている相手には、完璧な効力を発揮しているわけではない。

ましてや、相手は零子という目を持っていて。

そう、トゥーイだ。

授業の隙間に、早紀を見にきたのか。

「……」

黙ったまま、身構える。

タミには、既に彼女の秘密を知られているのだ。

いつ、他に漏れるか分からない。

それに。

特に、学校で気をつけるように真理に言われていた。

イデルグの双子とタミと——この二人に。

「青が…カシユメルの屋敷に来たって本当かい？」

早紀の無言など気にせず、トウーイは質問をする。

「……………」

うつむいて、唇をなお閉ざした。

真理から、引き出せなかったに違いない。

彼女から、情報を得ようというのか。

二人の、強い眼差しに射られながら、早紀は小さくなることだけに努めた。

「青が…人間の女を連れてきたって…本当かい？」

質問が。

変わった。

刹那、早紀の脳裏を駆け抜けるあの光景。

門の向こう側。

伊瀬と、その腕の中の――

唇を、強く噛みしめる。

顔も上げない。

早紀でいたい、早紀でいたい。

呪文のように、それだけを繰り返す。

そのためなら、どんな荒れ地にだってずっと伏せている。

質問と、視線が消えた。

早紀が顔を上げずにはいられないほど、はつきりと。

トゥーイは、教室の入口の方を振り返っていた。

真理が、いた。

いや——来てくれた。

主人というより

――

「ふうん…」

トゥーイは、ひとつの目で真理を面白くなさそうに見ていた。

早紀は、彼を見つけるやいなや、席を立てかけてくる。

そして、真理の陰に隠れるのだ。

「そんな姿を見ると、この間の君の話もあながち嘘ではなく思えてくるね…けど、本当に信じたわけじゃないよ」

トゥーイは、一瞬だけ視線を零子に投げる。

引き上げの合図だったのだろう。

二人は、ロークラスの教室を出て行きかけた。

入口の真理の側で、一度立ち止まる。

「主人というよりは…ナイト様だな、君はまるで」

クツと。

挑発気味に、トゥーイが笑った。

こめかみが、ぴりっとする瞬間だ。

挑発だと分かっているからこそ、それ以上感情を荒れさせずにすむ。

捨て台詞も済んだようなので、引き上げるだろう。

真理が、そう思った時。

進みかけた足を、トゥーイはもう一度止めるではないか。

まだあるのか。

うんざりしつつ、真理はあらぬところを見た。

「そうそう：決着がついたよ」

だが、言われた言葉には、心当たりがなかった。

何の話だ。

視線だけで怪訝を伝えようと、トゥーイは低く笑って見せる。

「何って：イデルグ家の家督相続だよ」

将来の、僕らのライバルが決まったんだよ。

瞬間。

脳裏に、あの双子が甦る。

決着がついた——どちらかが死んだ、ということか。

「どっちが継いだかは…自分の目で確かめるといい」

そこまで言い置いて、ようやくトゥーイは去った。

双子のことを思いめぐらそうとしたが、抵抗感に止められた。

早紀が、彼のシャツを握っている。

そして自分を見ている。

双子の決着に、何か思うところでもあったのか。

もしくは、トゥーイらの訪問そのものの影響か。

その瞳は、とても何かを恐れていた。

「大丈夫だ…」

気づいたら——そう語りかけていた。

椅子取り

—
—
—

双子の片方が死んだ——かもしれない。

その事実、早紀を恐れさせた。

別人格の二人だが、双子だ。

どこかで、彼らをセットで見っていたことは、否定できなかった。

一人の中の、二つの人格のように。

その片方が。

消された。

たとえ生きていたとしても、もうおそらく前と同じではありえない。

一つしかない席を、奪い合って負けたのだから。

それが、自分と貴沙に似ている気がした。

席は、ひとつしかない。

座れるのは、自分か貴沙。

最初に貴沙が座っていたところを、次に自分が座った。

じゃあ次は？

貴沙には、まだチャンスがある。

彼女の中の、宝珠を取りさえすればいいのだから。

そして、今度彼女にチャンスが回ったら——自分のチャンスは、もう二度と回ってこない気がしたのだ。

そう思ったら。

真理のシャツを握っていた。

目の前にある、早紀の最後の綱。

彼が、『早紀』を望んでくれる限り、貴沙の番は回ってこない。

それだけが、彼女のすがるところなのだ。

「大丈夫だ…」

声が。

真理の声が、降ってくる。

彼女の魂を、震えさせるほどの音。

彼は、こんなに誰かを安心させるような言葉を吐く人ではない。

分かっていたからこそ、じつと真理を見てしまう。

何故、そんなことを言ってくれるのか、と。

何故、早紀をとどめてくれようとしているのか、と。

どう、して。

声に出来ずに、唇だけ動いた。

声にしてしまえば、失望する返事がきそうで。

だが、彼は早紀の唇の動きを見ていた。

言葉と同じ意味は、きっと届いたはずだ。

だが。

真理は、ゆっくりと視線を斜め上に向けた。

次の授業の、始業ベルが鳴ったのだ。

もっと違うもの

――

「お話があります…」

来たのは――タミだった。

放課後。

帰ろうと立ち上がった真理の先に、彼女が現れたのだ。

好都合である。

どこまでエンドリン家に動きがあるのか、多少は探れるかもしれない。

ただ。

軽く周囲を見やる。

こんな学校で、話せる内容とは思えなかった。

ちらりと、タミも視線を動かす。

「うちの屋敷に来るといい」

彼女が、次の言葉を紡ぐより先に、彼は自分の意向を伝えた。

自分に有利になる先手を打ったのだ。

これならば、早紀も連れて帰ることが出来、安全圏に置いておける。

エンドリン家が、何の企みを持っているか分からないのだから。

しばしの沈黙の後。

「…兄も同行してよろしければ」

さすがに、一人で来る気にはならなかったようだ。

だが。

おかしい真似をする気がないことも、これで分かった。

「結構…」

言い置くと、真理は歩き出す。

もはや彼女が、真理と同じ車に乗るとは思えない。

後から兄と合流して、屋敷に来るだろう。

タミをかわし歩を進めると、早紀がこちらに向かってくるのが見える。

その足が、止まった。

真理の向こう側を見ている。

タミが見えたのだろう。

そして、きっとタミも早紀を見ているのだ。

動きを促すべく、ゆっくりと彼女の腕に触れると、電流が走ったかのように、はっと彼女は顔を上げた。

不安定な瞳と唇。

早紀は、何もかもから逃げようとした。

鎧になることから逃げ、自分の価値を見失って逃げ——そして、いまは貴沙から逃げている。

そして今、逃げの反動で、真理にすぎるのだ。

すがりつかれることでは、彼の心は満たされなかった。

早紀の好意は、その中にあるはずなのに。

おそらく。

自分は、もっと違うものを求めているのだ。

対価

――

「毎夜、お返しします」

タミの話を、早紀は身を固くして聞いていた。

エンドリンの兄妹が、屋敷にやってきたのだ。

早紀は、真理にくっついていたので、必然的に同席する形になり――
——つらい話を聞かされることとなった。

要するに。

珠を取り出す手段を調べるために、早紀を貸せと言ってきたのだ。

ただし、蝕が起きるかもしれないため、夜には返すと。

真理が要求をのみやすいよう、最初から譲歩してきたのだろう。

その譲歩を彼がのんでしまいそうで、とても怖かった。

隣にいる真理の袖に、触れ続けることでしかその怖さと戦えない。

「断ると…どうなる？」

早紀の方を見ないまま、彼は静かに言葉を続ける。

「そう…ですね…もっと上の方を巻き込むことになるかと」

ゆっくりゆっくり、タミが返した。

あきらめる気はない、と言っているのだ。

ふう、と。

真理が息を吐く。

それだけのことなのに、早紀は自分がびくついていることを知る。目の前に荷馬車があって、真理の心ひとつでそこに積み込まれるかと思うと、生きた心地がしなかったのだ。

「では」

言葉が、短く切られた。

「では、もっと上とやらを連れて、出直してもらおう」

真理の言葉の瞬間。

あ。

早紀は、喜ぶべき状況とは裏腹に、足もとの床が抜けおちた気分を味わわれた。

ひとつ話が進むたびに、早紀の秘密が広がり、不利になってゆく気がしたのだ。

不利——そう、真理にとって。

自分が自分でありたいと願うだけで、どれほどの対価が必要なのか。

本当に次に、その上とやらがやってきたら、彼はどう答えるのか。

逃げ場が、どんどん失われていく気がした。

ついに真理が、早紀から手を放してしまったら。

去ってゆくエンドリン兄妹の姿をぼんやりと見つめながら、彼女は真理の袖を掴むしかできなかったのだ。

おっと

「綺麗でしょ…」

言ったのは、貴沙。

「これ、なに？」

問いかけたのは、葵。

手のひらの中の、美しい珠。

早紀は——それを見ていた。

あつ。

その光景に、早紀は後ずさった。

また、だ。

また、鎧の男の見せる夢に引きずり込まれたのだ。

夢。

いや、自分の中にある過去の現実。

前は、貴沙として見ていた光景を、今度は少し離れて早紀として
見ている。

「これはね…青の珠。裏返りの…珠」

もてあそぶように、貴沙はそれを転がした。

自分を生みだす元凶となった世界が、いままさに目の前で流れている。

「裏返し？」

「そう…あたしは生まれ変わるの」

ふふふ。

閃かせる舌は、猫のよう。

傍から見ていると、本当に貴沙という女が魅惑的であったことが分かる。

彼女と自分が同一人物とは、とても信じられないほど。

「待って」

その手を、葵が止める。

「生まれ変わるって…何故？ 貴沙のままでいいじゃない」

顔色のよくない葵は、何も知らないのだ。

自分の病気のために、貴沙がそうしようとしていることを。

「私が嫌なのよ…せっかく面白い力を持ってたって、いまのままじや宝の持ち腐れだもの。これを飲めば、私は魔族の連中の中で暴れられるわ」

葵のことなど、関係ある素振りも見せない。

知らなければ、早紀だって騙されるほどの名演技だ。

「そんな…」

口ごもる葵に、貴沙は何かを言おうとしていた。

その唇が、はっと息を飲む。

目が。

「誰か…いるの!？」

彼女の目が、部屋の中をぐるりと巡った。

『おっと』

早紀の頭の中で、そんな声がする。

鎧の男の声だった。

気づいたら、彼の前にいて。

貴沙も葵もいなくなっていた。

「さっきの…何？」

何故か、ときどきする胸を押さえきれずに、早紀は問いかけた。

「さあて…なんだろうなあ」

素直に答える男では、なかった。

自分

ビクっとして。

目を開けた。

夢の中の心拍数を、そのまま現実世界に持ち出したかのように、胸が高鳴っている。

側には、真理がいた。

反射的に、その夜衣を掴む。

鎧の男が、何か企んでいる気がする。

それ以前に、現実ではひたひたと追い詰められている。

助けて、と。

目の前の真理にすぎる。

童話なら、彼は王子様だ。

王子ならば、どんなピンチも救ってくれて、そしてお姫様と幸せに暮らすのだ。

お、ひめ、さ、ま。

ざわっと。

背筋が騒いだ。

どこに。

どこに姫などいるのか、と。

真理がどれほど王子様であろうと、自分はただの下僕でしかない。

怪しい魔法をかけられた、ヒキガエルに過ぎないではないか。

温かいはずの毛布の中で、早紀は寒風に吹きさらされる。

そうなってしまったのなら。

寒くてしょうがないのなら。

たとえ自分がカエルであったとしても、目の前の王子にしがみつ
くしかない。

彼が払いのけない限り、身の程知らずの両生類らしく、夢を見て
現実から逃れているしかできないのだ。

その身体に腕を回し、自分よりも温かい身体にすり寄る。

助けて。

カエルのままでいいから。

魔法なんか解けて、元に戻らなくていいから。

真理は起きている。

目を開いて、早紀の行動を見ている。

ヒキガエルの自分を。

「憐れだな…」

あつ。

真理の言葉が——魂を刺した。

生身

あわれ、まれた。

言葉をそれ以上考えられないほど、早紀の頭の中は真っ白に塗りつぶされる。

そう。

いまの早紀は——かわいそうなのだ。

その『かわいそう』が、鋭く刺さったのである。

あ、あ。

すがった手を。

離す。

真理が、自分を見ている。

横たわったまま、早紀を見ている。

その目にあるのは、憐れみというものなのだと。

そう、彼は言うのだ。

身体を、引く。

完全に彼から離れる。

分かっていたではないか。

何を自分は、真理に期待をしていたのか。

かわいそうなヒギエルを、憐れみ以外で保護しようなんて考えるものはいないではないか。

あつ…あ…あああああああ！！！！

ぐちゃぐちゃに、なっていく。

頭の中も、そして魂の中も。

暗いはずの視界で、白や赤や紫の光が点滅する。

猛りに任せて叫びだしたい衝動と、吐き気がこみ上げる。

狂って、しまいかと思った。

真理が指を伸ばさなければ、狂ってしまったかもしれない。

額で描かれる円。

早紀は——狂うための生身を失った。

だが。

いつもとは違った。

固い鎧の中に溶けながら。

早紀は。

もっと深いところまで、溶けていったのだった。

夢ではない痛いなか

「待ってたぜ」

鎧の男が、立っている。

ついさっき会ったばかりの相手が、そこにいる。

しかし、雰囲気違った。

現実の狂気を引きずったまま、早紀はその足元に座り込んでいて。

ただ、ぜいぜいと息を繰り返す。

「さあ…これでもっと俺の影響が大きくなる…戦ってこい」

そんなボロボロの早紀に、彼は戦えというのだ。

一体何と。

考える間もなく、早紀は叩き落とされていた。

ついさっき体験した、あの光景の中に。

「誰か…いるの!？」

貴沙だ。

巡らされる視線。

その瞳の中に――早紀が映った。

「あ…」

声が、出た。

自分の身体が、はっきりとそこに『ある』ことを感じた。

「あんた…誰よ」

貴沙は、はっきりと自分を認識している。

そして、攻撃的に誰何してきた。

おかしい。

おかしいに決まっている。

だって、ここは夢の中なのだ。

そこで、昔話を聞かされていただけ。

それなのに、何故自分が認識されるのか。

「誰かって…聞いているのよ」

珠をぎゅっと握り込んで、貴沙がベッドを下り、こちらに歩いてくる。

ずぶ濡れのまま。

葵も、自分を見つけたのだろう。

驚いた顔で早紀を見ている。

これは、何？

「人間？ …いや、魔族ね…何をしにきたのよ」

問答無用に突き飛ばされる。

なすすべもなく、床に転がった。

痛かった。

※

痛い。

床に打ちつけた身体が。

とっさについた手が。

ジンジンと痛みを伝えてくる。

その痛みが、早紀に教えてくれるのだ。

いま彼女のいる光景が——現実だと。

あ。

鎧の男の言葉が甦る。

『戦ってこい』、と。

過去と、戦ってこいと。

そう彼は言うのか。

そしてもう一つ、男は言った。

『死×死』の話を。

少し前のことだった。

意味深に言われたその言葉は、もしかしてこの事とつながっていたのではないか。

早紀は、二度死んだ。

死んだことが大事なのではない。

同じものを二つ掛け合わせる——それが、鍵ではないのか。

いま。

早紀は、夢の中の鎧の世界で、彼に更に夢に突き落とされた。

夢の中で見る夢。

それは、『夢×夢』ということではないのだろうか。

答えは。

その答えは。

「何とか言ったらどうなの？ このグズ！」

貴沙が、上から彼女を容赦なく罵倒する。

「は…ははは…」

早紀は、笑ってしまった。

床に座り込んだまま、笑いが止められなかった。

ゆっくりと。

本当にゆっくりと、早紀は立ち上がる。

椅子を奪い合う相手が、いま彼女の目の前にいるのだ。

それが、悲しいほどおかしくてしょうがなかった。

「私は…あなたよ。あなたは…私」

知っているのは私——知らないのは、あなた。

※

「何言ってるの？ 頭大丈夫？」

貴沙は、まったく取り合う様子はない。

珠を握る手を解く様子もなく、立ち上がった早紀を真っ向から睨みつける。

「あなた、いまからその珠を飲むんでしょ？」

早紀は、彼女の手元へと視線を落とした。

知っている。

「飲むと…力が裏返る。そう思ってるんでしょ？」

知っていることを貴沙に告げることが、一体何につながるか——
そんな後のことは考えもしないで、早紀は言葉が続ける。

貴沙の目に、前以上の警戒を感じた。

だが、その警戒が戸惑いに変わる。

ああ、そうか。

そう。

彼女の能力は、『暴き』。

おそらく、早紀を暴こうとしたのだ。

暴けなかったのか、暴いたのか。

その結果など、どちらでもいい。

どちらにせよ、貴沙は戸惑わざるを得ないのだ。

暴けなかった事実か、暴いた内容か。

暴けたのなら、こんなに滑稽なことはない。

早紀を暴いたところで、結局は自分だと思い知るだけなのだから。

「それを飲んだら…こうなるのよ」

彼女は、笑いながら両手を広げた。

自分をよく見せたのだ。

美しくもなく、華やかでもない——ヒキガエルの自分を。

「能力は裏返ったわ…でも、魔力そのものは裏返らなかった」

貴沙が、一歩下がるのを見ながら、早紀は伝える。

そう。

伝えていたのだ。

自分でいたいと、どんなに逃げ回っただろう。

けれど、真理に守ってもらおうとすがりついて、憐れまれていることに気づいた。

結局——彼に、お姫様ではない、ヒキガエルの姿を鏡で見せられてしまったのだ。

真理の目を、思い出す。

ああ、そうか。

お姫様として、見て欲しかったのだ、自分は。

涙が。

あふれた。

※

「貴沙？」

その異様な光景を、葵はどう見ていたのだろうか。

貴沙は言葉を失い、早紀は泣き崩れた。

そんな空気を、葵がゆっくりと壊したのだ。

「貴沙…この子になるの？」

問いかげに、空気が震えた。

震わせたのは、貴沙だ。

早紀の頭の上で、大きく気配が動いた。

「ば、バカじゃない？　こんなしょうもない魔女の戯言なんか信じたの？」

キツイ音の言葉——だが、語尾が震えている。

「この子に…なるのね」

ベッドの上の人が、動く音。

顔を上げると、濡れた視界の中で、葵がベッドから降り立つところだった。

「別にね…私、死んでもいいんだよ」

笑う、白い顔。

「貴沙と一緒にいて、それで死んでしまうなら…いいんだ。楽しかったし」

貴沙に近づく、そして伸ばされる手。

「うるさいわね！ 死にたければ勝手に死ねばいいでしょ！」

その手を、彼女は容赦なく払いのける。

嗚呼。

早紀は、それを見ていた。

素直ではない貴沙の様子を。

「私は、ただ魔族の中で暴れたいだけよ。あんたなんか関係ないわよ！」

貴沙が暴言を続ける中、それでも葵は笑っている。

「でも…貴沙がいなくなるのは…やだな」

噛み合わない会話の奥に——でも、愛が見えた。

魔族と人の、噛み合わない愛。

「裏返らなくていいよ…貴沙のままでもいい」

もう一度、伸ばされる手。

白い手のひらが、上を向いている。

貴沙から、珠を受け取ろうというのか。

彼女が、飲んでしまわないように。

「うるさいうるさいうるさい！」

子供のように、貴沙は地団太を踏みつけた。

そして、早紀をキッと睨みつける。

「あんだなんかが来るから！」

目を吊り上げて怒鳴られる。

どうやら——彼女の計画を、台無しにしてしまったようだ。

独り

—
—
—

真理は、鎧になった早紀に入ろうとした。

彼の言葉で、早紀の自我が歪んだのを感じて、鎧にしたのだ。

うまく落ち着かせる言葉を探すより、それが早かった。

そして。

彼女の中に入ろうとしたのだ。

が。

「……！」

初めて——鎧が拒んだ。

触れれば受け入れるはずの鎧が、真理の指をはじいたのだ。

予想外の出来事に、彼は自分の指を見た。

もう一度、今度はそつと触れる。

だが。

金属の塊は、やはり真理を受け付けない。

反射的に、彼は早紀の気配をたどった。

目の前にいるのだから、たとえ鎧になっていようと、それはあるはずだ。

なのに、気配はどこにもなかった。

いつもつながっているはずの一本の糸が、どこにもない。

ということは。

鎧の中に、早紀はいないということだ。

「……!!」

その兜に、真理は両手で触れた。

抜け殻の、ただの金属。

そんなものと、添い寝をするようにベッドに横たわっている滑稽な光景。

一体。

鎧になる寸前の、早紀の様子が気になった。

しかし、すぐに解決法に気がつく。

そうだと。

鎧を解けばいいのだ。

その額をもう一度なぞれば。

早紀は――戻ってはこなかった。

鎧は、ただあるがまま。

最初から空っぽであったかのように、そこに転がっているだけ。

真理の契約者は。

いなくなってしまった。

二つの力

一一一

貴沙は、行ってしまった。

早紀の存在が気に入らないように、暴言の限りを尽くしてホウキで飛び去ってしまったのだ。

残されたのは、葵と早紀。

この世界に紛れ込んだ異端の早紀は、ただ泣いているしか出来なかった。

これで、終わったのだろうか、と。

もしも、本当にここが現実とつながっているのなら、貴沙はきつと珠を飲まないだろう。

そうなれば、自分は生まれないのだ。

真理との思い出も、自分としての意識も、全て遡って消えるのか。

ああ。

消えるなら、早く。

こんな悲しくて辛い思いを、長い間味わわれるのは嫌だった。

涙の海に溺れてしまう前に、早く首を切り落として欲しかった。

「あなた…泣き虫なのね。貴沙と反対だわ」

ベッドに座ったまま辛い吐息をつきながら、葵はゆっくりと早紀に声をかける。

「ねえ、ひとつ聞いていい？」

首の皮がつながったまま苦しむ早紀に、彼女は質問しようというのか。

顔もあげられず、自分の両手に涙をため続ける。

「どのくらい未来に、あなたがいるかは知らないけど…そこで、私は生きてる？」

泣きながら聞くその声は、普通に興味深い色をしていた。

この女性は、窓辺に現れた貴沙を喜んで受け入れた変人だったのだ。

それ以前に、自ら魔族を呼び寄せようとさえしていた。

だから。

早紀が悲しんでいようが、不思議な質問をするのである。

声がうまく出せずに、しかし、早紀はうなづくことで答えた。

自分が消えるまでの時間を、少しでも他のことでつぶすために。

「あ、そうなんだ…そっか」

考え込む声。

静かになる部屋。

その静けさが、貴沙の出て行った時に開いたままの窓辺から入る、微かな風の音を際立たせた。

「そっか…結果的に、あなたが私に生きる力を与えたのね…きつと」
ぽつり。

呟かれたその音は——微かな風に乗ったように聞こえた。

※

窓は、開いていた。

そして、風が微かに吹いていた。

その風が、実は吹いたのではなく、連れてきた者がいたという事実を知ったのは、早紀が顔を上げた時で。

涙まみれの視界の中。

早紀は、舞い戻った魔女の足を見るのだ。

ホウキから伸びる、綺麗な足を。

飛び去ったはずの貴沙が、反転してきたのだ。

ホウキは、降りてきた。

そして、早紀を睨むのだ。

「貴沙」

葵の呼び掛けを無視して、彼女は早紀に手を伸ばす。

「ああそう！ あんたでもいいんだ！」

胸ぐらを捕まれ、怒鳴られる。

「あんたでも、役に立ったのね！ ああ、ムカつくわ！」

何を怒っているのか。

ゆさぶられながら、早紀はもう一人の自分を見るのだ。

怒りの向こうに、悔しさが見える。

役に――ああ。

さっきの、葵の問いかけを、彼女は聞いていたのか。

葵は生き延びたのか、という話だ。

貴沙ではなく、早紀がいたのに生き延びた。

『私』がいなくても葵は生きられる。

そこが、悔しいのか。

本当に。

本当にこの人は、私の真反対なんだと、早紀は思った。

早紀は、お姫様になりたがった。

だれか助けて、と。

でも貴沙は、王子様になりたかったのだ。

そして、葵を救いたかった。

美しいけれども、衝動的で短絡な魔女。

「あんたを殺したら、どうなるの？ あんたにこの珠を飲ませたら？」

早紀の無反応ぶりが腹立たしかったのか、支離滅裂な事を言いながら、貴沙は珠を握ったままだろう拳を振り上げる。

刹那。

早紀は、笑ってしまった。

存在が消えることは、とても恐ろしいというのに。

殺されるという言葉は――塵ほども怖くなかったのだ。

※

「二回死んで：一回死にそびれたわ」

笑いながら、早紀は呟いていた。

涙は、もう流れていない。

拳が、止まる

貴沙の拳だ。

そうだ。

早紀がずっと恐れているのは、ただ『自分が消える』こと。

だが。

その『自分が消える』を体験する相手が、そこにいる。

貴沙は、消えたのだ。

そうして、早紀になったのだ。

「あんた：なんでそんなに気持ち悪いの」

貴沙が、ぶるっと身を震わせる。

怒りは顔から消えてはいないが、彼女の本能が怯えさせるのだろう。

逆に。

早紀が、彼女を殺したら——どうなるのだろう。

このひ弱な手で、美しく傲慢な貴沙を。

鏡のこちらと向こうのように、本当ならば、同じところにいてはならない二人なのだ。

それならば。

自分を消したくないというのならば。

椅子を奪い合う相手を、この手で。

既に、自分はおかしくなっているのかもしれない。

おかしくなりかけていたのは、確かだ。

あの最初の死から、彼女は妖しい森に迷いこんでいたのだから。

真理、鎧の男、トゥーイ、零子、タミ、伊瀬、イデルグ、双子の

男。

登場人物の変わる物語の中に次々放り込まれ、しかし、どこも真っ暗な森ばかり。

出てくる答えは、蛇や化け物。

どれもこれも、早紀を幸福になどしてくれなかった。

けれども。

けれども、その中でたった一人。

側に真理が、立ってくれた。

庇護してくれる人が現れたと思ったのに。

「なによ…」

早紀は、身震いをした貴沙に向かって——足を踏み出していた。

※

手を、伸ばす。

両手を。

その白く綺麗な首筋へ。

早紀は、生まれて初めて人を自ら害しようとした。

貴沙は、何故か動けないでいる。

彼女の身軽さならば、すぐさま早紀など払いのけて逃げられるだろうに。

指が。

首筋に。

かか——ぐいっ！

早紀の周辺で、二つの力が動いた。

一つは葵。

彼女が、動かない貴沙を後方に強く引っ張って、早紀から引き離す。

しかし。

しかし、もう一つ。

力があった。

それは、早紀の身体を後方に引っ張るもの。

登場人物は、三人のはずだ。

だから、もう一つの力など、動くはずがない。

じゃあ、誰が。

誰が、早紀を動かそうとしたのか。

「やめておけ…」

頭の側で——声がした。

瞬間。

ぐらん。

視界が回るかと思うほどの、精神的な衝撃が全身を駆け巡る。

身体がよろけて後方へ傾くのを、何かが受け止めた。

ここは早紀の夢の更に夢の中。

そこに、いるはずのない者が、紛れ込んでいる。

「…しん…り」

振り返れないまま、震える唇でその音をこぼす。

自分を、憐れんだ男。

「ああ…」

だが。

いま、彼女を支えている男でもあった。

がぶり

――

鎧が――笑った。

カタカタと震えるように、しかし真理には笑ったのだと分かった。

早紀のいなくなった抜け殻のそれは、彼を拒みながら彼を笑うのだ。

そして、分かった。

早紀の存在が消えた原因は、おそらく鎧のせいだ、と。

その兜の顔面を。

真理は、がしつと驚掴む。

ふざけるな。

早紀は、非常に不安定だった。

真理に依存し、それでしか生きていられないという歪んだ状態で。

そんな早紀を、一体どこへ隠し込んだというのか。

『お前だろ?』

兜を掴んだ手のひら全体に伝わるように、音が響いた。

いや、音ではなかったのだろう。

しかし、意思を感じる振動。

その振動が、真理の骨をダイレクトに震わせるのだ。

まるで、音のように。

『お前が、あの女を絶望に突き落としたんだろ？』

「違う」

骨への震えを、彼は即座に否定した。

絶望に落としたかったわけではない。

依存のみの生という歪んだ糸を、切りたかったただけなのだ。

そんな感情を向けられるのが——嫌だった。

嫌悪、とは違う。

嫌悪ならば、真理は側にも寄せなかっただろう。

そうではなく、ただ嫌だったのだ。

『そうか？』

鎧は、笑う。

『それなら、助けに行くか？』

そして、奇妙なことを言った。

助けに。

まるで早紀が、危機に陥っているかのように。

『随分深いところまで落ちたから：一人では帰ってこれないだろうな』

鎧は。

本当に、おかしくて仕方がないように大笑いをしたのだった。

※

食われる。

その感触を表現するならば、それが一番近かっただろう。

いつも、早紀のいる鎧に入る時は、飲まれる感じだが、今日のこれは違う。

兜を掴んでいる手から、まるで咀嚼されるように引き込まれていくのだ。

だが。

まだ、いまならば手を引き抜ける。

早紀を助けに行きたくないなら、手を抜けばいいと。

その選択権を、にやにや笑いながら真理に投げ与えているつもりなのだ。

この鎧は。

だが、行くしかない。

早紀が消えたままでは、真理に鎧は使えないのだ。

それに。

彼の意識の前方を——早紀の映像が掠める。

何度か。

何度かこれまで、彼女の存在は真理を強く揺さぶった。

火花のように一瞬ずつ、何度か。

その火花の瞬間に見えた早紀は、あまり自覚はしたくないが、彼に強く焼き付いているのだ。

それが何なのか、まだ真理は掴めずにいる。

「行ってやろう…」

肘まで食われたところで、真理は間近にある鎧の兜に向かって、上段から言い放った。

『そうかそうか』

真理を噛み砕きながら、鎧は愉悦の響きを溢れさせる。

その鎧の金属が、顔の目の前まで近づいた。

顔に噛みつかれる直前。

『そのまま…』

迫りくる漆黒。

『そのまま…奈落まで行ってこい』

がぶり。

魔族らしくない

早紀が、いた。

空間の認識に、一瞬時間が必要だったが、軽く頭を振った直後、真理のすぐ前に早紀が立っているのが分かる。

ただし、背中を向けて。

彼女が、進もうとする先にいるのは――

ありえない、はない。

ここは、鎧の中の世界。

いや、もっと深く違う次元なのだ。

でなければ、彼が早紀を見失うはずなどないのだから。

ここで、向こうの常識など通用するはずがなかった。

だから――貴沙と呼ばれる魔女がいても、おかしくもなんともないのだ。

だが。

あの早紀から、悪意が漂っている。

その手を、悪意を持って貴沙に伸ばそうとしていた。

早紀は、貴沙で。

貴沙は、早紀なのだ。

その表裏一体の、同じ生き物を末梢しようとしているのだと、真理は瞬間的に理解した。

危険な行動だった。

もし、この世界が過去の現実につながっているとすれば、それは自殺にも等しい行動なのだから。

まだ。

真理は、足を踏み出した。

まだ、失うわけにはいかない。

その肩を。

掴んで。

引き戻す。

悪意があったことさえ疑わしいほど軽く、彼女は自分の元へと帰ってきた。

「やめておけ…」

言葉に、よろける身体。

その身体を、抱きとめる。

「…しん…り」

震える声。

「ああ…」

自分と呼ぶ、しかし——真理の内側を震わせる声だった。

※

「また…気持ち悪いのが来たわね」

貴沙は、自分を支えようとする葵を払いのけて、しっかりと二本の足を踏みしめる。

その姿を、真理さえも、多少不思議な気持ちで見っていたのだ。

さっきは、早紀を引きはがすことを最優先にしていたため、じっくり見てはいなかった。

これが、早紀の元となった魔女なのだ、と。

悪趣味なことをする。

真理は、視線だけをしばし斜め上に向けた。

そこにいるはずもない、鎧に対しての一睨みだ。

元は同じものを二つ並べて、どうしたいというのか。

どちらかが死んでも、いい結果にはならないだろうに。

「……」

そうか。

そして、ふと自分が考えついたことに——自分で驚くこととなる。

とても、魔族らしくないものに感じたからだ。

ここに二人揃っているというのならば、と。

早紀と貴沙が、別々にいるというのなら。

もう一つ、やり方があるのではないかと。

「早紀……」

支えた身体に向けて、真理は声をかけた。

自ら立ち向かい続けようとする貴沙の前で、すがらずにはいられない女がいる。

その彼女を支える手に、少しだけ力を込めた。

びくつと、早紀がそれに反応する。

「殺す以外の方法が……ある」

本当は、それが可能なのかは分からない。

だが、可能かどうかは考える必要はないのだ。

ただ。

ただ早紀が、その選択を自ら選べるかどうか、という事だけ。

振り返らないままの彼女を奮い立たせるように、真理はもう少し支える手に力を増やす。

「受け入れて……ひとつになることだ」

刹那。

腕の中の肉体は——石のごとく固くなった。

温かくはない

――

「受け入れて：ひとつになることだ」

瞬間、早紀は固まっていた。

麻痺させられたように、全身がこわばったのだ。

後ろにいるのは――真理のほず。

その彼が、貴沙とひとつになれと言っているのだ。

考えたことなんか、なかった。

貴沙が、目の前に現れるなんてありえないことだからこそ、そんな選択肢をよぎらせたこともなかったのである。

生き残るのはたった一人で。

もう一人は、消えてなくなるのだと。

それしか、考えられなかった。

ひとつに？

眼球だけをどうにか動かして、早紀は前に立つ魔女を見る。

同じように彼女も驚いた顔をしているのは、真理の言葉に動揺し

たせいかな。

消えたくないと思う二人がいる。

ただ、座れる椅子はひとつ。

だめよ！

反射的に否定した時、早紀はようやく自分の身体が動き出したのを知った。

真理の方を、振り返っていたのだ。

だめよ、それじゃ私じゃなくなるかもしれない！

それに、相手が私を受け入れるはずがない！

その感情を、強く真理にぶつけたのだ。

彼は。

彼は、静かな瞳を向けていた。

冷ややかではない、突き放す目ではない。

ただ、自分を見ている。

大体。

何故、こんなところまで来たのか。

ここは、鎧の中の更に夢の世界だ。

どうやってきたのか。

この中では、真理が一番イレギュラーな駒だろう。

なんで、なんで！

爆発しそうな感情が、喉元までせり上がった時。

その爆発は、真っ白に塗りつぶされた。

真理が。

早紀を――抱きしめていたのだ。

※

強い抱擁ではない。

両腕を身体に回し、引き寄せる穏やかなものだ。

だが。

あの真理が、早紀を抱きしめている――その事実には、変わりが
ない。

この歪んで狂いかけた、ヒキガエルの身体を。

あっ…あつ。

言葉が死ぬ。

頭の中から、これまで覚えた言葉の全てが死に絶えてゆく。

それくらい、早紀は真っ白になっていた。

「大丈夫だ」

だから。

頭の側でこぼれた声も、意味が分からなかった。

耳で音を拾うのが、精いっぱい。

「何と混じろうが…お前は早紀だ」

言葉が——死ぬ。

死は、優しくない。

素晴らしくもない。

愛しくも、温かくもない。

けれど、いつも側にある。

特に早紀の側には。

そんな死と同じように。

側に真理がいる。

温かいとは思えない抱擁だが、そこに憐れみはなかった。

打算も慰めも。

だが、初めて真理から——愛を感じた。

温かくはない愛も、この世にはあるのだ。

それをあの真理が、初めて早紀に流し込んでくれたのである。

言葉を亡くしたまま、彼女は真理を抱き返していた。

自分の意思で。

そして。

今度もまた、自分の意思で。

真理から離れた。

言葉は浮かばない。

けれど。

早紀は――前を向きなおした。

簡単に極端な女

――

そうか。

貴沙へと向き直った早紀の髪を見ながら、真理はようやく自分の
思いを理解していた。

強くあれ、と。

早紀にそうあれと、自分は願っていたのかと。

願う。

それは、魔族にとってはあまりに儚く無意味なものだ。

強い者は、願う必要などない。

欲しいものは、自分で手に入れるからだ。

なのに。

手に入らないものもある。

イデルグでさえ、貴沙を手に入れられなかったように。

魔女の心ばかりは、どんなに強い魔族でもどんなに手を尽くして
も、最後は『願う』という頼りないものになってしまうのだ。

それを、真理は早紀という魔女で、生まれて初めて知った。

そして。

その感情が、結局のところ——イデルグと同じ道につながっていることを、ようやく理解したのである。

だから。

抱きしめた。

必要のない、抱擁のはずだった。

だが、真理はそうしなかったのだ。

早紀を、抱きしめたかった。

そうしたら。

そうしたら早紀はまるで、枯れかけた植物が水を浴びたかのように、力を取り戻していったのだ。

うなだれた首が持ち上がる。

抱き返され、真理はまたも驚かされる。

いままで、しがみつかれこそすれ、こんな形で早紀に抱かれるのは初めてだったからだ。

その腕には、彼女のことを容易に感じる事が出来た。

ああ、そうか。

真理は、自嘲した。

と。
早紀を強くするのは——本当はこんなに簡単なことだったのか、

カシユメル

――

「いやよ…あんたとひとつなんかにならないわよ」

貴沙は、ホウキを握りしめたまま、早紀をこぼむ。

早紀は、足を止めた。

彼女がこぼんでいる限り、ひとつにはなれないのだ。

しかし、言葉を取り戻していない早紀は、どう説得していいか分からなかった。

ただ。

葵が、視界に入った。

彼女と目が合った瞬間。

葵は、貴沙のホウキを両手で掴んだのだ。

「ちよっ！」

そのままホウキを取り上げようとする葵に、魔女は抵抗する。

「あの子とひとつになって、貴沙！」

悲痛なほど、必至な声だった。

「何バカなことやってんのよ！　ふざけないで！」

貴沙の声は、ヒステリックに跳ね上がる。

ホウキを挟んで、激しい攻防が起きていた。

さっきまで、楽に跳ね飛ばされていた葵が、今度ばかりはホウキから手を離さない。

立っていられなくなって、床に引きずられるようになって尚、そのホウキにしがみつくのだ。

貴沙が、それに乗って遠くへ逃げてしまわないように。

「だって…だって貴沙は消えたのよ…消えたからあの子がいるのよ！」

ボロボロになりながら、葵はおかっぱの頭を持ち上げる。

言葉に、ホウキを奪い返そうとする動きが止まった。

まだ、その目には迷いがある。

信じ切れていないのか、信じたくないのか。

その瞳が——真理を睨むように一度見た。

そして。

明らかに目の色を変える。

「ああ…そう…カシユメル…そう」

何を、暴いたのか。

カシユメルの人間であることそのものに、貴沙は衝撃を受けているように思えた。

「代替わりしたんだ…あの人、イデルグの奴に殺されたの？」

ぴくりと。

早紀の後方で——気配が動いた。

ぱちっ

――

「大空蝕で死んだと…聞いている」

真理は、貴沙の言葉には反応するつもりではなかった。

だが、出てくるはずのない人間の名が口にされたのだ。

『あの人』

彼女の言う、カシユメルの『あの人』とは、おそらく――真理の父だろう。

しかし、何故彼女は、イデルグに殺されたのかと聞くのか。

「そう…」

さっきまでギャンギャンと騒いでいた魔女は、うってかわって沈黙の淵にたたずんでいる。

そうか。

忘れそうになるが、貴沙は前の時代を生きた魔女なのだ。

まだ、父が生きていた時代の。

「ああ…じゃあ」

はっと。

はっと、貴沙は顔を上げて早紀を見た。

早紀の一点を。

「あんた…カシユメルと契約したんだ」

その言葉に、ほんのわずかの羨望にも似た響きがあった。

貴沙の瞳は、真理の魔女の額に注がれているようで。

その意味を、ようやく彼女は理解したのだろう。

「貴沙…カシユメルって」

葵が何か言おうとするのを、貴沙は即座に手で制した。

「そうよ…あたしはカシユメルの当主に惚れてるわ。そして、イデルグのバカは私に惚れてる。だから殺されたのかって思ったのよ」

自分の思いは、自分で言わなければ気がすまない。

だが、先代の死は、まだ彼女の中ではリアリティを持っていないらしい。

惚れてる、と。

過去形にならない言葉が、それを証明した。

事実、まだこの夢の世界を探せば、真理も生きた父と再会できるかもしれないのだから。

残念ながら、興味をそえられることはなかったが。

だが、イデルグが父に殺意を抱いていたかもしれない。

その言葉だけは、とても興味深く真理の中に残った。

「イデルグ卿なら：極東の1stだ」

真理は、火種をまいてみた。

好意を寄せていた父に、殺意を持っていたかもしれない男が、現在極東のトップとは、面白くなかろうと。

ぱちっと、貴沙の中で何かがはぜるように。

彼女の目の中に――炎が生まれた。

ただいま

――

「一緒に…行かない？」

ようやく、言葉が生まれる。

早紀は、気が付いたら手を差し出していた。

真理の言葉で、明らかに温度を上げた瞳を、早紀はまっすぐに見る。

もう一人の自分。

真理の父親を愛していたのは驚きだが、その男の死にイデルグが関わっていたかもしれないというのだ。

その疑惑が、貴沙の心をかきたてているようだった。

早紀と一緒にくれば、未来のイデルグに会うことは出来る。

それが、どんな形になるのかは分からないが。

「……」

貴沙は黙り込んだ。

そして、一度だけちらと、葵の方へと視線を馳せるのである。

「大丈夫よ…貴沙」

葵は、小さく笑った。

「未来の私はまだ生きているもの…あなたが来るのを、生きて待っているもの」

向こうで、待ってるわ。

早紀の目に、不思議な愛の形が見えた。

女二人。

お互いの伸ばした指先を、一瞬だけ触れあわせて離すだけの接触。そうするなり。

貴沙は、視線と身体をまっすぐに早紀に向けるのだ。全てを断ち切ったように。

「どこへでもいくわよ」

そして、大上段に構えて、早紀を睨み下ろすのである。

圧倒されるほど、イキのいい魔女だ。

早紀は、その圧倒に苦笑しながら——真理を一度振り返った。

彼の視線が、瞼によって軽く伏せられる。

行っ
て来い。

そう言われている気がした。

前を向き直る。

貴沙は、ずっと握りしめていた片方の手を開く。

「これが、役に立つんじゃない？」

虹色の、海の珠。

彼女の運命を変え、早紀を作りだした海の宝。

どう役に立つかは分からなかったけれど、早紀はもう一度彼女に向けて手を差し出す。

貴沙は、珠を指で支えたまま、その手を差し出してくる。

重ねる。

珠が手のひらに食い込んで痛いほど強く――握り合った。

※

ドオン。

音は——早紀の中で起きた。

身体の中で、何かが大きく動いたのだ。

腹部の中心、いや、身体の中心から下が冷たくなる。

早紀は、自分の下半身が、水に浸かっていることに気づいた。

うまく動けないまま、握り合った手の向こうを見ると。

貴沙は、上半分が水で覆われている。

長い髪が、水の中を立ちのぼるように広がっていた。

しかし、彼女の目もまた、早紀をしっかりと見ている。

逆さまの二つの水の塊が——うなった。

うなり、ひねり、巨大な水流となって、早紀を、そして貴沙をねじ切ろうとしたのだ。

立っていられるはずがなかった。

全身を粉々にする力が、身体を宙に舞わせて。

腕が、一瞬で雑巾絞りのようにねじれたのを見た。

手のひらだけが。

熱かった。

バシャンッ！

次の刹那。

水が、彼女を吐き捨てた。

いや。

『私』を、吐き捨てたのだ。

『あたし、よ』

思考に、訂正が入った。

ああ、うん。

それに、けだるく答える。

「き…さ？」

おそろおそろかけられる声。

葵がいる。

「なに？ 辛気臭い顔しないでよ」

唇が、勝手に動いた。

自分の声か理解できないほど、力に溢れた音。

葵は、目を潤ませて、自分の顔をおさえている。

「早紀…」

背後で。

背後で、名前を呼ばれた。

『私』の名前だ。

ふり、かえる。

静かな目が、『私』を見ている。

「あっと…あの…ただいま」

いま、彼女の言える、精一杯の言葉だった。

砕けた

変な、感覚だった。

記憶を探ろうとすると、意識が混線する感覚だ。

葵を思い起こそうとすると、年齢の違う二人の彼女が入り乱れる。

周波数が、うまく合わない。

『そのうち慣れるわよ…って、うわ、これはひどいわ』

向こうは、早紀の記憶と混線しているせいか、げんなりした声をあげた。

かなり恥ずかしい。

同じ自分でありながら、真反対の人生を送ってきたのだから。

だが。

記憶が混線しない相手も、いる。

真理、だ。

貴沙が、意識レベルを慣れさせようとしている間に、早紀は彼に向き直っていた。

自分で自分は見えない。

だから、彼の目を通して、早紀は自分を見ようとしたのだ。

真理は、視線を無駄に動かすことはなかった。

ただ、まっすぐに早紀の目を見ている。

そんな彼女の方へ、そして足を進めるのだ。

「帰るぞ…」

手を、差し伸べられる。

言葉が。

また、言葉が死にそうになる。

彼から向けられるひとつひとつが、今までのどれとも違って見えるのだ。

優しいわけではない。

だが、その手は——早紀の意思を待つ手なのだから。

そんな彼女の心の隙間に、貴沙は葵を振り返っていた。

「それじゃ」

貴沙からの言葉は、一言。

「うん…貴沙、未来でね」

小さく、泣き笑いの手が振られる。

そして。

貴沙は、動かなくなった。

早紀に身体のをすべてを預けた気配だけが、はつきりと彼女の中に残る。

真理の手は、差し伸べられたまま。

その手が。

その手が、とても冷たいことを知った時——世界は碎けた。

メルヘンなこと

――

早紀が、もう一人を受け入れた瞬間を、真理はまばたきもせずに見ていた。

二つの水が、渦潮のような力強さを持って、二人を引きちぎったように見えた時さえ、微動だにせず見つめ続けたのだ。

そして。

水の体内から、羊水と共に――早紀は、吐き捨てられた。

乱暴な出産シーンだった。

女が、ゆっくりと顔を上げる。

少し髪が伸びたが、それはまっすぐなまま。

だが、瞳が。

その瞳が、片方だけ濃紺に代わっていた。

暗いところでは、黒と見間違いうほどの暗い水の色。

身体の中の宝珠が、彼女の魂に深く食い込んだかのように。

人間の女が、生まれた女を貴沙と呼んだ。

女は応えた。

「早紀…」

その名を呼ぶ役は、自分だった。

振り返る女の顔は——まごうことなき早紀のもだった。

「あつと…あの…ただいま」

とぼけた、そして図太い娘。

ああ。

その瞬間の自分の心とやらは、不可解なものだった。

これが、『願い』とやらのせいか、と。

彼女が消えるはずなどないと、根拠なく理解していたというのに、いざ早紀の声を聞くと、信じられない安堵がよぎったのだから。

カシユメルの当主が、安堵などと——微かでも、願っていた証拠だった。

早紀であれ、と。

だが。

安堵の一瞬遅れで、不穏を感じていた。

この世界が、微かな揺らぎを見せたのだ。

女たちが気付かないほど、小さく小さく。

早紀と貴沙がひとつになったことで、世界の維持にヒビを入れたのか。

「帰るぞ…」

しかし、真理は急かなかった。

正確に言えば——急いたところで、帰り方など分かりはしないのだ。

最初から、命綱などなかった。

ただ。

鎧の言葉は、覚えている。

早紀が。

手を。

取る。

すべてが。

壊れる。

真理は、迷うことなく、深みを目指した。

鎧の言うところの――奈落へと。

※

「ちょっと…逆なんじゃない」

握った手の向こうが、苦しげに声をあげる。

どっちがしゃべっているか、すぐに分かるのは真理には楽だった。

だが、現実問題はとても強い圧迫感の中だ。

あの世界から、奈落を目指そうとすればするほど、なにかも飲み込もうとする闇の締め付けが増えるばかりなのだ。

まるで、彼らを拒むかのように。

真理は黙ったまま、握る手に力を込めた。

うっかりにでも手を離せば、二度と早紀と出会えないという危機感だけは、間違いではないだろう。

ずしり。

更に重力が増す。

気を抜けば、圧死できそうなほど。

さっきから。

貴沙ばかりが、うるさくしゃべっている。

「早紀…」

だから、呼び掛けた。

「なんか、メルヘンな事を考えてるわよ、このバカは」

呆れた返事は貴沙のもの。

「ちが…」

慌てたように、早紀の声がかぶる。

「いばら姫ねえ…この先に、お姫様でも待ってるって言うの？」

「違うってば。ただ…こんなに苦しいくらい隠し込めてことは…
なにか大事な…」

一人で喧嘩をする早紀に、真理はわずかに苦しさを忘れた。

多分、笑いに似た感情が、彼の苦痛を少しだけ上回ったのだ。

だが。

突然重力の向きが落下に変わり、圧迫感が鋭い痛みに変わった瞬

間——緩んだ思考を捨てた。

「あっ！」

どっちのものか分からない悲鳴をあげる身体を引き寄せ、自分の身体の内に取り込む。

いばらよりも鋭いものが、真理を切り刻む。

どこに落ちるかなど、分かるはずなどない。

だが。

歓迎されていないのだけは、身を持って分かっていた。

光

――

『痛い！』

貴沙の悲鳴と、早紀の悲鳴はシンクロしていた。

真理に抱き締められてなお、鋭い痛みがはみ出した彼女の身体を襲うのだ。

永遠き続くかと思う痛みにも、おかしくなりそうだった。

しかし、強く抱き締める腕が、早紀を正気にとどめる。

痛いのに。

一人ではないのだ。

もう、前とは違うのだ。

『バツカじゃない！？』

早紀のセンチメンタルな感情を、即座に同居人が踏み付ける。

だが、罵倒するだけではなかった。

貴沙は、ただ真理に守られたまま落ちることに抵抗したのだ。

この闇に、何らかの意思があるかもしれないと。

暴こうとしたのだ。

アバキ——初めて感じる瞬間だった。

猛烈な騒音が、頭の中を駆け抜ける。

ほとんどが、聞くに耐えない雑音。

とても、意思があるようには思えなかった。

だが。

一瞬だけ。

全ての音が、消えた。

いや。

すうっと、空を縦に裂く音だけが流れた。

深く暗い井戸に、小さい何かが落ちるような音。

自分たちの、落ちる音かと思った。

そして。

ついに——落ちた。

何物にも受けとめられない空間で、ようやく彼らは止まったのだ。

壊れたエレベータのように、空間に宙づりになったと言った方がいいか。

だがそこには——たったひとつ、光があった。

沢山の闇の帯が集まる中心に、その光はあったのだ。

帯は、上から伸び、下から伸び、四方八方から伸び、光を覆いつくしていた。

隙間などない。

だが、それは光るのだ。

闇など、ものともせず。

真理は、それに目を奪われているように見えた。

だが、早紀もまた——その光を見たことがある気がしたのだ。

あれは。

貴沙と交ざる意思に戸惑いながら、早紀は記憶を探ろうとした。

「あれは……」

だが、気付いたのは真理が先のようにだ。

彼は、こう言ったのだから。

「あれは…蝕の涙か」、と。

あれは

――

『痛い！』

貴沙の悲鳴と、早紀の悲鳴はシンクロしていた。

真理に抱き締められてなお、鋭い痛みがはみ出した彼女の身体を襲うのだ。

永遠き続くかと思う痛みにも、おかしくなりそうだった。

しかし、強く抱き締める腕が、早紀を正気にとどめる。

痛いのに。

一人ではないのだ。

もう、前とは違うのだ。

『バツカじゃない！？』

早紀のセンチメンタルな感情を、即座に同居人が踏み付ける。

だが、罵倒するだけではなかった。

貴沙は、ただ真理に守られたまま落ちることに抵抗したのだ。

この闇に、何らかの意思があるかもしれないと。

暴こうとしたのだ。

アバキ——初めて感じる瞬間だった。

猛烈な騒音が、頭の中を駆け抜ける。

ほとんどが、聞くに耐えない雑音。

とても、意思があるようには思えなかった。

だが。

一瞬だけ。

全ての音が、消えた。

いや。

すうっと、空を縦に裂く音だけが流れた。

深く暗い井戸に、小さい何かが落ちるような音。

自分たちの、落ちる音かと思った。

そして。

ついに——落ちた。

何物にも受けとめられない空間で、ようやく彼らは止まったのだ。

壊れたエレベータのように、空間に宙づりになったと言った方がいいか。

だがそこには——たったひとつ、光があった。

沢山の闇の帯が集まる中心に、その光はあったのだ。

帯は、上から伸び、下から伸び、四方八方から伸び、光を覆いつくしていた。

隙間などない。

だが、それは光るのだ。

闇など、ものともせず。

真理は、それに目を奪われているように見えた。

だが、早紀もまた——その光を見たことがある気がしたのだ。

あれは。

貴沙と交ざる意思に戸惑いながら、早紀は記憶を探ろうとした。

「あれは……」

だが、気付いたのは真理が先のようにだ。

彼は、こう言ったのだから。

「あれは…蝕の涙か」、と。

まさか

――

ここは、どこなのか。

真理は、蝕の涙の輝きを見ながら、それを考えていた。

空にある自然な涙とは思えなかった。

光を覆い尽くす闇の帯は、まるで涙を拘束するかのように取り巻いているのだから。

涙が、ここから逃げていかぬように。

「ねえ、あんたコレ知ってるでしょ？」

貴沙が、ぽつりと呟く。

腕に抱く彼女を見ると、その瞳は真理を見ているわけではなかった。

「え：ううん、涙ってことは分かるけど」

頭を振るのは、早紀だ。

同じ身体を持つ二人で、問答をしているのか。

「光ってることじゃないわよ」

貴沙は、顎をしっかりと光の方へと向ける。

真理もそれを追っていた。

「あの光の形よ」

闇の帯の中、放たれる光のせいで形は、はっきりとは分からない。

だが。

真理も早紀も、光が蝕の涙であるという事実のみに捕らわれていた。

形？

真理が目を細めようとした時。

「あっ！」

腕の中の、早紀が跳ねた。

「あっ！ あっ！ なんで？ どうして？」

驚きと戸惑いが、あふれ出す声。

その手が、ぎゅっと真理の胸の辺りを握る。

早紀の顔が。

驚きの色をそのままに、ゆっくりと彼を見上げてきた。

「あれ…あの形……じゃない？」

唇は、うまく音を掴めず、空を切る。

だが、真理はその唇の形を見た。

オ・オ・イ

母音の形だ。

はっと。

真理は、もう一度光を直視した。

その形だと言われて見れば、そう見えないことはない。

まさか。

あれは。

あれは——鎧なのか？

表と裏

――

「いたっ…」

早紀は、強い頭痛を覚えた。

いや、痛いのは頭ではない。

額、だ。

あ。

光に、見られた気がした。

あの鎧の形をしたようなものが、自分を見たから――額が痛んだのだろうか。

まるで、早紀を呼ぶように。

「呼ぶ、っていうよりは…挑発してるみたいよね」

早紀の思考を、貴沙が別の表現で表した。

痛みも、彼女と共有しているのだ。

「どうするの？ 行くの？」

早紀と、そして真理に問いかける声。

彼は、一度周囲を軽く見渡した。

「それしか、道はないようだ」

真理の決断は早かった。

彼は、無理やり止められた空中から逃れるように、光の方へと飛び始めたのだ。

あつ。

心の準備が出来ていないのは早紀だ。

慌てて、彼にしがみつく。

「いい度胸じゃない」

貴沙は、面白そうに笑う。

お、おもしろくないー。

とても彼女には、その感覚を共有できそうにはなかったが。

「鎧の男って奴、悪そうだけど強そうよ…これを面白がらずに何を面白がるっていうの！」

勢いのよい真理の飛翔に、貴沙のテンションが跳ね上がっていくのが分かる。

いままでなら。

いままでの早紀なら、この状況を前にテンションを上げるなんて不可能だったろう。

しかし。

表と裏のように綺麗にくっついた貴沙が、すぐそこにいた。

彼女のテンションが、わずかだが早紀に影響を与えている気がしたのだ。

胸が、高鳴る。

真理が、さっきよりも——少しだけ強く抱いてくれた。

鎧の中

—
—
—

鎧なしで涙に近づけば近づくほど、その威圧感は何倍増していく。

真理は、早紀を抱く腕に再び力をこめた。

しかし、思ったより彼女の身体は緊張していない。

貴沙が、いまこの身体を支配しているせいだろうか。

ちらりと、顔を見た。

唇を薄く開いて、頬を紅潮させ——『早紀』は、光を見ていた。

威圧感など微塵も感じていない、そして『早紀』の顔だったのだ。

契約で、鎧と半分つながっているせいかな。

光の前に、彼と早紀とでは感じ方が違うようだった。

威圧に耐えうる距離で、ようやく真理は飛翔を止める。

うっすらと、鎧の形をした光が上下した。

肩を震わせて笑っているかのように。

そして、同時に気づいた。

この光の鎧が、この闇の帯の外に出てこないことを。

いや。

もしかしたら、出られないのかもしれない。

涙を閉じ込める——まるで牢獄。

その帯に触れたいとは、とても思えなかった。

闇の帯。

おそらく、魔族の力による何らかの干渉に思えた。

魔族とは、真理が属している領域だ。

ということは。

この力は、魔族によって封じ込めなければならなかったということである。

なにゆえ、涙を封じる。

「……」

真理は、ふと考えを止めた。

ひっかかったことが、あったのだ。

魔族自身は、蝕が始まったことを気づくことが出来ない、という

事実を。

では、何故。

何故鎧は、それに気づくことが出来るのか。

真理は、目を細めた。

鎧を形作るものの中に、蝕に関する情報があるから、という仮定が頭を掠めたのだ。

それが、これだというのか。

鎧の中に——涙自身を封じ込めたというのか！？

早紀の言葉

――

ズクズクと疼く額を抱えたまま、早紀は闇の帯の中を覗き込んだ。

もしこの光が、あの鎧の男だというのならば――彼は、わざとここへ彼らを呼んだのだろう。

早紀を深みへと突き落とし、そして真理がここにいることでさえ、おそらくあの鎧の男が関係しているに違いないのだから。

突然。

ドクンっと、闇の帯が大きく鼓動を打った。

この帯の塊全体が、心臓であるかのように。

早紀の額も、同じように大きく脈打つ。

びくっとしてしまったが、その身体はしっかりと真理に抱きとめられているおかげで、体勢を崩してしまうことなどなかった。

ドクンっ。

もう一度。

もう一度。

生きているのだと。

この中で、何かが生きているのだと、それを彼らに向けてアピールしているようにさえ思える。

声は届かない。

本当の心さえも。

だが、懸命に自分の存在と命を、外へ向けようとするのだ。

「出たいのか…」

真理が、呟く。

いくつもの含みを感じる音。

怪訝と疑惑が、特に強く感じられた。

だが、彼もまたその鼓動が言わんとしていることを汲んでいるのだ。

問題は。

真理とこの存在の利害が一致するかどうか、だろう。

ドクンっ。

額が、呼応する。

早紀を、呼んでいるのか。

「あたしがさわれるくらい、近づいてよ」

貴沙が、勝手に唇を使う。

真理は動かなかった。

動かないまま、『早紀』を見る。

あつ。

それに、気づいた。

「うん、ちょっとやってみる」

真理は——早紀の言葉を待ってくれていたのだ。

ようこそ

闇の帯に、右手を伸ばした刹那——帯の方が、早紀の手を取らえた。

音もなく、それは彼女の肘まで這いあがり闇に染める。

気持ち、悪い。

冷たい、ではない。

温度がないのだ。

温度のない何かが、早紀を虚空へ飲みこもうというのか。

真理がそれに気づき、抱いた彼女の身体ごと引き戻そうとする。

「めんどくさい…覚悟決めてあんたも来なさいよ」

そんな彼を。

貴沙は、もう片方の手で逆に引っ張った。

本当に思う通りに生きる魔女である。

しゅるんっ。

早紀を抱いたままバランスを崩した真理も、帯が絡め取る。

一瞬。

彼の眉間に、皺が刻まれた。

まったく。

そんな表情。

困ったことに、その顔に早紀は微かな笑いを覚えてしまったのだ。

こんなとんでもない空間で、それでも『まったく』程度で扱ってしまう彼に。

だが、その笑みごと早紀は帯に全てを包まれた。

温度のない闇の空間は、しかしさっきまでの落ちてきた場所とは違う。

何かの映像を巻き戻して見ている映像が、脳に叩きつけられるのだ。

自我を忘れるほどの、膨大な情報。

記憶という記憶を全て叩きだし、その代わりに居座ろうとするシヨッキングでグロテスクで禍々しい何かの意識。

身体が痛いのではなく、脳がちぎれそうに痛い。

見たくないとか、嫌とか思う隙間もない、脳内的拷問が終わったのはいつだったか。

目を開けるのに、長い時間がかかった気がする。

早紀は、横たわっていた。

誰かが側に立っている。

光っているのに黒いものが、そこにはあった。

「「「よお」「」」」

ハウリングするような強い音に、早紀は強く目をとじた。

目を閉じたところで耳はふさげないのだが、いまはそれが精いっぱいだった。

だが。

その声を、早紀は知っていた。

もう一度、目を開ける。

「「「ようこそ、オレの部屋へ」「」」」

ウワンウワンと唸りを上げる声の先には——あの男が、いた。

ハモらないハモリ

不思議な、空間だった。

何が不思議だったか。

早紀は、目の前に立つ存在——要するに、毎晩会っていた鎧の男を不思議だとは、正直思っていなかった。

それは、彼女が手を伸ばす前から、大体分かっていたことだから。

本当に不思議だったのは、倒れている者たちだ。

真理が、近くに倒れている。

それはいい。

だが、もう一人。

そう。

貴沙も、そこに倒れているのだ。

何とか半身を起しながら、早紀は波うつウェーブの髪をじっと見てしまった。

「「お前さんは、魂が二つになったからな」」

相変わらず音量調整のされていない音で、おもしろげに男は言う。

ここが、魂の世界だと、そう言いたいのだろうか。

だが、まだ二人は意識を失ったままのようで。

「何で…呼んだの？」

毎夜、早紀と彼は会える。

ただ会いたければ、そこで会えばいいではないか。

こんな手の込んだことをして、そして真理まで巻き込んで——彼は何を目論んでいるのか。

「「ここから…出るためだ」」

少しだけ、ハウリングが減る。

「「どうやって鎧が作られるか…お前は見たはずだ」」

そして、彼は声をひそめるように言った。

ずきつと脳が痛む。

ここに来るまで見せられた、膨大な量の巻き戻し映像。

その最後に。

その最後に、それらしいものがあつた。

魔族の男の喉に——流し込まれる蝕の涙。

身体は光り出し、マグマのように物凄い熱を放ちながら、一瞬大きく膨れ上がって。

そして。

硬質化した。

周囲を取り囲む、奇妙なくまどりをしたローブの男たち。

あれは、タミの祖先である鎧鍛冶の一族なのか。

「「さあ、捕らわれの憐れな蝕のしずくを…解放してやれよ」」

両手を広げ上から目線で言い放つ態度は——やはり、いつもの彼にしか見えないというのに。

※

「解放すると…どうなるの？」

早紀は、呆れながら聞いていた。

毎晩、彼と付き合ってきたせいだろうか。

驚くことはあっても、不思議と恐怖はなかった。

いつもの彼らしい話し方だったことも、早紀を後押ししてくれているのか。

最初から、彼には図太い態度を取っていた気がする。

「自由になるだけさ」

男は、ニヤニヤした声で答える。

こんな鎧稼業とは、もうオサラバ——そう言いたいのか。

「契約は…?」

早紀は、自分の額を指した。

彼が鎧をやめるといふのなら、早紀はもう鎧になることはできない。

魂を、彼との契約に捧げたことになっている。

「だから…もう一人準備するチャンスを…やったろう?」

鎧の男は、軽く顎で倒れたままの貴沙を指す。

どういう、こと?

「「契約したのは一人分の魂だ…オレと分離する時に、一人分の魂がなくなってもお前は生きられるだろ?」」

実に。

実に、彼らしい考えのように思えた。

奇妙な情けと、奇妙な残酷さを同時に持っている。

早紀が生き延びるチャンスとして、貴沙の魂を取りに行かせたのだ。

そして、貴沙の魂を犠牲にして生き残れ、と。

何とも素晴らしい計画ではないか。

「はは…」

早紀は、思わず笑ってしまった。

本当におかしいことを考える鎧だ。

その笑い声に、もう一つ笑い声がかぶった。

「あははは…それは面白い話だわ」

ゆっくりと、貴沙が身を起こす。

「早紀の記憶では見たけど…初めて会うわね、鎧野郎」

立ち上がり、髪を払う。

「「どっちの魂でも、オレは構わんぞ」」

鎧野郎と呼ばれても、男は気配一つ変えはしない。

それどころか、二人で争えといわんばかりだ。

早紀は、貴沙を見た。

貴沙も、彼女を見た。

爽快感とは、この一瞬のことだろうか。

意識にずっと涼しげな風が吹き込んで、暗雲をすべて追い払ってくれるような、そんな感覚。

早紀は、自分の口角が上がるのを感じた。

貴沙は、目を細める。

「どっちも…いやだなあ」

「いやに決まってんでしょ」

×

—
—
—

目を開けると——魔女二人は、既に立ちあがっていた。

鎧の男、とやらも。

どうやら、真理が一番最後の目覚めのようだ。

あれが、鎧か。

いつも自分が身につけている姿と、確かに同じものではあるが、あれほど光ってはいない。

それに。

あんなに、棘は出てはいない。

ジャキン！

鎧の全身から、ハリネズミのような棘が飛び出たのだ。

早紀が、いやそうに顔をゆがめる。

「早紀を2回目に殺した時が、それだっけ？」

貴沙が、うんざりした声を出す。

2回目。

その表現に、真理は薄く笑った。

1回目に殺したのが、彼だったからだ。

重い身体を引き起こす。

どうやら鎧は、もう一度魔女を殺す気のようなだ。

どちらか、は知らないが。

「「寝ていればいいものを」

棘だらけの姿で鎧の男は、真理を見る。

「あんたは早紀を助ければいいわよ…私は自力で逃げるから」

貴沙がそう言った直後、早紀は彼女の手をぎゅっと握った。

今度は融合は起きなかったが、二人は手をつなぐ形になる。

「ちよっ」

彼女は払おうとするが、早紀はそれを離さない。

「死×死が、私だっていうんなら…夢×夢がこの貴沙だって言うんなら…」

ぶつぶつと。

まるで呪文のように、彼女は何かを呟き始める。

早紀の視線が、多少の不安を含みながらも、真理を振り返った。

「鎧×鎧…っていうのも…あり、か、な？」

バチっと、真理の右のこめかみ上がりに電気が走る。

彼女の言わんとしていることが、分かりそうで分からない。

本能の部分では分かるのだが、それをうまく思考に出来ない。

正確には、それが正しいのか間違っているのか。

そして、安全なのか危険なのか。

だが。

真理は——早紀に手を伸ばしていた。

ありがとう

――

真理の指先を、早紀は待っていた。

目が、合う。

真理の冷えた瞳が、自分を見ている。

彼女の言葉に、彼が動いてくれる。

鎧の男も動いたが、彼の指先が早紀の額に届く方が速かった。

額で、くるりと円を描かれる。

つないだままの手を、強く引っ張った。

その向こうには、貴沙がいるのだ。

彼女も、一緒に連れて行く。

「……………!!」

声にならない叫びが、空間を大きく揺らす。

早紀の全身からは真っ黒い魔気が吹き出し、自分と貴沙を包んでいく。

その魔気に。

その魔気に――男は引きずられていた。

全身の棘が、自制できないように激しく飛び出したり引っ込んだりを繰り返す。

必死で抵抗しているのが、分かった。

「一緒に……出ればいいのよ」

早紀の声が、鎧の男と同じようなハウリングを生む。

抵抗する彼が、自分と同期し始めているせいか。

「はっ……小娘……とぼけた小娘！」

完全に棘を失いつつある男は、苦しげな声をあげた。

「少しは、頭が回るようになったじゃないか！」

その腕が、激しく霧散した。

早紀の腕が、金属に変わる。

「あなたが教えてくれたんじゃない」

男の足が霧散する。

早紀の足が、金属へと変異した。

「面白かったからな…お前は、いままで一番面白い魔女だったからな」

胴体が霧となる。

「ありがとう…私に関心を持ってくれて」

続けて兜も吹っ飛ぶ。

そして、全てが早紀の身を包んだ。

『ほんと…面白いわ』

まったく面白くない口調で、身体の中の貴沙が毒づく。

笑いたいのに笑えないのは、早紀が金属になってしまったから。

後は。

真理が歩いてくるのを、見ていればいい。

まるで

――

鎧の中で――鎧になる。

そんなこと、彼は考えつきもしなかったし、可能だとは思えなかった。

しかし、早紀は一人ではなく。

貴沙をも一緒に、自分の鎧に巻き込もうとした。

魂二人分の力で、彼女は強引に自分に鎧を引きずり寄せたのだ。

何という。

感心と呆れが、同時に彼の中に生まれていた。

型破りにもほどがある。

そして同時に。

これまで覚えたこともない強い愛しさが、激しく渦を巻くのを感じた。

もしいま早紀がそこに立っていたならば、抱き締めずにはいられなかっただろう。

確かに、彼女はいる。

だがそれは、固く黒い金属の姿だ。

ただ、彼には抱擁よりもっと近い距離で、早紀を感じる手段があった。

この鎧の中に、入ればいいのだ。

反射しない黒のはずの表面が、ギラギラと輝いているのはいつもとは違う融合のせいだ。

その身に向けて、彼は歩き出した。

手を伸ばしかけて、やめる。

無粋な気がしたのだ。

こんな手より。

真理は、躊躇なくその身体を鎧の目の前に寄せた。

早紀を見る。

鎧の向こうに、確かに息づく彼女を見る。

きつといま、彼女もまた自分を見ていることだろう。

一步、踏み出す。

兜と顔がぶつかるまで、ほんの一瞬しかない。

まるで。

まるで、兜に口づけるように——真理は、彼女の中へと入っていた。

空

—
—
—

金属の全身が、打ち震えた。

早紀は、3種の負の乗数を手に入れ——そして、真理を受け入れたのだ。

いままでにない、強い充足感。

足りないものなど、微塵もない。

彼女は、いま初めて自分が完成したことに気づいたのだ。

自分の深い底から、風のようなものが唸るように吹き上げる。

その力ごと、真理にコントロールを委ねた。

鎧の重い身体が、飛翔とは違う意味で浮き上がった。

周囲の黒い帯が、一瞬にしてちぎれ飛び、全てが上に向かって吹き上がる。

もはや、何の呪縛もなかった。

風を生んでいるというのは、違う気がする。

鎧のエネルギーそのものが、吹き出して止まらない。

まさに、そんなカンジだ。

『ゾクゾクするわね』

昂揚を隠しきれない貴沙が、その感覚にうっとりとした声をあげる。

いまの早紀も、同じ状態だった。

こんな快楽を、覚えたことなどない。

『早紀…』

呼ばれるだけで、魂が震える。

自分が金属の塊で、いまは本当によかったと思えるほどだ。

でなければ、名前だけで膝を折ってしまっただろう。

次の瞬間。

鎧は、天を貫く弾丸となった。

降りてくる時、あれほど彼らを苦しめた闇の雲など、一瞬も感じない力強さで、全てを切り裂いてゆく。

すさまじい力が、溢れても溢れても止まらない。

時間と次元と空間と。

全てが、平等に切り裂かれていく。

ああ。

色の違う闇が、遠くに見えた。

すぐに、分かった。

空蝕の始まった空、だった。

吠える

――

大きな、とても大きな蝕。

これまで数度しか、真理は蝕を見たことはないが、あきらかにそれらとは違うのだ。

全ての思考が統一されたように、彼はこう理解した。

『大空蝕』

鎧が、しびれるように吠える。

それに呼応するように、空間のあちこちで振動が起きた。

金の流星が飛んでくる。

当然、漆黒の星も流れた。

真理もその、漆黒の流星のひとつで。

鎧たちが、自分の生みの親に向かって産声を上げるように、どの種族もその衝動を抑えられていない。

そしてここは――海の真上だった。

青の流星は、下から上に流れる。

獲るのだ。

あの空蝕を、天も青も打ち払い、魔族のものとするのだ。

いま、彼の中にある欲望は、ただそれだけ。

弾丸のように、大空蝕に近づく。

空のあちこちで、疑似蝕も始まっていた。

各陣営が、遠方から増援を送ろうとしているのか。

真理は、自分の首筋に手をやる。

そこに、あるのだ。

愛刀が。

水馬刀に似ていると、蔑んだこともあったそれが、たまらなく愛しく思えた。

魔気を、集めるまでもなかった。

真理はただ、一瞬願うだけでよかったのだ。

それだけで刀を中心に、全身を氷が走る。

周囲の空気さえも、凍りついた。

自分を視認した青が、まっすぐに突っ込んでくる。

早紀のステルスが、青には効かないという証拠だったが、そんなことはどうでもいいのだ。

鎧を砕いたのは——これが初めてだった。

ふっと

――

何と身軽に、何と力強く、真理は戦うのか。

振り下ろした手で、海面を広く凍らせるのを、彼はいともたやすくやってのけたのだ。

そして、自分の周囲に氷の粒のドームを作るのだ。

真理が動く度、それらは彼を親のように慕いついてくる。

そして、真理に害なす者には容赦なかった。

振り出した刀ごと、一瞬で肘まで凍りついた青が、すぐさま後方へと退避する。

彼が、それに遠慮などするはずがない。

追いつがるだけで。

真理が近付くだけで、相手は冷気に耐え切れず、全身の多くを氷に包まれて墜落してゆくのだ。

水を根源とする海族にとって今の真理は、早紀のステルスなどなくとも、一番相性の悪い相手だったと言っているだろう。

燃え盛る塊がすっ飛んで来たのは、次の瞬間だった。

激しい金の尾を引いて近づくそれに、彼は正面から応えた。

猛烈な速さで水蒸気と化す氷と、その水蒸気が新たな氷となるサイクルを目まぐるしく繰り返しながら、刃を叩きつけ合う。

明らかに、いままで見た天族とは違う相手だ。

見た目だけではない。

強さも段違いだ。

今の真理と、ほぼ互角で戦えているのだから。

見れば、疑似蝕と言われるものの口がぱっくりと開いていて、そこから金の流星群が流れ始めていた。

真理が意識の一部を、早紀に開放してくれているようで、それが他のエリアからの天族の増援であることを知る。

その直後。

反対の方角でも、疑似蝕が開いた。

闇の流星群もまた、そこから始まるのだ。

「今宵の原因は…おのれか！」

刀を打ち合い、熱と氷の攻防が続ける空間で、天の男は雄たけびのように声をあげた。

「いま滅びよ！　ここで滅びよ！　塵と果てよ！」

強い衝撃を、鎧全身で跳ね返す。

貴沙も、内側から支えてくれているのが伝わってくる。

心強い、もう一人の自分。

『暴きにくいわ…天族なのに、こいつ』

悔しそうに、貴沙が唸った。

『ある意味で、俺とお仲間なのだろうな、こいつは』

ふっと。

真理が笑った気がした。

限定解除

一一一

真理は『それ』に、『限定解除』という仮の名前を与えた。

鎧の中の涙に触れ、どういう形でかその力を目覚めさせた現象のことだ。

そして、この限定解除は、大空蝕を引き起こすのか。

真理の頭の中を、『あの存在』がよぎる。

いまの、魔族の頂点に君臨する者だ。

代替わりしたのは、前回の大空蝕の時ではなかったか、と。

勿論、彼がそれをリアルタイムで知っているわけではないが、その程度の知識はほとんど常識のレベルである。

彼に、極東の4thを任命した者でもあった。

前回の大空蝕の時、あの存在は限定解除したのか。

その強さを見せつけ、先代のトップを引き裂いたのか。

そして、目の前にも。

天族の、限定解除組が現れた。

生まれたばかりの真理を滅ぼすために、送りこまれてきたのだ。

ふふふふ。

湧き上がる昂揚と、言葉に出来ない充足感が、彼を微笑ませる。

既に自分が、普通の鎧など相手にならない存在になったことを噛みしめたのだ。

これこそ、鎧持ちの一族の誉れ。

これこそ、カシユメルの誉れ。

逆に言えば。

限定解除組が、同じ空間にいたというのならば、普通の鎧持ちたちはただでは済まないだろう。

次元が違いすぎるのだ。

最初に、真理が『あの人』に会った時のように。

父は、死んでも恥じるべきことなどなかった。

ただの、魔族だったのだから。

たとえその当時、極東の1stであったとしても、さっきの青のように、なすすべなどなく落とされただろう。

父を殺したのかと、イデルグを疑う隙間などない。

父は、限定解除の天族を相手にしたに違いない。

立ち向かったのだ。

相手がこの鎧だったのかどうかなど、分かるはずもない。

だが。

刀に、疑似的な仇討を混ぜることなど、造作もなかった。

「いま？　　いつがそのいま、なんだ？」

真理は、自分の中を噴き上がる魔力を集める。

「まだ、俺には傷ひとつついてないのだがな」

鎧の上に、更に――氷の鎧をまとわせた。

星

—
—
—

空の大きな蝕が、空全体を揺るがすように震えた。

真理の飛んだ海上は、ただそれだけで全て氷に覆われてゆく。

溶かせない。

天族の鎧は、それを溶かせなくなっていた。

少し前の、あの水蒸気の戦いが嘘のように。

真理が、笑う。

とても魔族的に、残忍に。

早紀は、それを怖いとは思えなくなっていた。

同じように笑うことは出来ないが、彼が種の生存本能のために闘っているのだと、ようやく魂で理解できたのだ。

『暴いたわよ…』

低い笑いを浮かべるのは、貴沙も同じだった。

『あんたの言う限定解除とやらの中でも、一番下っ端だわ…コンプレックスの塊よ、こいつ』

貴沙の解放する情報が、言葉より先に全身を駆け抜けた。

限定解除した者が複数いるというのならば、そこでも順位がつけられるものだ。

王のような地位につく者があれば、蔑まれる者もいて当然だった。

この金の男の屈辱が、全身を広がる。

初めて、きちんとした暴きを全身で感じた。

『ああ、かわいそうな天族ちゃん…せっかく限定解除したのに、結局普通の天族にしか威張れないなんてね』

貴沙の嘲笑は、まるで鎧から漏れたかのように空気を震わせる。

早紀は、その笑いよりも気になることがあった。

貴沙が出来たというのならば。

そして、相手が下っ端というのならば。

さつき真理は、噴き上げる風を集めていた。

うまくできるか、分からないけど。

早紀は、その風を集めてみようとした。

正確には、自分に取り込もうとしたのだ。

脳髓まで、一気に突き抜ける新鮮な魔気だった。

寝ていたわけではないというのに、目が覚めきるといふ強い感覚。

自分が魔族なのだと。

早紀はいま、それを喜びとして感じた。

どんなおいしい食事よりも、この魔気に叶うものなどない。

鎧の指の先端まで、魔族としての命を感じるのだ。

それ以上、何かしたわけではない。

なのに。

真理が、こう言ってくれた。

『よくやった』

金の星が――落ちた。

※

星が、落ちてゆく。

早紀は、それをずっと見ていた。

最初から、まるで儚いものであったかのように、次々と海へと落ちてゆくのだ。

だが、そこは柔らかな海面ではなく——固い氷面。

明らかに気配の違う、一人の闇の鎧が近付いてくるまで、それは続けられた。

真理によって。

「カシユメル卿！ 参られよ！」

その呼びかけは、明らかなる認識の元に紡がれた言葉ではなかった。

ぼんやりとした何かを追うような視線は、真理の鎧に定まっていなかったからだ。

早紀のステルスは、いまだ魔族にも健在のようだ。

限定解除の相手に対して、という意味で。

真理は、ようやくにして星墜としをやめたようだった。

それ以前に——もはや、落とせる星はほとんどなくなっていたのだが。

「極東の4th：カシユメル、参りました」

真理は、鎧を震わせた。

それでようやく、相手は彼を認識したのだ。

「間もなく大空蝕が終わる…卿が中央の染めを行われよ、という達しだ」

もはや。

もはや、魔族がこの海上の蝕を取ることは明白だった。

その先触れとして、彼は遣わされたのである。

限定解除組自ら、豪華な出迎えだった。

しかし、それほどの相手でなければ、いまの真理を捕まえることなど出来ないのもまた事実だろう。

真理が、笑う。

幸福そうな笑顔が、鎧を通じて全身に広がるのだ。

「それは…『あの方』の思し召しですか？」

早紀の意識の中に、暗く重く怖い存在がよぎる。

二度目に鎧のなった日に、彼らを4thに任命した相手だった。

しばし、相手は動きを止めた。

「…そうだ」

肯定に、真理が一度目を閉じたような気がした。

自分を整えるために、彼が早紀の内側でそうしたような。

「光栄ですね…喜んで参ります」

一瞬、見知らぬ男が早紀の中を駆け抜ける。

それに反応したのは、貴沙だった。

あっと。

彼女は、その残像を追う動きをしたのだ。

おそらく——真理の父親だったのだろう。

代弁

――

「イヤなもんになったな」

大空蝕を囲む形で、大勢の魔族が集まる中――隣に来たのは、イデルグだった。

極東の1st。

このエリアの大空蝕を落としたのだから、本来ならば彼が中央の位置に来るべきだったのだろうか。

ただ、真理の反対隣には、二人ほど限定解除組がいたが。

『イヤな男になったわね』

彼が答えるより先に、鎧の中で貴沙が舌を出す。

刹那。

イデルグは、はっと真理を見た。

貴沙の声が、彼に聞こえるはずなどない。

しかし、彼女は、既にやらかしていたのだ。

この状態のまま、イデルグを――暴いたのである。

大空蝕の映像が、津波のように甦る。

彼の記憶ではない。

イデルグの記憶だ。

魔族の力は魔族には効きづらいが、限定解除状態ならば、一般の魔族を暴くことなど造作もないのだろう。

闇がひとつ落ちる。

先代のトゥーイか。

金4、魔3という空に、先に到着したのは金の増援。

入り乱れる世界。

逃げたのはベルガー——現在の2ndだった。

イデルグが、怒号をあげる。

だが、ベルガーは戻ることはない。

残されたのは、父とイデルグ。

死んだのは父。

ボロボロになった鎧で、墜落していったのはイデルグ。

そこで暗くなる意識。

「カシユメル卿：お前は何になったんだ？」

真理の中の貴沙を感じたのか、心底不思議そうに問いかけられる。

だが、真理の視線は彼の向こうを見ていた。

飄々と突っ立っている、ベルガーを。

『卑怯者の腰抜け野郎』

全ての代弁は——貴沙がやってくれた。

本当の本物の現実の世界

一一一

大空蝕が終わって、カシユメルの屋敷に戻る。

随分長い間、ここを離れていた気がするのは、鎧の中の世界がとても遠かったからだろうか。

その夜――すでに明け方近く。

早紀は、自室に帰ろうとしたのだ。

昨日まで、真理にべったりとつくき続けていたというのに、彼の気持ちが分かった途端、恥ずかしさがかぁと押し寄せてきたのである。

それに。

自分の中には、もう一人の同居人がいたのだ。

彼女連れで、真理と同じベッドで眠ることは、とても恥ずかしかった。

『えっ、あんたらの関係ってその程度!?!』

自分の中では、うまくステルスがかけられないのか、貴沙にダダ漏れだったのが、なおのこと彼女をいたたまれなくさせた。

『あたしのことは気にしないでいいわよ、好きにやってるから』

何をどう好きにやるのか分からないが、彼女は豪胆に言い放つ。

さすがは、海族の中に泥棒に入っただけのことはある。

しかし、気にするなというのは難しく、早紀はもごもごと別れのあいさつを真理に切り出そうとしたのだ。

なのに。

鎧を解除したての真理は、まだ興奮さめやらぬ状態だった。

ふうと、深い呼吸を二度ほど繰り返して、彼は自分を落ち着かせようとしている。

しかし、その目は。

その目は、早紀を見ているのだ。

昨日とは、違う色で。

動けなくもいたたまれない感覚に、早紀が唇を閉じてしまうと。

真理は、彼女に手を差し伸べるのだ。

鎧でもないのに、全身が金属のように硬直してしまった身体を、彼が抱きしめてきた。

「……………！」

あっあっ。

冷たいんだか、熱いんだか分からない感覚が、早紀の全身を貫く。

ここは、本当の本物の現実の世界。

そんな中で、彼女は真理に抱きしめられているのだ。

『いいから目え、つぶんなさい』

瞼に、自分以外の力を感じて、早紀は眼を閉じさせられる。

冷たい外側とは、比べられない温度を持った唇に——探られた。

夢に、鎧の男は現れなかった。

ずっと

――

「解放者になられた事、喜ばしく存じ上げます」

カシユメル家に、鎧鍛冶の一族がやってきた。

しかし、それはタミの一族ではない。

血は、続くほどに枝分かれしていく。

だから、ここにいるのは真理の鎧を作った一番近い血の一族となる。

彼らは、沢山の貢物を恭しく差し出す。

一族の鎧から、解放者が出たのは真理が初めてだという。

極東で初と言われれば、悪い気はしないものだ。

彼らの呼ぶ解放者なる魔族のことは、公に語られることはない。

何故なら、意図して手に入れることは非常に難しく、失敗は死を
持つて購わなければならないからだ。

無駄に挑まれると、あつという間にその血族が絶えてしまいかね
ない。

だからこそ、解放者同士で語られることはあっても、一般の鎧持

ちに伝わることはないのだ。

「俺は、どうなるんだ？」

一通りの祝辞を受け終わった後、真理はソファから鷹揚に問いかけた。

「後ほど、『あの方』からお声がかかるでしょう」

トップの沙汰を待て、と。

そう言うのだ。

そうか。

薄く真理は、笑った。

その沙汰が、下剋上のチャンスとやらか、と。

前の大空蝕の時、解放者となった者が、『あの方』とやらになったのだろうから。

下剋上したい、というわけではない。

真理に、その可能性が与えられたという事実を、大きく受け止めたのだ。

「ところで…」

鎧の一族の視線が、周囲をさまよった。

「もしよろしければ、卿の憑き魔女殿を拝見したいのですが…」

本来、憑き魔女に殿などをつけることはない。

鎧鍛冶の一族の位も、決して低いわけではないのだから。

だが、解放者の憑き魔女ともなると違うのか。

真理は、複数の意味で微かに笑みを浮かべた。

「探している者なら…」

視線を、動かしもしなかった。

「…俺のすぐ隣に、ずっと座っているが？」

早紀は、申し訳なさそうに——しかし、もっと小さくなってしまった。

花

「ちょっと借りるわよ」

鎧の一族が引き上げると、貴沙がそう切り出した。

猛烈に退屈したのだろう。

早紀の身体を、勝手に使って大きく伸びをする。

真理は、視線で彼女に問いかけた。

どこに行く気か、と。

「今朝、屋敷を漁ってたらいいものを見つけたから、早紀の部屋に放り込んでいたの」

貴沙は、ホウキに腰かけるようなゼスチャーをする。

空を飛んで、外に出かけようというのか。

軽率な行動だ。

限定解除して解放者になったとは言え——真理の思考を、貴沙が手のひらで止める。

「あたし”ら”を見つけるのは、生半可じゃ無理よ」

無用な心配だ。

そう言うのである。

真理は、早紀を見た。

いま、彼女に身体も唇も受け渡しているようだが、本人も了承していることか確認しようとしたのだ。

「大丈夫…すぐ戻るから」

真理の視線は、うまく伝わったようだった。

ふう。

よくよく考えれば。

行き先など、そう沢山あるわけではないのだ。

どうせ。

「…花がいるなら、庭のものでも摘んでいくがいい」

真理には、理解できることではなかったが、頭ごなしにやめさせるものでもなかった。

貴沙は、ハンと笑った。

「馬鹿ね…」

その親指が、自分の胸を指す。

「馬鹿ね…あたし以上の花が、どこにあるっていうの？」

そして——1時間後。

戻ってきた彼女からは。

ほんの少しだけ。

消毒薬の香りがした。

昨日

—
—
—

『うわ…』

嫌そうに呟いたのは、貴沙だった。

学校でのことである。

車から降りるなり、前以上の魔女たちが真理を取り囲んだのだ。

しかも。

前ほどの軽薄さを、みな持つてはいなかった。

獲物を狙う猛獣の目だ。

みな、ライオンのメスが狩りをする時の瞳で、真理を取り囲むのである。

幸い、早紀は——無事以外の何物でもなかった。

元々ステルスがあるというのに、先日の限定解除とやらのせいで、ますますその力が上がってしまったようだ。

真理が、一瞬視線で早紀を追う。

それだけで、彼女は言葉にできない幸せな気分を味わえるのだ。

『ばーか』

幸せ気分が、たとえ自分の中の同居人に足蹴にされようとも。

そんな、真理狩りの風景の向こうに。

数人の、思惑の違う者たちが、こちらを見ていた。

ひとつめは、タミとその兄。

タミが視線をさまよわせているのは、早紀を探しているのだろうか。

彼女の中の、海の珠を取り除こうと思っていた者。

取り除くどころか、更に過去の珠と貴沙の魂を融合してしまったため、ますます応じられそうになかった。

だが。

その件に関しては、真理の鎧鍛冶の一族が、保証に近い言葉を残してくれている。

『解放者に、他家の鎧鍛冶が失礼なことはできませんまい：ましてや、見つけられぬのなら無意味なことですね』

勿論、早紀の中に海の宝の珠があることを、真理は言わなかった。

ただ、他の鎧鍛冶の一族が、早紀の力を調べたがってつきまといっていると、そう言ったただけだ。

タミの一族に切り札があるのは確かだが、前ほど自由には動きまわれないという話だった。

早紀は、自分からタミに見つかるような行動は取らず、遠巻きに彼女を見る。

嫌いでは、なかった。

いい人というより、自分の好きな物にのみ突き進まずにはいられない人だったのだ。

彼女のおかげで、葵と再会できた。

自分の本当の正体も分かった。

そして——本当の、葵の笑顔を見られた。

※

「貴沙！」

病院のベッドの上。

窓からホウキにまたがって入ってきた早紀に向かって、彼女は迷わずにそう呼びかけたのだ。

ああ。

花のような、あたたかい笑顔。

早紀の持っていた、あの写真と同じ笑顔だ。

「ふ…つけたわねー！」

それに感動する早紀をよそに、貴沙はやっぱり貴沙だった。

あけすけで口さがない。

だが、それに葵が笑い出す。

「ああ、貴沙よ…本当に貴沙…間違いないわ」

ホウキを置いて、ベッドに横座りする彼女の首に、かじりつきそうな勢이었다。

だが。

次の瞬間、葵は激しく咳き込んだ。

「ああ…忘れてた」

貴沙は、天をおおぎながらベッドから立ち上がる。

「無事戻れたのはいいけど…前よりパワーアップしたらしくてさ」

濃厚になった魔気を、葵は吸いこんでしまったのか。

「いいの、近くに来て…もう生きてた意味はちゃんとあったから」
そんな彼女の熱意に、しかし、貴沙は苦笑しながら窓辺まで下がった。

「また来るわよ。あんたが生きてる限り」

くん、と。

貴沙が鼻を鳴らした感覚を、早紀は共有していた。

消毒薬の臭いに混じる、かすかなかすかな潮の香り。

貴沙の怪訝と、早紀の記憶の中の伊瀬が混じる。

「海の奴…来てんの？」

さも自分の記憶のように、彼女は葵に問いかける。

はにかむように、葵は微笑んだ。

「ええ…元気になるようにって、時々不思議な薬を持ってきてくれるわ」

さっきも来てくれたの。

葵の言葉に、早紀は安堵していた。

「彼が、昨夜の太空蝕に参加していたのかどうかは分からない。

ただ、彼が無事だった事実本当に安堵する。

味方ではないと、理解してはいるのだが。

「ああ…なるほど」

貴沙は、ちらりと窓の外を見た。

下方に広がる地面を。

この病室の窓を、見上げる男が一人——伊瀬だった。

※

「こんにちは」

病院の上空から、早紀は声をかけた。

身体は、ホウキの上。

魔女らしい視点から、伊瀬を見下ろすことになるとは、思ってもいなかった。

不思議な感覚だ。

「君は…あの時と同じ君なのか？」

静かに。

色々と思うところはあるだろうが、つとめて静かに伊瀬は空に向かって声をかける。

「違うわよ」

唇を乗っ取ったのは、貴沙。

挑発的な声をあげながら、ホウキで空中に弧を描いた。

「…やはり、昨日の夜も…『君たち』だったんだな」

「そうよ、『あたしたち』よ」

ゆっくり振り出される太刀と、鋭い短剣のようなやりとり。

「ごめんなさい…」

そのやりとりの中に、早紀は木の棒で割り込むのだ。

「ごめんなさい…私は魔族なんです。魔女なんです」

そんな当たり前のことだと分かっている、言わずにはいられなかった。

彼は、とてもいい人だ。

殺されかかりはしたが、その時でさえも伊瀬は優しくかった。

ごめんなさいは——その優しい男と、完全に決別する言葉。

早紀は魔女で、そしてこれからも魔女であり続けると、覚悟が決まってしまったのである。

だから。

「……わかったわよ」

面倒臭そうに、貴沙がため息を吐きだす。

「もう二度と、あんたには会わないわ」

貴沙は、ホウキの舐先を軽く持ち上げる。

上昇するサインだ。

「次に会うとしたら……殺し合いの場だけ、よ」

見上げる伊瀬。

「その前に……葵に何かしたら、あたしがあんたを殺しに行くわ」

捨てゼリフの直後、ホウキは弾丸のように上空へと飛翔する。

風が、顔に痛いほど。

「あーもう……鬱陶しい！　泣かないでよ！」

貴沙の怒った声が、早紀のせいで涙声なのが、ちよっただけ笑えた。

相棒

昨日の記憶をしまいこんだ早紀は、再び校庭でこちらを見ている二組目に目を向けた。

タミ兄妹の、やや後方。

トゥーイと零子だ。

零子は、きよろきよろはしていない。

しかし、やはり早紀を見つけてはいなかった。

一点ずつに的を絞って、集中して見ている——そんな瞳だ。

昨夜。

トゥーイは、真理には声をかけなかった。

だが、その鎧の上の可動式のひとつの瞳だけは、激しく動きながらも真理を見ていた。

何者になったのか、彼はそれを見定めようとしていたのだろう。

ただ、早紀には分かった。

もはや、トゥーイは3rdではいられないだろうと。

いや。

そういうレベルの話では、ないのかもしれない。

沙汰があると。

そう、解放者の鎧の男が言った。

限定解除出来るということを、これまで真理は知らなかったし、あえて知らせないようにしてきた具合を見ると、極東というくくりでは、なくなるのかもしれない。

この、遠い遠い東の果ての島国から、離れなければならないのかも。

少なくとも。

真理は、4thではなくなるのだ。

それを、彼が一番喜んでいることを、鎧というつながりで知った。

零子の目が、早紀の上でじっと止まった。

じっと、じっと。

長いこと見つめられていたので、ついに気づかれたかと思った。

しかし。

視線は、また違う空間へと移る。

ああ。

自分はもう本当に、限定解除していない魔族には、見つけれなくなってしまうのだと。

それを、少し寂しく思った。

『バーカ』

決して自分を見失うことのない相棒が、そんな彼女を足蹴にしてくれた。

名無し

そして、最後のグループ。

とはいうものの、『彼』は一人だった。

そう、彼だ。

イデルグの息子。

立っているのは、たった一人。

決着がついたと、そう聞いている。

ただ、早紀が戸惑ったのは——どっちなのか、分からなかったことだ。

どちらも大人びてはいたが、まだ若々しい男だった。

しかし、そこに立っているのは、違う面差しの男だったのだ。

頬からこめかみに残る深い傷と、短く刈り込まれた髪。

そして、この世の苦渋で出来た池に、深く沈められてきたかのような、苦味にひたされた表情。

イデルグの息子のどちらか、ということまで、分かったことさえ奇跡に思えた。

『ふーん、あれがどっちか、ね』

早紀の記憶をたどった貴沙が、興味深げに身体を動かす。

息子の方へと、近づこうと言うのだ。

だが、その行動に、早紀はあらがえない。

彼が、どちらなのか。

気にならないはずなど、ないのだから。

彼もまた、二つだったものだ。

早紀とは違う意味だが、自分の生存を賭けて、もう一人と向かいあったのだ。

彼女たちが融合出来たことは、鎧の気まぐれによる奇跡。

「はあい」

貴沙は、イデルグの息子の前で、戸惑うことなく唇を開く。

一瞬の間があった。

男は、三度まばたきをしなければならず、そして貴沙がもう一度声をかけなければ、彼女を認識できなかったのだ。

「あんたは…どっち？」

貴沙は、貴沙の顔でそう問いかけた。

男は、その顔をじっとじっと見る。

何かを、思い出そうとするかのように。

そして。

肩をそびやかすのだ。

「それは…おれにも分からないことだな」

まるで——どっちでもいいことのように、彼は言い放った。

※

後に。

本当に、ずっとずっと後に。

イデルグ家の後継ぎ争いの壮絶さを、耳にすることになった。

兄弟で、正面から殺しあった二人。

どちらが勝ったかはともかくとして、勝った側は、負けた側の死体を全て食らい尽くしたという。

何度も何度も、獣のように吠えながら。

彼らも。

別の意味で、一つになろうとしたのだ。

二つの魂を、そんな形でしか融合出来なかったのだ。

生き残った側は、その後、美濃も甲斐もどちらも名乗らなかった。

『名無しのイデルグ卿』

鎧を手に入れた時から、彼はそう呼ばれている。

ある意味。

彼は、次の限定解除に近い魔族なのかもしれない。

早紀は、そう思った。

そして――

三人の夢

早紀の意識が、沈む、沈む。

気がつくと、彼女は歩いていた。

「遅かったわね」

貴沙が、一足早くそこに来ていた。

「来たな…諸悪の根源」

早紀を見るなり、もう一人が機嫌の悪い声をあげる。

鎧の男だ。

あれからずっと。

解放者となった直後の、一日のみを除いて、早紀は挨拶のように恨み言を聞かされていた。

それをもう、何千回聞かされたことだろう。

彼女が、男の望む解放を、台無しにしたからだ。

おかげで、彼はいまもお鎧の中にとらわれている。

「飽きないわね、まったく」

そんな鎧の男の側にはべりながらも、貴沙はニヤニヤしている。

彼女は、すっかりこの空間を気に入ったようだった。

毎晩、本当に楽しそうに夢の中で遊ぶ。

そして。

この空間から、貴沙は葵の夢にちょっかいをかけるのだ。

限定解除の影響は、夢の世界にも届いているようだった。

鎧の男も、その魔女たちも前とは比べ物にならない自由を、夢の中でさえ手に入れていたのである。

夢で会うだけならば、彼女の大事な友人に、悪影響が出ないと分かって来た。

夢という負の世界で、魔力という負は——正になってしまうのか。

そして、その方法ならば。

葵の元を、度々訪れる海の男の目にも、触れないのだ。

潮の香りの男が、彼女を元気にしてゆく過程を、貴沙が面白くないながらも黙って見守っているのを、早紀は知っていた。

「もう一度、絶望のどん底まで落ちたら……いつでも鎧になってくれよ」

いまだあきらめてはいない鎧の男が、早紀にストレートなまでの分かりやすい言葉を投げる。

この半端な自由では満足せずに、もう一度早紀を深いところに突き落としたがっているのだ。

早紀は、苦笑した。

「はあ…まあ…そういう日が、こないといいな」

結局のところ——早紀は、相変わらずだった。

むかしむかし

明け方。

夢路から、早紀だけが一足早く抜け出る。

貴沙の目覚めは、彼女よりずっとずっと遅いのだ。

うつすらと、目を開けると。

同じように、わずかにまぶたの上がつた瞳が、自分を映していた。黒々としていた髪艶と深さは、日を追うごとに強くなる気がする。

その瞳の中の黒も、まったく同じだ。

覗きこむだけで、違うところまで連れて行かれそうになる。

そんな男が、早紀の身体を抱えてくれていた。

「極東に、新しく鎧の一族が編入された」

だが、発せられる言葉に甘い音はない。

ある意味、仕事の話だ。

それを、目覚めの少しぼんやりした頭で、早紀は聞いていた。

甘くはないが、聞きなれた心地よい声。

明日の夜、その編入式があるというのだ。

少し温度の低い手が、彼女の素肌の腕を軽くなでる。

「その人が…今度の極東の4thになるの？」

けだるいまま、彼に語りかける。

そうだと、微かに空気の揺らぐ気配。

ああ。

長い間空席だった極東の4thが、明日埋まるというのだ。

それは、早紀にとって非常に感慨深いものだった。

最初に二人が立った位置が、そこだったのである。

あの時は、ひどい有様だった。

自分が、魔女であると知ったばかりで。

なのに、勝手に契約を交わした相手は、自分にひどい仕打ちばかりしたのだ。

それから、幾年。

その位置に、新しい人が来る。

そして。

真理は。

こう言うのだ。

『貴公を、極東の4thとして任命する』——と。

※

むかしむかし、あるところに。

これはそんなおとぎ話の、ありきたりな言葉で始まる物語。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6296u/>

極東4th

2011年9月6日22時15分発行